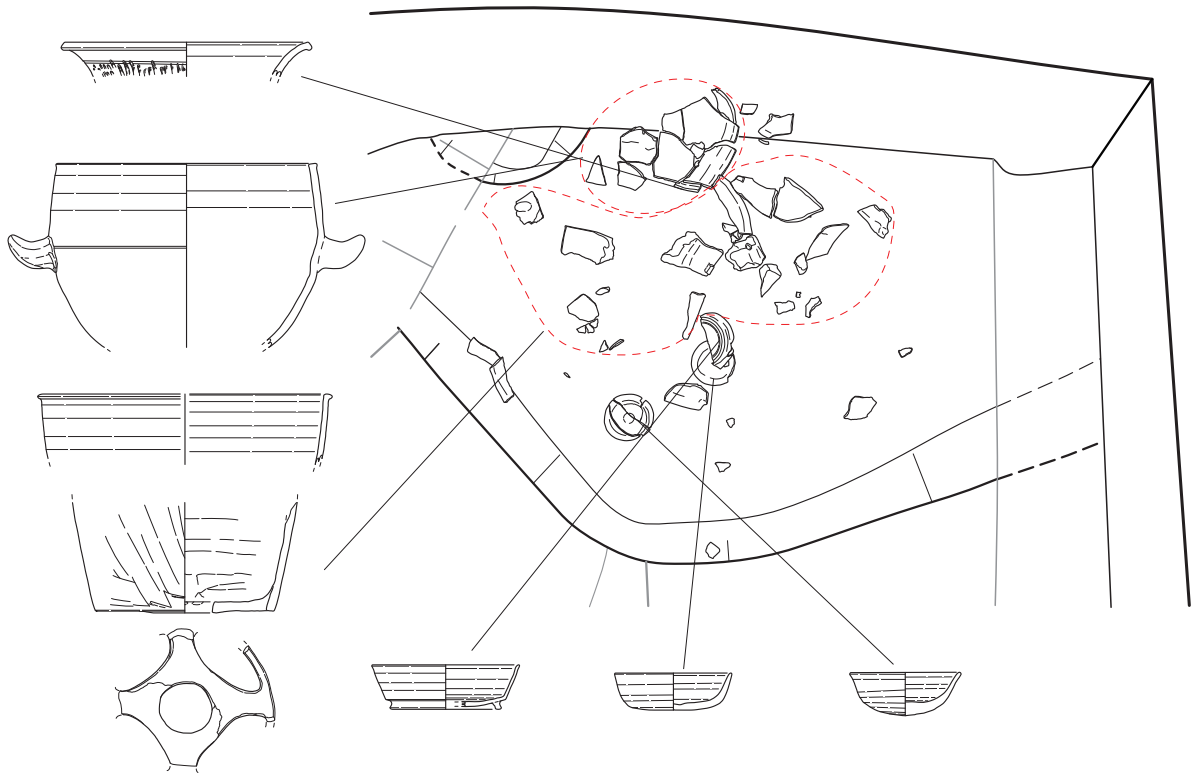


愛知県東海市

平成30年度

はたま ひがしはた
畑間・東畑遺跡発掘調査報告



2020年

愛知県東海市教育委員会



1 地点 全景



1 地点 B 区 全景



堅穴状遺構 O66SI 遺物出土



3 地点 遠景



土坑 3016SK・3017SK 完掘



2 地点 遠景



犬埋葬遺構 2088SX イヌ遺存体出土



井戸 3223SE 4段目井戸枠



井戸 3223SE 出土遺物

序

伊勢湾に面した知多半島西岸の付け根に、私どもの愛知県東海市は位置しています。はるか昔には、あゆち潟と呼ばれた遠浅の海が広がり、その沿岸には多くの先人たちの暮らしがありました。現在、あゆち潟はわが国有数の工業地帯へとその姿を変え、海との関わり方も漁業から工業へと移ろいましたが、本市にとって海との関わりは昔も今も切っても切れないものがあります。

こうした海との関わりの中で形成された先人たちの暮らしの跡は埋蔵文化財という形で現在も残されています。

東海市では名古屋鉄道常滑線太田川駅を中心とする区域を中心市街地と位置づけ、平成4年度から土地区画整理事業を実施してきました。教育委員会では、本事業区域内に所在する埋蔵文化財について、平成11年度から記録保存を目的とした発掘調査を実施しています。

本書ではこの土地区画整理事業に伴う平成30年度の畑間・東畑遺跡における発掘調査成果について報告します。平成30年度の調査では、中世から近世を中心とした遺構や遺物を確認することができました。これまでの調査成果と共に、畑間・東畑遺跡における中・近世の様相を知る手がかりとなりました。

今後、本書が既刊の報告書と合わせて地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

令和2年（2020年）3月

愛知県東海市教育委員会
教育長 加藤 千博

例 言

- 1 本書は、愛知県東海市大田町に所在する畑間（はたま）遺跡、東畑（ひがしはた）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は東海太田川駅周辺土地地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施行者である東海市長から依頼を受け、平成30年6月22日に安西工業株式会社名古屋支店と業務委託契約を結び、「畑間・東畑遺跡発掘調査業務委託」として実施した。
- 3 現地調査は、平成30年7月2日から平成31年1月31日まで実施し、遺物洗浄・注記等の1次整理作業は現地調査と併行して実施し、平成31年3月29日に終了した。
- 4 遺物実測等の2次整理作業および本書の作成は、東海市教育委員会が安西工業株式会社名古屋支店と業務委託契約を結び、「畑間・東畑遺跡発掘調査報告書作成業務委託」として実施した。
- 5 2次整理作業及び報告書作成は、令和元年7月1日から令和2年3月31日まで実施した。
- 6 現地調査と2次整理作業ならびに本書の作成作業は、東海市教育委員会（社会教育課 宮澤浩司 早川（安津）由香里）の監督のもと、安西工業株式会社名古屋支店 調査員 久富正登が担当した。調査・整理の体制は第1章第4・5節に記した通りである。
- 7 調査の実施にあたって、東海市中心街整備事務所、愛知県教育委員会、（公益）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターなど、関係各位のご協力を賜った。
- 8 出土した自然科学試料については、（株）パレオ・ラボに同定を依頼した。金属器の保存処理についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 9 調査および報告書作成にあたっては、石黒立人、新名強、大杉規之、鈴木正貴、川添和暁（順不同敬称略）の各氏にご指導・ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。
- 10 現地での遺構実測は、久富が行った。遺構写真撮影は、久富と上田が行った。
- 11 出土した遺物、作成した図面・写真など記録・資料類はすべて東海市教育委員会で保管している。
- 12 本書は宮澤と早川の監督のもと、久富が編集した。執筆分担は下記のとおりである。

宮澤浩司（東海市教育委員会） 早川由香里（東海市教育委員会）

：第1章第1節～第4節

久富正登（安西工業株式会社）：第1章第5節、第2章、第3章第5節、第5章

新山王諒太（安西工業株式会社）：第3章第1節～第4節

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze（パレオ・ラボ）：

第4章第1節

中村賢太郎（パレオ・ラボ）：第4章第2節

パリノ・サーヴェイ株式会社：第4章第3節

凡 例

- 1 調査記録の方位及び座標は、世界測地系の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。ただし、単位 (m) を省略している。
- 2 標高は、すべて T.P. (東京湾平均海面高度) による。
- 3 土層の土色観察および遺物の色調の観察には小山正忠・竹原秀雄編著・農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(2012 年度版) を用いた。
- 4 遺跡の略号は以下の通りである。

1 地点 A 区 (畑間遺跡) : HM18 - 1A 1 地点 B 区 (畑間遺跡) : HM18 - 1B
3 地点 (畑間遺跡) : HM18 - 3 2 地点 A 区 (畑間遺跡) : HM18 - 2A
2 地点 B 区 (東畑遺跡) : HH18 - 2B

遺構の記号は以下の通りである。

SB : 掘立柱建物 SI : 竪穴状遺構 SD : 溝 SE : 井戸 SK : 土坑
SP : 柱穴・ピット SX : 不明遺構・その他 SG : 池状遺構 NR : 自然流路

- 5 本書で使用する遺構番号は、遺構の種類ごとに通し番号を付けている。これらの番号の先頭に前述の遺構記号を付与し、遺構の種類を記すこととした。
- 6 遺構図の縮尺は、各々図のタイトルに表示している。遺構全体図については 1/100・1/200、竪穴状遺構・土坑・溝については 1/50・1/40、掘立柱建物については 1/80 (断面図は 1/50・1/40)、井戸については 1/50・1/40、遺物出土状況図については 1/20 とした。
- 7 本文中の遺構寸法は、特に断りの無い場合は残存長を示している。
- 8 本書で使用する遺物番号は土器・土製品・瓦・石器・金属製品の種類を問わず、通し番号を付与した。これにより本文・観察表・実測図・写真において、一つの遺物を指示する際には同一の番号を使用している。
- 9 遺物実測図の縮尺は 1/4 を基本としているが、遺物の大きさによって変更しているものがある。
- 10 注釈・参考文献は、文中 () で示し、巻末に一括して掲載した。

本文目次

巻頭図版

序

例言・凡例

第1章 序章

第1節	調査に至る経緯	1
第2節	遺跡の位置と地理的歴史的環境	2
第3節	既往の調査	4
第4節	発掘調査の方法	7
第5節	発掘作業の経過	8
第6節	整理作業の経過	11

第2章 遺構

第1節	1 地点A・B区(畑間遺跡)の遺構	15
第2節	3 地点(畑間遺跡)の遺構	37
第3節	2 地点A区(畑間遺跡)の遺構	80
第4節	2 地点B区(東畑遺跡)の遺構	108

第3章 遺物

第1節	遺物の概要	135
第2節	1 地点A・B区(畑間遺跡)の出土遺物	136
第3節	3 地点(畑間遺跡)の出土遺物	138
第4節	2 地点A区(畑間遺跡)・2 地点B区(東畑遺跡)の出土遺物	143
第5節	その他の出土遺物	146

第4章 自然科学分析

第1節	放射性炭素年代測定	148
第2節	畑間・東畑遺跡から出土した動物遺体	150
第3節	畑間・東畑遺跡出土金属製品の保存処理	155

第5章 まとめ

第1節	調査成果について	158
第2節	井戸3223SE出土のカメ遺存体について	164

注釈

挿 図 目 次

第 1 図	調査地の位置	1
第 2 図	遺跡周辺の環境 (航空写真)	3
第 3 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第 4 図	調査区位置図	7
第 5 図	グリッド配置図	11
第 6 図	1 地点 A 区 遺構平面図	16
第 7 図	1 地点 B 区 遺構平面図	18
第 8 図	1 地点 A 区 東壁土層断面図	19
第 9 図	1 地点 A 区 南壁土層断面図 1 地点 B 区 北壁土層断面図	20
第 10 図	1 地点 B 区 東壁・西壁土層断面図	21
第 11 図	1 地点 A 区 池状遺構 001SG 平面・断面図	22
第 12 図	1 地点 A 区 土坑 004・006・007・009SK 平面・断面図	23
第 13 図	1 地点 A 区 不明遺構 013SX 平面・断面図	25
第 14 図	1 地点 A 区 区画溝 022・037SD 平面・断面図	26
第 15 図	1 地点 B 区 区画溝 063・064SD 平面・断面図	27
第 16 図	1 地点 B 区 溝状遺構 065SD・井戸 069SE 平面・断面図	28
第 17 図	1 地点 A 区 土坑 010・021SK 平面・断面図	29
第 18 図	1 地点 A 区 土坑 025・026・029・030・033SK・ ピット 027SP 平面・断面図	30
第 19 図	1 地点 B 区 土坑 052・053・054・055・056・061・062SK・ピット 057・ 058・059SP 面・断面図	31
第 20 図	1 地点 A 区 竪穴状遺構 020SI 平面・断面図	33
第 21 図	1 地点 B 区 竪穴状遺構 066SI 平面・断面図	34
第 22 図	1 地点 B 区 土坑 067SK 平面・断面図	35
第 23 図	1 地点 A 区 自然流路跡 035・038NR 平面図	36
第 24 図	3 地点 遺構平面図 1	38
第 25 図	3 地点 遺構平面図 2	39
第 26 図	3 地点 遺構平面図 3	40
第 27 図	3 地点 西壁土層断面図	41
第 28 図	3 地点 南壁土層断面図 1	42
第 29 図	3 地点 南壁土層断面図 2	43
第 30 図	3 地点 南壁土層断面図 3	44

第 31 图	3 地点	北壁土層断面图 1	45
第 32 图	3 地点	北壁土層断面图 2	46
第 33 图	3 地点	井戸 3010SE 平面・断面图	48
第 34 图	3 地点	井戸 3019SE 平面・断面图	49
第 35 图	3 地点	井戸 3223SE 平面・断面图	50
第 36 图	3 地点	区画溝 3012・3015SD・土坑 3008SK 平面・断面图	52
第 37 图	3 地点	区画溝 3140・3110SD 平面・断面图	53
第 38 图	3 地点	区画溝 3150・3152SD 平面・断面图	54
第 39 图	3 地点	区画溝 3170・3171SD 平面・断面图	55
第 40 图	3 地点	溝状遺構 3011SD 平面・断面图	57
第 41 图	3 地点	溝状遺構 3238SD 平面・断面图	58
第 42 图	3 地点	溝状遺構 3172・3251SD 平面・断面图	59
第 43 图	3 地点	土坑 3022SK 平面・断面图	60
第 44 图	3 地点	土坑 3269SK 平面・断面图	60
第 45 图	3 地点	土坑 3016SK 平面・断面图	62
第 46 图	3 地点	土坑 3017SK 平面・断面图	63
第 47 图	3 地点	土坑 3323SK 平面・断面图	64
第 48 图	3 地点	土坑 3005・3163SK 平面・断面图	65
第 49 图	3 地点	土坑 3179SK 平面・断面图	66
第 50 图	3 地点	掘立柱建物跡 001・002・003・004SB 平面图	67
第 51 图	3 地点	掘立柱建物跡 001SB 平面・断面图	68
第 52 图	3 地点	掘立柱建物跡 002SB 平面・断面图	69
第 53 图	3 地点	掘立柱建物跡 003SB 平面・断面图	70
第 54 图	3 地点	掘立柱建物跡 004SB 平面・断面图	71
第 55 图	3 地点	掘立柱建物跡 005・006・007SB 平面图	73
第 56 图	3 地点	掘立柱建物跡 005SB 平面・断面图	74
第 57 图	3 地点	掘立柱建物跡 006SB 平面・断面图	75
第 58 图	3 地点	掘立柱建物跡 007SB 平面・断面图	76
第 59 图	3 地点	掘立柱建物跡 008SB 平面・断面图	77
第 60 图	3 地点	柱穴 3222・3270・3104・3311SP 礎石 平面图	78
第 61 图	3 地点	柱穴 3229SP 平面・断面图	79
第 62 图	2 地点 A 区	遺構平面图	81・82
第 63 图	2 地点 A 区	遺構平面图 1	83
第 64 图	2 地点 A 区	遺構平面图 2	84
第 65 图	2 地点 A 区	遺構平面图 3	85
第 66 图	2 地点 A 区	西壁土層断面图 1	86
第 67 图	2 地点 A 区	西壁土層断面图 2	87

第 103 図	2 地点 B 区	包含層 2029SX・溝状遺構 2028・2254・2164SD・土坑 2195SK	平面図	・ ・ 128
第 104 図	2 地点 B 区	包含層 2029SX・溝状遺構 2028・2254・2164SD	断面図	・ ・ 129
第 105 図	2 地点 B 区	土坑 2195SK	平面・断面図	・ ・ ・ ・ ・ 130
第 106 図	2 地点 B 区	土坑 2258SK	平面・断面図	・ ・ ・ ・ ・ 131
第 107 図	2 地点 B 区	溝状遺構 2194SD	平面・断面図	・ ・ ・ ・ ・ 132
第 108 図	2 地点 B 区	溝状遺構 2324SD	平面・断面図	・ ・ ・ ・ ・ 133
第 109 図	1 地点 A 区	竪穴状遺構 020SI	遺物実測図	・ ・ ・ ・ ・ 136
第 110 図	1 地点 A・B 区	区画溝 022・063SD・溝状遺構 065SD・井戸 069SE	遺物実測図	・ ・ ・ ・ ・ 136
第 111 図	1 地点 B 区	竪穴状遺構 066SI	遺物実測図	・ ・ ・ ・ ・ 137
第 112 図	3 地点	井戸 3010・3019・3223SE	遺物実測図	・ ・ ・ ・ ・ 139
第 113 図	3 地点	区画溝・溝状遺構・土坑・掘立柱建物跡	遺物実測図	・ ・ ・ ・ ・ 141
第 114 図	2 地点 A・B 区	区画溝・溝状遺構・土坑・掘立柱建物跡	遺物実測図	・ ・ 143
第 115 図	2 地点 A・B 区	弥生土器	遺物実測図	・ ・ ・ ・ ・ 145
第 116 図	3 地点・2 地点 A・B 区	石器	遺物実測図	・ ・ ・ ・ ・ 147
第 117 図	年代試料			・ ・ ・ ・ ・ 148
第 118 図	暦年較正結果			・ ・ ・ ・ ・ 148
第 119 図	畑間・東畑遺跡から出土した動物遺体			・ ・ ・ ・ ・ 152
第 120 図	保存処理遺物写真			・ ・ ・ ・ ・ 156
第 121 図	X線遺物写真			・ ・ ・ ・ ・ 157
第 122 図	畑間・東畑遺跡区画復元図			・ ・ ・ ・ ・ 159・160
第 123 図	周辺環境と溝・区画復元図			・ ・ ・ ・ ・ 163

表

表 1	既往報告書一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 7
表 2	測定試料及び処理	・ ・ ・ ・ ・ 148
表 3	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	・ ・ ・ ・ ・ 149
表 4	動物遺体一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 153
表 5	カメ出土遺跡一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 164
表 6	遺物観察表	・ ・ ・ ・ ・ 171

巻頭写真図版

巻頭図版 1	1 地点 全景	1 地点 B 区 全景
	竪穴状遺構 066SI 遺物出土	
巻頭図版 2	3 地点 遠景	
	土坑 3016・3017SK 完掘	

卷頭図版 3 2 地点 遠景

犬埋葬遺構 2088SX イヌ遺存体出土

卷頭図版 4 井戸 3223SE 4 段目井戸枠

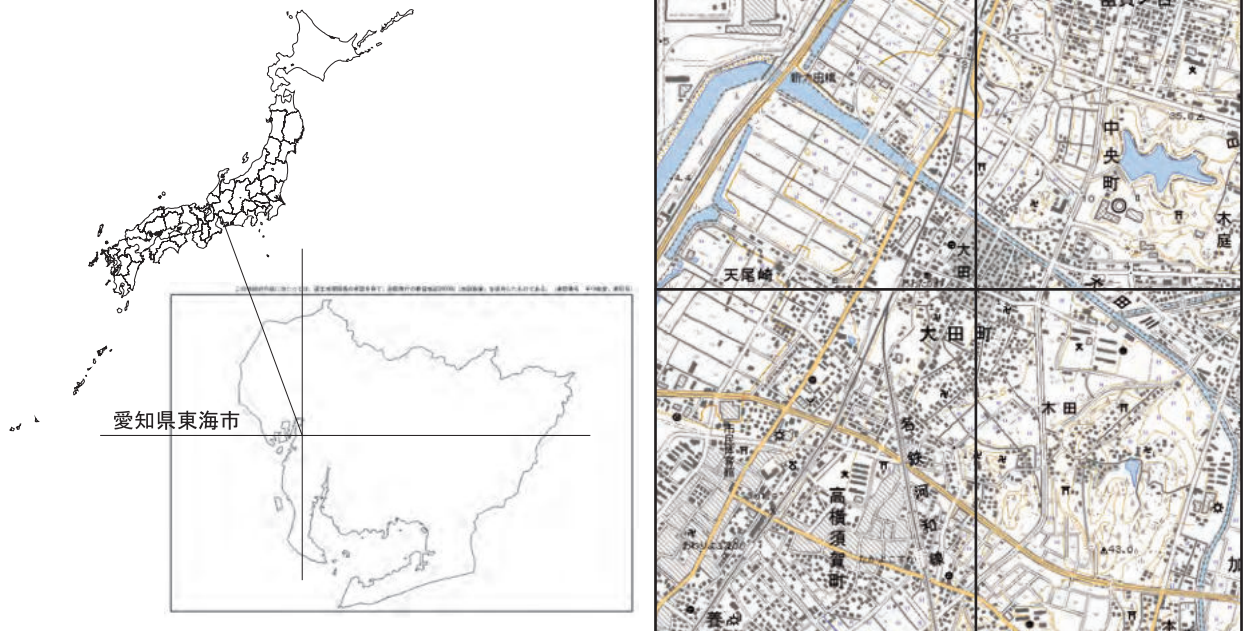
井戸 3223SE 出土遺物

写 真 図 版

- | | | |
|------|---------------------|-------------------------|
| 図版 1 | 1 地点 A 区 第 1 面全景 | 池状遺構 001SG 土層断面 |
| | 1 地点 A 区 第 2 面全景 | 土坑 006SK 粘土貼付状況 |
| | 1 地点 B 区 全景 | 1 地点 A 区 土坑群 完掘 |
| | 池状遺構 001SG 検出 | 井戸 069SE 完掘 |
| 図版 2 | 区画溝 022SD 完掘 | 溝状遺構 065SD 完掘 |
| | 区画溝 022SD 遺物出土 (3) | 竪穴状遺構 020SI 完掘 |
| | 区画溝 063SD 完掘 | 竪穴状遺構 066SI 遺物出土 |
| | 区画溝 064SD 完掘 | 竪穴状遺構 066SI 完掘 |
| 図版 3 | 3 地点 全景 | 3 地点 東側半景 |
| | 井戸 3010SE 土層断面 | 井戸 3019SE 土層断面 |
| | 井戸 3010SE 完掘 | 井戸 3223SE 土層断面 |
| | 井戸 3010SE 断割 | 井戸 3019・3223SE 完掘 |
| 図版 4 | 井戸 3223SE 井戸枠 1 段目 | 区画溝 3140SD 完掘 |
| | 井戸 3223SE 井戸枠 2 段目 | 区画溝 3011SD 土層断面 |
| | 井戸 3223SE 井戸枠 3 段目 | 区画溝 3011SD 遺物出土 (31) |
| | 井戸 3223SE 井戸枠 4 段目 | 区画溝 3011SD 完掘 |
| 図版 5 | 区画溝 3150SD 完掘 | 区画溝 3172SD 完掘 |
| | 区画溝 3170SD 完掘 | 区画溝 3172SD 遺物出土 |
| | 区画溝 3170SD 土層断面 | 区画溝 3251SD 完掘 |
| | 区画溝 3170SD 土層断面 | 区画溝 3251SD 土層断面 |
| 図版 6 | 土坑 3005SK 完掘 | 土坑 3269SK 遺物出土 (43) |
| | 土坑 3163SK 完掘 | 土坑 3016・3017SK 検出 |
| | 土坑 3179SK 完掘 | 土坑 3017SK 粘土塊・炭化物出土 |
| | 土坑 3269SK 検出 | 土坑 3017SK カマド材出土 |
| 図版 7 | 土坑 3017SK 粘土壁 | 掘立柱建物跡 001SB 完掘 |
| | 土坑 3017SK 完掘 | 柱穴 3226SP 礎石出土 |
| | 土坑 3016SK 完掘 | 掘立柱建物跡 002・003・004SB 完掘 |
| | 土坑 3016SK 粘土壁 | 掘立柱建物跡 005・006SB 完掘 |
| 図版 8 | 2 地点 A 区 全景 | 2 地点 A 区 全景 |
| | 溝状遺構 2235・2236SD 完掘 | 包含層 2200SX 土層断面 |
| | 包含層 2200SX 鹿角出土 | 区画溝 2221・2233SD 完掘 |

- 区画溝 2221・2233・2231SD 完掘
- 図版 9 区画溝 2206SD 完掘
区画溝 2285SD 完掘
区画溝 2285・2214SD 土層断面
土坑 2207SK 完掘
- 図版 10 溝状遺構 2222SD 完掘
竪穴状遺構 2290SI 検出
竪穴状遺構 2290SI 完掘
溝状遺構 2246SD 完掘
- 図版 11 2地点B区 全景
井戸 2001SE 土層断面
井戸 2001SE 完掘
土坑 2032SK 完掘
- 図版 12 竪穴状遺構 2013SI 完掘
竪穴状遺構 2015SI 完掘
竪穴状遺構 2080SI 完掘
竪穴状遺構 2097SI 完掘
- 図版 13 溝状遺構 2028SD 完掘
包含層 2029SX(溝状遺構 2164SD) 完掘
土坑 2195SK 完掘
土坑 2195SK 遺物出土
- 図版 14 溝状遺構 2254SD 完掘
土坑 2199SK 完掘
包含層 2029SX 完掘
溝状遺構 2324SD 完掘
- 図版 15 出土遺物 (1)
- 図版 16 出土遺物 (2)
- 図版 17 出土遺物 (3)
- 図版 18 出土遺物 (4)
- 図版 19 出土遺物 (5)
- 図版 20 出土遺物 (6)
- 図版 21 出土遺物 (7)
- 図版 22 出土遺物 (8)
- 図版 23 出土遺物 (9)
- 図版 24 出土遺物 (10)
- 区画溝 2231SD 完掘
区画溝 2215SD 完掘
区画溝 2212・2214・2291SD 完掘
区画溝 2202SD 完掘
区画溝 2210SD 完掘
掘立柱建物跡 001SB 完掘
不明遺構 2204SX 完掘
不明遺構 2204SX 土層断面
溝状遺構 2245SD 完掘
2地点B区 全景
区画溝 2010SD 完掘
区画溝 2150SD 完掘
溝状遺構 2027・2044SD 完掘
土坑 2045SK 土層断面
犬埋葬遺構 2088SX イヌ遺存体出土
犬埋葬遺構 2088SX イヌ遺存体出土
犬埋葬遺構 2088SX イヌ遺存体出土
包含層 2029SX 土層断面
包含層 2029SX(溝状遺構 2164SD) 完掘
土坑 2195SK 完掘
土坑 2258SK 遺物出土
溝状遺構 2164SD 完掘
溝状遺構 2164SD 遺物出土
溝状遺構 2194SD 完掘
溝状遺構 2197SD 完掘

第1章 序章



第1図 調査地の位置

第1節 調査にいたる経緯

畑間・東畑遺跡は愛知県東海市大田町に所在する（第1図）。平成8年度から同10年度にかけて愛知県教育委員会が実施した知多半島遺跡詳細分布調査（注1）によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけて、東畑遺跡は弥生時代から中世にかけての遺物散布地とされている。

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺地区を東海市の玄関口として位置づけ、中心市街地としての整備を進めており、平成4年度から土地区画整理事業、連続立体交差事業及び市街地再開発事業の三つの事業を実施している。これら事業のうち、土地区画整理事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するため、平成8年度に試掘調査を実施した（注2）。この調査によって、事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡をはじめ、後田遺跡、龍雲院遺跡が存在することを確認した（第3図）。試掘調査の結果に基づき、土地区画整理事業担当部局である都市建設部中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成11年度から東海市教育委員会によって、主として道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成28年度末時点での調査済面積は26,820㎡である。

平成30年度の調査は、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成30年4月4日付けにて文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘

の通知があり、平成30年5月8日付け30教生第4390号にて愛知県教育委員会教育長から発掘調査指示があった。畑間・東畑遺跡範囲内の計3地点1,010㎡については、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成30年5月15日付け中第7号にて発掘調査依頼があった。平成30年5月17日付け社第65号にて東海市教育委員会教育長から発掘調査を実施する旨回答し、現地調査業務及び1次整理作業について、平成30年6月29日に安西工業株式会社名古屋支店と業務委託契約を締結した。

現地調査は6月8日より着手し、社会教育課職員の監督の下、1地点、3地点、2地点の順に調査を実施した。翌、平成31年1月31日に現地調査は終了し、その後現場事務所にて1次整理作業を実施し、平成31年3月29日付けで成果品の納入を受けた。

平成31年度には報告書作成を行った。現地調査を受託した安西工業株式会社名古屋支店と2次整理作業及び報告書作成業務について、業務委託契約を令和元年6月27日に締結した。その後、社会教育課職員の監督の下、2次整理作業及び報告書作成業務を実施し、本報告書の刊行に至ったものである。

第2節 位置と歴史的環境

畑間・東畑遺跡は知多半島西岸の伊勢湾に面した海岸平地に展開する砂堆上に立地する遺跡である。知多半島西岸部には海岸部に向けて開けた海岸平地がいくつか展開するが、畑間・東畑遺跡の立地する東海市大田町周辺から、知多市北部の寺本にかけて南北に延びる海岸平地は中でも最大のものである。この平地を構成する地層は沖積層であり、縄文海進の時期には水面下にあったとみられる。その証左として、畑間・東畑・郷中遺跡の東側に延びる丘陵上に展開する高ノ御前遺跡がある。高ノ御前遺跡の現在の海拔高は12m程であり、市内最古の縄文時代前期の土器が出土している。その後、畑間・東畑遺跡周辺が陸地化したのは、海水面が後退する縄文時代中期から後期にかけてとみられ、東畑遺跡からは当該期の縄文土器が少なからず出土する。恐らく縄文時代中期から後期には砂堆と呼ばれる砂の高まりが形成され、現在遺跡の範囲として捉えている海岸平地が陸地化していたと考えられる。

砂堆とは、伊勢湾を河口に持つ木曾川や、知多半島の丘陵部から流れる小河川や、波による陸地の浸食等、様々な作用によって供給された砂が、伊勢湾の沿岸流等によって運ばれて海岸に沿って堆積したものと考えられており、その形成時期の違いによって本遺跡周辺では3条の砂堆列がみられる。最も海岸から奥の砂堆列から順に第1、第2、第3砂堆と呼んでおり、畑間・東畑遺跡は第1砂堆に位置する。この第1砂堆は最も東西幅が広く大規模であるが、南北方向は丘陵部に規制され、1km程にとどまる。この丘陵部には北側の丘陵上に真言宗の古刹である弥勒寺が、南側丘陵上に天台宗の古刹である観福寺が所在しており、両者に挟まれた位置に畑間・東畑遺跡の集落が展開することは示唆的である。この他第1砂堆上には、最も北側の弥勒寺が立地する丘陵山裾に王塚古墳（古墳時代・滅失）、神宮前遺跡（古墳～中世）が所在する。王塚古墳は、昭和初期の道路拡幅の際に石室などが出土したと伝えられ、出土遺物の一部（須恵器短頸壺・坏蓋）が東海市立郷土資料館に所蔵されている他は詳らかではない。同じく神宮前遺跡についても遺物散布地として知られてはいるが、発掘調査が実施されておらず、詳細は



第2図 遺跡周辺の環境 (航空写真)

不明である。なお、王塚古墳、神宮前遺跡の両遺跡のすぐ南を流れる大田川は、江戸時代初期に尾張藩 2 代藩主徳川光友により、横須賀御殿の建築に際して新たに開削された流路である。現在では大田川によって断絶されているものの、王塚古墳等は近世までは畑間・東畑遺跡と同じ砂堆上にあったものであり、一体の遺跡群としてとらえる必要がある。

第 2 砂堆は第 3 砂堆と比べて幅が狭く小規模である。名鉄太田川駅の辺りから北側の大宮神社辺りまで広がっている。この砂堆上には後田遺跡（古墳～平安）が位置する。後田遺跡周辺は宅地化が進んでいるが、製塩土器が採集されており、後述する上浜田遺跡、下浜田遺跡と密接に関連した遺跡であると考えられる。この砂堆の北端に位置する大宮神社は創建時期が不詳であるが、東海市史によると平安時代に大郷（大田町周辺）が熱田神宮の荘園となるに伴って、荘園鎮守神として熱田から勧請されたと推定されている。

第 1 砂堆は形成時期が最も新しいが、最も規模が大きく、旧海岸線沿いに知多市北部まで延びている。知多市域ではこの第 1 砂堆上に弥生時代以降大規模な集落が形成された。本市域では古墳時代中期以降に著名な製塩遺跡として知られる松崎遺跡（古墳～平安）や上浜田遺跡（古墳～平安）、下浜田遺跡（奈良～平安）が存在する。

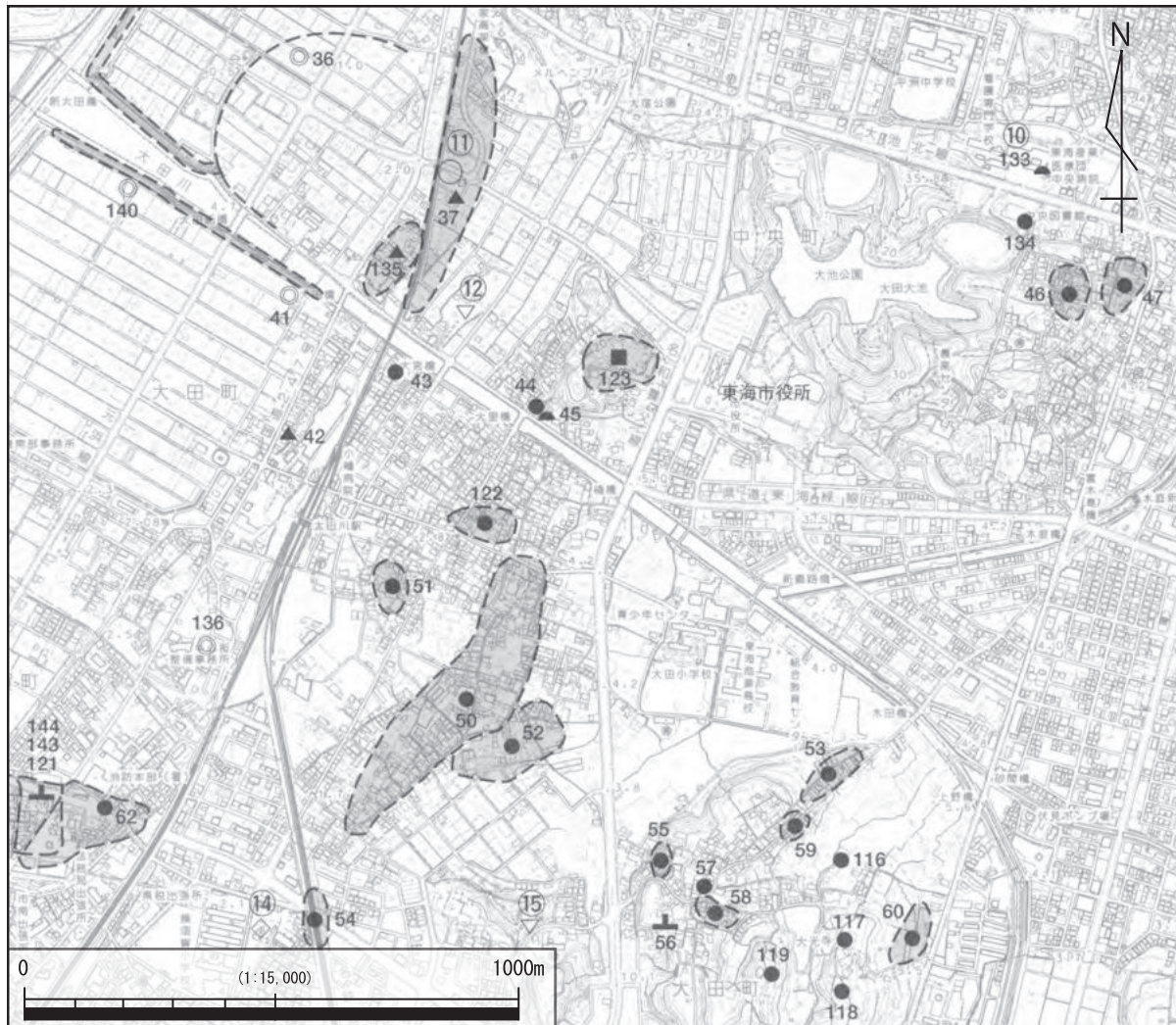
概観すると、畑間・東畑・郷中遺跡の所在する大田町周辺では、最も奥側の第 1 砂堆上に中心的な集落が立地し、第 2、第 3 砂堆が積極的に利用されるのは古墳時代以降ということになる。これは第 3 砂堆上に弥生集落が展開する知多市などとは様相を異にする。その理由としては、大田町周辺では内陸側に奥まった、いわば谷状地形であったことから、第 1 砂堆が大きく発達し、居住に適していたことが考えられる。

この大田町周辺には上記の遺跡の他、主に弥生時代の集落である烏帽子遺跡（縄文～近世）、尾張藩 2 代藩主徳川光友の浜御殿である横須賀御殿跡などの遺跡が所在する。また、近世には第 3 砂堆の海岸部が新田開発されて埋め立てられた。川北新田、川南新田、浜新田がそれである。中でも浜新田からは圃場整備に伴って新田堤防の圪（いり）が出土している。こうした近世の新田開発や大田川の付け替えに加え、現代の埋立てによって遺跡が形成された当時の景観は失われているが、遺跡の分布や僅かに残る砂堆の痕跡などから、かつての環境を復元することができる。

第 3 節 既往の調査

畑間・東畑遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、土地区画整理事業実施以前は試掘調査も含めて発掘調査は実施されていなかった。初めて調査が実施されたのは、第 1 節のとおり平成 8 年度の土地区画整理事業に先立つ試掘調査である。調査では、土地区画整理事業の予定区域内に 20 箇所のトレンチを設定して行った。このうち畑間・東畑遺跡に係るトレンチは 12 箇所になる。この試掘調査によって分布範囲が不明であった各遺跡について、概略ではあるが範囲を特定することができた。当時、各遺跡の時期については畑間遺跡が中世から近世、東畑遺跡が弥生時代中期から古墳時代前期と古代から中世であることが推測された。

その後は平成 11 年度からの本調査によって、畑間・東畑遺跡それぞれの遺跡の様相が明ら



- | | | | |
|----------------|--------------|-----------------|------------|
| 36 浜新田堤防 | 50 畑間遺跡 | 59 前畑遺跡 | 123 弥勒寺遺跡 |
| 37 松崎遺跡 | 51 龍雲院遺跡 | 60 北広遺跡 | 133 丸根古墳 |
| 41 後浜新田堤防 | 52 東畑遺跡 | 62 烏帽子遺跡 | 134 大池北貝塚 |
| 42 下浜田遺跡 | 53 高ノ御前遺跡 | 116 上前田遺跡 | 135 上浜田遺跡 |
| 43 後田遺跡 | 54 太田川第3踏切貝塚 | 117 西広1号遺跡 | 136 御州浜庭園跡 |
| 44 神宮前遺跡 | 55 庄之脇遺跡 | 118 西広2号遺跡 | 140 川南新田堤防 |
| 45 王塚古墳 | 56 木田城跡 | 119 山畑遺跡 | 143 滝川半斎屋敷 |
| 46 峰畑貝塚 | 57 木田遺跡 | 121 横須賀御殿跡 | 144 横須賀代官所 |
| 47 北屋敷遺跡 | 58 下畑遺跡 | 122 郷中遺跡 | |

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

かとなってきた。既往の調査地は第4図に示した通りであるが、各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗状況に応じて調査を実施しており、移転が進んでいなかった初期段階の調査は小規模なものとならざるを得なかった。このため調査当初は遺跡全体の様相のみならず、近隣調査区の遺構との整合を図ることすら困難であった。

発掘調査は駅前から延びる街路（駅前線）を中心に着手し始めたことから、南北方向に長く延びた畑間遺跡の中央部を東西方向に横断して調査する形となった。その後は周辺の街区道路の調査を順次実施している。これまでの調査では、主に縄文時代から近世にかけての幅広い時期の遺構・遺物を確認している。特筆すべき事項としては、1点目に縄文時代後期以降の縄文土器がまとまって出土したことである。畑間・東畑遺跡が立地する砂堆の形成時期を示唆する新たな知見である。2点目に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての時期毎の生活域が分かってきたことが挙げられる。近年は街区道路部分の調査も進んできており、遺跡内での集落の消長をたどることができるようになってきている。

なお、調査開始時の平成11年度から平成19年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については概要報告（注6）と並行して整理作業を実施し、平成25年度に報告書を刊行している（注7）。平成20年度以降は民間調査機関の支援を受けて調査を実施しており、基本的には調査翌年度に報告書を刊行している。民間支援の調査で刊行した発掘調査報告書は表1のとおりである。

注1『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』 愛知県教育委員会 1999

注2『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』 東海市教育委員会 1997

注3「横須賀町のあらまし」『横須賀町史』 横須賀町役場 1969

注4『法海寺遺跡』（知多市文化財報告第15集） 知多市教育委員会 1979

注5『愛知県史資料編4 考古4 飛鳥～平安』 愛知県史編さん委員会 2010

注6「伊勢湾を望む海辺の遺跡－東畑遺跡等発掘調査概報－」

東海市教育委員会（永井伸明・宮澤浩司）

『研究報告とうかい』創刊号 東海市教育委員会 2007

「伊勢湾を望む海辺の遺跡（2）－平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要－」

東海市教育委員会（宮澤浩司）

『研究報告とうかい』第2号 東海市教育委員会 2009

注7『愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告－平成11～19年度調査－』

東海市教育委員会 2014



第4図 調査区位置図

表1 既刊報告書一覧表

調査年次	書名	発行機関	編集機関	発行年
平成11年度～19年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告—平成11～19(1999～2007)年度調査—	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	平成26年(2014年)
平成20年度	愛知県東海市畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際航業株式会社	平成21年(2009年)
平成21年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	安西工業株式会社名古屋支店	平成24年(2012年)
平成22年度	愛知県東海市平成22年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	平成24年(2012年)
平成23年度	愛知県東海市畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	平成25年(2013年)
平成24年度	愛知県東海市平成24年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	平成26年(2014年)
平成25年度	愛知県東海市平成25年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告書	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	平成27年(2015年)
平成26年度	愛知県東海市平成26年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	平成28年(2016年)
平成27年度	愛知県東海市平成27年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	平成29年(2017年)
平成28年度	愛知県東海市平成28年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	平成30年(2018年)
平成29年度	愛知県東海市平成29年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社中部支店	平成31年(2019年)

第4節 発掘調査の方法

遺跡略号・調査区

これまでの調査を踏襲し、2018年度の調査ということで畑間遺跡は「HM 18」、東畑遺跡は「HH 18」とした。図面や写真、遺物カード、遺物注記にこれらの略号を使用している。

調査区は畑間遺跡と東畑遺跡に所在する。内訳としては1地点A区・1地点B区・3地点・2地点A区が畑間遺跡、2地点B区が東畑遺跡に所在する。

遺構番号・遺構略号

遺構番号は各地点で種別に関係なく通し番号で付与した。調査時において1地点では3桁を、2地点・3地点では各地点数字を頭に4桁の数字を付与した。また、

1地点 001～ 2地点 2001～ 3地点 3001～

遺構略号については『発掘調査の手引き』文化庁文化財部記念物課編 2010に準拠する。

S K = 土坑 S P = 柱穴 S D = 溝状遺構 S E = 井戸 S B = 掘立柱建物

S I = 竪穴状遺構 S X = 不明遺構・落ち込み等 S G = 池状遺構 N R = 自然流路

なお、遺構略号は整理作業時の検討の結果、調査時に付与した略号を変更しているものもある。

以上の法則を用いて遺構表記は0001SPのように前に番号を、後に略号を配置して表記した。

基準点設置・グリッド設定

基準点は2級基準点を基点とし、調査区を網羅する位置に4級基準点を設置した。またそれとは別に、トータルステーションを設置する関係上、任意の位置に補助点を設置した。座標は世界測地系座標による。

グリッドは既調査との整合性を保つため、2017年度調査の配置に準じる形で設定を行った。世界測地系の平面直角座標系第Ⅶ系の座標に基づき、座標のX軸を座標系原点の子午線に一致する軸として、Y軸をX軸に直交する軸とし、座標系原点からX軸は真北、Y軸は東へ向かう数値を正とする。これに基づき1km×1kmの大グリッドを設定し、さらに100m×100mの中グリッドを設定し、最小単位として5mグリッドを設定した。北から南方向を1～20で、東～西方向をa～tで示した。

記録作業

遺構配置図、遺構平面図、調査区土層断面図、各遺構実測図用ポイントの座標記録にはトータルステーションと電子平板を用いた。遺構断面図は手測りを基本とした。遺物出土状況図及び壁面断面図は写真測量を用いた。

写真撮影は35mm一眼レフカメラ(リバーサル)、一眼レフデジタルカメラ(2000万画素以上)を使用した。俯瞰撮影は高所作業車(22m規格)を利用して撮影を行った。現像したフィルム、画像データはその都度収納・管理し、写真台帳を作成した。出土遺物のうち、包含層出土遺物はグリッド及び層位ごとに取り上げた。また、遺構内遺物も層位ごとに取り上げた。重要遺物については、出土地点の座標を記録した。

遺構検出・掘削

表土等の掘削は重機を用いて、遺物包含層上面まで掘削を行った。大きな攪乱については重機で掘削を行った。遺物包含層は人力で層位順に掘削と精査を行い、遺構の検出に努めた。当遺跡は砂堆上に立地することから土壌や遺物の流動性が高く、壁面観察からは複数の遺構面を把握しているが、平面観察からは遺構の判断は困難であった。このため、ほとんどの遺構は地山面直上で検出を行った。また、遺物包含層の掘削において大きな破片等については出土位置を測量し、遺構との整合に努めた。

1次整理・2次整理・報告書作成

1次整理作業として遺物洗浄とジェットマーカーによる注記を現地作業と併行して行った。整理した遺物は日付順を基本として種別ごとに分類を行い、台帳を作成した。実測図は手描き図面についてはデジタルトレースを行った。デジタル測量を行った図面については線種やレイヤー整理を行い、原図として整理し、台帳を作成した。撮影したリバーサルフィルムはマウント現像を行い、アルバムに収納した後、デジタル写真と整合を行い、台帳を作成した。

2次整理作業として遺物接合、実測を行い、デジタルトレースと図版を作成した。遺構図版は原図からの切り出しと、線種や効果の調整をして作成した。報告書の作成はデジタル編集で行った。

第5節 発掘作業の経過

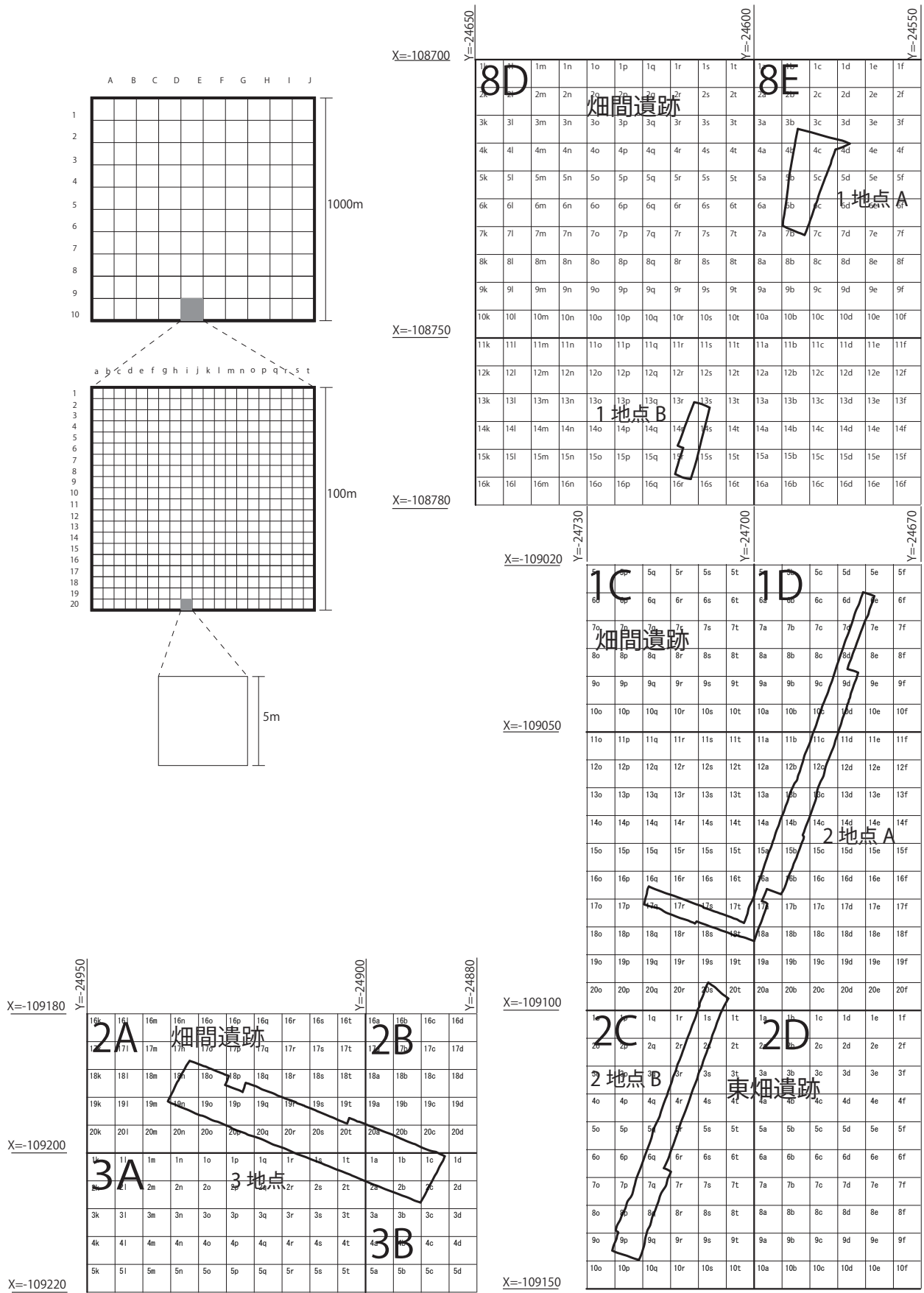
契約締結後、平成30年7月17日より現場事務所設置等を行った。現地調査は畑間遺跡1地点より着手し、7月30日から7月31日まで1地点A区を、8月1日に1地点B区の表土掘削を行った。表土掘削完了後に作業員による調査区壁面精査と包含層掘削を行った。1地点

A区とB区の調査は工程上の制約からほぼ同時進行で行い、1地点A区下層において自然流路の痕跡を確認したことから、2面目の調査を行うこととなった。8月21日に1地点A区第1面の完掘写真撮影と記録作業を行い、同時に1地点B区の調査を進めていった。8月29日に高所作業車を使用して1地点A区第2面と1地点B区の完掘写真撮影を行った。その後、補足調査と記録作業を行って、9月5日に1地点の調査を完了した。埋め戻しは調査が完了した箇所から順次行い、9月7日に埋め戻しが完了し、現地を引き渡した。

続いて畑間遺跡3地点の調査を開始した。9月5日より表土掘削を開始した。東側より掘削を進めていくと、西側に向かって緩やかに傾斜していく様子が確認された。3地点は遺跡の縁辺部にあたることから旧大田川河道に接続する可能性が考えられたので、全容の把握を優先して、西側の表土掘削を行った。その結果、地山が東側よりも高いレベルで確認出来たことから、自然堤防状の高まりか、もしくは谷状地形が展開する可能性が高く、遺跡の立地に関わる重要な箇所と認識した。壁面精査と包含層掘削は表土掘削の進捗に合わせて行い、多くの遺構を検出した。周辺での既往調査から、古代から中世の遺構が展開していると予想していたが、中世の遺構・遺物がほとんどで古代の遺構は確認できず、遺物も極少数の破片を確認するのみであった。10月25日に高所作業車を使用して、完掘写真撮影を行った。その後、補足調査と記録作業を行った。埋め戻しは調査が完了した箇所から順次行い、11月8日に井戸の断ち割り・記録作業とその箇所の埋め戻しをもって、調査を完了した。

最後に東畑遺跡2地点B区と畑間遺跡2地点A区の調査を開始した。既存建物の解体と事業用地の都合上、11月1日から2地点B区の表土掘削を開始した。北側より掘削を進めていくと、予定より浅い深度で地山と想定される黄褐色土層と遺物包含層と想定される黒褐色土層を確認したことから、以後土の変化を見ながら慎重に掘削を進めた。その過程において、古代の遺物が集中的に出土する範囲を確認したことから、当該期の遺構が展開している可能性を考慮しつつ、掘削作業を進めた。2地点B区の表土掘削完了後、2地点A区の表土掘削を開始した。A区は攪乱が著しく、調査面の把握が困難であった。

2地点A区とB区の調査は工程上の制約からほぼ同時進行で行った。攪乱を掘削して地山層の確認を行い、遺構面の把握につとめた。表土掘削の経緯から古代の遺構・遺物の痕跡に注意して精査を行った結果、古代から中世の遺構・遺物を確認することが出来た。特に2地点B区北側では古代の遺物が集中する様子がみられたので、調査区を拡張する必要性が生じた。11月29日には地元ケーブルテレビの地域広報番組「ハローとうかい」の取材を受け、また、12月8日には現地説明会を開催し、調査成果の周知を行った。12月14日に高所作業車を使用して、2地点B区の完掘写真撮影を行った。その後、調査区の拡張と調査を行い、12月28日に一旦現地作業を終了した。1月7日に作業を再開し、2地点A区及びB区拡張部分の調査



第5図 グリッド配置図

を行った。1月22日に高所作業車を使用して、2地点A区の完掘写真撮影を行った。その後、補足調査と埋め戻しを行い、1月31日に現地作業を終了した。

1次整理は1月7日より遺物洗浄を行った。2月28日から遺物注記を行い、3月29日に成果品の納品を行い、当委託業務を完了した。

発掘調査作業は以下の体制で行った。

調査監督者	宮澤浩司	
	安津由香里	(東海市教育委員会社会教育課)
現場代理人	三木孝博	(安西工業株式会社)
受託調査員	久富正登	(安西工業株式会社)
調査補助員	日紫喜勝重	(安西工業株式会社)
計測員	門田哲侍	(安西工業株式会社)
計測補助員	村崎和明	(安西工業株式会社)
作業世話役	吉田哲也	
重機運転手	守屋久人	
発掘作業員	牟田神東勝男、平野光男、平野武光、藤井恭彦、中野まち子、水谷美子、神野攻一、藤井恵美子、井上由子、下谷雅子、石黒立人	

第6節 整理作業の経過

整理及び報告書作成は令和元年7月1日に東海市高横須賀町に整理作業所を開設し、翌日2日に東海市遺物収蔵庫から整理所にコンテナ数にして39箱の遺物を搬入した。遺物の2次整理作業としては、まず報告書掲載遺物の選定を行い、復元と接合作業を行った。その後実測と写真撮影を行い、手描き実測図をスキャニングしてイラストレーターを用いてデジタルトレースを行った。上記の作業と並行して遺構から出土した遺物を中心に分類作業を行い、年代観の把握に努めた。報告書作成に関わる遺物についてはコンパクトデジカメでメモ写真を撮影し、台帳の整理とデータベース化を進めた。

9月から図版作成に着手した。報告遺構遺物の図版を作成し、A4版を基本として編集作業を行った。また、原稿作成の過程で必要となった図版はその都度作成を行った。写真図版については調査経過の表現に留意し作成を行った。

令和2年3月2日に原稿及び版組を完了し、印刷所へ入稿、印刷を行い、3月31日に業務を完了した。

整理調査作業は以下の体制で行った。

調査監督者	宮澤浩司	
	早川由香里	(東海市教育委員会社会教育課)
受託調査員	久富正登	(安西工業株式会社)
調査補助員	新山王諒太	(安西工業株式会社)
	鈴木淳子	(安西工業株式会社)
2次整理	花井晶子、大杉規之、上田誠人	藤井恵美子、井上由子、下谷雅子

調査日誌抄

平成 30 年

1 地点 (畑間遺跡)

- 7月17日 現場事務所設置。
- 7月30日 1 地点A区の表土掘削開始。
- 8月1日 1 地点B区の表土掘削開始。
- 8月2日 作業員による調査区壁面精査と包含層掘削開始。
- 8月6日 池状遺構 001SG 検出。粘土を貼り付けている痕跡確認。
- 8月9日 須恵器を包含する遺構を確認。竪穴状遺構 (066SI) か？
- 8月10日 断面観察から遺構が複層に亘っている可能性を確認。方形区画溝の痕跡 (022SD) を確認。夏期休暇のため現場養生を行う。
- 8月16日 現地作業再開。1 地点A区 1 面の遺構を完掘した。
- 8月17日 1 地点B区の包含層掘削開始。北壁周辺で須恵器坏や甑が一括で出土。竪穴跡遺構か？
- 8月20日 方形区画溝 (063・064SD) を確認。
- 8月21日 1 地点A区第 1 面の完掘写真撮影と記録作業を行う。
- 8月22日 1 地点A区下層において自然流路の痕跡を確認。
- 8月23日 台風 20 号の接近により、現場作業中止。
- 8月24日 1 地点A区水没のため、現地作業中止。
- 8月28日 1 地点A・B区共に遺構完掘。全景撮影準備を行う。
- 8月29日 高所作業車を使用して 1 地点A区第 2 面と 1 地点B区の完掘写真撮影。
- 8月30日 補足調査を行う。井戸 069SE を確認した。
- 9月3日 066SI の遺物取り上げ。
- 9月4日 台風 21 号接近のため、現地作業中止。猛烈な風であった。
- 9月5日 1 地点の調査を完了。
- 9月7日 埋め戻しが完了し、現地を引き渡した。

3 地点 (畑間遺跡)

- 9月5日 表土掘削を開始。東側より掘削を進めていくと、西側に向かって緩やかに傾斜していく様子が確認された。3 地点は遺跡の縁辺部にあたることから旧大田川河道に接続する可能性が考えられる。
- 9月12日 西側の表土掘削を行った。その結果、地山が東側よりも高いレベルで確認出来たことから、自然堤防状の高まりか、もしくは谷状地形が展開する可能性が高く、遺跡の立地に関わる重要な箇所と認識した。
- 9月13日 掘立柱建物を構成する可能性がある柱列と粘土壁をもつ可能性がある遺構 (3016・3017SK) を確認した。表土掘削を進めたところ、谷状地形を確認することができた。旧地形復元から 3 地点は畑間遺跡が立地する第 1 砂堆の南端に当たり、また旧大田川につながる遷緩線に当たるか？
- 9月21日 全体の遺構検出ほぼ完了。南北方向に延びる溝を複数確認。
- 9月26日 3011SD の掘削を開始。12～13 世紀の遺物が見られる。
- 9月28日 全体の遺構掘削を進める。午後より台風 24 号接近のため、現場養生を行う。
- 10月1日 幸い台風の影響は少なかった。
- 10月2日 3011SD の北側で井戸状の範囲 (3019SE) を確認。
- 10月11日 3017SK で明瞭な粘土壁を確認。底部にも粘土を張っていたか？
- 10月16日 3017SK の埋土に炭化物やカマド材と思われる粘土塊を確認。石黒氏より製塩に関わる遺構ではないかとの指摘を受ける。

- 10月17日 3019SEの調査を進めたところ、円形の平面プランを確認したことから井戸(3223SE)が重複しているものと判断。
3017SK炭化物サンプル採取。年代測定試料にする予定。
- 10月23日 大きな土坑と判断していたものが掘削過程で複数の柱穴になる様子を確認。長期間にわたっての立て替えか？
- 10月24日 遺構掘削完了。全景写真撮影準備。
- 10月25日 高所作業車を使用して、完掘写真撮影を行った。
- 10月26日 補足調査を行う。3251SDの調査を行う。堆積土が地山に酷似している。
- 10月29日 3016・3017SKの断ち割りを行う。3017SKにおいて初期の粘土壁を確認。
- 10月31日 埋め戻し開始。補足調査は井戸の断ち割りを残すのみ。
- 11月7日 3010SE断ち割り。湧水が著しいため、底部は確認できず。
- 11月8日 3223SE断ち割り。井戸枠5段目まで確認。記録は4段目まで、それ以下は湧水のため断念。枠内には多量の遺物や石とともに、カメの遺存体多数出土。埋め戻し完了。
- 2地点A区(畑間遺跡)・2地点B区(東畑遺跡)
- 11月1日 2地点B区の表土掘削を開始。
- 11月5日 弥生土器が多く出土する箇所(2029SX)を確認。
- 11月13日 遺構検出完了。南側より時期の新しい遺構から掘削を開始。
- 11月15日 動物遺存体(2088SX)を確認。明らかに部位の不足が見られる。
- 11月19日 2地点A区の表土掘削を開始。
- 11月20日 2地点A区の攪乱が著しい。地山に近い堆積が見られるが、色調がくすんでいる印象を受ける。客土か？
- 11月26日 2地点A区・B区の調査を進める。B区では中世の竪穴状遺構が複数存在するか？
- 11月28日 2地点A区・B区の調査を進める。A区2200SXの調査を進める。大溝状遺構と推定していたが、調査の結果複数の溝を確認した。包含層だったのか。
- 11月29日 地元ケーブルテレビの地域広報番組「ハローとうかい」の取材
- 12月3日 2204SXから古代の遺物が出土。周辺の調査成果から古墳の周溝か？
- 12月8日 現地説明会を開催。
- 12月14日 高所作業車を使用して、2地点B区の完掘写真撮影。
- 12月15日 2地点B区の一部を拡張し、古代遺構の範囲の確認を行った。
- 12月18日 S字状口縁台付甕を有する土坑(2195SK)を確認。
- 12月25日 2地点B区の一部を除いて調査を完了したため、段階的に埋め戻しを開始。
- 12月28日 一旦現地作業を終了。
- 平成31年
- 1月7日 現地作業を再開した。
- 1月10日 2地点A区にて区画溝が重複している痕跡を確認。区画の規則性と継続性の可能性があるか？
- 1月12日 2地点A区にて竪穴状遺構(2900SI)を確認した。2地点B区にて剥片などが出土した。
- 1月21日 遺構掘削が完了した。
- 1月22日 高所作業車を使用して、2地点A区の完掘写真撮影を行った。
- 1月24日 補足調査完了。
- 1月25日 全体の埋め戻し開始。
- 1月31日 埋め戻しが完了。現地作業を終了した。

第2章 遺構

第1節 1地点A・B区(畑間遺跡)の遺構

概要と基本層序

1地点A・B区(畑間遺跡)は遺跡が立地する第1砂堆のほぼ中央に位置し、明応2年(1493年)開基とされる常蓮寺境内西側に隣接する。既往調査から古代から中世・近世にかけての遺構・遺物が確認されており、特に中世の町割とそれを踏襲する近世町割からは当該地が継続的に発展していった様相がうかがえる。調査面積は1地点A区で108㎡、1地点B区で45㎡を調査した。1地点A区は畑間遺跡の北縁部に立地し、平成21年度の郷中遺跡6B地点と畑間遺跡5地点の調査区に近接する。1地点Bは1地点A区より50mほど南下した地点に立地し、平成25年度の畑間遺跡2地点の調査区に近接する。基本層序は以下のとおりである。

- | | |
|-----------|---|
| I層：表土層 | 近現代の盛土である。 |
| II層：遺物包含層 | 10YR3/4 黒褐色砂質土と10YR3/3 黒褐色砂質土を主体とする。
近世から中世の遺物を包含する。 |
| III層：基盤層 | 地山である10YR6/6 明黄褐色細粒砂と自然流路の堆積に由来する。湧水も認められる。 |

1地点A区は近世以降の攪乱が著しく、北半部は攪乱によりほとんど消失しており、遺構の残存状況は非常に悪かった。南半部では中世から近世にかけての遺構と古代に遡る可能性が考えられる遺構を確認した。また、下層において自然流路と思われる落ち込みを確認した。遺構の内訳は井戸1基(002SE)、池状遺構1基(001SG)、区画溝1条(022SD)、ピット8基、土坑20基、溝状遺構1条(037SD)、不明遺構1基(013SX)、竪穴状遺構1基(0020SI)、自然流路2条(035NR・038NR)である。近世以降に帰属する遺構は井戸(002SE)、池状遺構(001SG)、不明遺構(013SX)などが挙げられる。また、土坑の内、004SK、005SK・006SK・007SK、009SKなどは層序や埋土から近世に属する可能性が考えられる。中世に帰属する遺構は区画溝(022SD)や溝状遺構(037SD)、010SKや021SKなどの土坑、026SK・028SK・029SK・030SK・033SKなど掘立柱建物跡の可能性のある土坑などが挙げられる。古代に帰属する遺構は竪穴状遺構(020SI)が挙げられる。その他、自然流路(035NR、038NR)など遺跡の立地に関わる痕跡を確認した。

1地点B区は1地点A区の様子から近世以降の攪乱を受けているものと予想していたが、調査を進めていくと一部は攪乱を受けているものの、遺構の残存状況は非常に良好であった。古代から近世代の遺構・遺物を確認した。遺構の内訳は井戸3基(051SE・060SE・069SE)、区画溝2条(063SD・064SD)、溝状遺構1条(065SD)、ピット・土坑11基、竪穴状遺構1基(066SI)、竪穴状遺構の可能性のある土坑(067SK)、不明遺構1基(068SX)である。近世代に帰属する遺構は井戸(051SE・060SE)が挙げられる。その他、調査区南側では分厚い黄褐色粘

土で構築された貯水躯体と思われる構造物を確認した。埋土中には貝殻片と古代から近世代の遺物を大量に包含することや構築面が現況地表とほとんど変わらないことから、近代以降に構築されたものと判断される。中世に帰属する遺構は区画溝 (063SD・064SD) とそれに先行する溝状遺構 (065SD)、065SD に先行する井戸 (069SE) のほか掘立柱建物を構成する可能性があるピットと土坑を確認した。古代に帰属する遺構は竪穴状遺構 (066SI) とそれに先行する土坑 (067SK) である。066SI からは一括性の高い遺物の出土を確認した。

近世の遺構

井戸 002SE(第 6 図)

1 地点 A 区 8E6c グリッドに位置する。調査区東側に拡がることから全容は不明であるが、長径 2.1m、深さ 1m 以上をはかる。楕円形の平面形状を呈す。井戸枠材は確認できなかった。001SG を切る。調査面から 0.59m 掘削した時点で湧水による崩落が著しかったので、安全上、掘削を中断した。そのため最終的な深さは不明である。出土遺物は山茶碗、播鉢、常滑産陶器片のほか須恵器片などが見られる。廃絶時の混入が著しいことから遺物から時期を推定することは難しいが、001SG を切ることから 18 世紀以降と思われる。

池状遺構 001SG(第 11 図 図版 1)

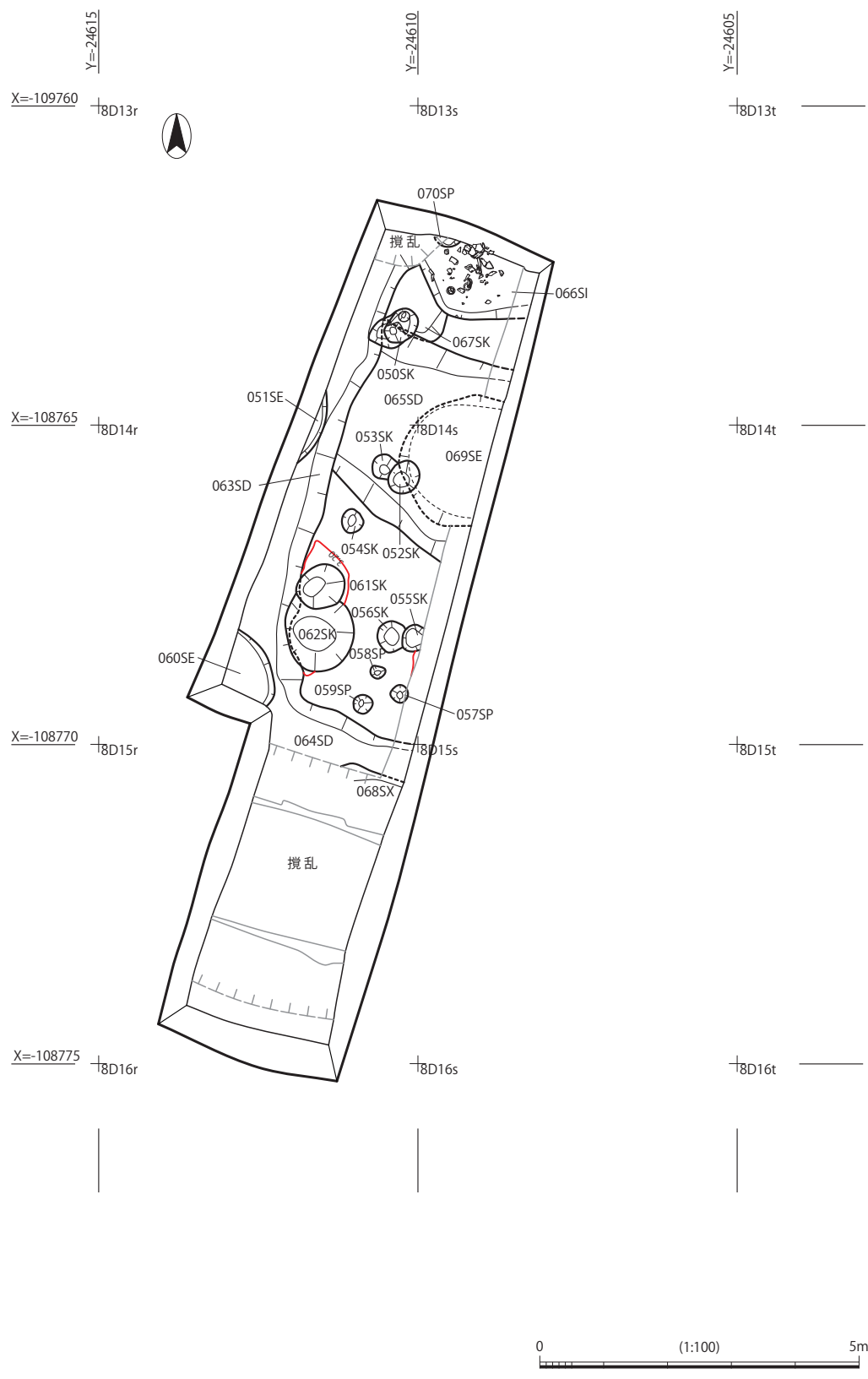
1 地点 A 区 8E6b グリッドに位置する。長径 3.67m、短径 2.61m、深さ 0.17m をはかる。不整五角形状の平面形状を呈す。002SE に切られる。033SK を切る。掘削時に人頭大の丸石が数点出土し、土層を観察すると遺構の肩部に粘土を貼り付けている様相が見られることから、池状遺構と判断した。出土遺物は陶器、染付碗 (78) などが見られる。廃絶時の混入が著しいことから遺物から時期を推定することは難しいが、概ね 18 世紀以降と思われる。

不明遺構 013SX(第 13 図)

1 地点 A 区 8E4c グリッドに位置する。長径 3.42m、短径 0.78m、深さ 0.25m をはかる。調査区東側に拡がることから全容は不明であるが、長方形の平面形状を呈す。掘削時に灰白色粘土が多く見られたため、土層を観察すると遺構の底面に灰白色粘土を貼り付け、壁面に板材をはめ込んだ痕跡を確認した。出土遺物は山茶碗、陶器、染付皿などが見られる。廃絶時の混入が著しいことから遺物から時期を推定することは難しいが、概ね 19 世紀以降と思われる。

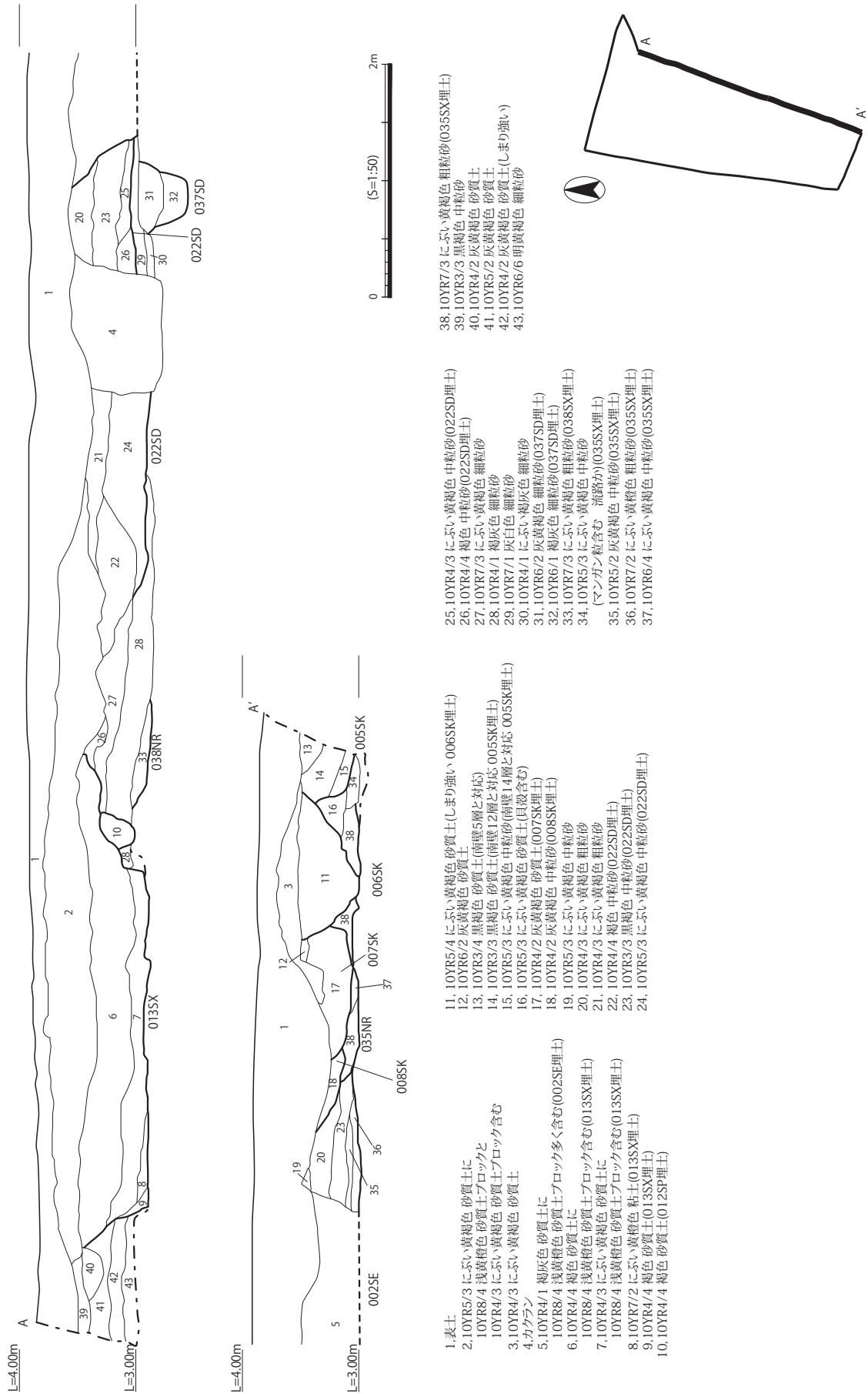
土坑 004SK、土坑 005SK、土坑 006SK、土坑 007SK、土坑 009SK(第 11 図 図版 1)

1 地点 A 区 8E6b～7b グリッドに位置する土坑群である。方形及び円形の平面形状を呈す。深さは浅いものが多いが、調査区の断面観察から平均的に 0.5m ほどの深さを有することを確認した。また、土坑 006SK には底部に灰白色粘土を貼り付けている。中央がやや凹んでいることから用途については柱や埋甕などの基礎、もしくは貯水等の目的が考えられる。007SK には埋土に貝殻片が多量に含まれている。009SK には埋土に灰白色粘土ブロックが含まれている。遺構の時期差については切り合い関係から観察すると 005SK と 007SK が 006SK に先行する。出土遺物はロクロ土師器皿、山茶碗、陶器などが見られるが細片のため全容は不明である。廃絶時の混入が著しいことから遺物から時期を推定することは難しいが、遺構の構築面から 16 世紀以降と思われるが断定は避ける。



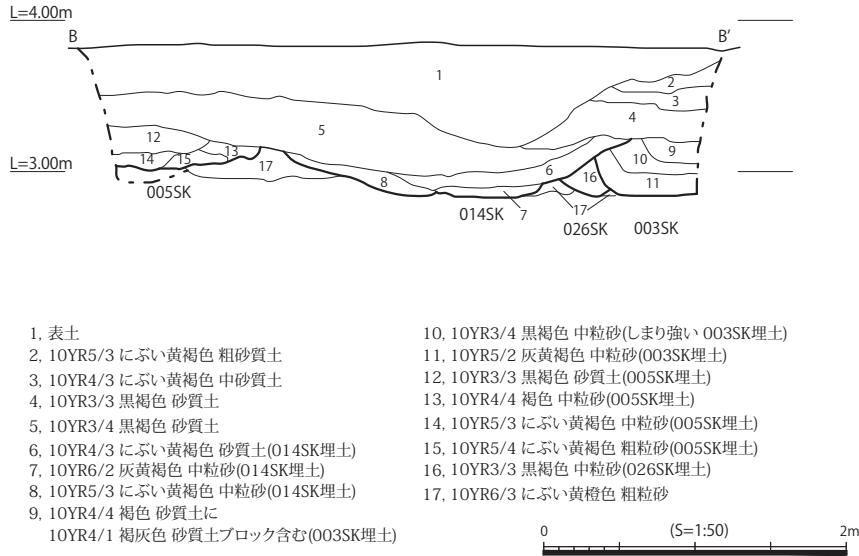
第7図 1地点B区 遺構平面図

東壁

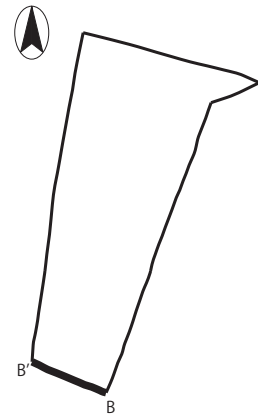


第8図 1地点A区 東壁土層断面図

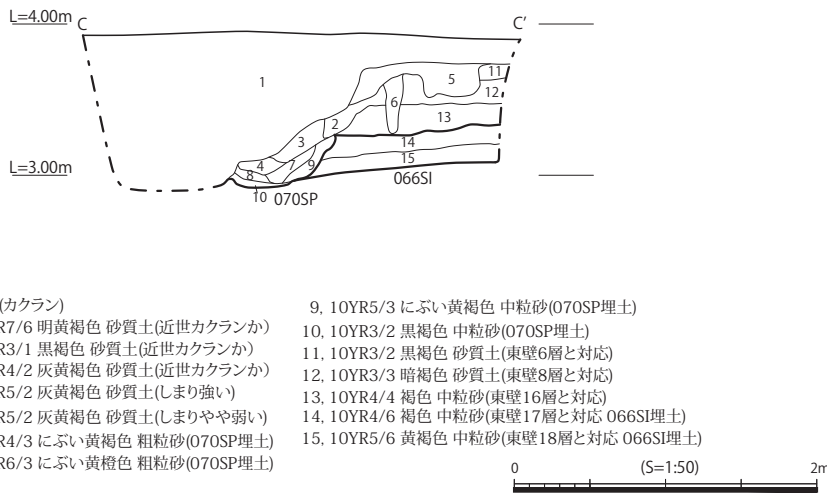
1 地点 A 区 南壁



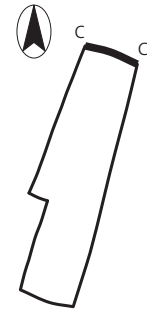
- | | |
|--|------------------------------------|
| 1. 表土 | 10. 10YR3/4 黒褐色 中粒砂(しまり強い、003SK埋土) |
| 2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂質土 | 11. 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂(003SK埋土) |
| 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中砂質土 | 12. 10YR3/3 黒褐色 砂質土(005SK埋土) |
| 4. 10YR3/3 黒褐色 砂質土 | 13. 10YR4/4 褐色 中粒砂(005SK埋土) |
| 5. 10YR3/4 黒褐色 砂質土 | 14. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂(005SK埋土) |
| 6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土(014SK埋土) | 15. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒砂(005SK埋土) |
| 7. 10YR6/2 灰黄褐色 中粒砂(014SK埋土) | 16. 10YR3/3 黒褐色 中粒砂(026SK埋土) |
| 8. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂(014SK埋土) | 17. 10YR6/3 にぶい黄褐色 粗粒砂 |
| 9. 10YR4/4 褐色 砂質土に
10YR4/1 褐灰色 砂質土ブロック含む(003SK埋土) | |



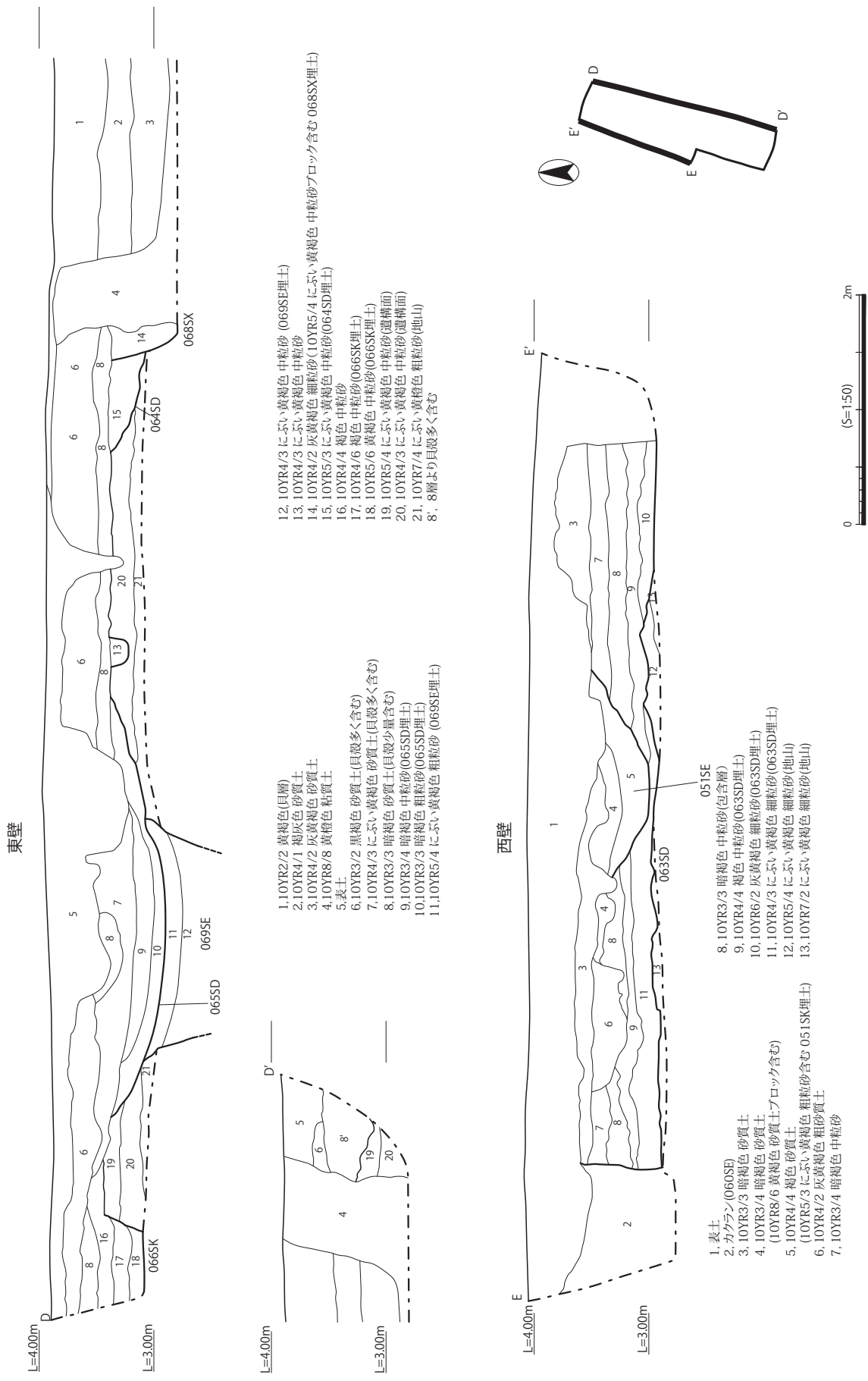
1 地点 B 区 北壁



- | | |
|--------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 表土(カクラン) | 9. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂(070SP埋土) |
| 2. 10YR7/6 明黄褐色 砂質土(近世カクランか) | 10. 10YR3/2 黒褐色 中粒砂(070SP埋土) |
| 3. 10YR3/1 黒褐色 砂質土(近世カクランか) | 11. 10YR3/2 黒褐色 砂質土(東壁6層と対応) |
| 4. 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土(近世カクランか) | 12. 10YR3/3 暗褐色 砂質土(東壁8層と対応) |
| 5. 10YR5/2 灰黄褐色 砂質土(しまり強い) | 13. 10YR4/4 褐色 中粒砂(東壁16層と対応) |
| 6. 10YR5/2 灰黄褐色 砂質土(しまりやや弱い) | 14. 10YR4/6 褐色 中粒砂(東壁17層と対応、066SI埋土) |
| 7. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒砂(070SP埋土) | 15. 10YR5/6 黄褐色 中粒砂(東壁18層と対応、066SI埋土) |
| 8. 10YR6/3 にぶい黄褐色 粗粒砂(070SP埋土) | |



第9図 1 地点 A 区 南壁土層断面図
1 地点 B 区 北壁土層断面図

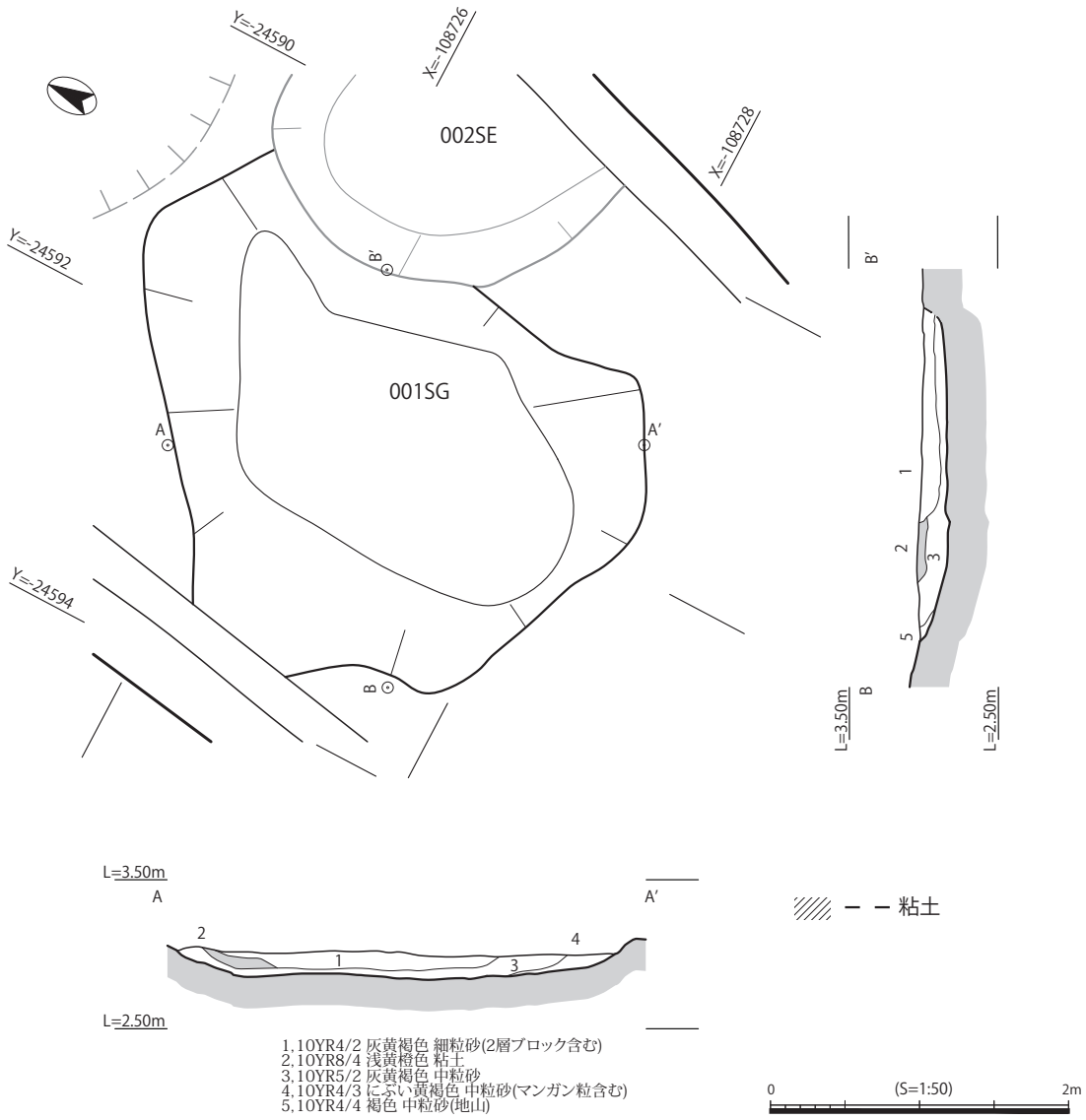


- 12. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂 (069SE埋土)
- 13. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂
- 14. 10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂 (10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂+ブロック含む 068SX埋土)
- 15. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂 (064SD埋土)
- 16. 10YR4/4 褐色 中粒砂
- 17. 10YR4/6 褐色 中粒砂 (066SK埋土)
- 18. 10YR5/6 黄褐色 中粒砂 (066SK埋土)
- 19. 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂 (遺構面)
- 20. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂 (遺構面)
- 21. 10YR7/4 にぶい黄褐色 粗粒砂 (地山)
- 8. 8層より貝殻多く含む

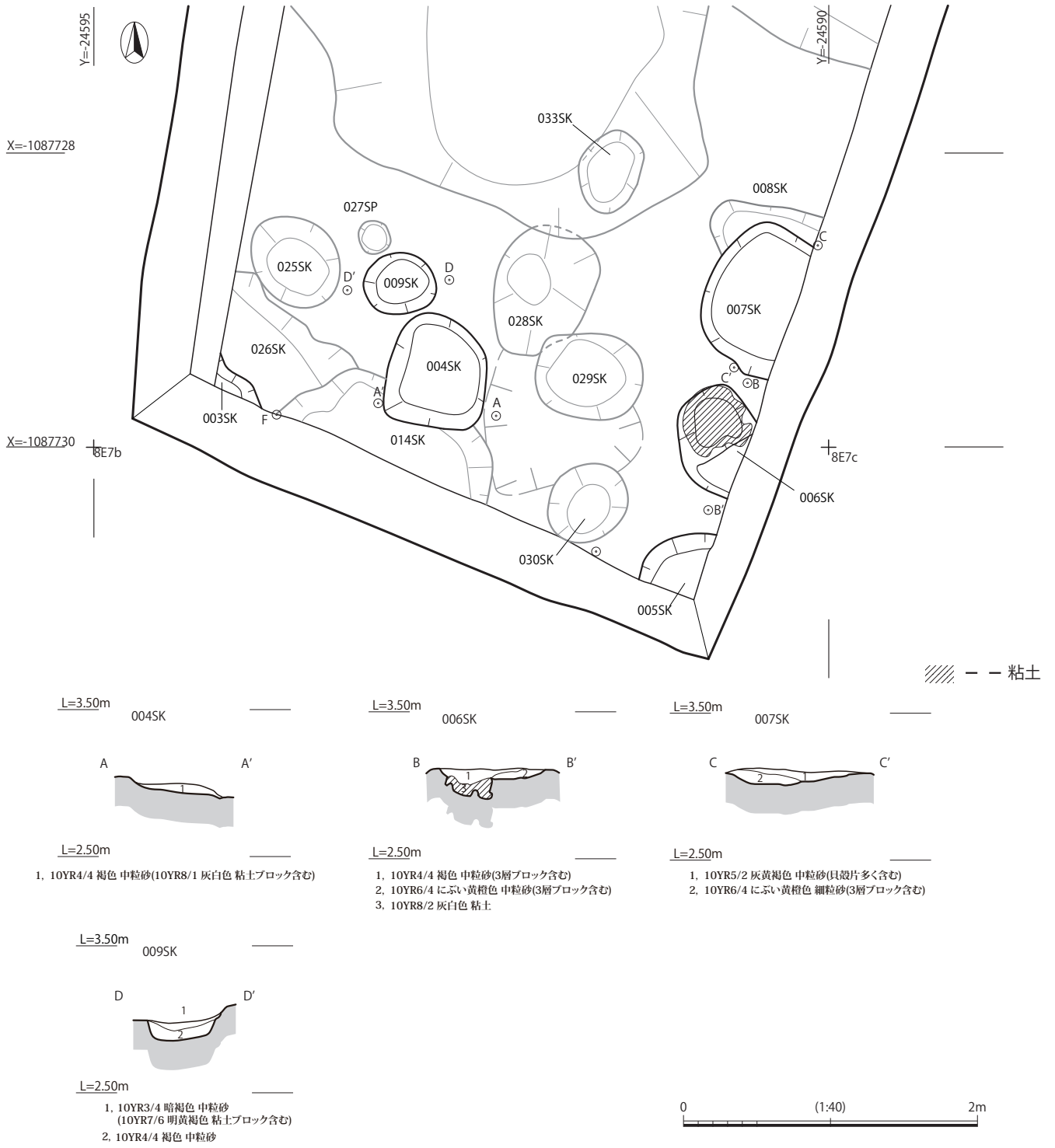
- 1. 10YR2/2 黄褐色 (目層)
- 2. 10YR4/1 陶灰色 砂質土
- 3. 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土
- 4. 10YR8/8 黄褐色 粘質土
- 5. 表土
- 6. 10YR3/2 黒褐色 砂質土 (貝殻多く含む)
- 7. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 (貝殻多く含む)
- 8. 10YR3/3 暗褐色 砂質土 (少量含む)
- 9. 10YR3/4 暗褐色 中粒砂 (065SD埋土)
- 10. 10YR3/3 暗褐色 粗粒砂 (065SD埋土)
- 11. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒砂 (069SE埋土)

- 1. 表土
- 2. カガラン (060SE)
- 3. 10YR3/3 暗褐色 砂質土
- 4. 10YR3/4 暗褐色 砂質土
- 5. 10YR8/6 黄褐色 砂質土+ブロック含む
- 6. 10YR4/4 褐色 砂質土
- 7. 10YR3/4 暗褐色 中粒砂
- 8. 10YR3/3 暗褐色 中粒砂 (包含層)
- 9. 10YR4/4 褐色 中粒砂 (063SD埋土)
- 10. 10YR6/2 灰黄褐色 細粒砂 (063SD埋土)
- 11. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂 (063SD埋土)
- 12. 10YR5/4 にぶい黄褐色 細粒砂 (地山)
- 13. 10YR7/2 にぶい黄褐色 細粒砂 (地山)

第10図 1地点B区 東壁・西壁土層断面図



第 11 図 1 地点 A 区 池状遺構 001SG 平面・断面図



第 12 図 1 地点 A 区 土坑 004・006・007・009SK 平面・断面図

井戸 051SE(第 7 図)

1 地点 B 区 8D14r グリッドに位置する。調査区外に拡がることから全容は不明であるが、長径 1.8m、深さ 0.52m 以上をはかる。円形の平面形状を呈す。中世の区画溝 063SD を切る。ごく一部しか確認していないが、遺構の規模から井戸と判断した。出土遺物は瓦質土器が見られる。遺構の構築面から 16 世紀以降と思われるが断定は避ける。

井戸 060SE(第 7 図)

1 地点 B 区 8D14r グリッドに位置する。調査区外に拡がることから全容は不明であるが、長径 1.28m、深さ 0.78m 以上をはかる。円形の平面形状を呈す。中世の区画溝 063SD・064SD を切る。ごく一部しか確認していないが、遺構の規模から井戸と判断した。出土遺物は確認できなかった。遺構の構築面から 16 世紀以降と思われるが断定は避ける。

中世の遺構

区画溝 022SD(第 14 図 図版 2)

1 地点 A 区 8E5c グリッドに位置する。調査区外に延びるため全容は不明であるが、幅 0.67m 以上、深さ 0.19m をはかる。南北方向に延び、南端では東に方向を変えることから、区画溝の南西隅にあたると思われる。出土遺物は土師器内耳鍋 (3) と土師器羽釜の他に、須恵器坏や土師器甑片などが見られる。遺物から 16 世紀と思われる。

区画溝 037SD(第 14 図)

1 地点 A 区 8E5b・5c グリッドに位置する。調査区外に延びるため全容は不明であるが、幅 0.69m、深さ 0.25m をはかる。東西方向に延びる。022SD とほぼ直交するが、断面観察から 022SD に先行する遺構と判断した。出土遺物は確認できなかった。

区画溝 063SD(第 15 図 図版 2)

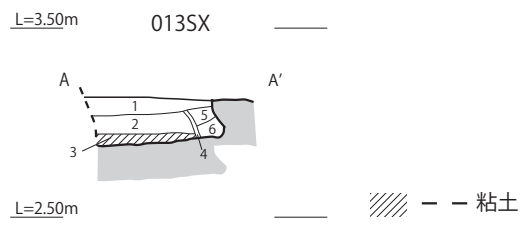
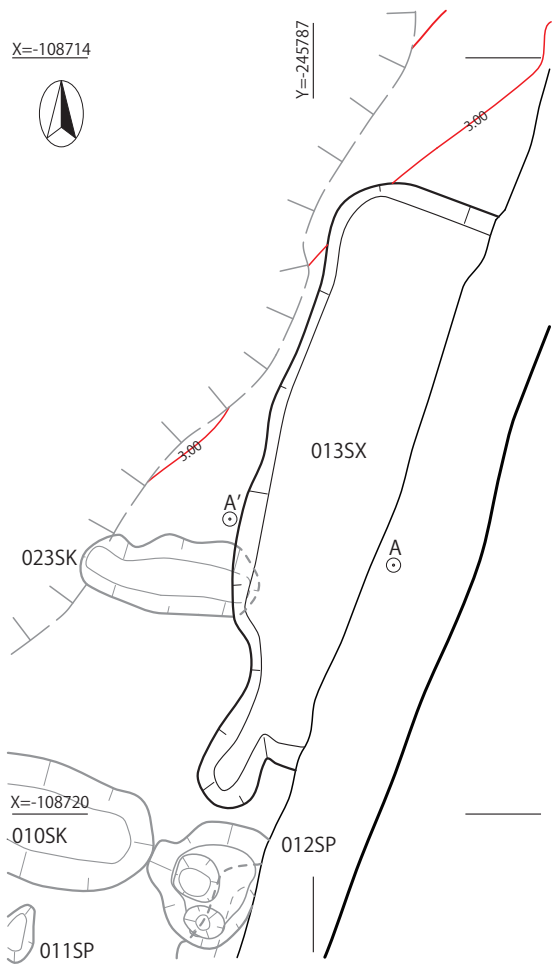
1 地点 B 区 8D13r・14r グリッドに位置する。調査区外に延びるため全容は不明であるが、幅 0.72m 以上、深さ 0.30m をはかる。南北方向に延びる。南端で 064SD と合流する。竪穴状遺構 066SI を切る。出土遺物は土師器、須恵器、山茶碗 (4)、陶器などが見られる。山茶碗は尾張型 6 型式のものが見られることから 13 世紀中頃には存在していた可能性が考えられる。また、9 世紀の須恵器の摘まみ付蓋片が見られることから、周辺に古代の遺構が存在していたと推定される。このことは切り合い関係にある竪穴状遺構 066SI が 8～9 世紀と推定されることから蓋然性が高い。

区画溝 064SD(第 15 図 図版 2)

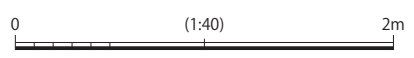
1 地点 B 区 8D14r・15r グリッドに位置する。調査区外に延びることと南側を近代の粘土構築物に切られるため全容は不明であるが、幅 0.81m 以上、深さ 0.24m をはかる。東西方向に延びる。西端で 063SD と合流する。068SX に切られる。出土遺物は条痕文系土器が見られるが混入品と思われる。断面観察や遺構規模などから 063SD と同時期と判断した。

溝状遺構 065SD(第 16 図 図版 2)

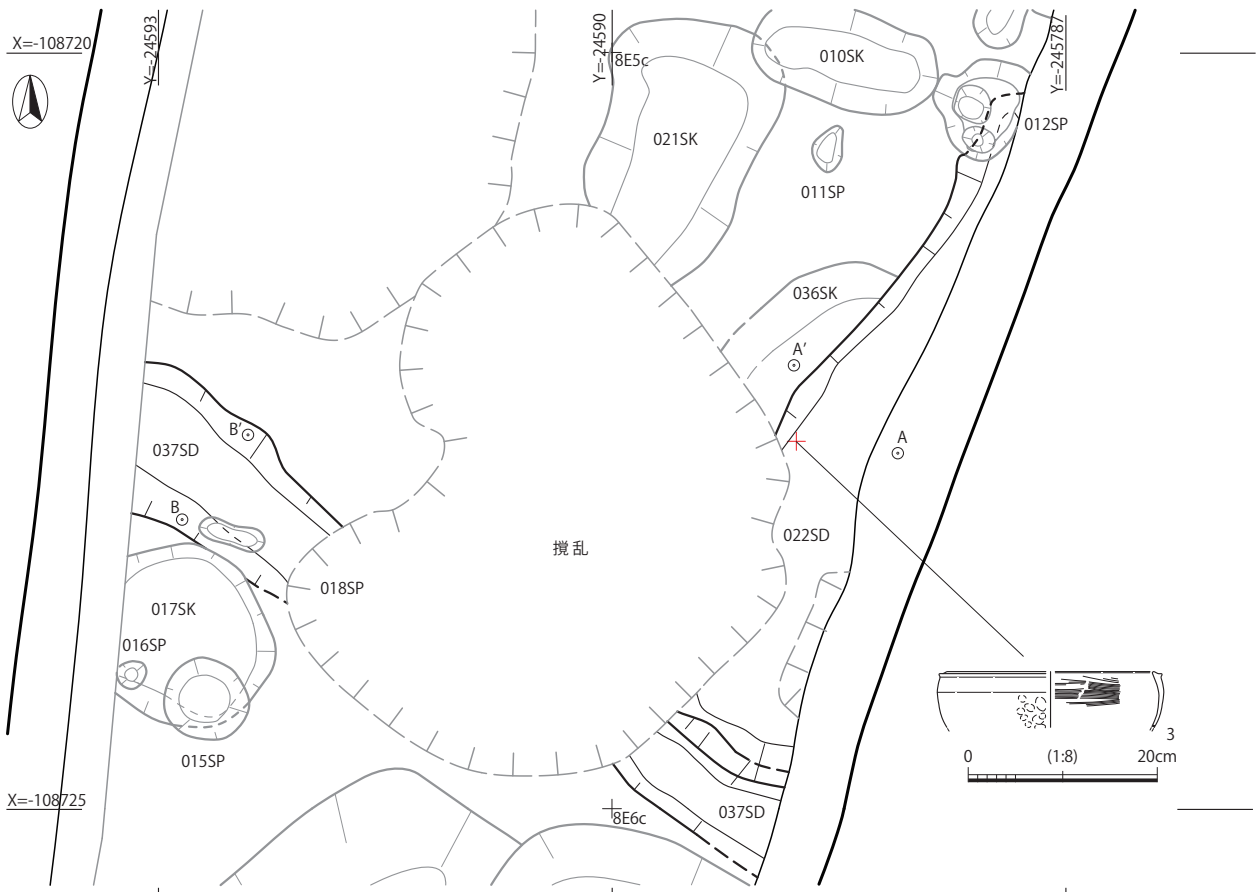
1 地点 B 区 8D13r・14r、13s・14s グリッドに位置する。調査区外に延びることから全容は不明であるが、幅 2.85m、深さ 0.27m をはかる。東西方向に延びる。西端で 063SD に切



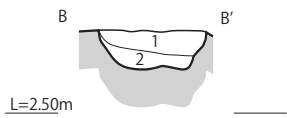
1. 10YR4/2 灰黄褐色 中粒砂(粘土ブロック含む)
2. 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂(粘土ブロック多く含む)
3. 10YR8/1 灰白色 粘土
4. 10YR3/1 黒褐色土(板材痕跡)
5. 10YR4/4 褐色 中粒砂(10YR4/1 褐灰色 粘土ブロック含む)
6. 10YR3/4 暗褐色 中粒砂



第 13 図 1 地点 A 区 不明遺構 013SX 平面・断面図

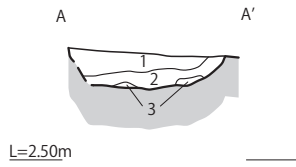


L=3.50m 037SD

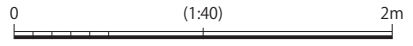


- 1, 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂

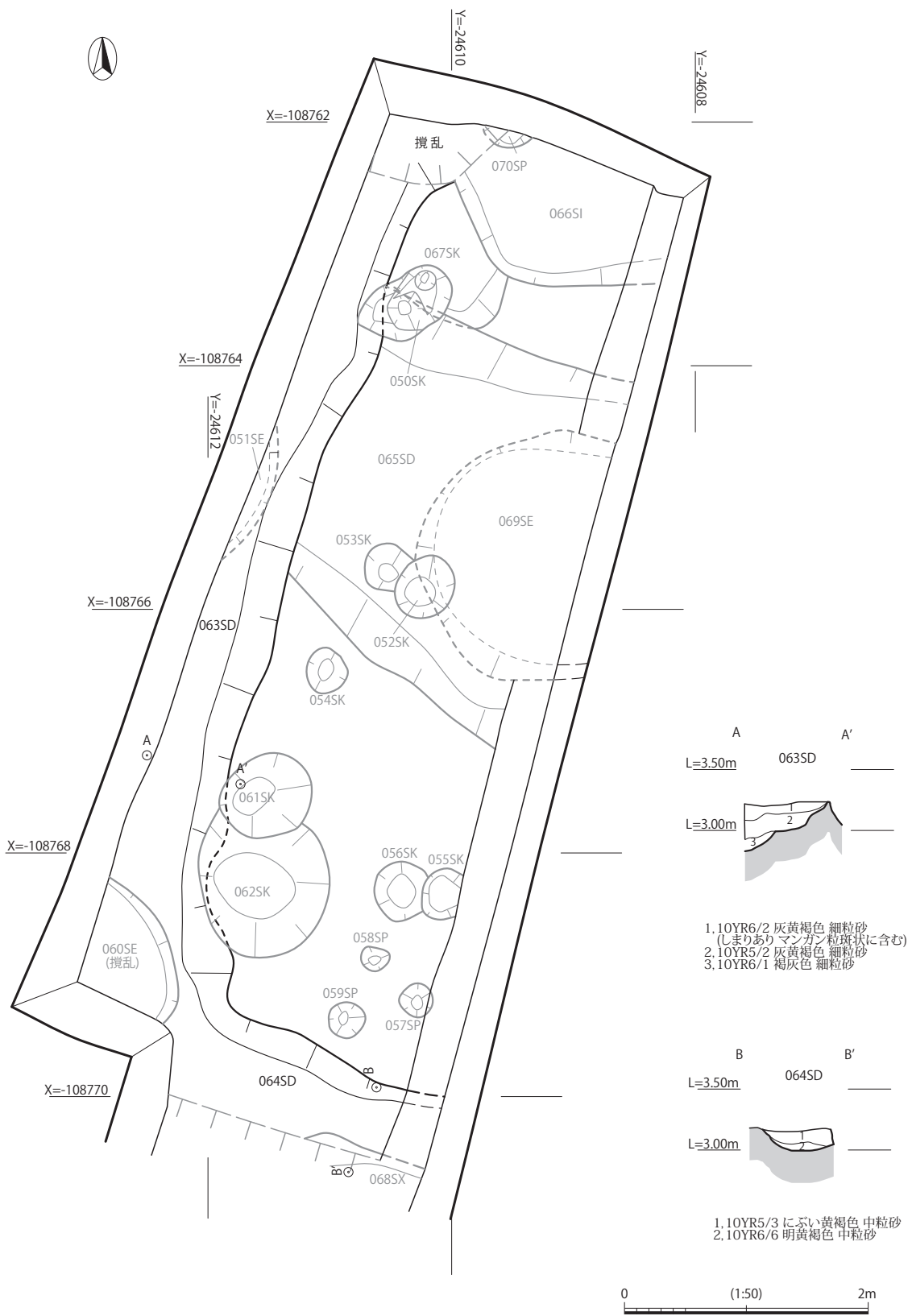
L=3.50m 022SD



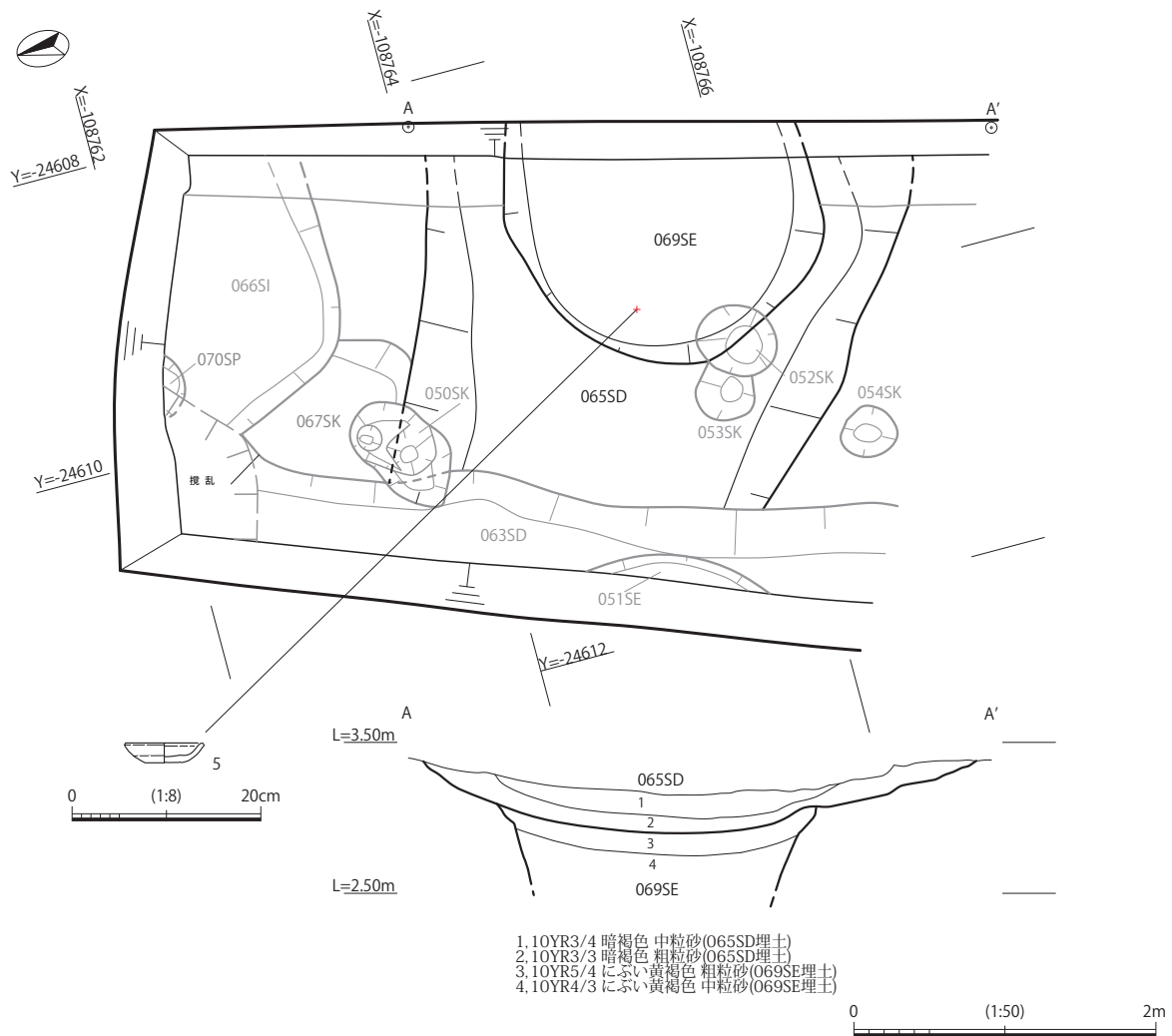
- 1, 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂
- 2, 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂
- 3, 10YR6/3 にぶい黄褐色 中粒砂



第 14 図 1 地点 A 区 区画溝 022・037SD 平面・断面図



第 15 図 1 地点 B 区 区画溝 063・064SD 平面・断面図



第 16 図 1 地点 B 区 溝状遺構 065SD・井戸 069SE 平面・断面図

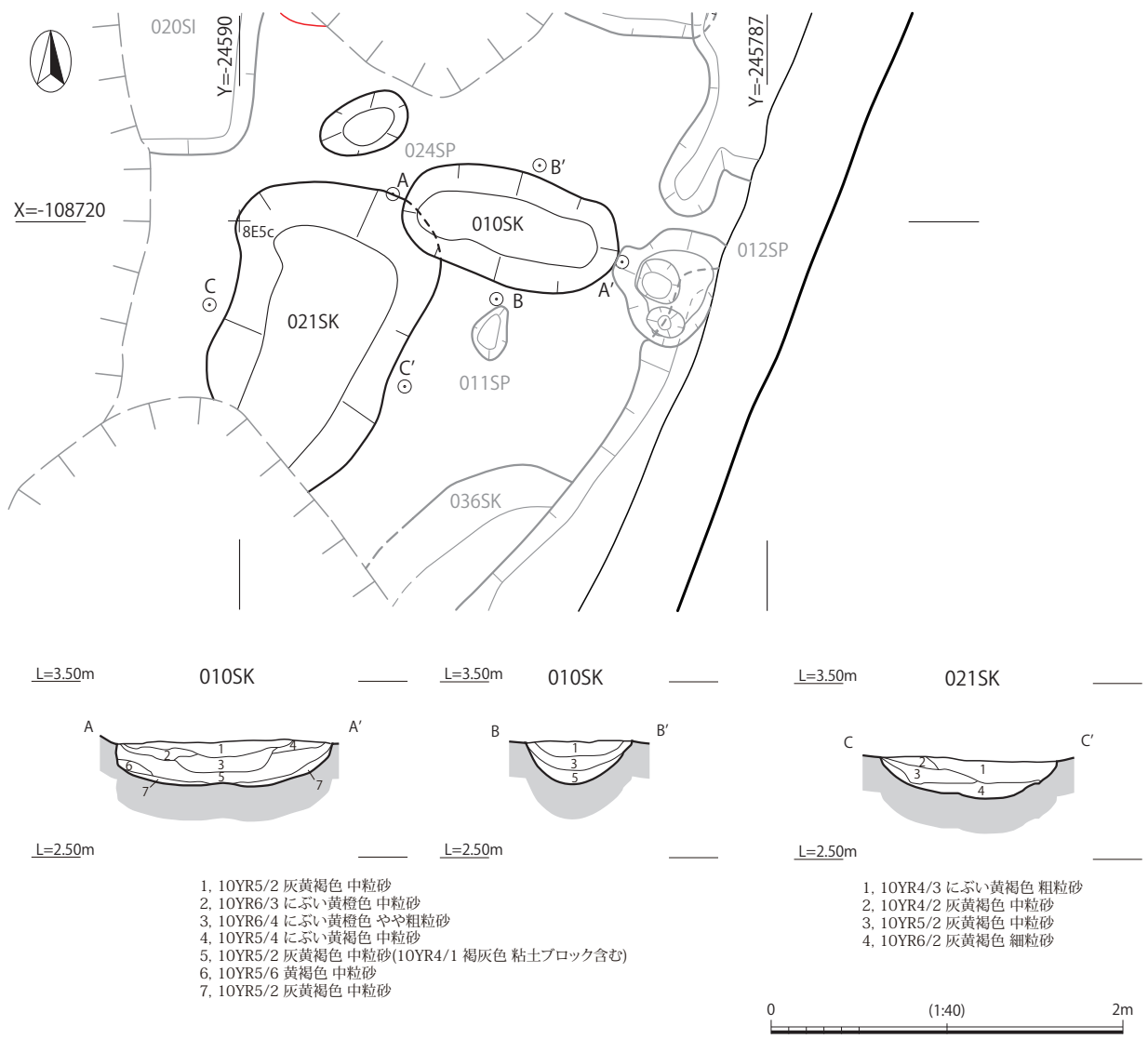
られる。井戸 069SE 埋没後に構築される。出土遺物は土師器高坏脚部、須恵器、山茶碗、製塩土器脚部、丸瓦などが見られる。なかでも尾張型 6 型式の山茶碗小皿 (5・6) や 11 世紀の伊勢型鍋 (7) が見られることから、時期については 11～13 世紀に帰属する可能性が考えられるが、063SD との重複関係から 13 世紀には埋没している可能性が高い。

井戸 069SE(第 16 図 図版 1)

1 地点 B 区 8D13s・14s グリッドに位置する。調査区外に拡がることから全容は不明であるが、長径 2.12m、深さ 0.27m 以上をはかる。平面形状は円形を呈す。湧水が著しかったことから、安全上、掘削を中断したため、深さや構造は不明である。井戸枠は確認できなかった。065SD に先行する。出土遺物は土師器、須恵器、山茶碗 (8)、製塩土器脚部などが見られる。遺物や遺構の切り合い関係から 13 世紀には埋没していたと考えられる。

土坑 010SK(第 17 図)

1 地点 A 区 8E5c グリッドに位置する。長さ 1.25m、幅 0.65m、深さ 0.23m をはかる。平面形状は楕円形を、断面形状は腕型を呈す。検出段階では土壙墓の可能性を考慮して掘削を進めたが、骨や副葬品などは確認できなかった。021SK を切る。出土遺物は確認できなかった



第 17 図 1 地点 A 区 土坑 010・021SK 平面・断面図

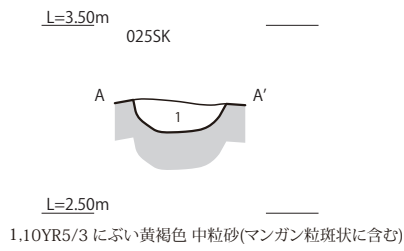
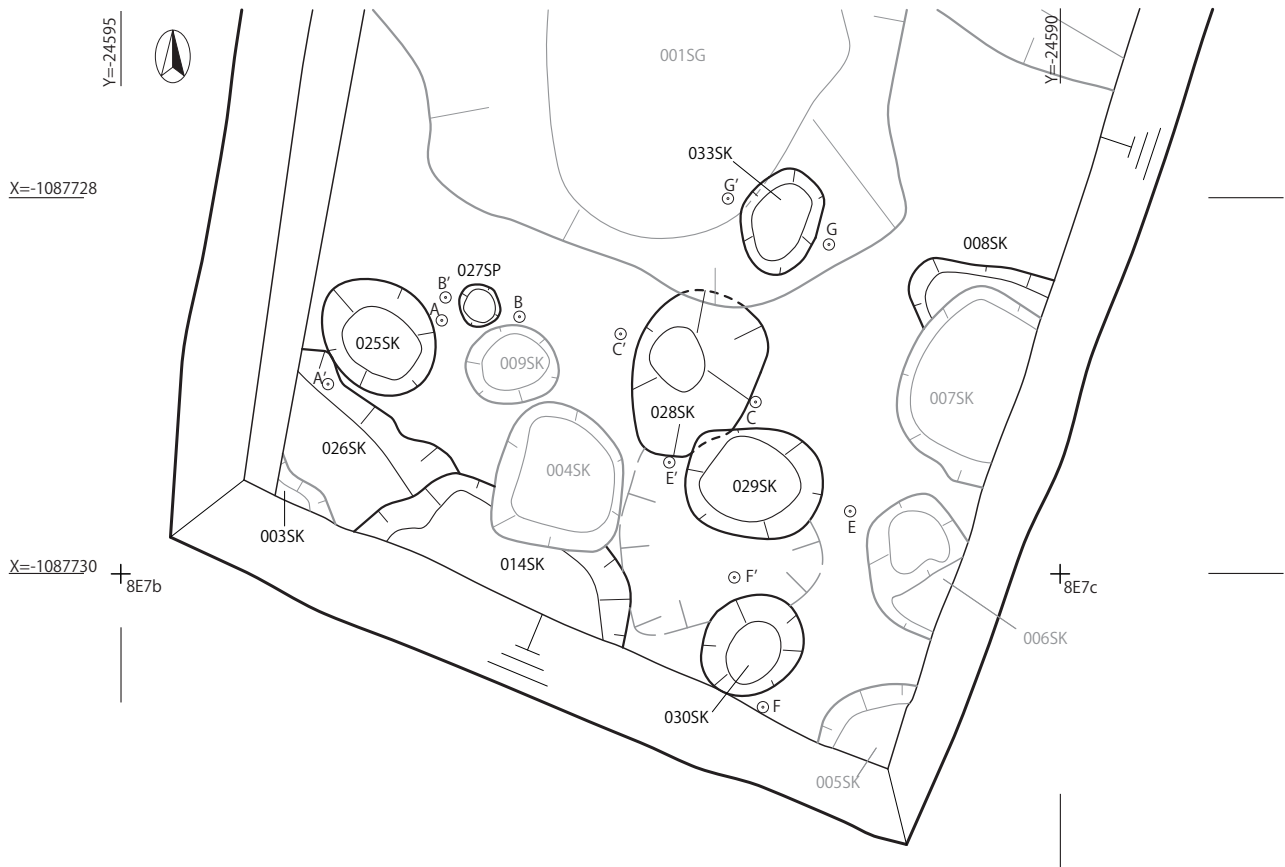
ことから、時期については不明であるが、埋土の堆積状況や 021SK との切り合い関係から中世に帰属すると判断した。

土坑 021SK(第 17 図)

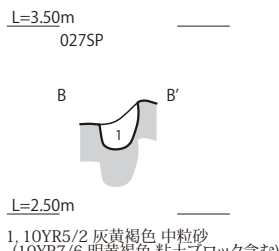
1 地点 A 区 8E5c グリッドに位置する。南端を攪乱によって壊される。長さ 1.53m、幅 1.02m、深さ 0.21m をはかる。平面形状はいびつな長方形を、断面形状は腕型を呈す。検出段階では土壙墓の可能性を考慮して掘削を進めたが、骨や副葬品などは確認できなかった。010SK に切られる。出土遺物は山茶碗小皿片が見られる。細片のため時期については不明瞭であるが、13 世紀以降に帰属する可能性が考えられる。埋土の堆積状況や 021SK との切り合い関係から中世に帰属すると判断した。

土坑 025SK・027SP・028SK・029SK・030SK・033SK(第 18 図 図版 1)

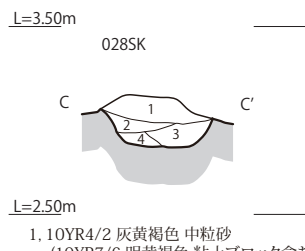
1 地点 A 区 8E6b・7B グリッドに位置する土坑群である。円形及び楕円形の平面形状を呈す。033SK は 001SG に切られる。深さはおおむね 0.2m 前後である。遺物は土師器や山茶碗、陶



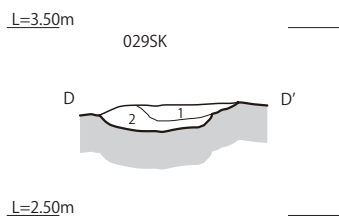
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂(マンガン粒斑状に含む)



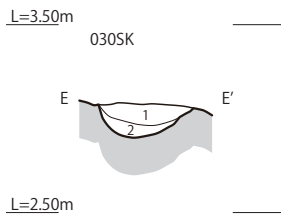
1. 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂
(10YR7/6 明黄褐色 粘土ブロック含む)



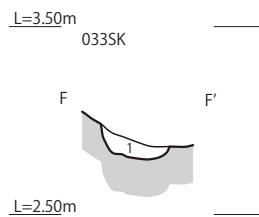
1. 10YR4/2 灰黄褐色 中粒砂
(10YR7/6 明黄褐色 粘土ブロック含む)
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂
3. 10YR3/4 暗褐色 粗粒砂
(10YR6/1 褐灰色 粗粒砂斑状に含む)
4. 10YR6/1 褐灰色 粗粒砂



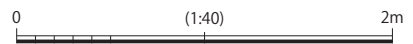
1. 10YR4/2 灰黄褐色 中粒砂
(10YR7/6 明黄褐色 粘土ブロック含む)
2. 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂
2. 10YR6/3 にぶい黄褐色 中粒砂



1. 10YR5/1 褐灰色 粘質シルト 細粒砂(グライ化)



第 18 図 1 地点 A 区 土坑 025・026・029・030・033SK・ピット 027SP 平面・断面図

器片などが見られるが細片のため全容は不明瞭である。遺構の集中具合から掘立柱建物跡の可能性が考えられるが、調査範囲の制限により断定はできない。

土坑 061SK(第 19 図 図版 1)

1 地点 B 区 8D14r グリッドに位置する。長さ 0.98m、幅 0.77m、深さ 0.14m をはかる。平面形状は楕円形を、断面形状は皿形を呈す。062SK と 063SD を切る。出土遺物は土師器や須恵器、製塩土器脚部が見られる。遺物からは中世の要素は見られないが、埋土の堆積状況や 063SD との切り合い関係から中世に帰属すると判断した。

土坑 062SK(第 19 図 図版 1)

1 地点 B 区 8D14r グリッドに位置する。長さ 1.09m、幅 0.98m、深さ 0.16m をはかる。平面形状は楕円形を、断面形状は皿形を呈す。061SK に切られる。063SD を切る。出土遺物は土師器、山茶碗、製塩土器口縁部、土錘(104)が見られる。遺物からは中世と断定できるものは少ないが、埋土の堆積状況や 063SD との切り合い関係から中世に帰属すると判断した。

土坑 052SK・053SK・054SK・055SK・056SK、ピット 057SP・058SP・059SP(第 18 図 図版 1)

1 地点 B 区 8D14r グリッドに位置する土坑群、ピット群である。円形及び楕円形の平面形状を呈す。052SK は 053SK を切り、両者は 065SD を切る。055SK は 056SK を切る。深さはバラツキが見られるが浅いものが優位を占める。遺物は土師器や山茶碗などが見られるが細片のため全容は不明瞭である。等間隔に遺構が配置される傾向が見られることから、掘立柱建物跡の可能性が考えられる。

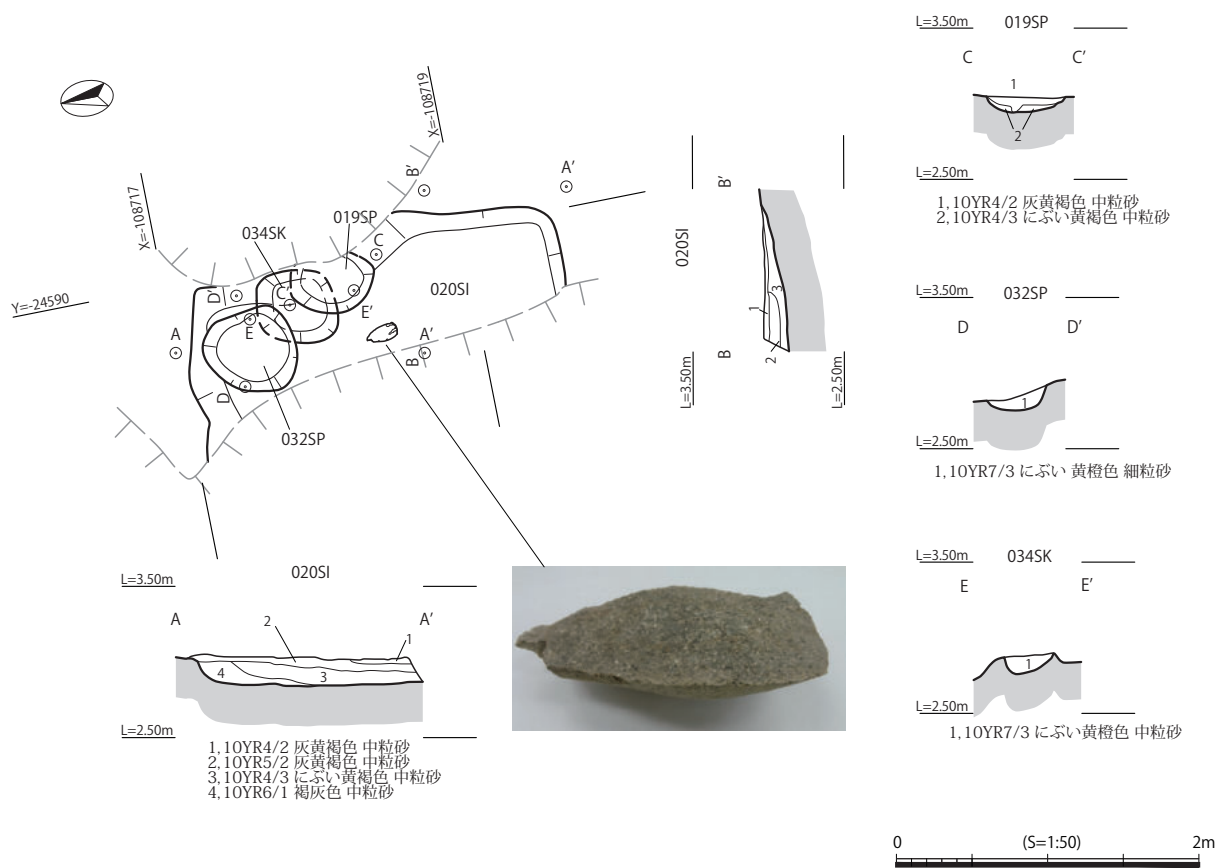
古代の遺構

竪穴状遺構 020SI(第 20 図 図版 2)

1 地点 A 区 8E4b グリッドに位置する。大部分を攪乱により壊されている。長さ 2.52m、幅 0.89m、深さ 0.19m をはかる。平面形状は隅丸方形を、断面形状は皿形を呈す。019SP に切られる。内部に 032SP・034SK が見られる。これらは柱穴や貯蔵穴等の遺構に付随する可能性が考えられるが、深さが浅いことから断定はできない。断面観察から北壁はやや垂直に壁を構築し、東壁はなだらかに傾斜している。出入口を意識している可能性も考えられるが、砂堆上に立地しているため経年による崩落の可能性が考えられることと攪乱のため遺構の全容が不明であることから断定はできない。出土遺物は土錘(1)、須恵器蓋片(2)、山茶碗、陶器片、台石などが見られる。須恵器蓋から 9 世紀と思われる。

竪穴状遺構 066SI(第 21 図 図版 2)

1 地点 B 区 8D13s グリッドに位置する。調査区外に拡がることから全容は不明であるが、長さ 1.20m、幅 1.14m、深さ 0.29m をはかる。隅丸方形の平面形状を、断面形状は箱形を呈す。063SD に切られる。壁溝などの床面施設は確認できなかった。内部にピット 070SP が見られ、柱穴の可能性が考えられる。断面観察から壁面はやや垂直に壁を構築している。遺物が多く出土しており、ほぼ同じ高さから出土していることから、床面の高さを反映していると思われる。前述の 070SP も床面と想定される層から掘り込まれている様子が見られる。出土遺物は土師器甕(9)、須恵器甕(10)、坏(11～13)、須恵器甑(14・15)、製塩土器脚部などが見



第20図 1地点A区 竪穴状遺構020SI 平面・断面図

られる。時期は遺物から9世紀と思われる。遺物の一括性が高く、ほぼ完形の個体も見られる。土坑067SK(第22図 図版2)

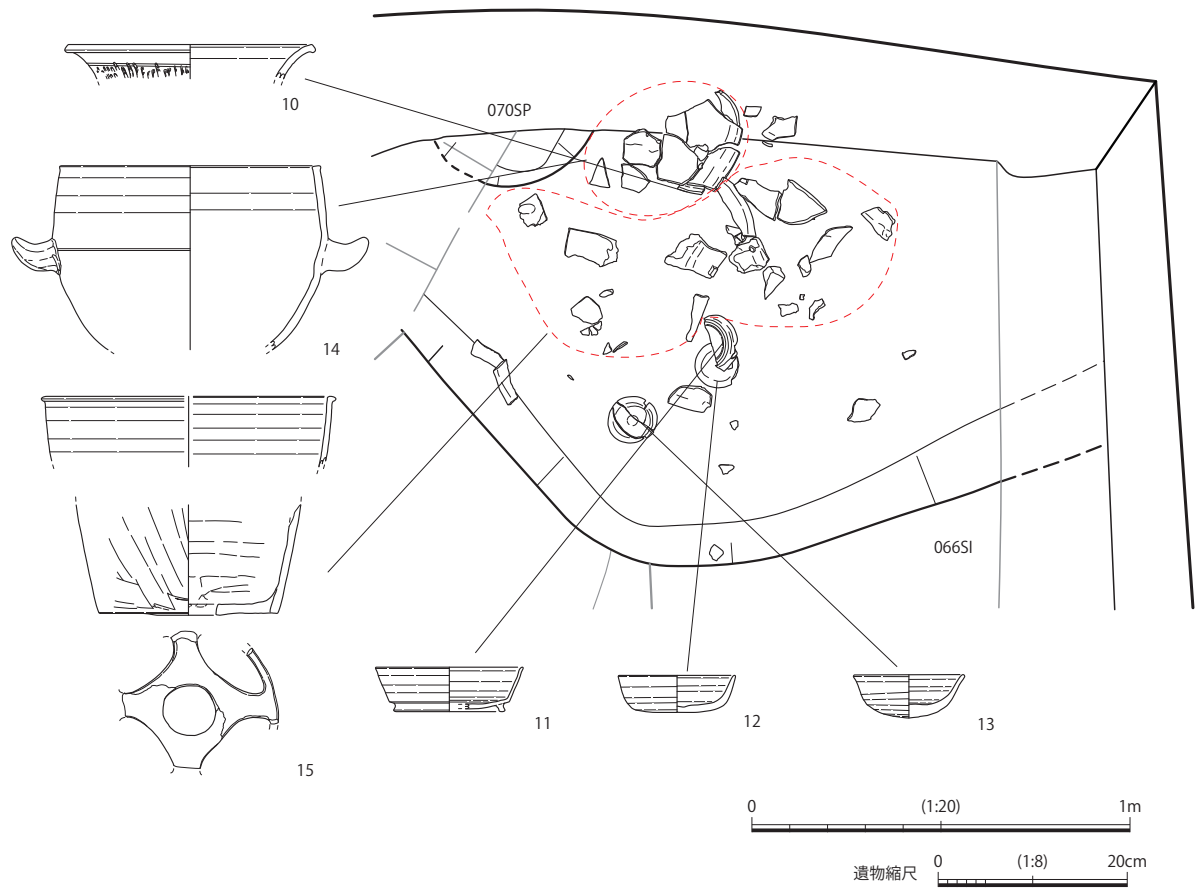
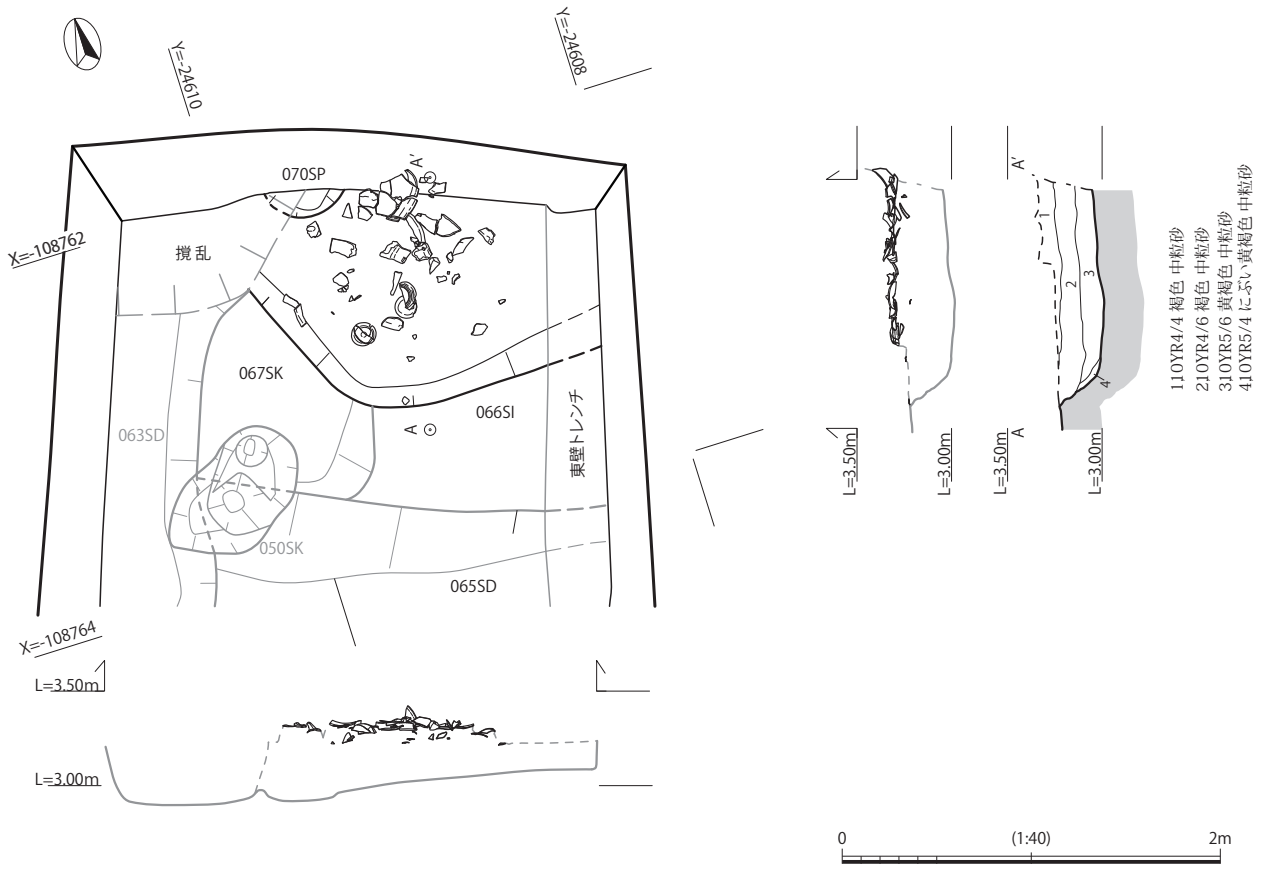
1地点B区8D13sグリッドに位置する。長さ0.93m、幅0.79m、深さ0.22mをはかる。隅丸方形の平面形状を、断面形状は皿形を呈す。063SD、065SDと066SIに切られることから全容は不明である。周辺の状況から竪穴状遺構の可能性を考慮して調査を行ったが、壁溝などの床面施設は確認できなかった。出土遺物は見られなかった。遺構の切り合い関係から9世紀以前にさかのぼる可能性が高い。

自然流路035NR(第23図 図版1)

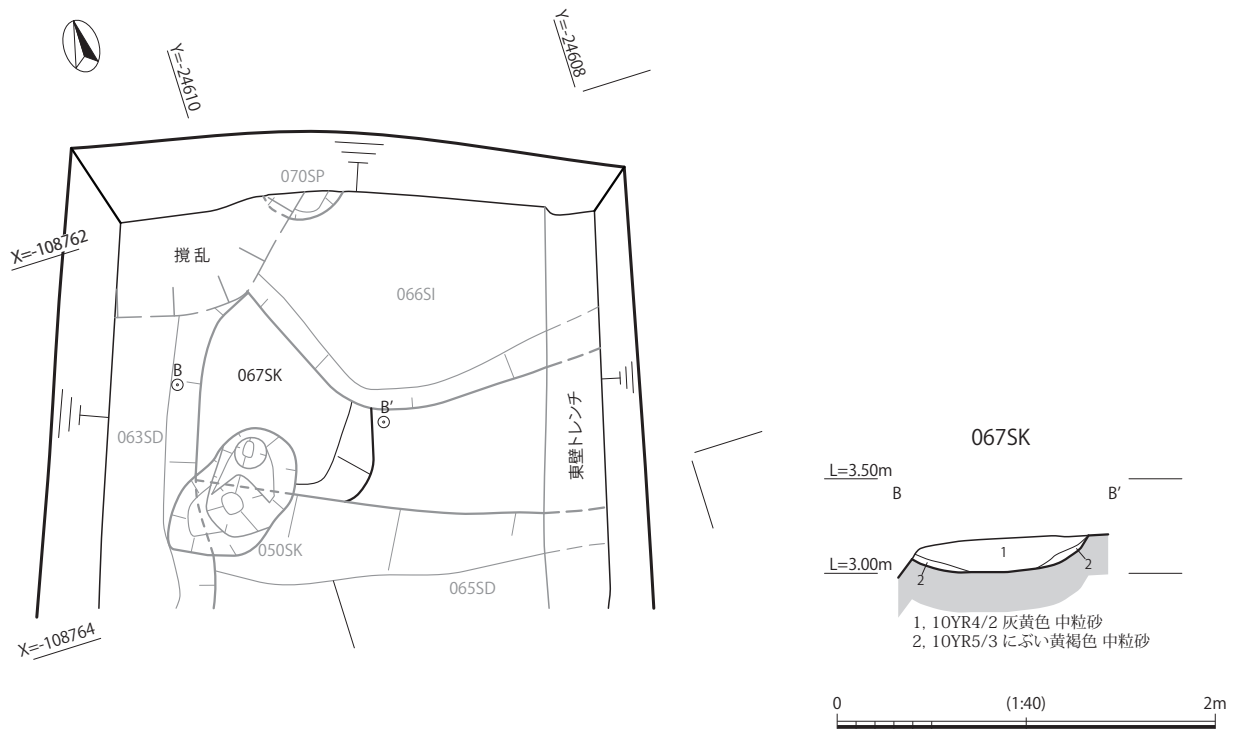
1地点A区8E6bグリッドに位置する。幅2.61m、深さ0.15mをはかる。東西方向に延びる。断面形状は皿形を呈す。検出段階では大きな溝状遺構と把握していたが、調査を進めていくと深さが浅く、断面観察からラミナ堆積が見られたことから自然流路と判断した。出土遺物は須恵器、陶器、山茶碗の破片が見られる。

自然流路038NR(第23図 図版1)

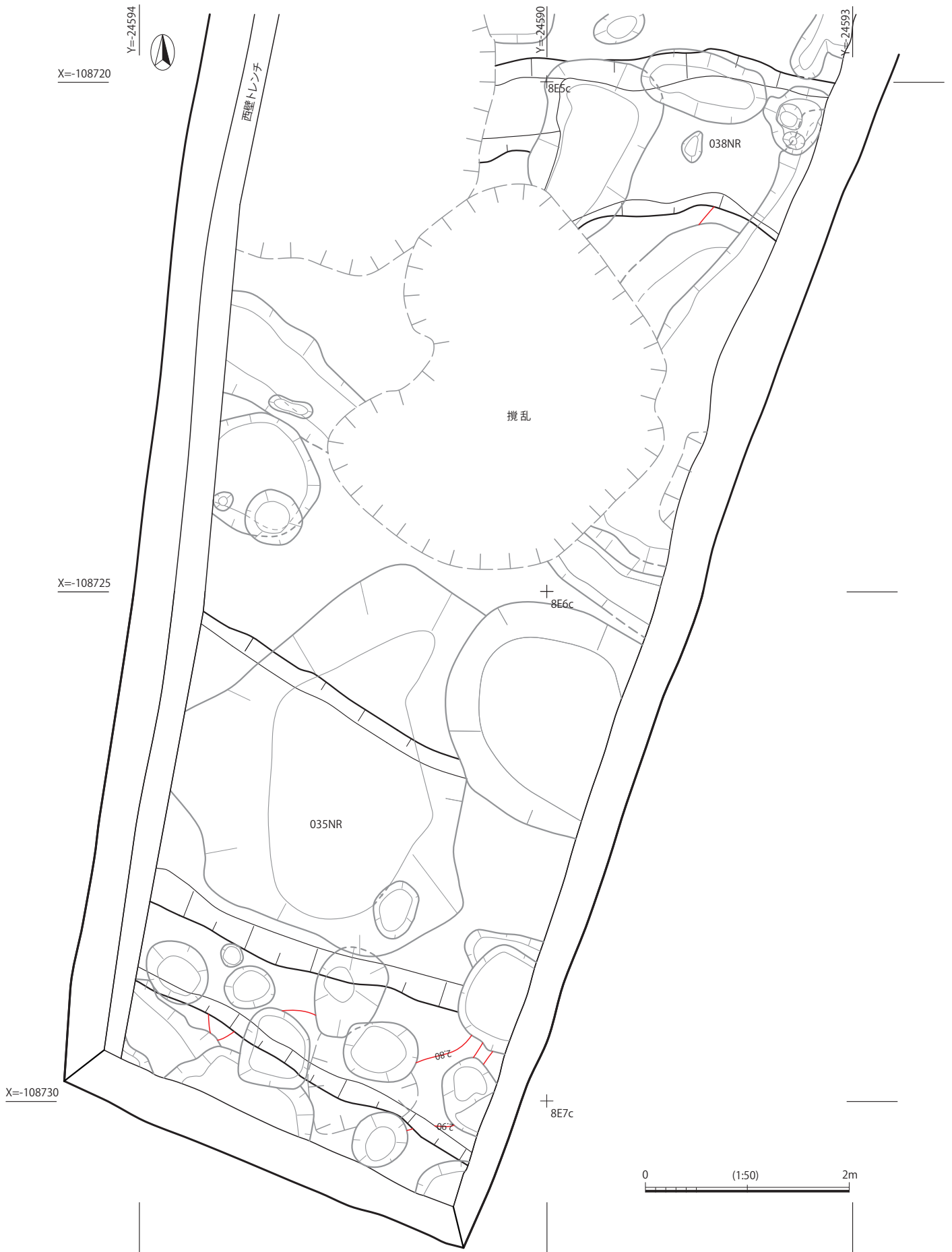
1地点A区8E5cグリッドに位置する。幅1.54m、深さ0.15mをはかる。東西方向に延びる。断面形状は皿形を呈す。攪乱と022SDに切られる。検出段階では溝状遺構と把握していたが、調査を進めていくと深さが浅く、断面観察からラミナ堆積が見られたことから自然流路と判断した。出土遺物は土師器、須恵器、土師器、山茶碗、陶器の破片が見られる。



第21図 1地点B区 竪穴状遺構066SI平面・断面図



第 22 図 1 地点 B 区 土坑 067SK 平面・断面図



第 23 図 1 地点 A 区 自然流路跡 035・038NR 平面・断面図

第2節 3地点(畑間遺跡)の遺構

概要と基本層序

3地点(畑間遺跡)は遺跡が立地する第1砂堆の南西端に位置し、名古屋鉄道河和線に近接する。調査の結果、中世・近世にかけての遺構・遺物が確認されており、特に中世の町割とそれを踏襲する近世町割からは当該地が継続的に発展していった様相がうかがえる。調査面積は421㎡である。畑間遺跡の南縁部に立地し、平成27年度の畑間遺跡7地点の調査区に近接する。基本層序は以下のとおりである。

- | | |
|-----------|---|
| I層：表土層 | 近現代の盛土である。 |
| II層：遺物包含層 | 10YR4/4 褐色中粒砂と 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂を主体とする。近世から中世の遺物を包含する。
おおむね2期の堆積を確認した。 |
| III層：基盤層 | 地山である 10YR8/1 灰白色細粒砂と 10YR7/6 明黄褐色粗粒砂に由来する。 |

3地点は一部で近世以降の攪乱が見られるが、遺構の残存状況は非常に良く、中世から近世にかけての遺構を確認した。遺構の内訳は井戸3基(3010SE・3019SE・3223SE)、区画溝7条(3012SD・3015SD・3011SD・3140SD・3150SD・3170SD・3171SD)、溝状遺構6条(3011SD・3172SD・3251SD・3238SD・3166SD・3239SD)、掘立柱建物跡8棟(SB1・SB2・SB3・SB4・SB5・SB6・SB7・SB8)の他、土坑及びピットを多数確認した。土坑の中には土坑墓(3005SK・3163SK・3187SK)や内部に粘土を貼り付ける土坑(3016SK・3017SK・3232SK)などが見られる。

3地点の大きな特徴として調査区中央を南北方向に延びる谷地形を確認したことで西側に向かって標高が上がる地形を確認したことがあげられる。このことは遺構分布にも影響を与えており、谷地形の両端にあたる3011SDと3238SDの間では遺構が集中する傾向が見られる。特に柱穴・ピットが大部分を占めており、頻繁に建て替えが行われた痕跡が明瞭に見られ、このことは調査区の断面観察からも大きく2時期の生活面とそこから掘り込まれる遺構を確認していることから、経年堆積による地盤の上昇や居住環境の変化への対応を示唆していると考えられる。谷の外側にあたる部分においても区画溝など集落の展開を示唆する遺構は見られるが、密度は薄くなる傾向があることから、屋敷地の利用に一定の法則性があったと考えられる。また、区画溝等がさらに南側と西側に延びる様子を確認することができた。前述したように3地点は畑間遺跡の南縁に立地し、旧地形に照らし合わせると旧大田川に近接する箇所にあたることから、河川との関係性や土地の活用についても考察の一助となると考える。

遺物は主に13～17世紀の遺物が大部分を占める。山茶碗、瀬戸美濃系陶器、常滑産陶器、土師器鍋、羽釜、内耳鍋、焙烙、土師器皿、青磁などの日用品や、土錘、銅製分銅など生業に関わる遺物が見られる。その他弥生時代後期～古墳時代前期の遺物がわずかに見られる。ほと



Y=-24920

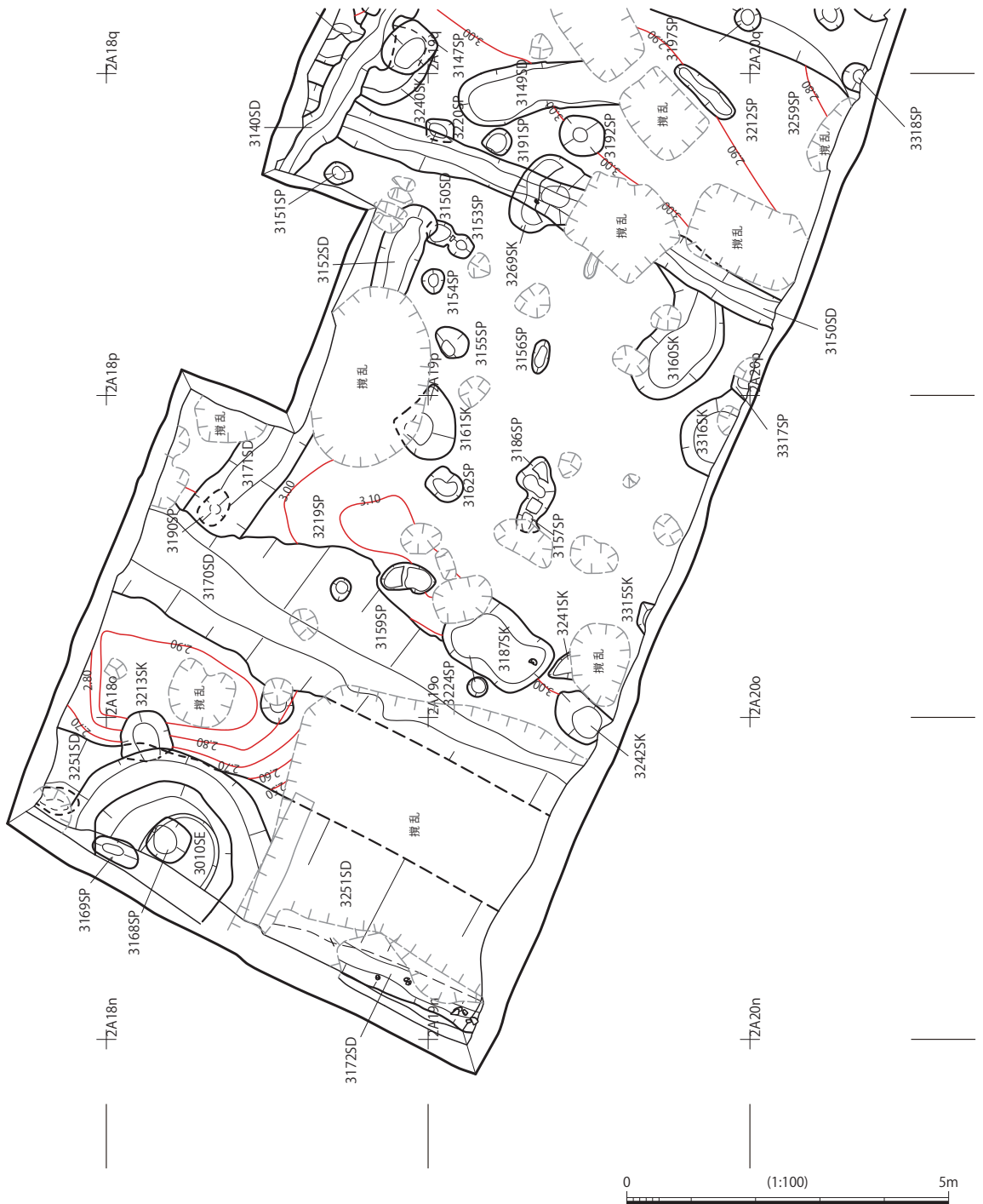
Y=-24925

Y=-24930

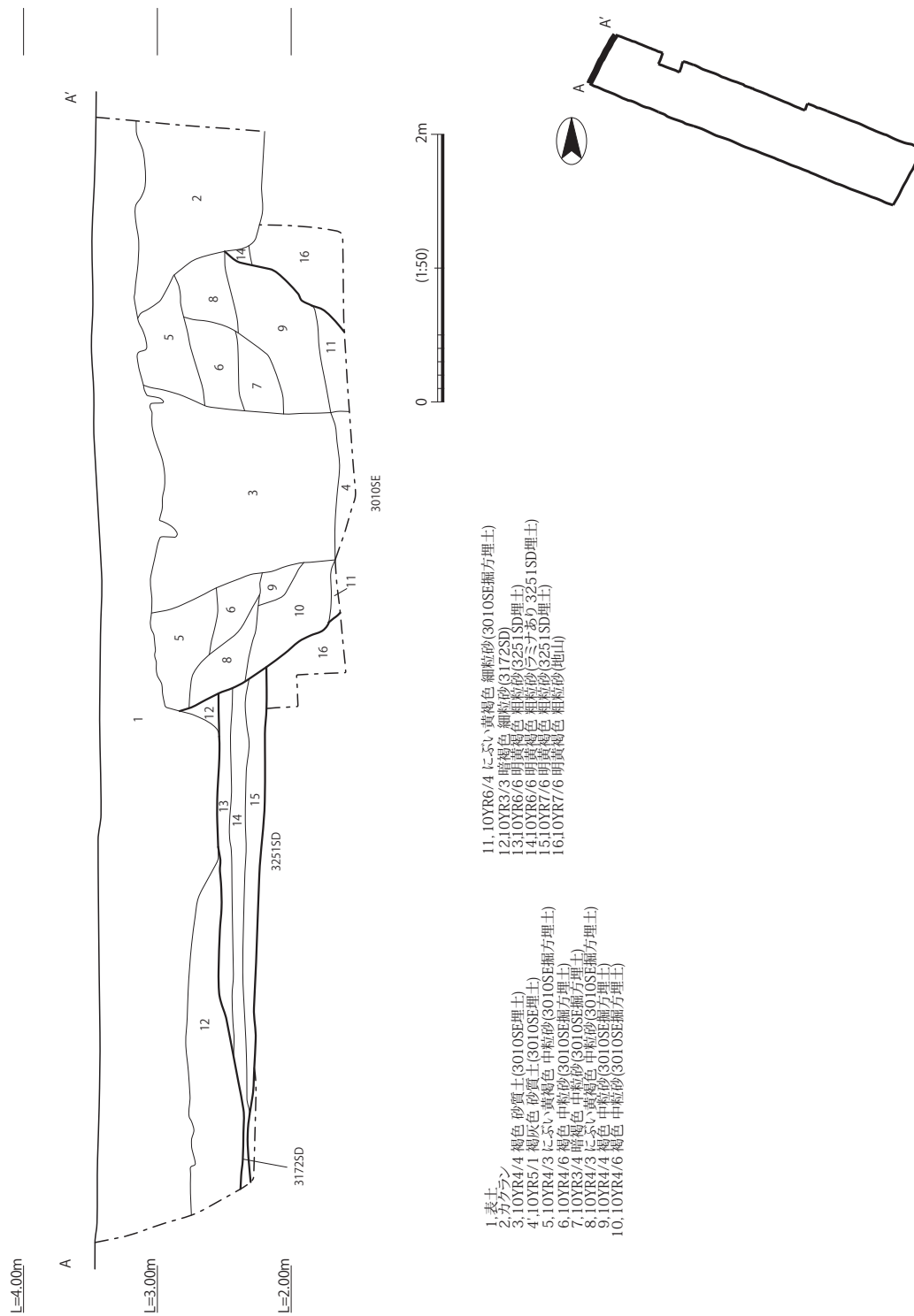
X=-109195

X=-109190

X=-109185



第26图 3地点 遺構平面図3



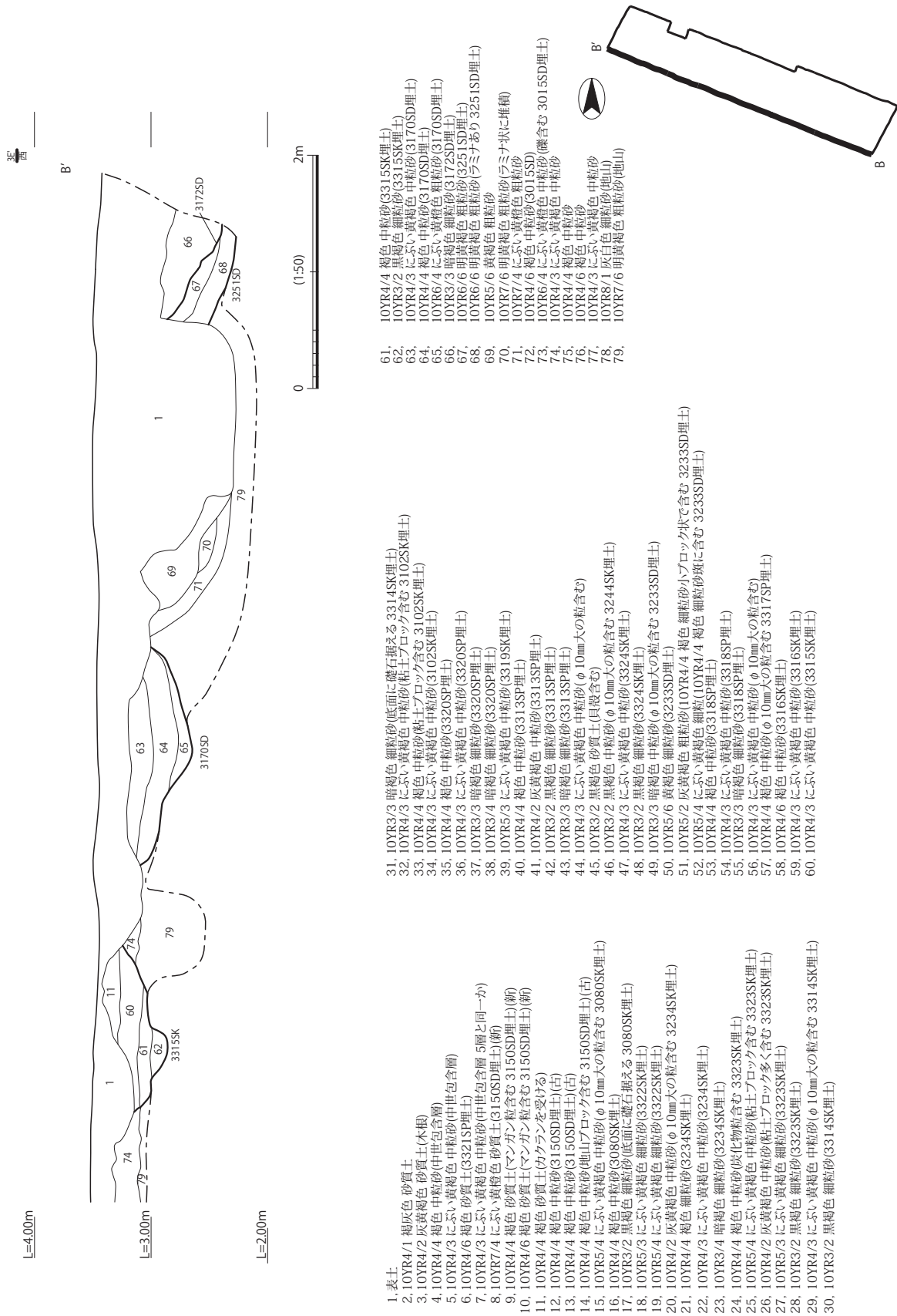
第 27 図 3 地点 西壁土層断面図



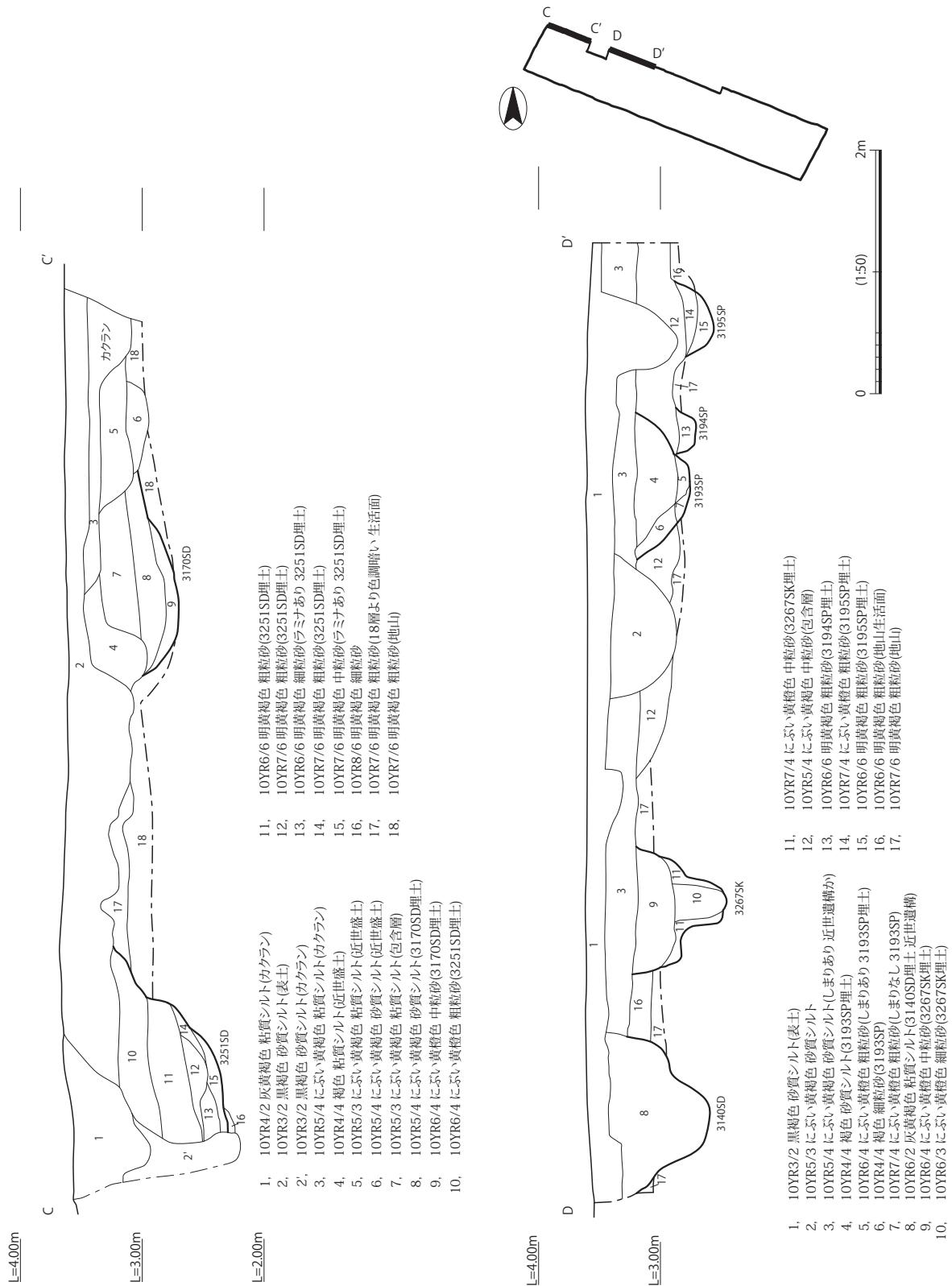
第 28 图 3 地点 南壁土层断面图 1



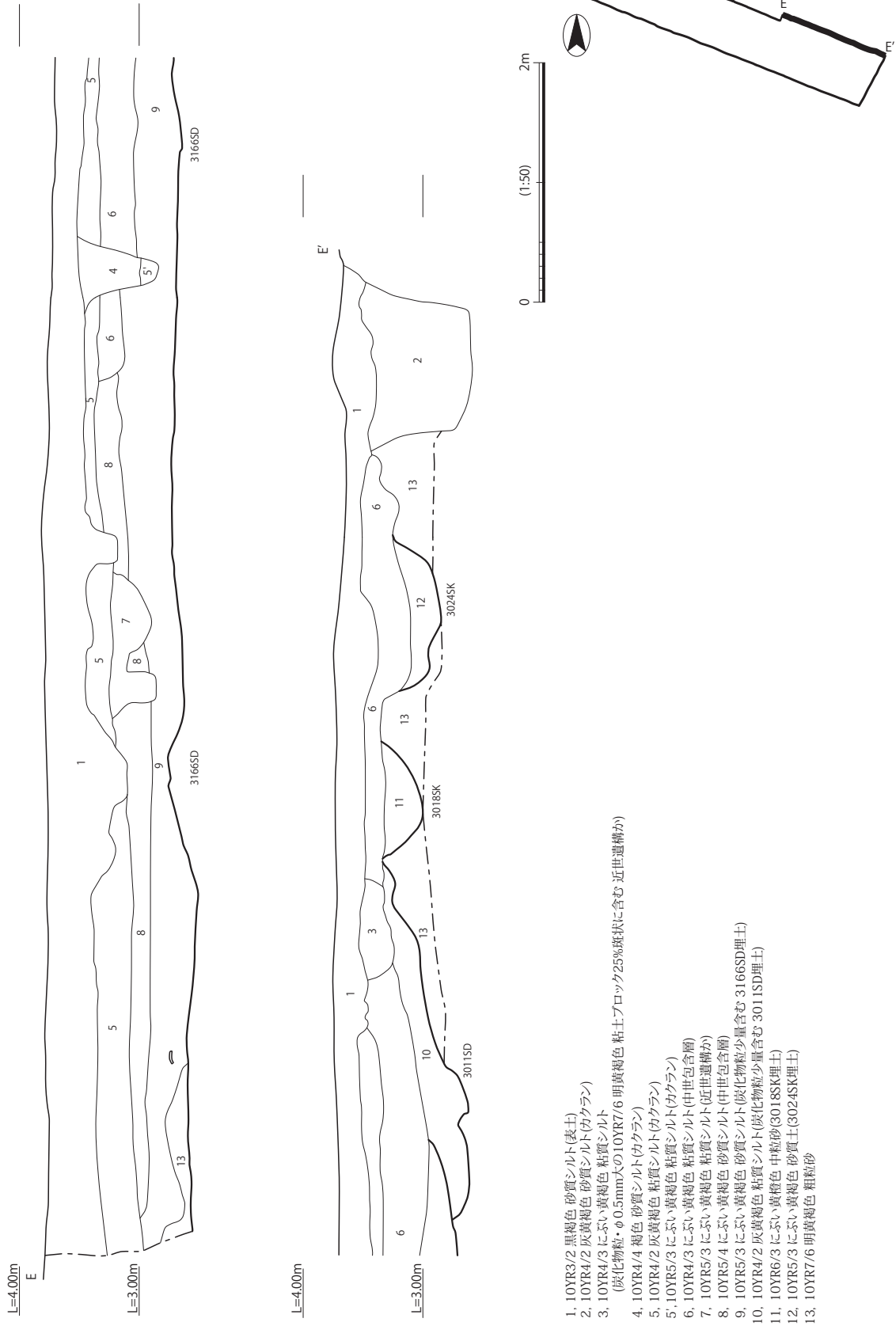
第 29 图 3 地点 南壁土层断面图 2



第30図 3地点 南壁土層断面図3



第31図 3地点 北壁土層断面図1



第 32 図 3 地点 北壁土層断面図 2

んどは破片で全容は不明であるが、台付甕の脚部や敲石などが見られるが、ただし遺構に伴うものは見られなかった。

遺物の出土傾向としては包含層から残存状態が良好な個体が多く見られた。遺構からは破片での出土が多く、全容の把握に時間を要したが、土師器鍋、羽釜、内耳鍋、焙烙や施釉陶器の傾向から前述の時代に収まると判断した。山茶碗については東濃型と尾張型の2系統を確認した。藤澤編年によるところの6～10型式のものが見られる。瀬戸美濃系陶器については、天目茶碗、丸碗、折縁大皿、志野丸皿、仏供、片口鉢、縁釉はさみ皿、卸皿、蓋などが見られる。天目茶碗は鉄釉のものがほとんどであるが、灰釉のものも見られる。古瀬戸後期～大窯期のものが主体を占める。常滑産陶器については、甕、壺、播鉢が見られる。甕は井戸杵に転用されているものがほとんどを占める。赤羽・中野編年によるところの8～11型式が見られる。土師器煮沸具は伊勢型鍋、羽釜、内耳鍋、焙烙が見られる。羽釜、内耳鍋の比率がやや高い傾向が見られる。土師器皿はロクロ土師皿と非ロクロ土師皿が見られる。ロクロ土師皿の比率が優位を占め、ロクロ土師皿についても薄手のものとやや厚手のものが見られる。

中世の遺構

井戸 3010SE(第 33 図 図版 3)

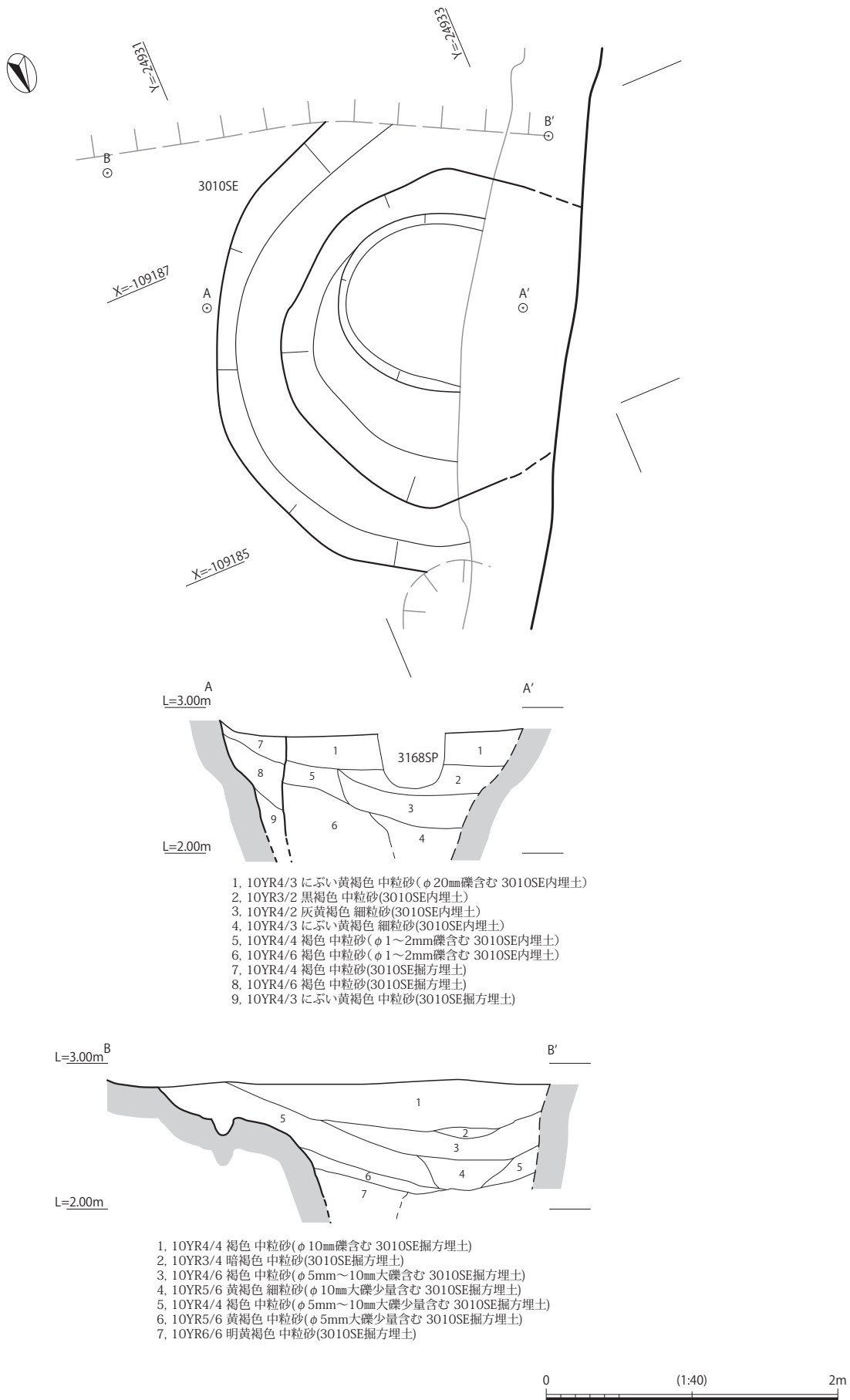
3 地点 2A17・18n グリッドに位置する。西側が調査区外に拡がり、南側が攪乱によって壊される。長径 3.16m、深さ 1.45m 以上をはかる。楕円形の平面形状を呈す。井戸杵材は確認できなかったが井戸内と掘方の差違を明瞭に確認することができた。3251SD を切る。湧水による崩落が著しかったので、安全上、掘削を中断した。そのため最終的な深さは不明である。出土遺物は東濃型山茶碗小皿 (16)、瀬戸美濃系皿 (17)、瀬戸美濃系仏供 (18)、ロクロ土師皿などが見られる。遺物から 15～16 世紀と思われる。

井戸 3019SE(第 34 図 図版 3)

3 地点 2B20a・b、3B1a・b グリッドに位置する。長径 3.22m、深さ 0.69m 以上をはかる。楕円形の平面形状を呈す。井戸杵材は確認できなかったが断面観察から廃絶時に行われた祭祀(息抜き)の痕跡を確認した。3232SE に切られる。湧水による崩落が著しかったので安全上、掘削を中断した。そのため最終的な深さは不明である。出土遺物は常滑甕、播鉢、山茶碗(東濃型・尾張型)、土師器羽釜 (19)、亀の腹甲を含む遺存体などが見られる。埋土から常滑甕の破片が多く見られることから、井戸杵に使用されていた可能性が考えられる。遺物から 15 世紀と思われる。

井戸 3223SE(第 35 図 図版 4)

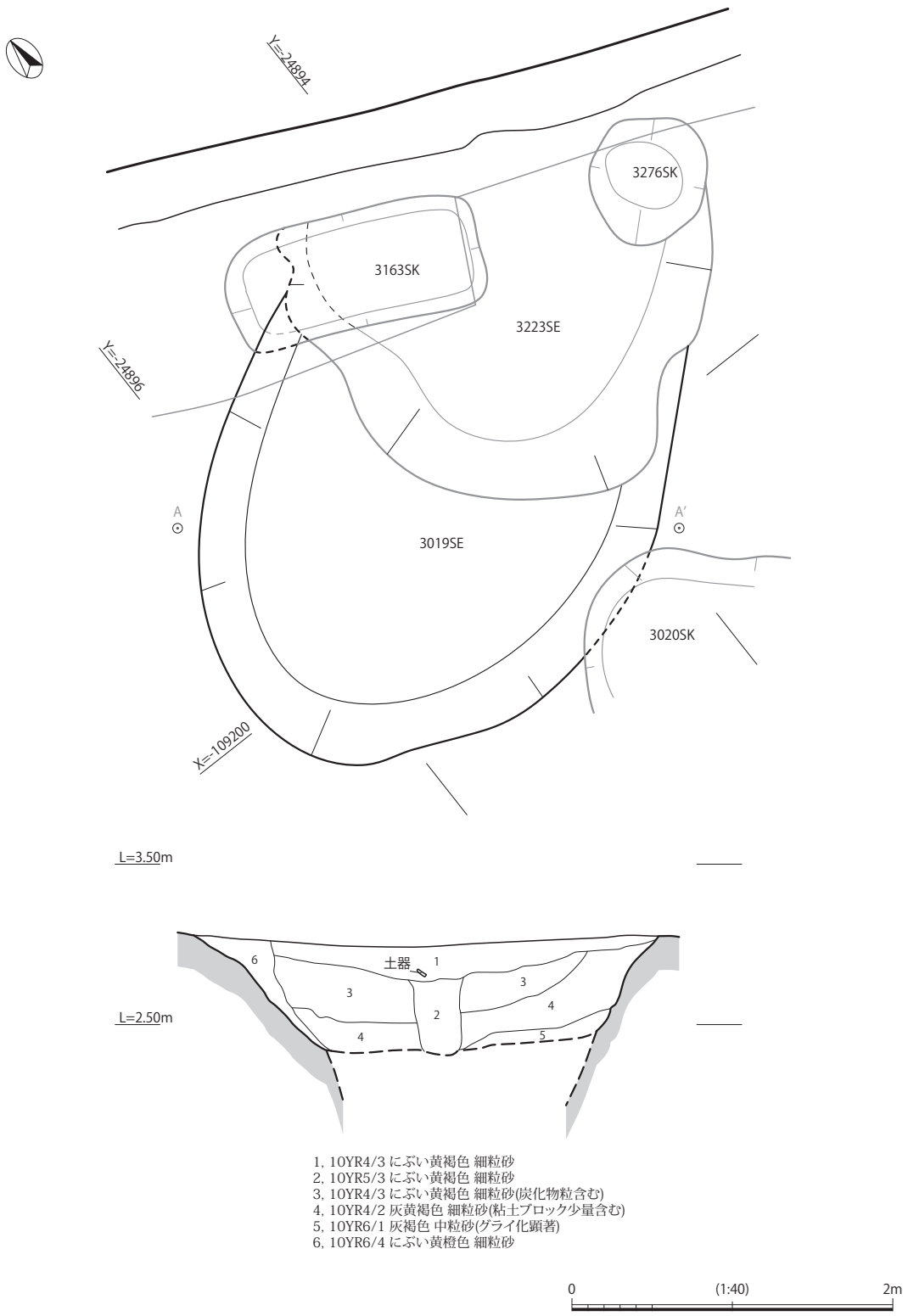
3 地点 2B20b グリッドに位置する。長径 2.39m、深さ 1.21m 以上をはかる。楕円形の平面形状を呈す。井戸杵材は常滑甕を転用しており、5 段までの設置を確認した。3019SE に切られる。湧水による崩落が著しかったので、安全上掘削を中断した。そのため 4 段目までの図化は行ったが、5 段目以下の詳細は不明である。井戸杵に使用されている常滑甕は底部や口縁端部を打ち欠いて部材としての加工が施されている。最下段の杵は底部を打ち欠いて筒状にしたものを据え付けて、その上に底部や口縁端部を打ち欠いてさらに 1/2 もしくは 1/4 ほどに



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂(φ20mm礫含む 3010SE内埋土)
2. 10YR3/2 黒褐色 中粒砂(3010SE内埋土)
3. 10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂(3010SE内埋土)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂(3010SE内埋土)
5. 10YR4/4 褐色 中粒砂(φ1~2mm礫含む 3010SE内埋土)
6. 10YR4/6 褐色 中粒砂(φ1~2mm礫含む 3010SE内埋土)
7. 10YR4/4 褐色 中粒砂(3010SE掘方埋土)
8. 10YR4/6 褐色 中粒砂(3010SE掘方埋土)
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂(3010SE掘方埋土)

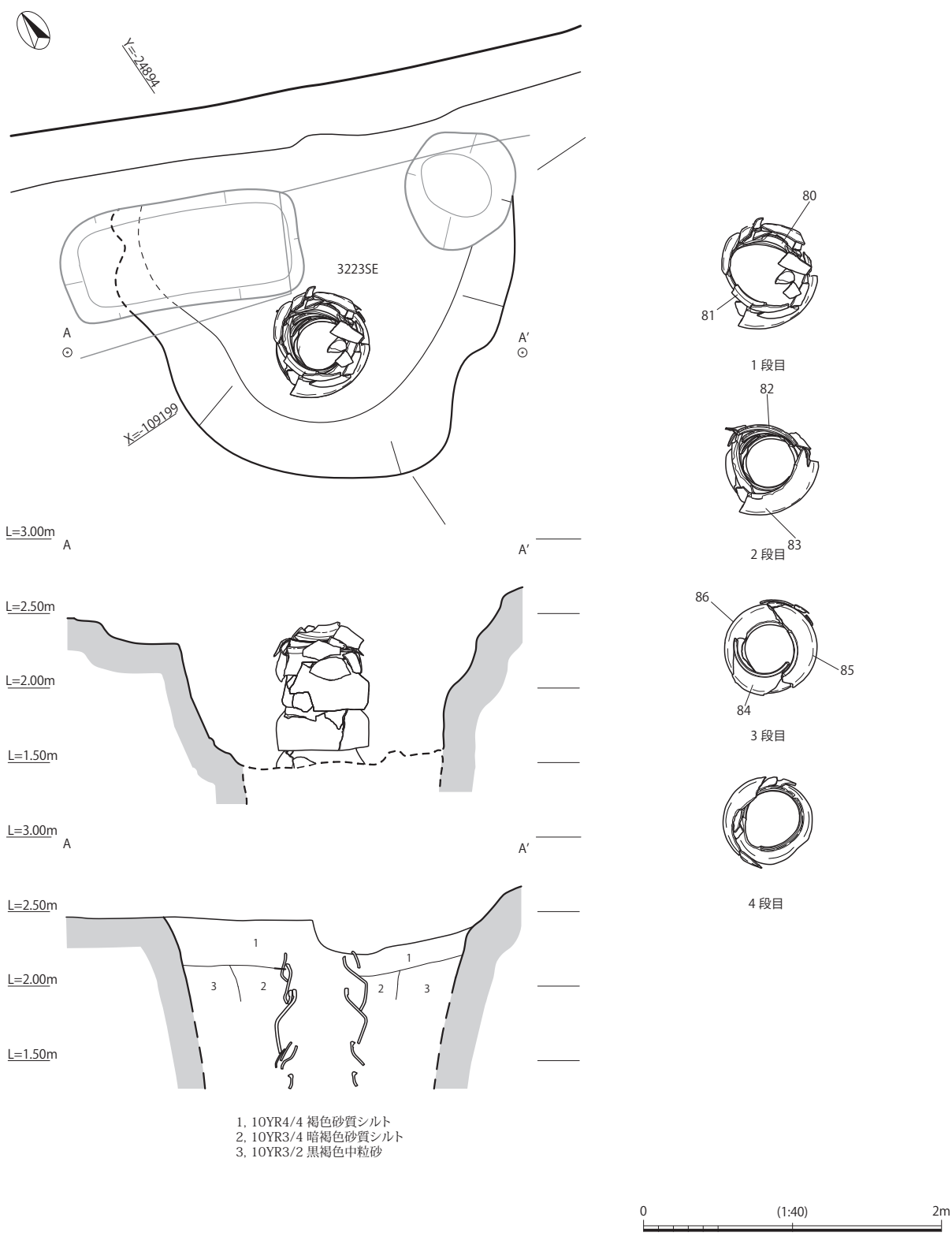
1. 10YR4/4 褐色 中粒砂(φ10mm礫含む 3010SE掘方埋土)
2. 10YR3/4 暗褐色 中粒砂(3010SE掘方埋土)
3. 10YR4/6 褐色 中粒砂(φ5mm~10mm大礫含む 3010SE掘方埋土)
4. 10YR5/6 黄褐色 細粒砂(φ10mm大礫少量含む 3010SE掘方埋土)
5. 10YR4/4 褐色 中粒砂(φ5mm~10mm大礫少量含む 3010SE掘方埋土)
6. 10YR5/6 黄褐色 中粒砂(φ5mm大礫少量含む 3010SE掘方埋土)
7. 10YR6/6 明黄褐色 中粒砂(3010SE掘方埋土)

第 33 図 3 地点 井戸 3010SE 平面・断面図



- 1, 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂
- 2, 10YR5/3 にぶい黄褐色 細粒砂
- 3, 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂(炭化物粒含む)
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂(粘土ブロック少量含む)
- 5, 10YR6/1 灰褐色 中粒砂(グライ化顕著)
- 6, 10YR6/4 にぶい黄褐色 細粒砂

第 34 図 3 地点 井戸 3019SE 平面・断面図



第35図 3地点 井戸 3223SE 平面・断面図

分割した部材を組み合わせて、さらに隙間に細かく割った部材を詰め込み、井戸枠を固定している様子が確認できた。枠内の埋土には遺物のほか、人頭大の石を多く見つかっている。石の表面は焼けた痕跡が見られる。その他ウマもしくはウシの骨やニホンイシガメの甲羅が10個体分見つかっている。ニホンイシガメは頭骨や四肢骨がほとんど見られないことや被熱を受けた痕跡が見られることから、井戸内に亀が生息していたのではなく解体したものを投棄していたと考えられ、廃絶時に祭祀を行った可能性が考えられる。そのほか、口縁端部を打ち欠いた常滑甕の口縁部が多く見られることから、廃絶に際して部材の再利用は行われず、上部枠材をそのまま枠内に廃棄したものと考えられる。3232SEと3019SEは、谷地形の最深部に当たる箇所を設置されており、湧水が途切れることがなかった。出土遺物は常滑産陶器玉縁壺(20)、甕(21・22・81～86)、播鉢、施釉陶器、山茶碗(東濃型・尾張型)、土師器皿、亀骨などが見られる。井戸枠材に使用されている常滑甕は8～11型式のものが見られる。井戸の構築時期は16世紀と思われる。

区画溝 3012SD(第36図 図版3)

3地点 3B2b・c グリッドに位置する。東側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、幅1.07m、深さ0.14mをはかる。東西方向に延びる。3008SKに切られる。出土遺物は土師器、陶器、青磁、瓦の細片が見られる。時期については不明であるが中世以降と思われる。

区画溝 3015SD(第36図 図版3)

3地点 3B2b・c グリッドに位置する。東側と南側は調査区外に延びるため全容は不明であるが、幅0.8m、深さ0.27mをはかる。東西方向に延びる。出土遺物は土師器、山茶碗(79)、瀬戸美濃系折縁皿(23)が見られる。時期は大窯4期にあたる瀬戸美濃系折縁皿から16世紀後半以降には埋没していると思われる。

区画溝 3110・3140SD(第37図 図版4)

3地点 2A18p～r・2A19q～r グリッドに位置する。北側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、幅0.66m、深さ0.24mをはかる。東西方向に延びる。断面観察から埋土が白色を帯びることから、周辺の堆積状況などを考慮すると近世の遺構の可能性が考えられる。出土遺物はロクロ土師皿(24・25)、山茶碗、瀬戸美濃系陶器、土錘などが見られる。特にロクロ土師皿は胎土が赤みを帯びることから、少なくとも中世後期以降にあたると思われる。このことから18世紀以降には埋没していると思われる。

区画溝 3150SD(第38図 図版5)

3地点 2A18p～2A20p グリッドに位置する。北側と南側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、幅0.66m、深さ0.83mをはかる。南北方向に延びる。3140SDに切られる。3269SKを切る。出土遺物はロクロ土師皿、山茶碗、瀬戸美濃系鉄釉陶器などが見られる。時期は細片のため全容の把握はできないが、16世紀と思われる。

区画溝 3170SD(第39図 図版5)

3地点 2A18n～2A19o・2A19n グリッドに位置する。北側と南側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、幅2.52m、深さ0.33mをはかる。南北方向に延びる。3171SDと合流する。規模は3地点の区画溝のなかでは大きいことから、区画の基準となる可能性が考えら

れる。断面形状はややV字形を指向し、西側の傾斜が強い傾向が見られる。出土遺物は土師器羽釜(26)、ロクロ土師皿(27)、山茶碗、瀬戸美濃系陶器、土錘のほか弥生土器が見られる。遺物から15～16世紀と思われる。

区画溝 3171SD(第39図)

3地点 2A18o・p グリッドに位置する。幅0.87m、深さ0.27mをはかる。東西方向に延びる。3170SDと合流し、3150SDに接する。3150・3170SD間の区画を南北に分割する溝の可能性が考えられる。出土遺物は土師器、山茶碗、瀬戸美濃系灰釉陶器などが見られる。遺物から15～16世紀と思われる。

溝状遺構 3011SD(第40図 図版4)

3地点 2B20a～3B1b グリッドに位置する。幅4.71m、深さ0.46mをはかる。南北方向に延びる。谷地形に沿う様に掘られている。後述する3238SDと平行する。明瞭な平面形状が把握できないことから溝というよりは谷の斜面をカットして区画の境界を示している可能性も考えられる。出土遺物は多く、土師器鍋(32・33)、羽釜(34)、内耳鍋(35)、山茶碗、常滑産陶器壺(30)、瀬戸美濃系志野丸皿(28)、青磁碗(29)、銅製分銅(31)、土錘(105～112)などが見られる。遺物の時期差も13世紀～17世紀と幅広いが15世紀の遺物がやや優位を占めることから、屋敷地の存続期間を反映するものと思われる。特に竿秤用の銅製分銅が出土していることから、計量を必要とする職業を営んでいた可能性が考えられる。

溝状遺構 3238SD(第41図)

3地点 2A18～20q グリッドに位置する。幅3.15m、深さ0.12mをはかる。南北方向に延びる。3011SDと同様に谷地形に沿う様に掘られている。明瞭な平面形状が把握できないことから溝というよりは谷の斜面をカットして区画の境界を示している可能性も考えられる。出土遺物は確認できなかった。

溝状遺構 3172SD(第42図 図版5)

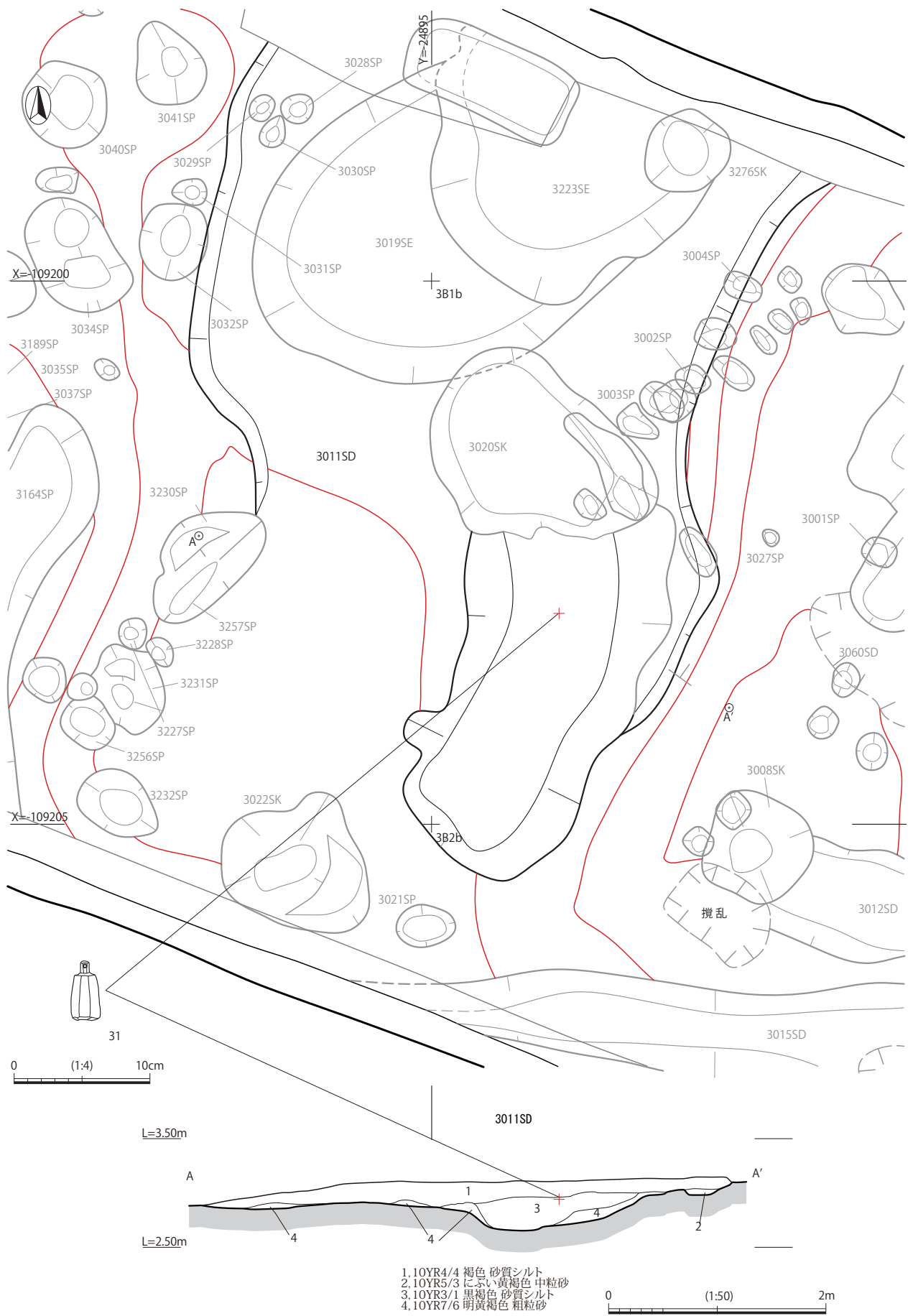
3地点 2A18・19n グリッドに位置する。大部分が調査区外に延びることと攪乱に壊されることから全容は不明であるが、幅0.44m、深さ0.41mをはかる。南北方向に延びる。3251SDを切る。出土遺物は土師器、山茶碗、瀬戸美濃系灰釉天目茶碗(36)、播鉢のほか古代の台付甕脚部などが見られる。遺物から16世紀と思われる。

土坑 3008SK(第36図)

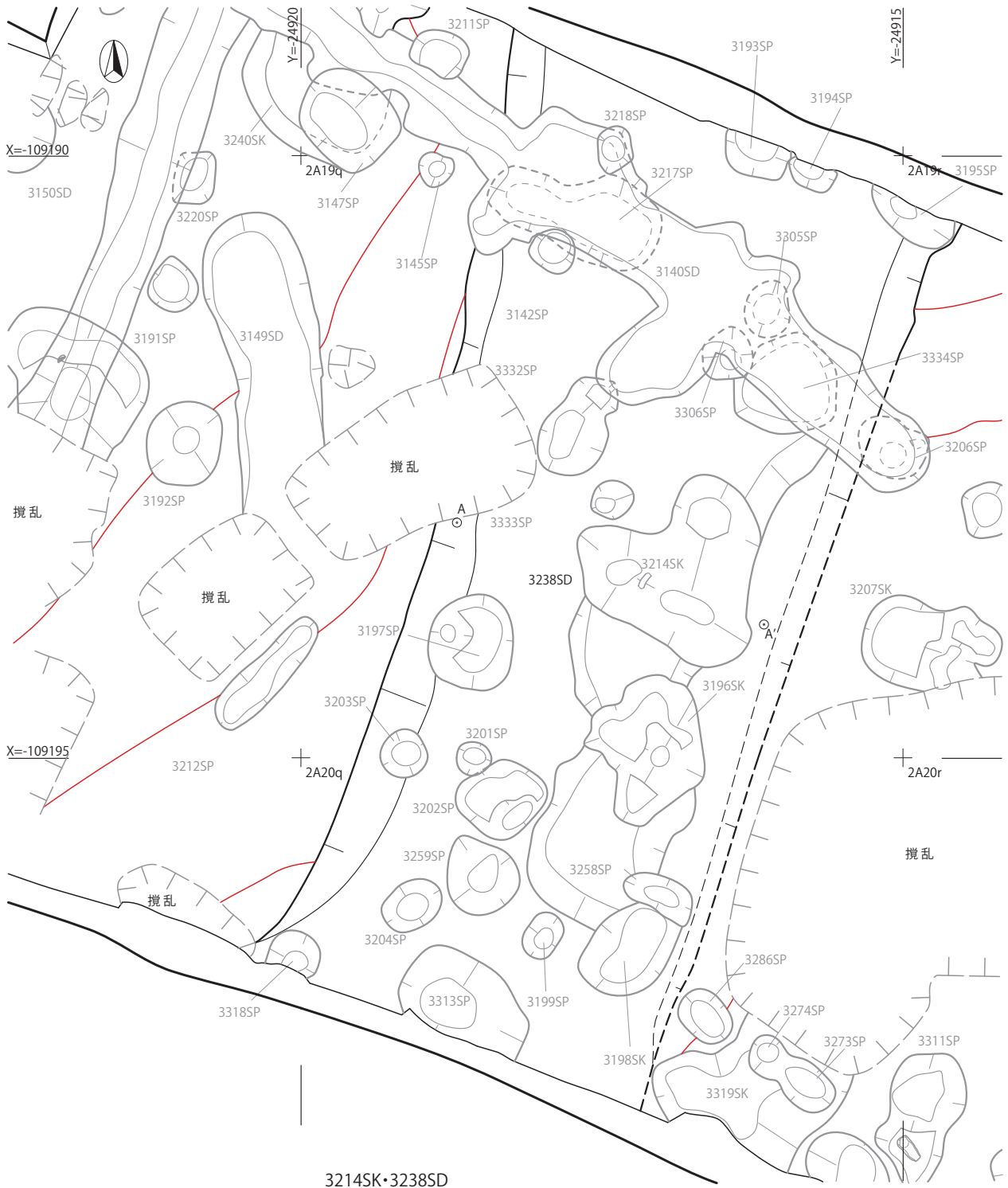
3地点 3B1・2b グリッドに位置する。長さ0.94m、幅0.93m、深さ0.24mをはかる。平面形状は方形を、断面形状は皿形を呈す。3012SDを切る。断面観察から埋土がやや白色を帯びる。出土遺物は瀬戸美濃系片口碗(37)、焙烙(38)、瓦、土錘などが見られる。遺物から16～19世紀と思われる。

土坑 3022SK(第43図)

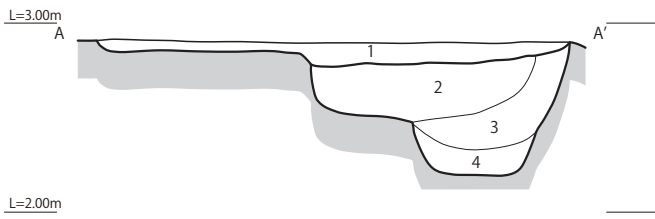
3地点 3B1・2a グリッドに位置する。長さ1.49m、幅1.06m、深さ0.40mをはかる。平面形状は楕円形を、断面形状は碗形を呈す。東側の掘り込みが浅くテラス状を呈す。周辺の遺構から掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。出土遺物は非ロクロ土師皿、東濃型山茶碗、尾張型山茶碗、常滑産陶器片のほか鎌刃と思われる鉄製品などが見られる。遺物から15世紀以



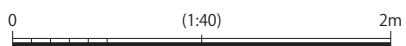
第 40 図 3 地点 溝状遺構 3011SD 平面・断面図



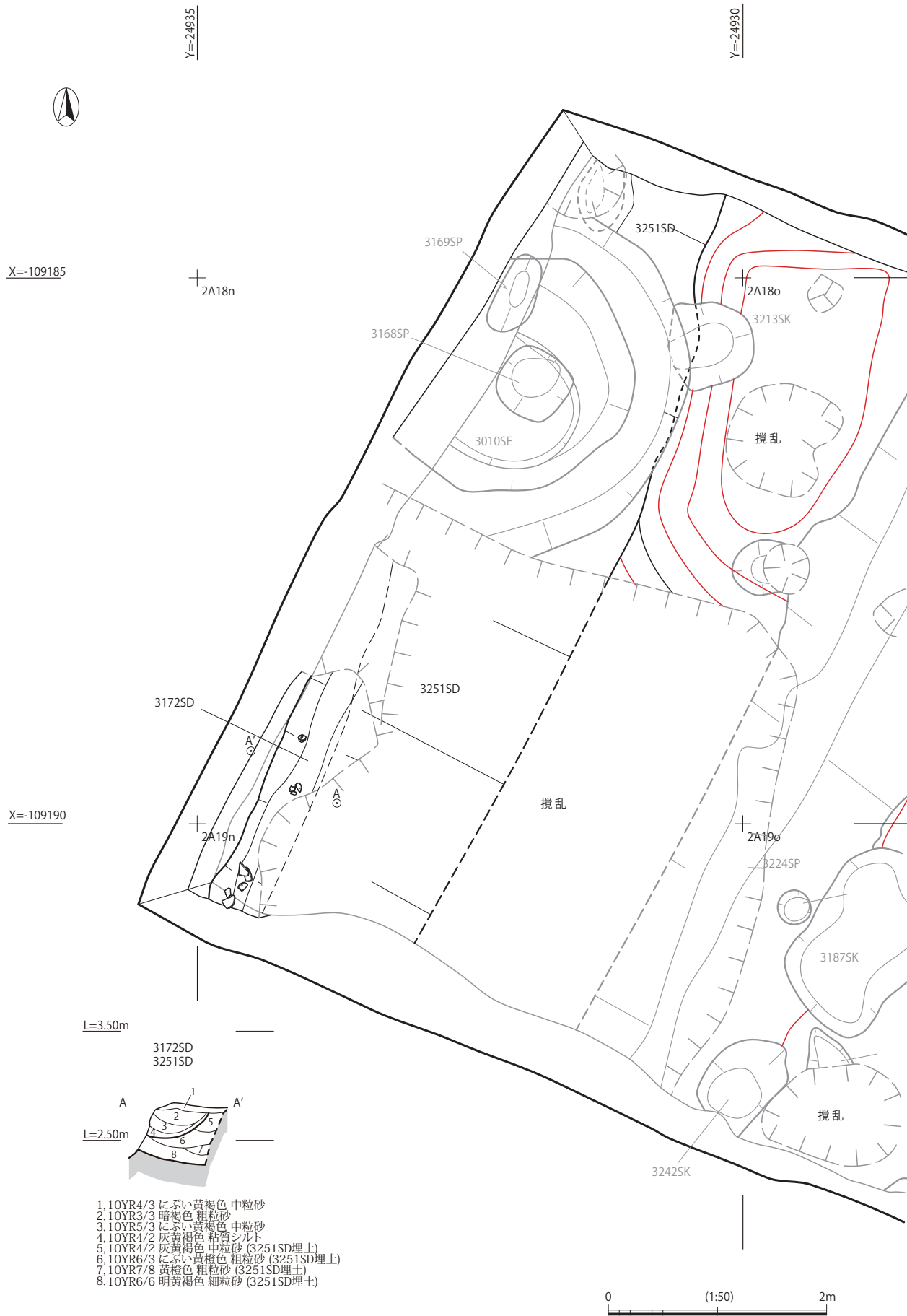
3214SK・3238SD



1. 10YR5/3 にふい黄褐色 粘質シルト(3238SD埋土)
2. 10YR6/3 にふい黄褐色 中粒砂(3214SK埋土)
3. 10YR5/4 にふい黄褐色 中粒砂(3214SK埋土)
4. 10YR4/4 褐色 細粒砂(3214SK埋土)



第 41 図 3 地点 溝状遺構 3238SD 平面・断面図



第 42 図 3 地点 溝状遺構 3172・3251SD 平面・断面図

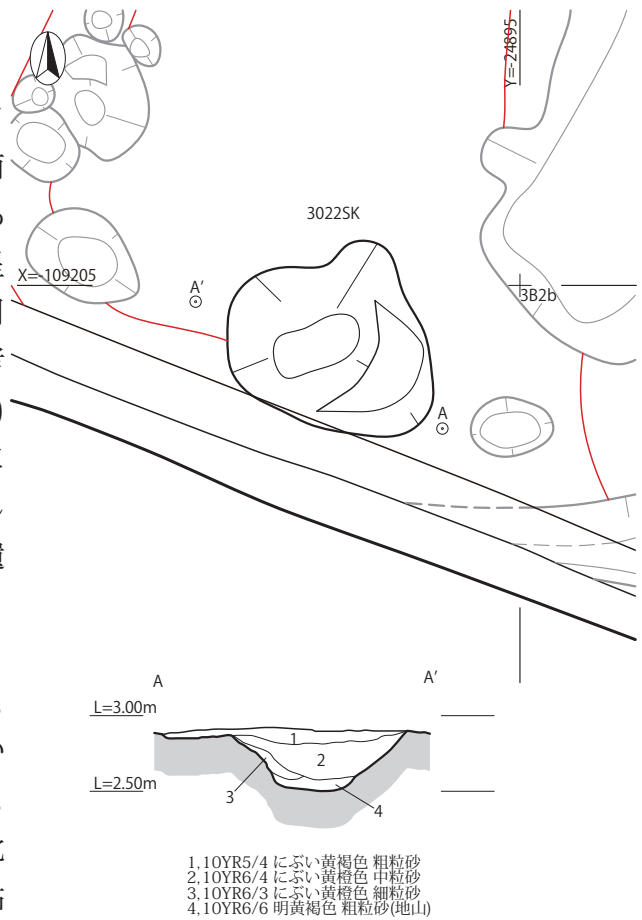
降と思われる。

土坑 3269SK(第 44 図 図版 6)

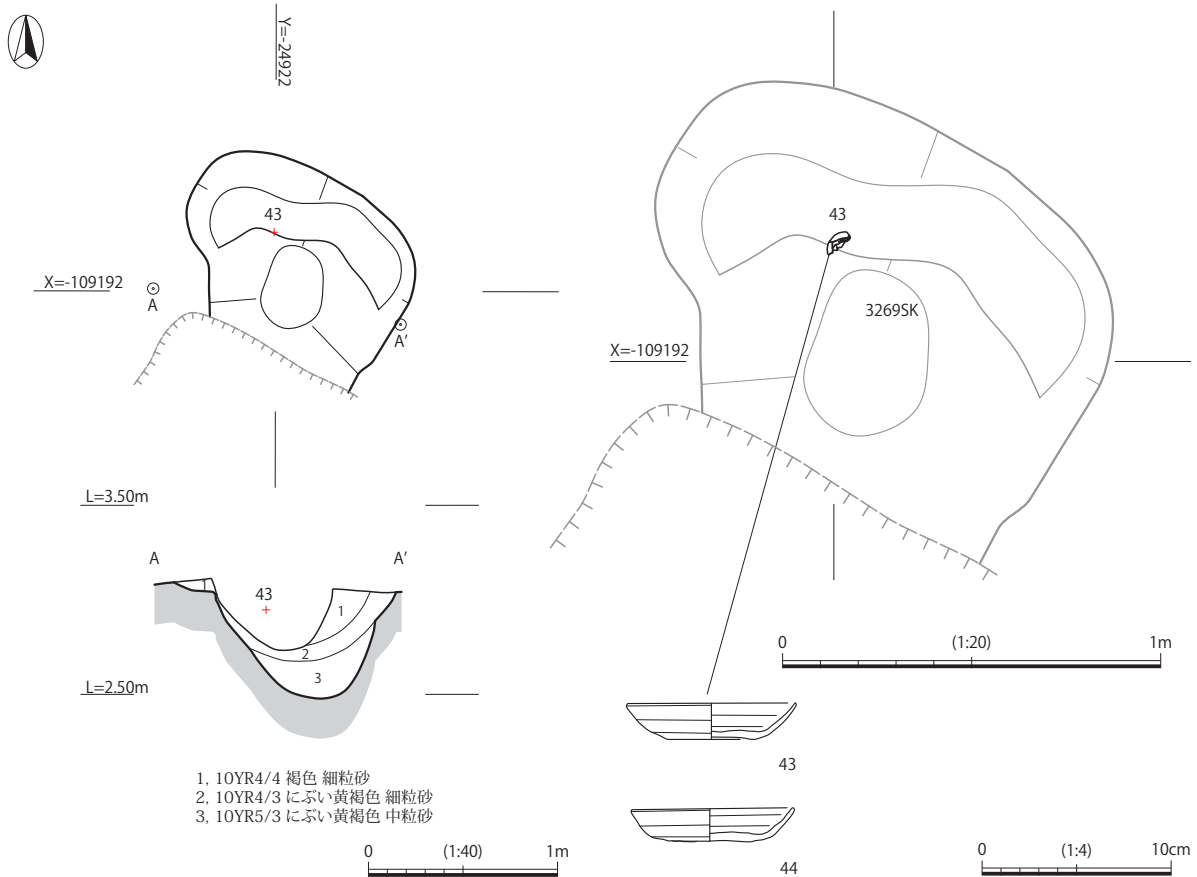
3 地点 2A19p グリッドに位置する。長さ 1.29m、幅 0.95m、深さ 0.58m をはかる。南側を攪乱に壊されることから全容は不明である。平面形状は楕円形を、断面形状は碗形を呈す。北側の掘り込みが浅くテラス状を呈す。周辺の遺構から掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。出土遺物はロクロ土師皿(43・44)が 2 枚見られる。ロクロ土師皿はうつ伏せに置いて 2 枚を重ねているような状態で出土した。廃絶に伴う祭祀の可能性が考えられる。遺物から 16 世紀以降と思われる。

土坑 3016SK(第 45 図 巻頭図版 2 図版 6)

3 地点 2A20t・2B20a グリッドに位置する。長さ 2.08m、幅 2.07m、深さ 0.57m をはかる。平面形状は方形を、断面形状は碗形を呈す。3017SK を切る。北壁面の傾斜が他の壁面と比較すると、なだらかになっている。南壁には粘土を貼り付ける加工を施す。断面観察から底面



第 43 図 3 地点 3022SK 平面・断面図



第 44 図 3 地点 土坑 3269SK 平面・断面図

にも粘土ブロックを多く含む埋土が見られたことから、貯水機能を指向している可能性が考えられる。また、埋土内に炭化物を多く含む。この特徴は後述する 3017SK にも見られる。出土遺物は土師器羽釜、内耳鍋、ロクロ土師皿、山茶碗、土錘などが見られる。細片のため全容は不明であるが、3017SK との関係から 17 世紀以降と思われる。

土坑 3017SK(第 46 図 巻頭図版 2 図版 6)

3 地点 2A20t・3A1t グリッドに位置する。長さ 3.08m、幅 2.87m、深さ 0.70m をはかる。平面形状は楕円形に近い方形を、断面形状は碗形を呈す。3016SK に切られる。南壁面の傾斜が他の壁面と比較すると、なだらかになっている。南壁以外の壁面に粘土を貼り付ける加工を施す。断面観察から底面にも粘土ブロックを多く含む埋土が見られたことから、貯水機能を指向している可能性が考えられる。また、埋土内に炭化物と竈材と思われる被熱を受けた粘土材を多く含む。また、壁面に使用されたと思われる粘土が投棄された状態で見ついている。北壁面では粘土壁の修復痕を確認することができた。炭化物の年代測定から 17 世紀中頃～18 世紀後半との測定結果が得られた。出土遺物は土師器羽釜、内耳鍋(42)、ロクロ土師皿、非ロクロ土師皿(39)、山茶碗、白磁、瀬戸美濃系折縁深皿(40・41)、天目茶碗、常滑産甕、土錘、板状の鉄製品などが見られる。遺物や年代測定の結果から 16 世紀～18 世紀後半と思われる。

土坑 3323SK(第 47 図)

3 地点 3A1s グリッドに位置する。調査区外に拡がることから全容は不明であるが、長さ 1.56m、幅 0.35m、深さ 0.67m 以上をはかる。平面形状は楕円形を、断面形状は碗形を呈す。3322SK に切られる。断面観察から埋土に粘土ブロックを多く含むことや、3016SK・3017SK に近接することから、同様の施設であった可能性が考えられる。出土遺物は見られなかった。

土坑 3005SK(第 48 図 図版 6)

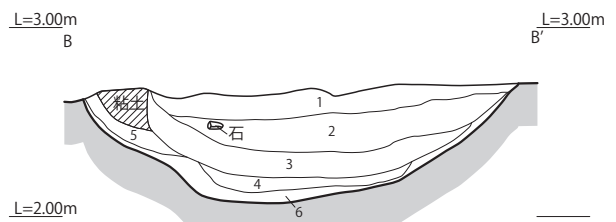
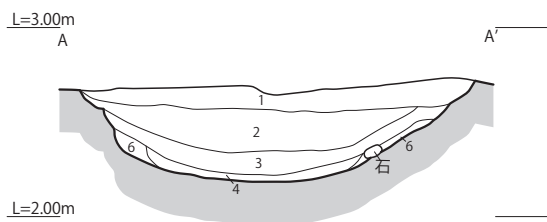
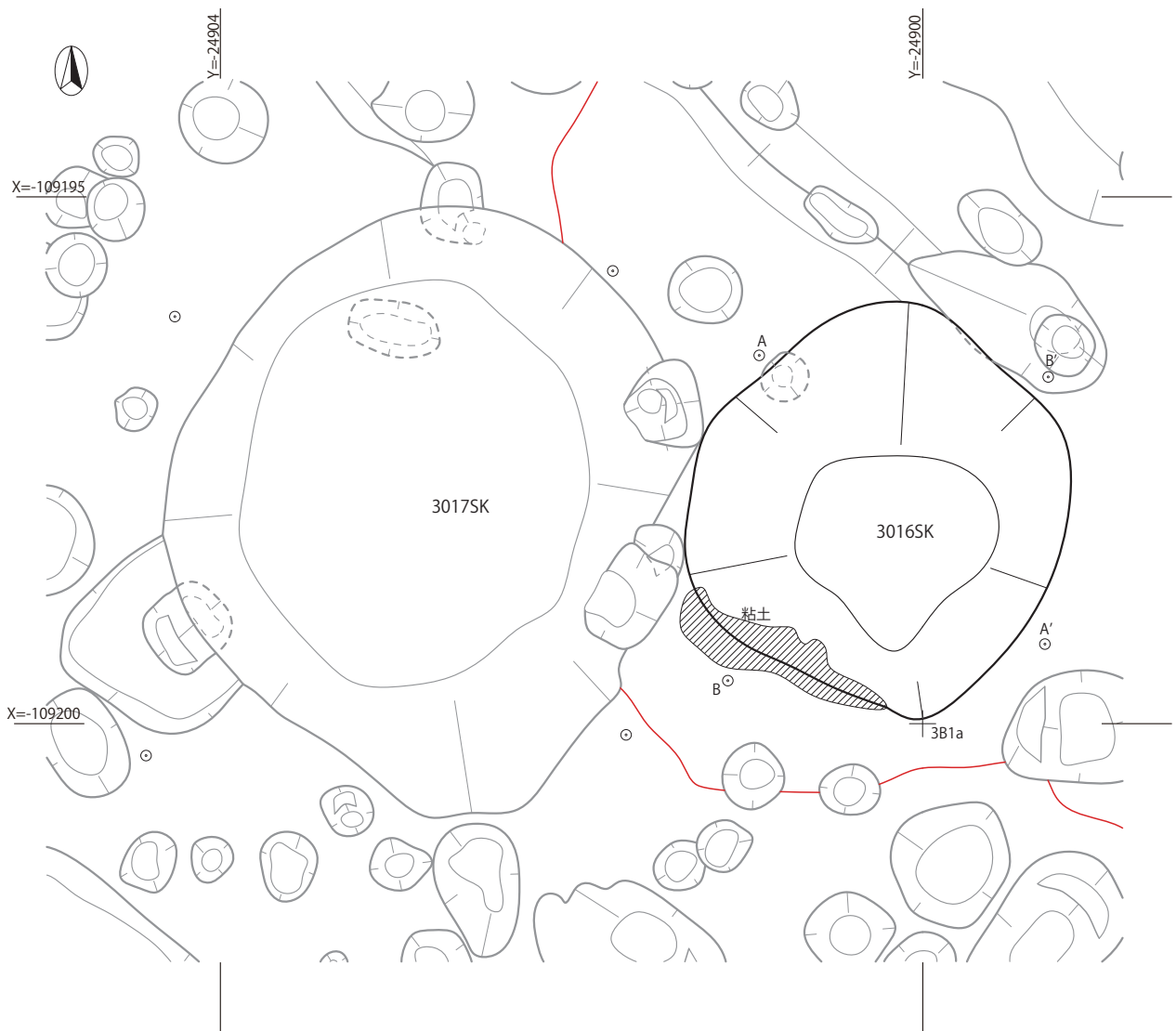
3 地点 3A1t・3B1a グリッドに位置する。長さ 1.33m、幅 0.89m、深さ 0.16m をはかる。平面形状は長方形を、断面形状は皿形を呈す。検出段階では銭貨が 1 枚出土したことから、土壙墓の可能性を考慮して掘削を進めたが、骨や副葬品などは確認できなかった。出土遺物は銭貨(紹聖元宝)(98)、山茶碗、播鉢、天目茶碗、卸皿などが見られる。遺物から 15 世紀以降と思われる。

土坑 3163SK(第 48 図 図版 6)

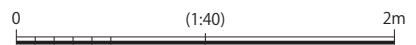
3 地点 2B20b グリッドに位置する。長さ 1.61m、幅 0.72m、深さ 0.13m をはかる。平面形状は長方形を、断面形状は皿形を呈す。検出段階では土壙墓の可能性を考慮して掘削を進めたが、骨や副葬品などは確認できなかった。3223SE を切る。出土遺物は土師器羽釜、山茶碗、天目茶碗などが見られる。遺物と 3223SE から 16 世紀以降と思われる。

土坑墓 3179SK(第 49 図 図版 6)

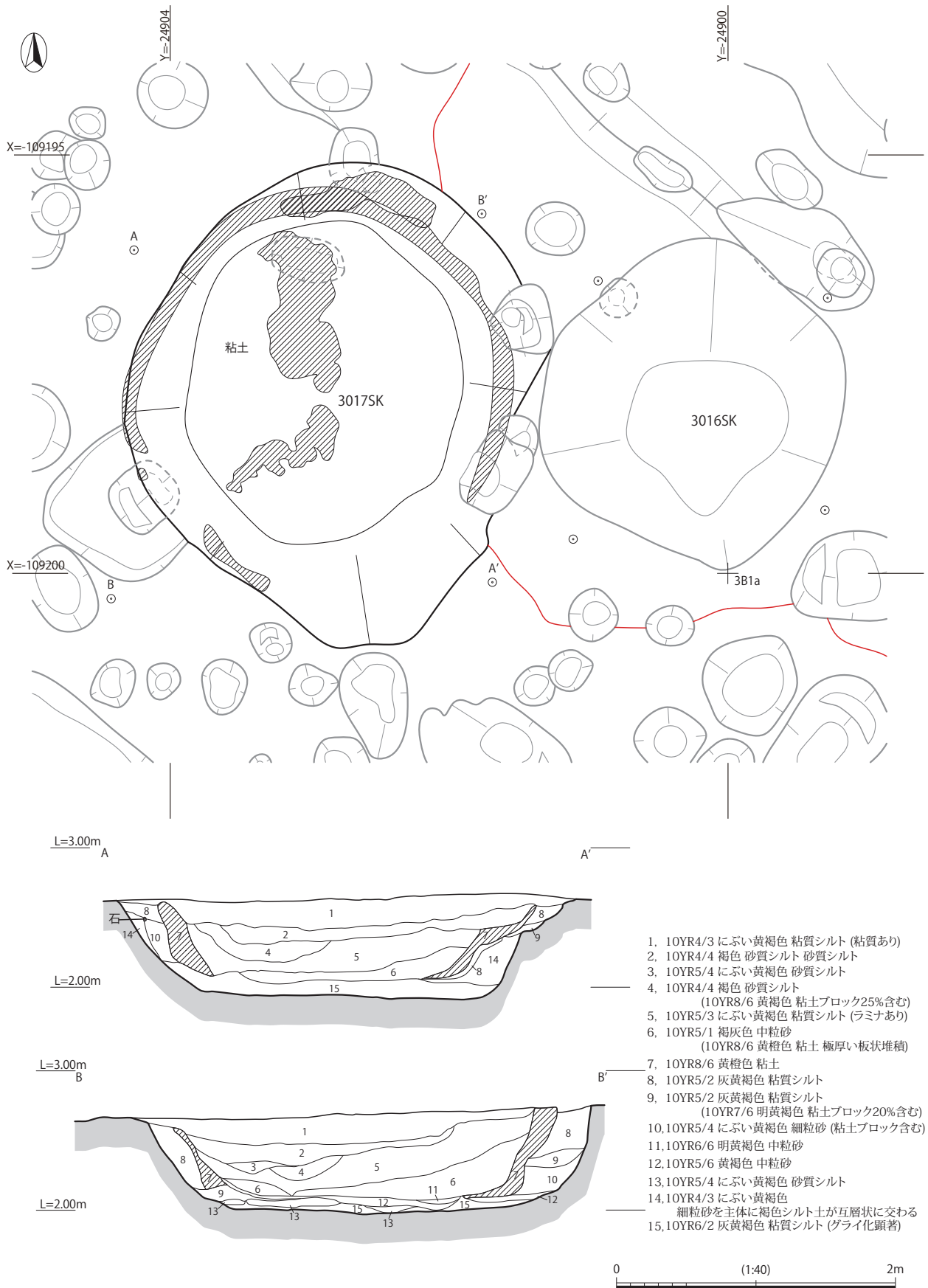
3 地点 2A19o グリッドに位置する。長さ 1.36m、幅 1.09m、深さ 0.24m をはかる。平面形状は長方形を、断面形状は皿形を呈す。検出段階では土壙墓の可能性を考慮して掘削を進めたところ、南側にて半分にした東濃型山茶碗(45)がうつ伏せに置いているような状態で出土した。3170SD を切る。出土遺物は前述の山茶碗の他、土師器などが見られる。遺物から 15 世紀以降と思われる。



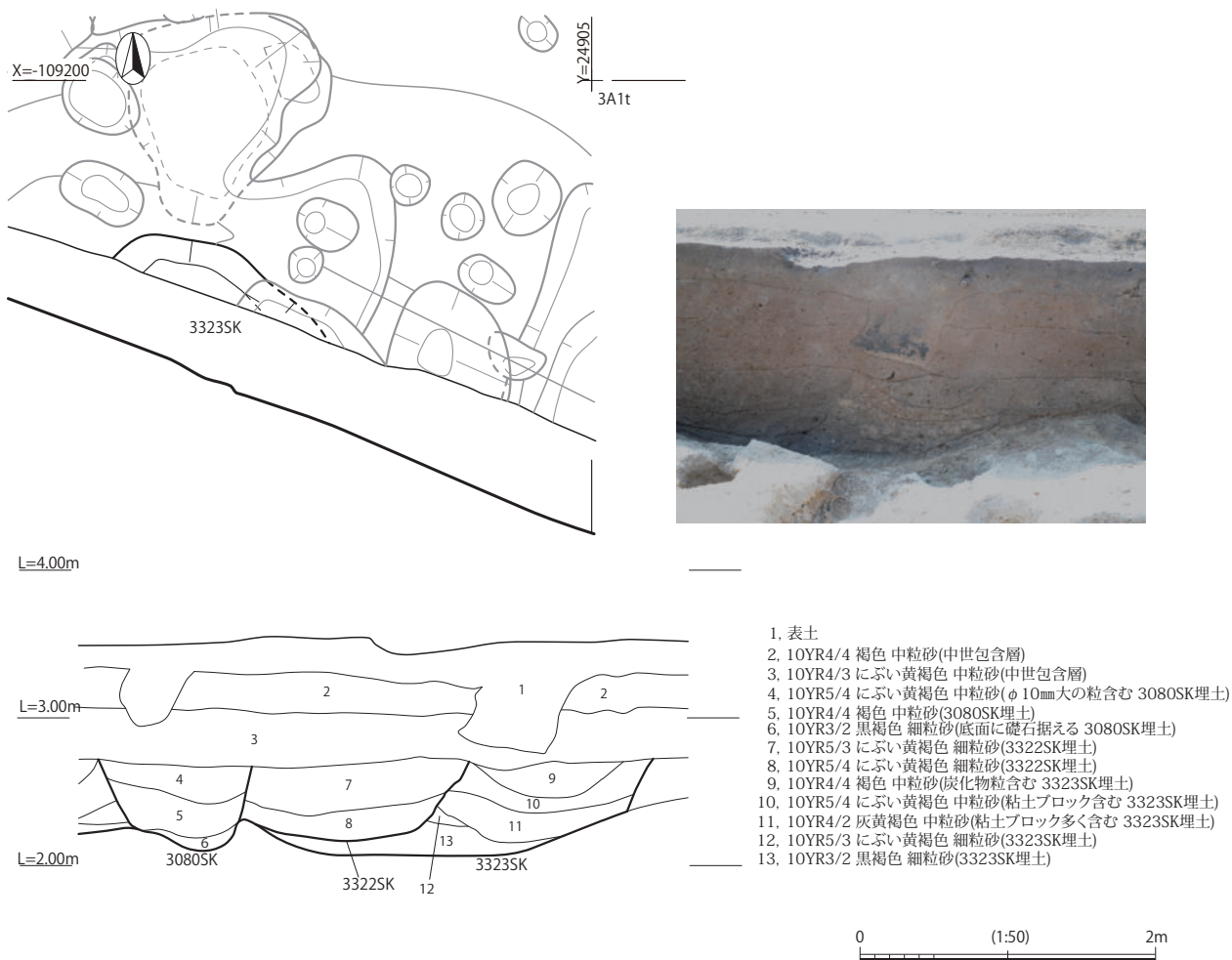
- 1, 10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂(しまりあり)
- 2, 10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂
- 3, 10YR4/3 にふい黄褐色 細粒砂(炭化物粒含む)
- 4, 10YR5/1 褐灰色 粘質土(粘土ブロック多く含む 底面粘土)
- 5, 10YR4/2 灰黄褐色 中粒砂(礫多く含む)
- 6, 10YR8/6 黄橙色 粗粒砂



第45図 3地点 土坑 3016SK 平面・断面図



第46図 3地点 土坑3017SK 平面・断面図



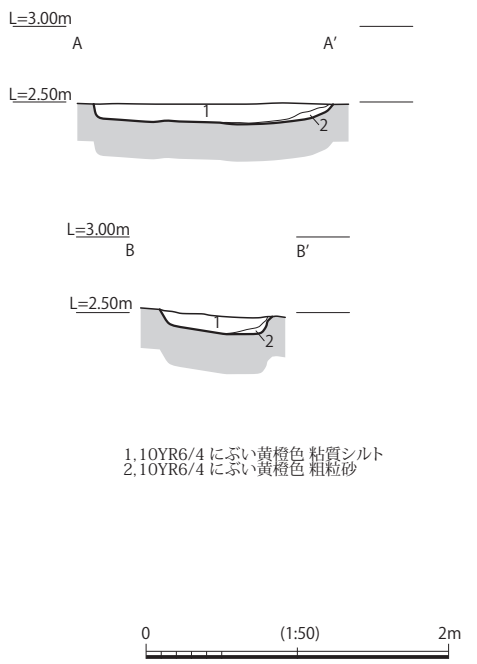
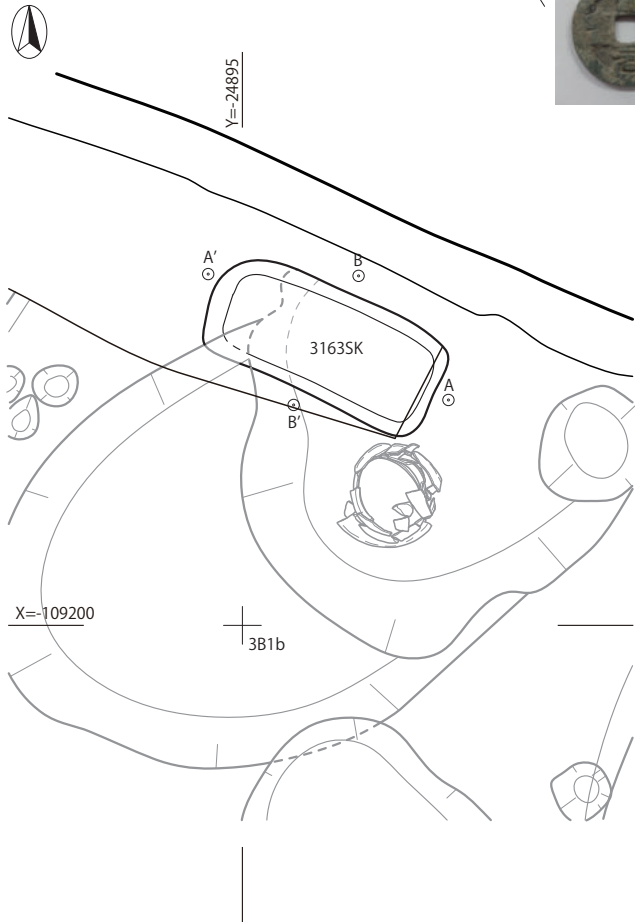
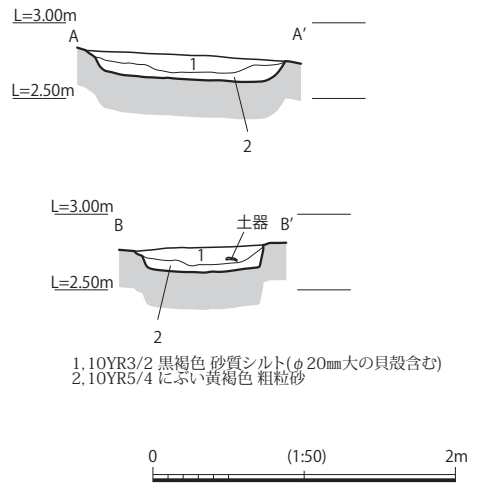
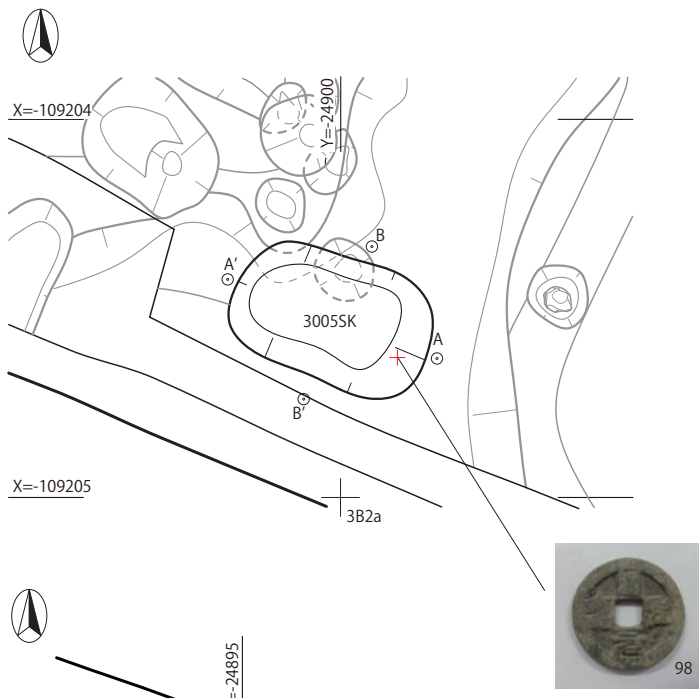
第 47 図 3 地点 土坑 3323SK 平面・断面図

掘立柱建物跡 001SB(第 50・51 図 図版 7)

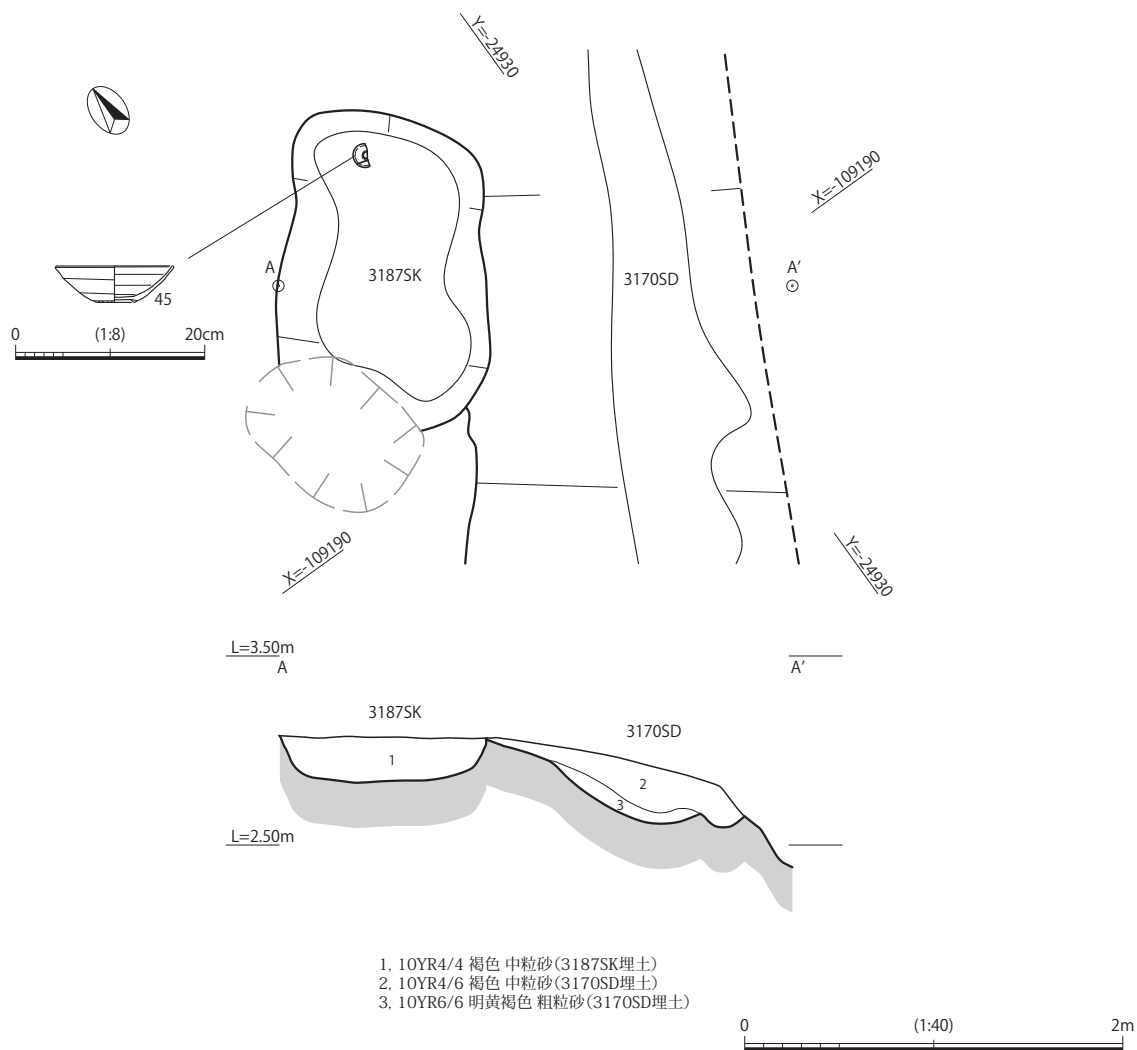
3 地点 3A1t・3A1a グリッドに位置する。2 間以上(桁行 3.2m 以上)×1 間(梁行 2.7m)をはかる。平面は長形状を呈す。梁行間では棟柱が見られなかった。主軸方向は N-31°-E である。柱穴は楕円形と円形を呈す。規模は直径 0.33～1.05m、深さ 0.12～0.58m とバラツキが見られる。特徴として北側の柱穴は楕円形状で大きく深い。それ以外の柱穴は比較的小さく、重複関係が著しいことから、複数回の建て替えがあったと考えられる。また、北側の柱穴の平面形状が乱れていないことから、建物配置や屋敷地内の活用に何らかの法則性があった可能性が考えられる。出土遺物は土師器内耳鍋、山茶碗、瀬戸美濃系鉄釉天目茶碗などが見られる。

掘立柱建物跡 002SB(第 50・52 図 図版 7)

3 地点 2A20t・s・2B20a・3A1t グリッドに位置する。4 間(桁行 4.97m)×3 間(梁行 4.21m)をはかる。平面は方形に近い長形状を呈す。主軸方向は N-37°-E である。柱穴は楕円形と円形を呈す。規模は直径 0.3～0.63m、深さ 0.11～0.42m とバラツキが見られる。柱穴間寸法も 1.1～1.9m とバラツキが見られる。東側柱列は 3016SK に切られる。一見すると 3017SK を覆うような様子が見られるが、関係性については検討を要する。出土遺物はロクロ



第 48 図 3 地点 土坑 3005S・3163SK 平面・断面図



第 49 図 3 地点 土坑 3179SK 平面・断面図

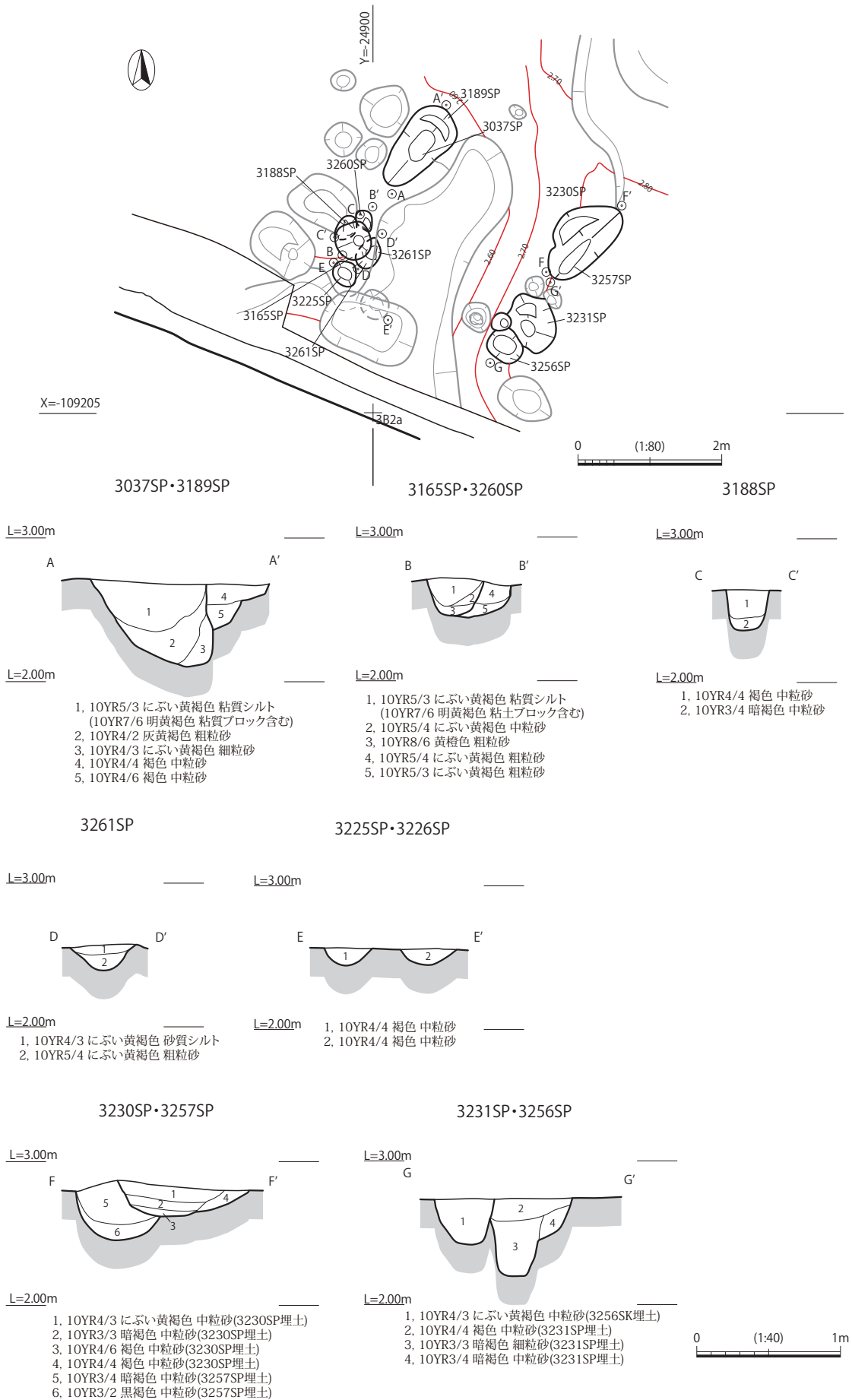
土師皿、非ロクロ土師皿、山茶碗などが見られる。

掘立柱建物跡 003SB(第 50・53 図 図版 7)

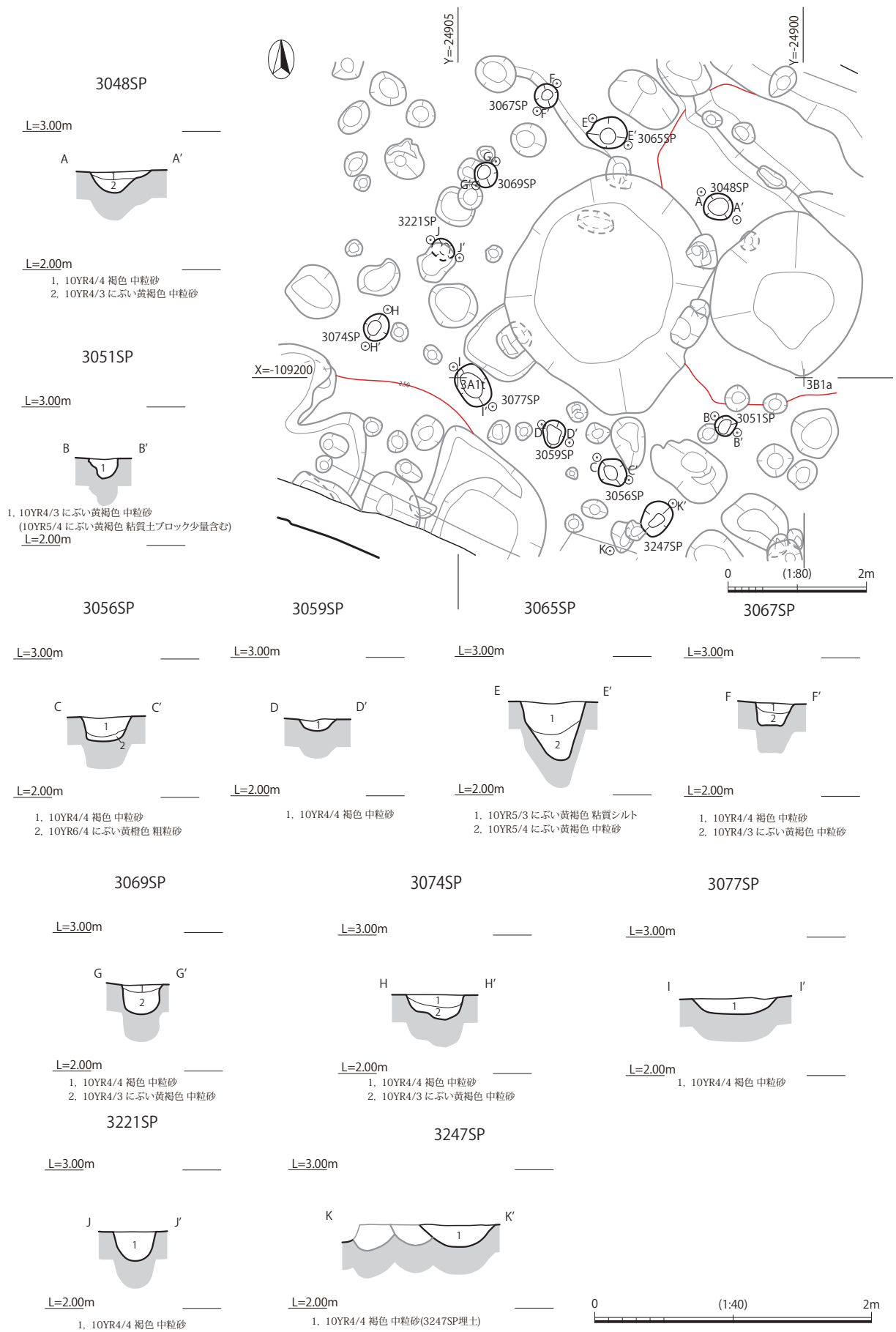
3 地点 2A20t・2B20a・3A1t・3B1a グリッドに位置する。2 間 (桁行 4.66m) × 2 間 (梁行 4.31m) をはかる。主軸方向は N-33° -E である。柱穴は楕円形と円形を呈す。規模は直径 0.34 ~ 1.25m、深さ 0.12 ~ 0.56m とバラツキが見られる。柱穴間寸法も 1.1 ~ 3.1m とバラツキが見られ、特徴として桁行東側の柱穴間が狭いことが挙げられる。また、3016SK を覆うような様子が見られるが、3281SP は 3017SK に切られることと 3016SK は 3017SK に後発することから、覆屋とは判断できない。出土遺物はロクロ土師皿、非ロクロ土師皿、山茶碗などが見られる。

掘立柱建物跡 004SB(第 50・54 図 図版 7)

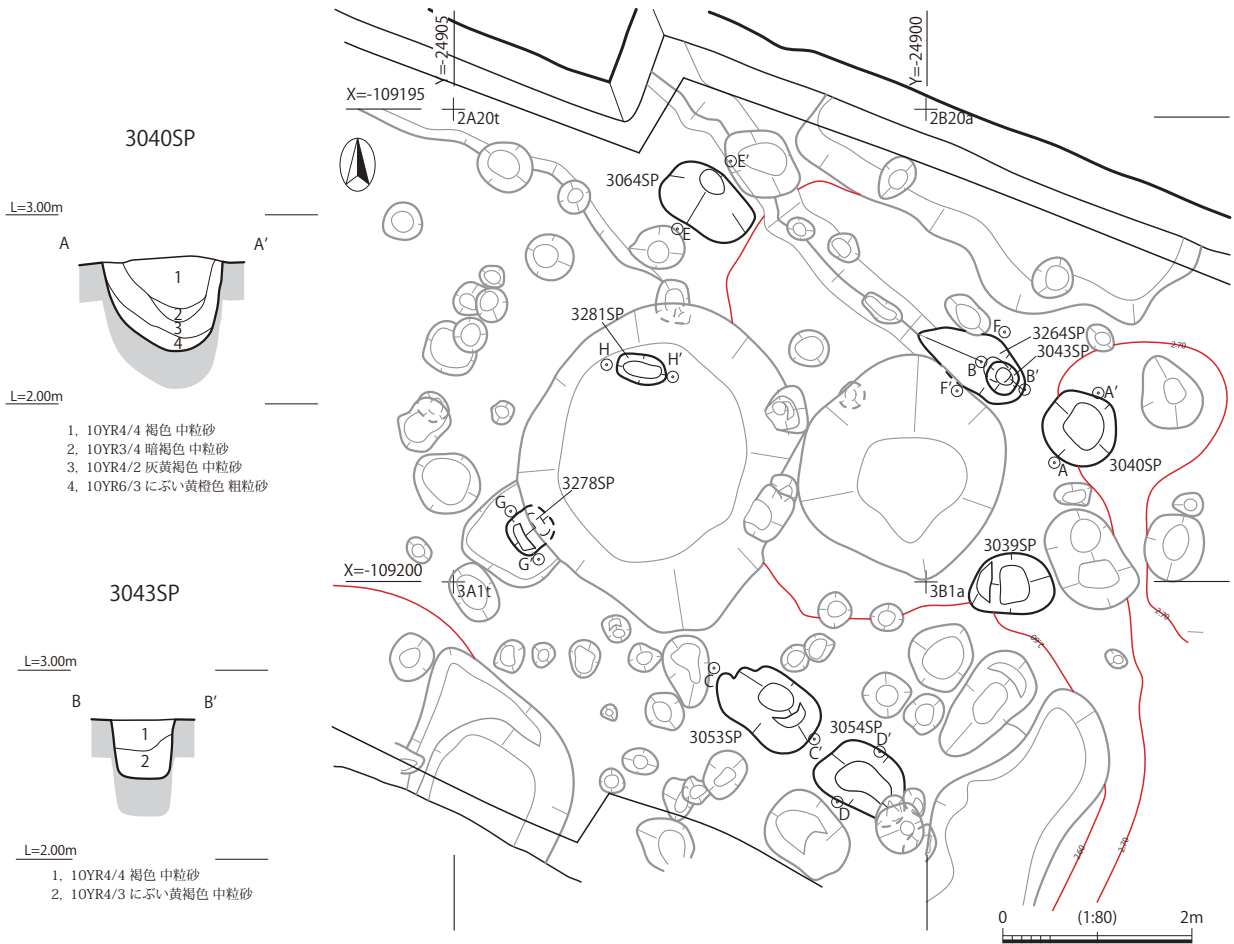
3 地点 2A20t・2B20a・3A1t・3B1a グリッドに位置する。4 間以上 (桁行 8.12m) × 2 間以上 (梁行 7.44m) をはかる。主軸方向は N-40° -E である。柱穴は楕円形と円形を呈す。規模は 0.34 ~ 1.14m、深さ 0.13 ~ 0.56m とバラツキが見られる。南側柱列は復元ができなかった。柱



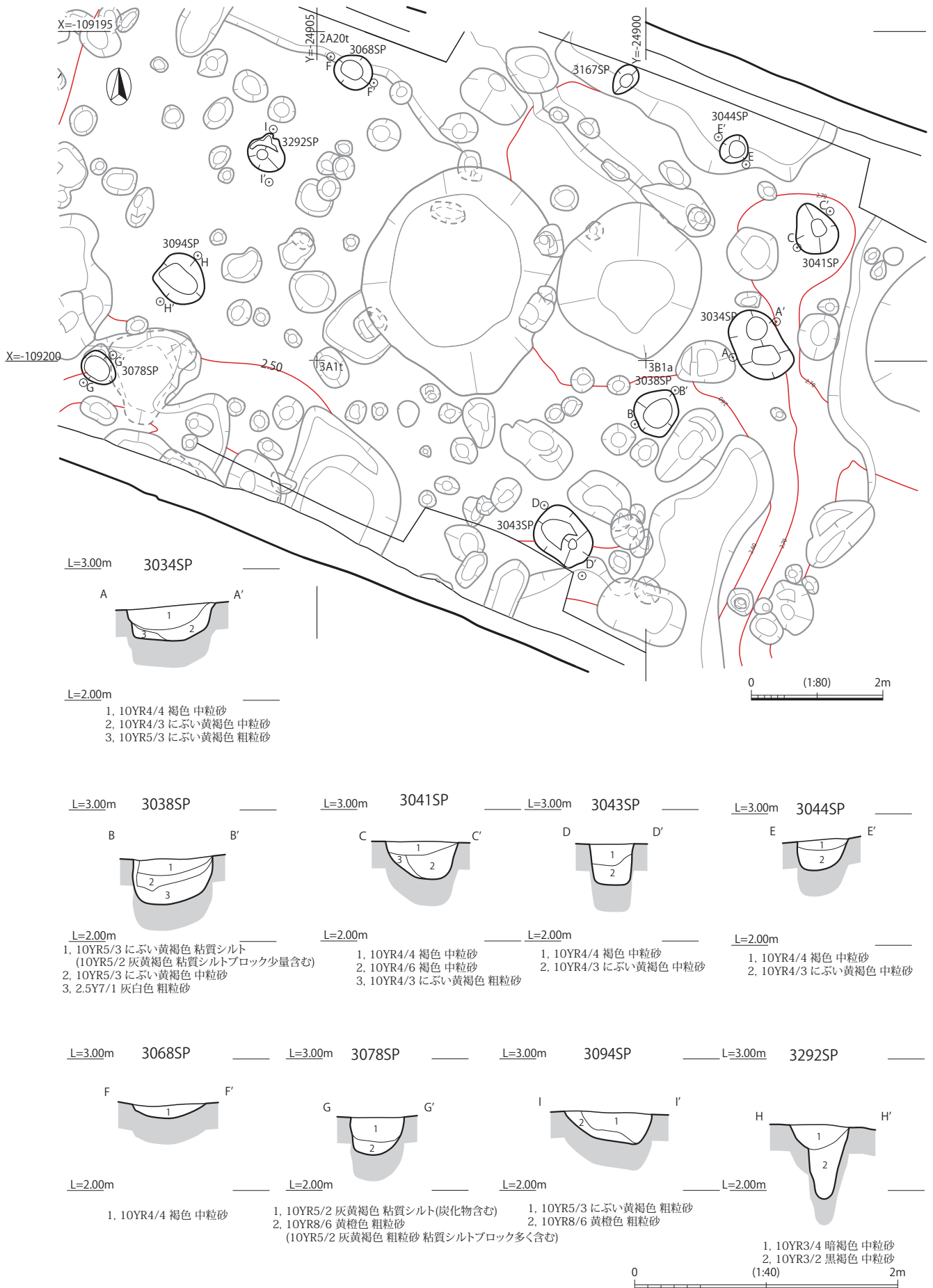
第 51 図 3 地点 掘立柱建物跡 001SB 平面・断面図



第 52 図 3 地点 掘立柱建物跡 002SB 平面・断面図



第 53 図 3 地点 掘立柱建物跡 003SB 平面・断面図



第 54 図 3 地点 掘立柱建物跡 004SB 平面・断面図

穴間寸法も 1.8 ～ 2.4m とややバラツキが見られる。出土遺物は土師器羽釜、非ロクロ土師皿、山茶碗などが見られる。

掘立柱建物跡 005SB(第 55・56・60 図 図版 7)

3 地点 2A20r・20s・3A1s グリッドに位置する。3 間以上 (桁行 5.9m) × 1 間以上 (梁行 2.2m) をはかる。主軸方向は N-47° -E である。調査区外に延びることから全容は不明である。柱穴は歪な楕円形を呈す。規模は 0.86 ～ 1.53m、深さ 0.22 ～ 0.76m と大きい。また、礎石と思われる扁平な石をもつ柱穴も見られる。歪な平面形状から重複関係も認められることから、複数回の建て替えがあったと思われる。出土遺物はロクロ土師皿 (46 ～ 48)、非ロクロ土師皿、山茶碗、播鉢、土錘などが見られる。

掘立柱建物跡 006SB(第 55・57・60 図 図版 7)

3 地点 2A19・20r・s・3A1s グリッドに位置する。3 間 (桁行 5.0m) × 2 間 (梁行 4.6m) をはかる。主軸方向は N-38° -E である。柱穴は円形を呈す。規模は 0.33 ～ 0.57m、深さ 0.08 ～ 0.34m とバラツキが見られる。また、根固石と思われる石組みと粘土をもつ柱穴も見られる。しかし、柱列が不揃いで非対称であることから、削平による消失の可能性が考えられる。出土遺物は非ロクロ土師皿、山茶碗などが見られる。

掘立柱建物跡 007SB(第 55・58 図)

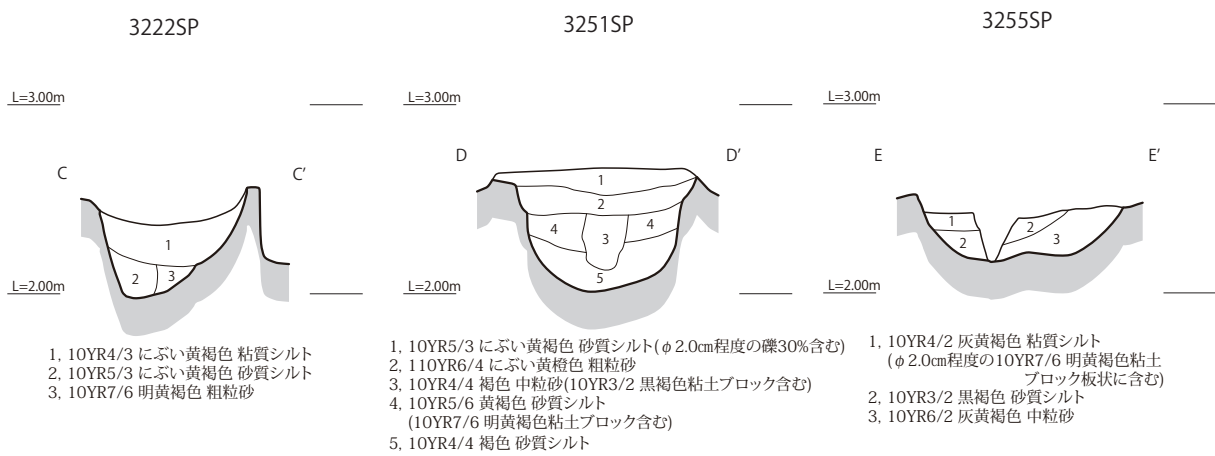
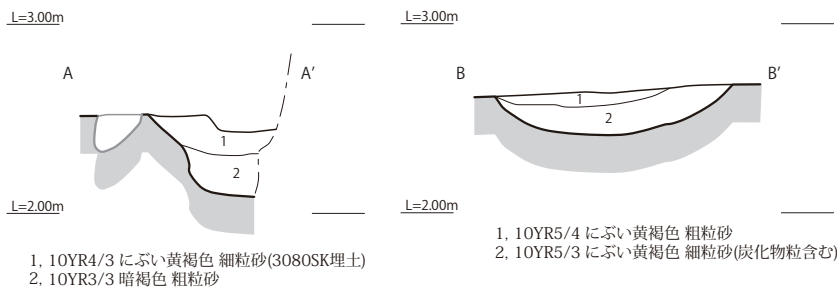
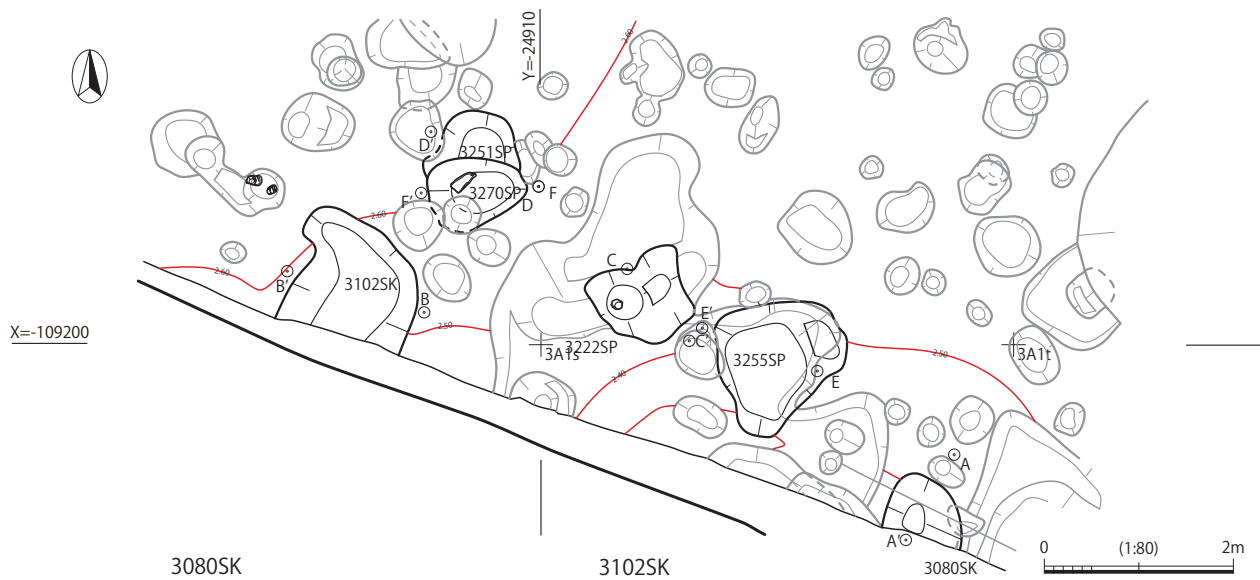
3 地点 2A19・20r・s グリッドに位置する。3 間 (桁行 5.9m) × 2 間 (梁行 4.9m) をはかる。主軸方向は N-31° -E である。柱穴は楕円形と円形を呈す。規模は 0.30 ～ 0.73m、深さ 0.11 ～ 0.49m とバラツキが見られる。西側柱列は攪乱によって壊されている。出土遺物は土師器片が見られるが細片のため詳細は不明である。

掘立柱建物跡 008SB(第 59・60 図)

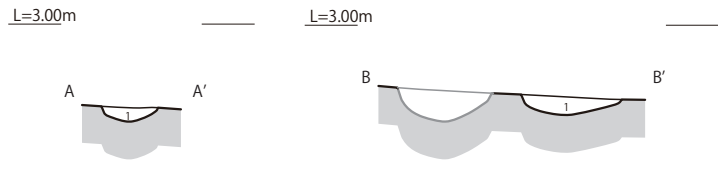
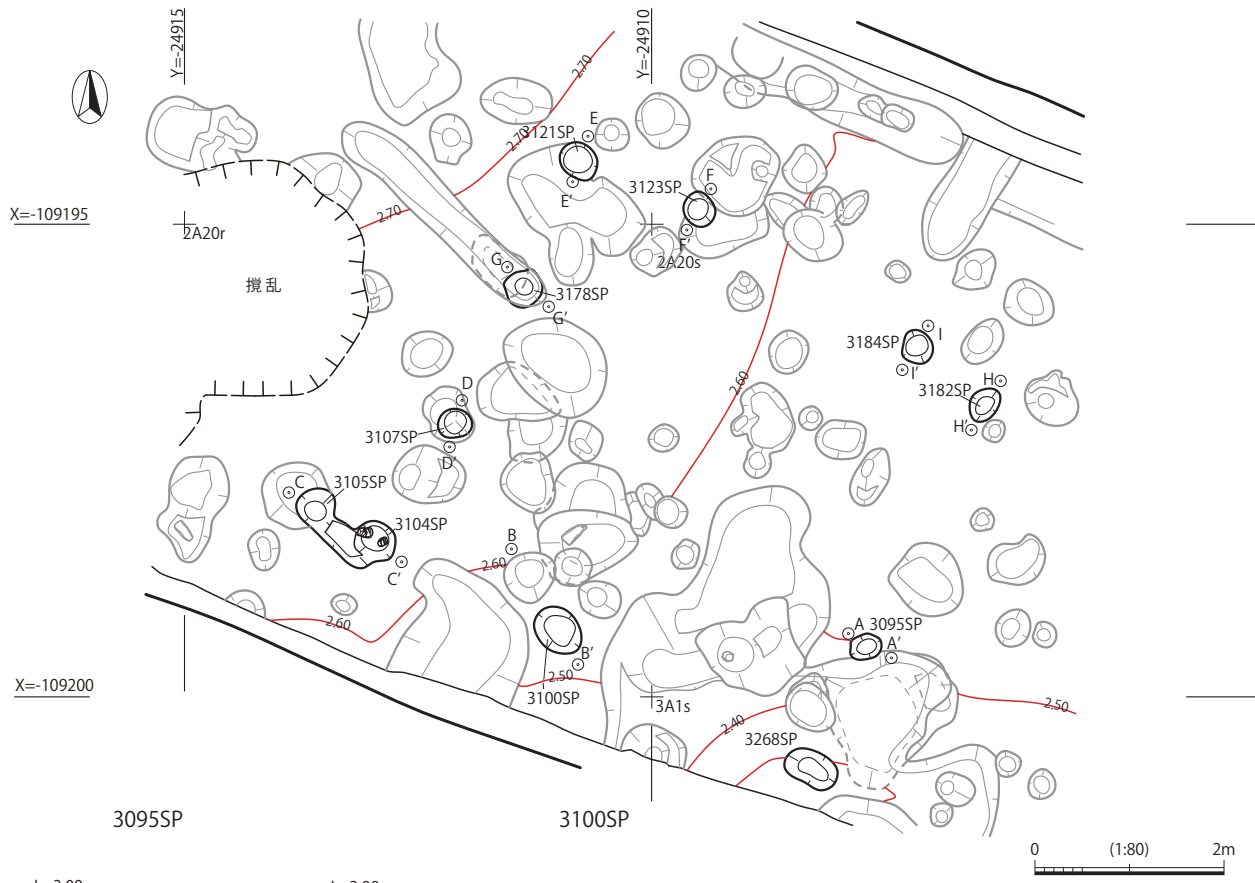
3 地点 2A20q.r グリッドに位置する。3 間以上 (桁行 5.5m) × 2 間以上 (梁行 2.3m) をはかる。主軸方向は N-37° -E である。調査区外に延びることから全容は不明である。柱穴は歪な楕円形と方形を呈す。規模は 0.37 ～ 1.00m、深さ 0.11 ～ 0.40m とバラツキが見られる。礎石と思われる扁平な石をもつ柱穴も見られる。歪な平面形状から重複関係も認められることから、複数回の建て替えがあったと思われる。出土遺物は山茶碗、土錘、銭貨 (100) などが見られる。



第 55 图 3 地点 掘立柱建物跡 005SB・006SB・007SB 平面图



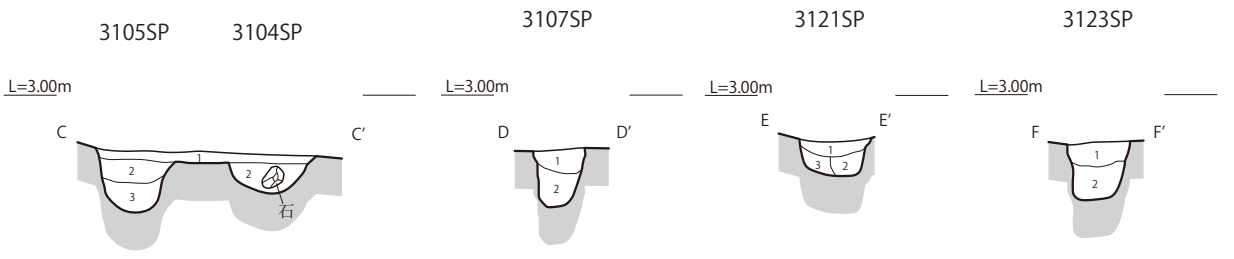
第 56 図 3 地点 掘立柱建物跡 005SB 平面・断面図



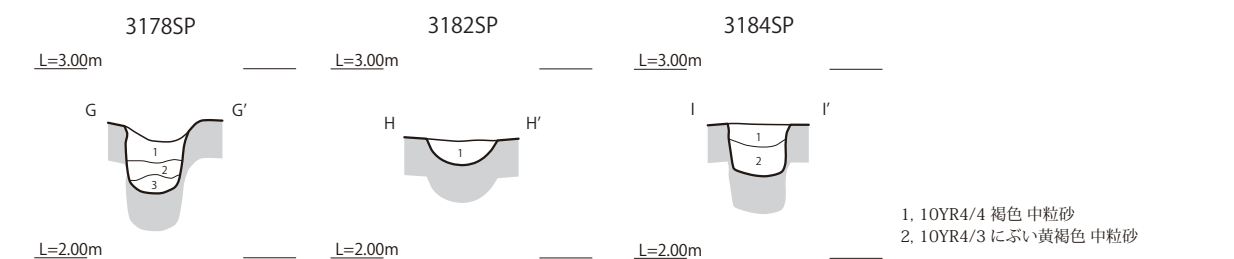
L=3.00m L=3.00m

L=2.00m L=2.00m

- 1. 10YR4/4 褐色 中粒砂
- 1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂

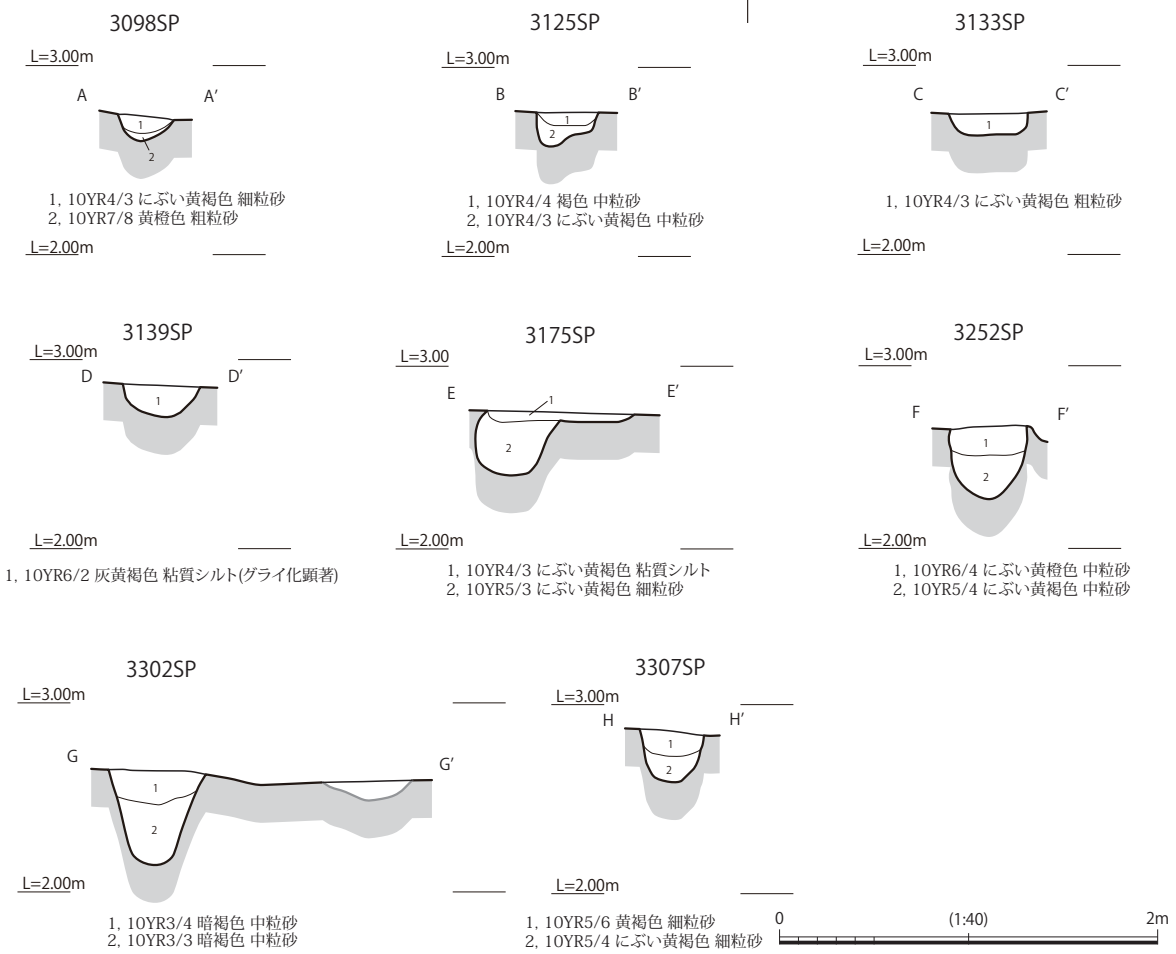
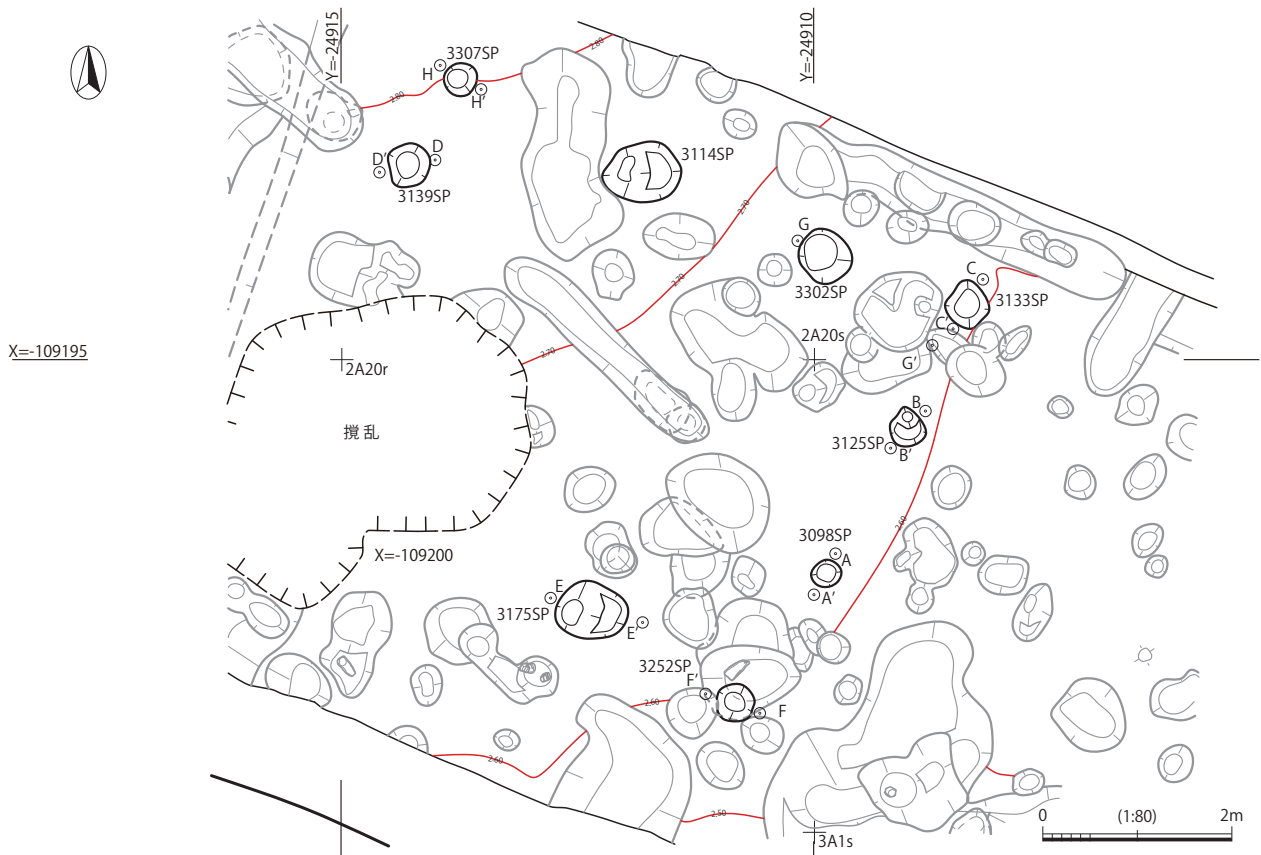


- 1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂
- 2. 10YR6/4 にぶい黄褐色 粗粒砂
- 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂
- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒砂 (しまりあり)
- 2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘質シルト
- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗粒砂
- 2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒砂
- 3. 10YR6/4 にぶい黄褐色 粗粒砂
- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂
- 2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗粒砂

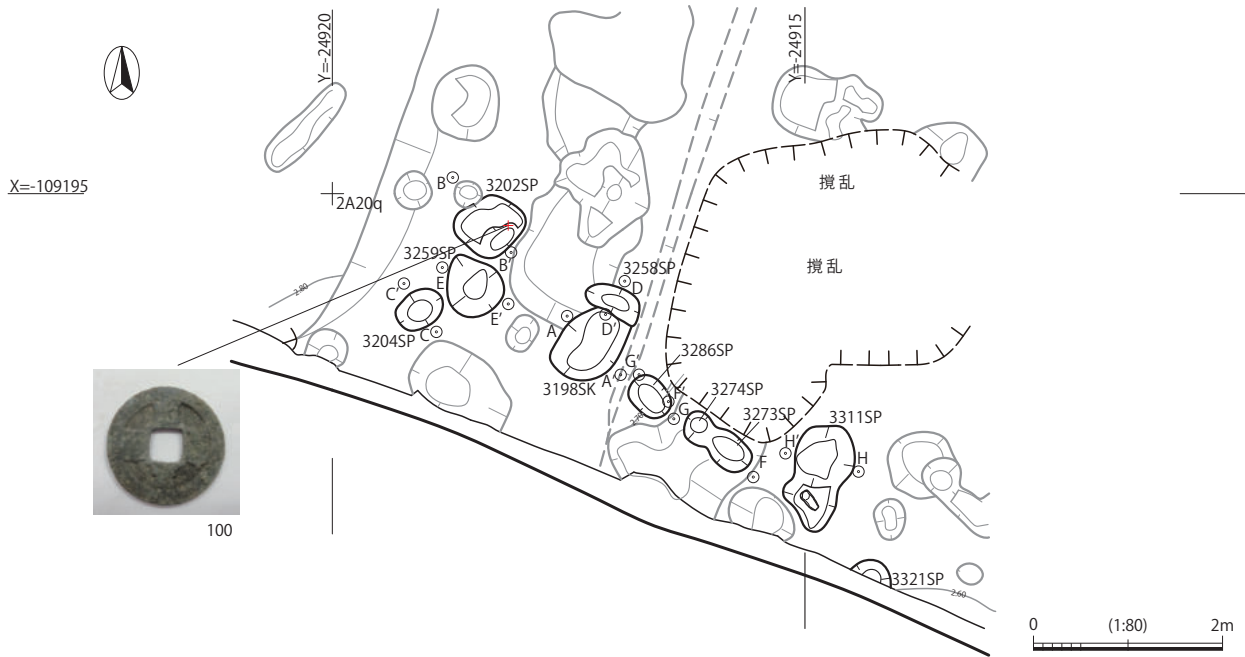


- 1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂
- 2. 10YR6/6 明黄褐色 中粒砂
- 3. 10YR8/4 浅黄褐色 粗粒砂
- 1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂
- 1. 10YR4/4 褐色 中粒砂
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂

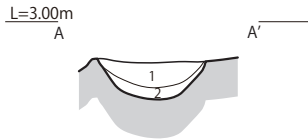
第 57 図 3 地点 掘立柱建物跡 006SB 平面・断面図



第 58 図 3 地点 掘立柱建物跡 007SB 平面・断面図

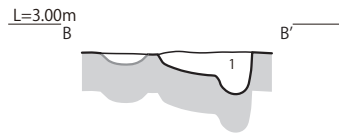


3198SK



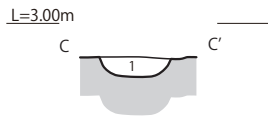
- L=2.00m
- 1, 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂
 - 2, 10YR5/6 黄褐色 粗粒砂

3202SP



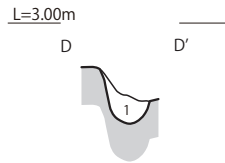
- L=2.00m
- 1, 10YR6/3 にぶい黄褐色 中粒砂

3204SP



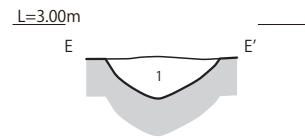
- L=2.00m
- 1, 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂

3258SP



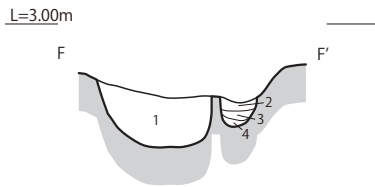
- L=2.00m
- 1, 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂

3259SP



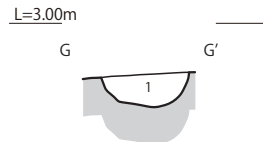
- L=2.00m
- 1, 10YR5/4 にぶい黄褐色 中粒砂

3273SP・3274SP



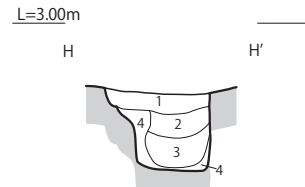
- L=2.00m
- 1, 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘質シルト (3273SP 埋土) (10YR7/4 にぶい黄褐色粘土50%斑状を含む)
 - 2, 10YR7/6 明黄褐色 細粒砂(3274SP 埋土)
 - 3, 10YR6/6 明黄褐色 中粒砂(3274SP 埋土)
 - 4, 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂(3274SP 埋土)

3286SP

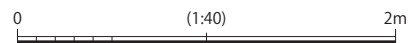


- L=2.00m
- 1, 10YR5/3 にぶい黄褐色 細粒砂

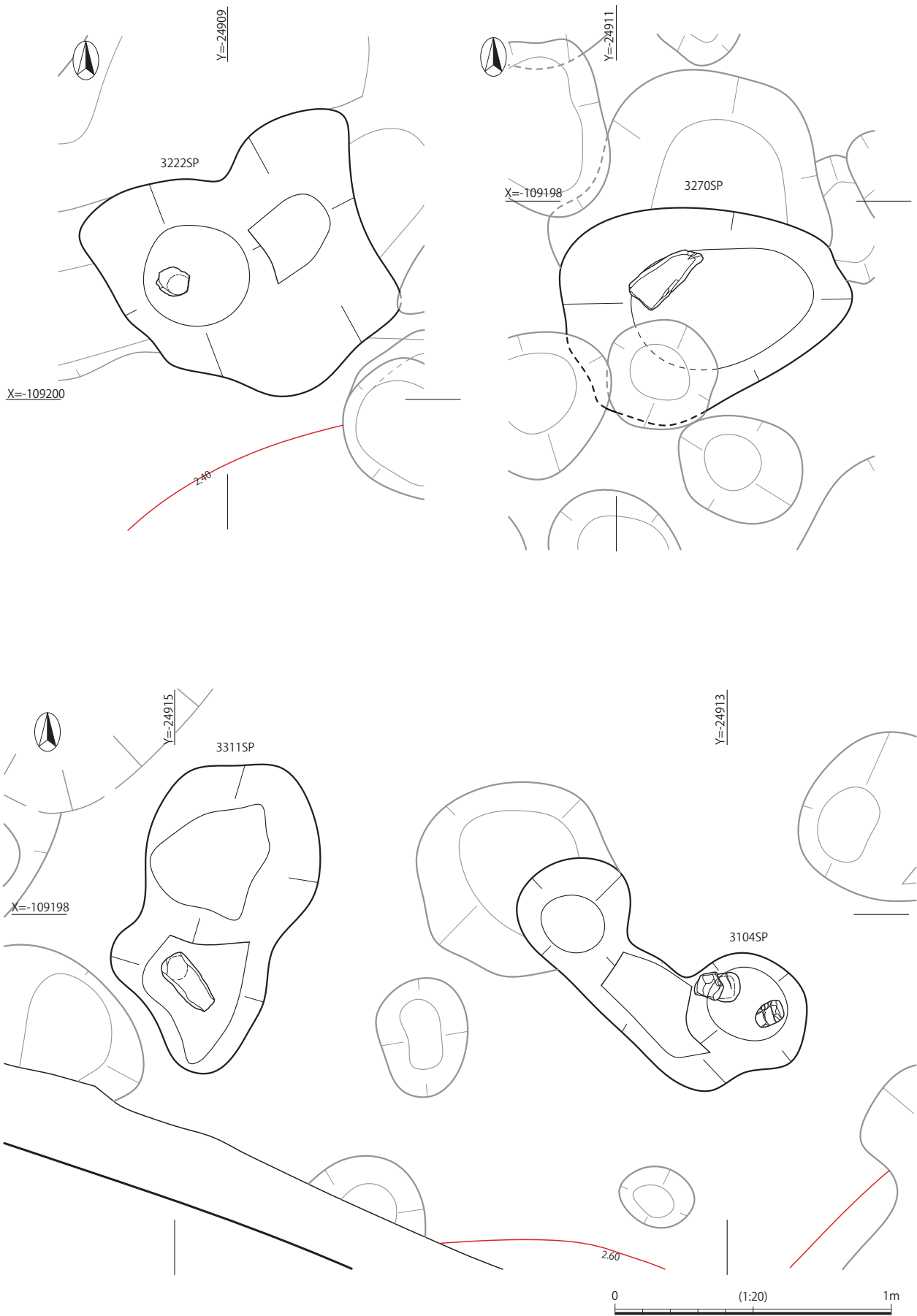
3311SP



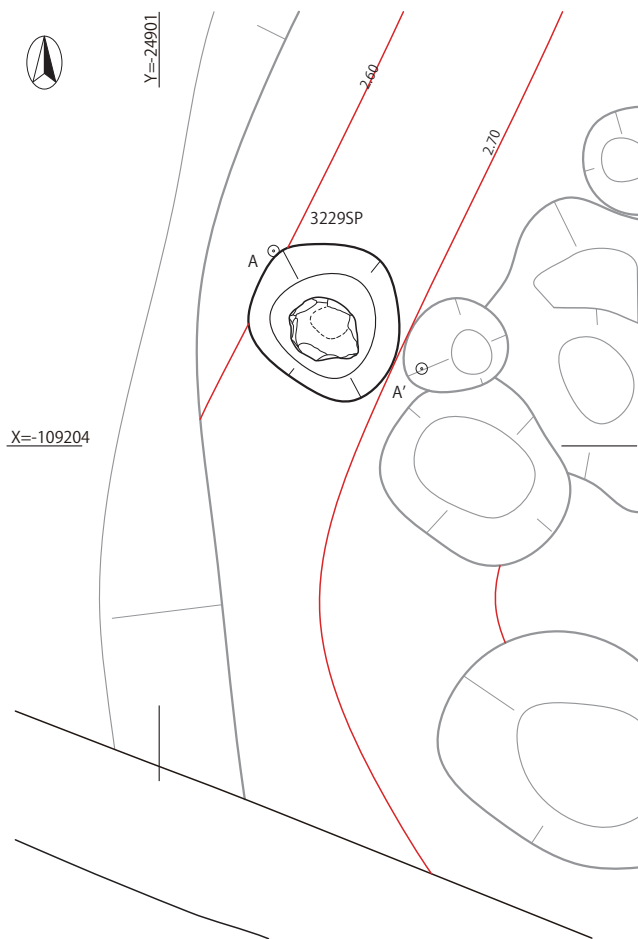
- L=2.00m
- 1, 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト
 - 2, 10YR6/4 にぶい黄褐色 砂質シルト
 - 3, 10YR7/6 明黄褐色 細粒砂
 - 4, 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂



第 59 図 3 地点 掘立柱建物跡 008SB 平面・断面図



第 60 图 3 地点 柱穴 3222SP · 3270SP · 3104SP · 3311SP 礎石 平面図



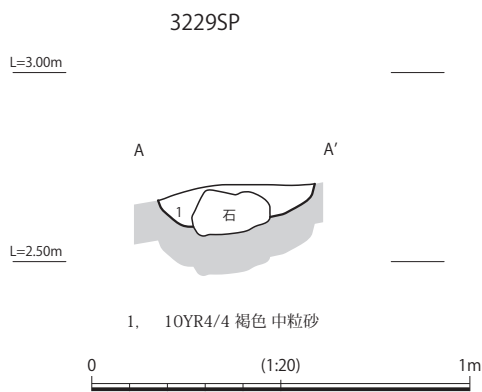
柱穴 3229SP(第 61 図 図版 7)

3 地点 3B1a グリッドに位置する。001SB に近接する。平面形状は楕円形を呈す。規模は 0.41m、深さ 0.09m をはかる。中央に礎石と思われる石を有し、石には柱を受けるためと思われる凹みが掘られている。

古代の遺構

溝状遺構 3251SD(第 42 図 図版 5)

3 地点 2A18・19n グリッドに位置する。大部分が調査区外に延びることと攪乱に壊されることから全容は不明であるが、幅 1.95m、深さ 0.85m をはかる。南北方向に延びる。3172 SD、3010SE に切られる。断面観察から埋土は地山と酷似していることから、人為的なものではなく自然流路の可能性も考えられる。出土遺物は土師器片などが見られる。時期については遺物からの判断は困難であることから明言はさけるが、埋土観察から古代の可能性を指摘したい。



第 61 図 3 地点 柱穴 3229SP 平面・断面図

第3節 2地点A区(畑間遺跡)の遺構

概要と基本層序

2地点A区(畑間遺跡)は遺跡が立地する第1砂堆の南側に位置する。調査区の大部分を近世以降の開発によって壊されていたが、中世の町割や古代(弥生時代後期の可能性もある)の遺構と弥生時代中期後半～中世・近世にかけての遺物を確認した。調査面積は269㎡である。

畑間遺跡と東畑遺跡の境界に立地し、平成29年度の畑間遺跡2地点、平成27年度の畑間遺跡8地点、平成24年度の畑間遺跡5地点の調査区に近接する。基本層序は以下のとおりである。

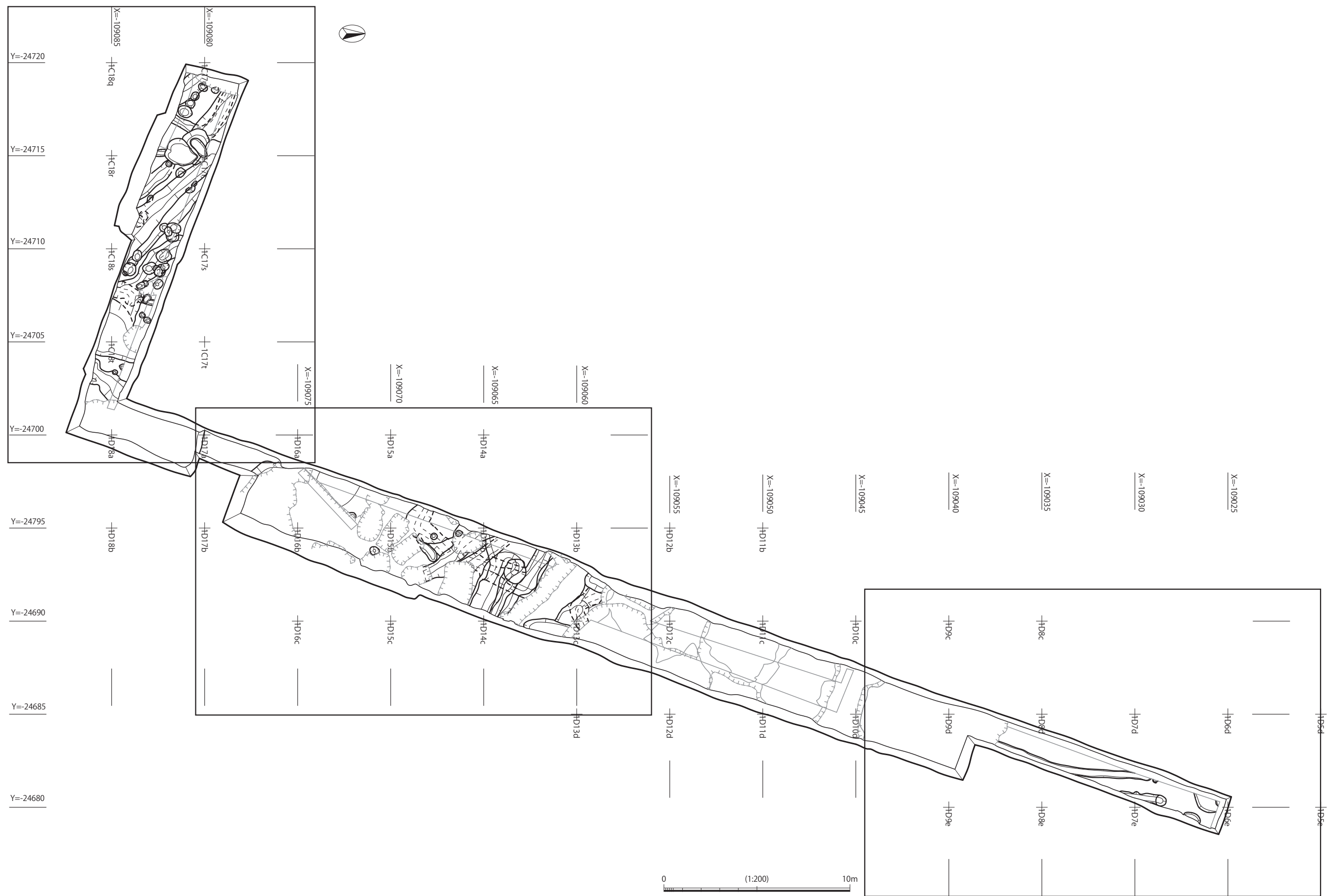
- I層：表土層 近現代の盛土である。
- II層：遺物包含層 10YR4/4 褐色中粒砂を主体とする。近世から中世の遺物を包含する。
- III層：基盤層 地山である 10YR7/4 にぶい黄橙色細粒砂に由来する。

2地点A区は大部分が近世以降の開発によって壊されており、遺構の残存状況は不良であったが、古代から中世・近世にかけての遺構を確認した。近世遺構の内訳は溝状遺構2条(2235SD・2236SD)の他土坑とピットを確認した。中世遺構の内訳は井戸1基(2203SE)、区画溝10条(2221SD・2233SD・2231SD・2206SD・2214SD・2215SD・2285SD・2212SD・2291SD・2287SD)、溝状遺構3条(2202SD・2222SD・2210SD)、掘立柱建物跡1棟(SB001)の他、土坑及びピットを多数確認した。古代遺構の内訳は不明遺構1基(2204SX)、竪穴状遺構1基(2290SI)、溝状遺構3条(2245SD・2246SD・2305SD)を確認した。

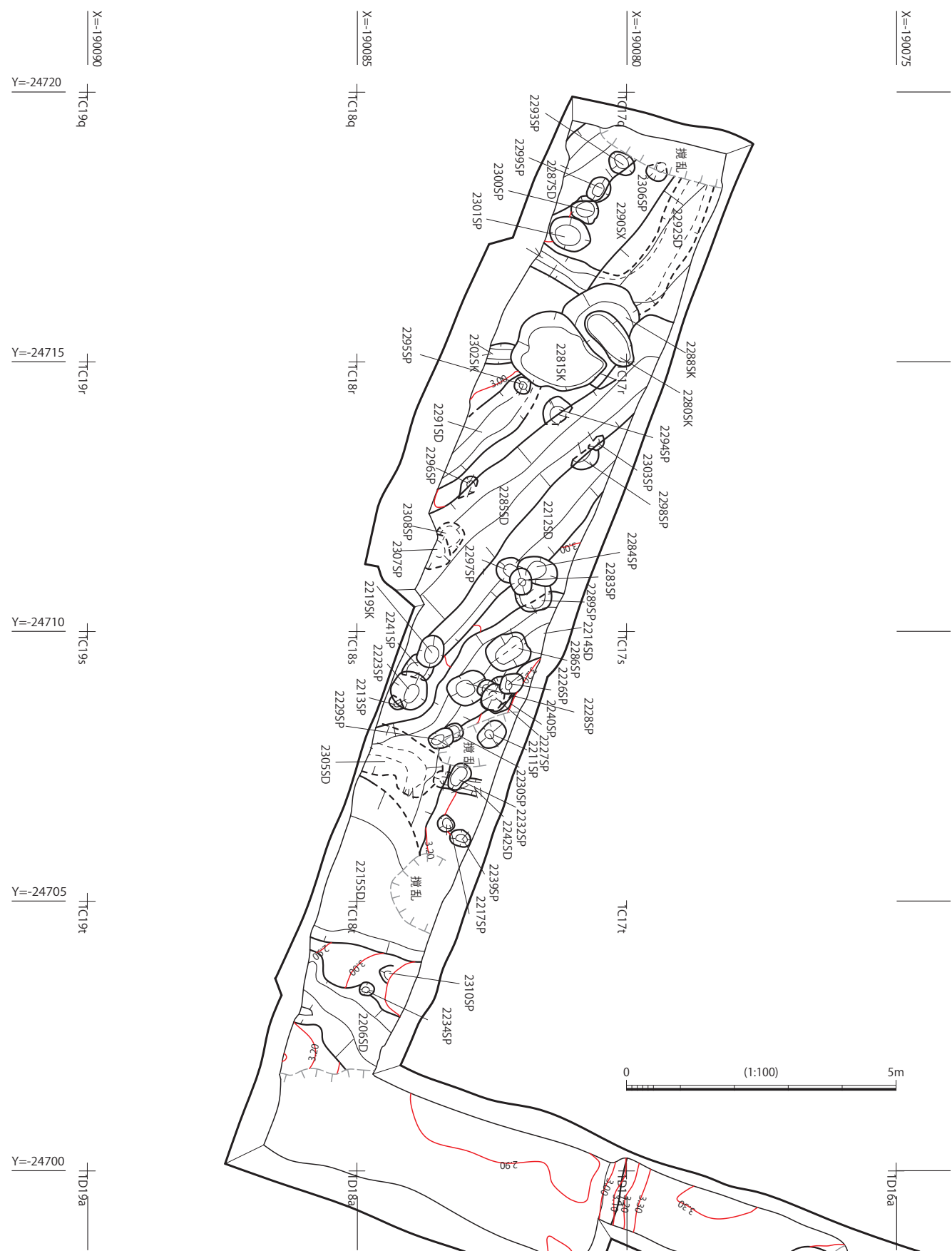
2地点A区の大きな特徴として近世以降の大規模な開発の痕跡を確認したことと複数期にわたる区画溝を確認したこと、弥生時代後期の可能性があるL字状の溝状遺構などがあげられる。近世の開発は中世の遺構面を大きく削られており、10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂を主体とした土で造成をしている。調査時において地山との判別が難しく、遺構面の把握に手間取った。区画溝は少なくとも2期の重複関係を確認した。このことは調査区の断面観察からも大きく2時期の生活面とそこから掘り込まれる遺構を確認していることから、経年堆積による地盤の上昇や居住環境の変化への対応を示唆していると考えられる。また、掘立柱建物の軸線が区画溝と対応しない傾向が見られたことから、屋敷地の利用に異なる基準があった可能性が考えられる。

遺物は主に13～17世紀の遺物が主体を占める。山茶碗、瀬戸美濃系陶器、常滑産陶器、土師器伊勢鍋、羽釜、内耳鍋、焙烙、土師器皿、青磁などの日用品や、土錘など生業に関わる遺物が見られる。その他、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物がわずかに見られる。ほとんどは破片で全容は不明であるが、条痕文や櫛描文、須恵器や石器などが見られる。

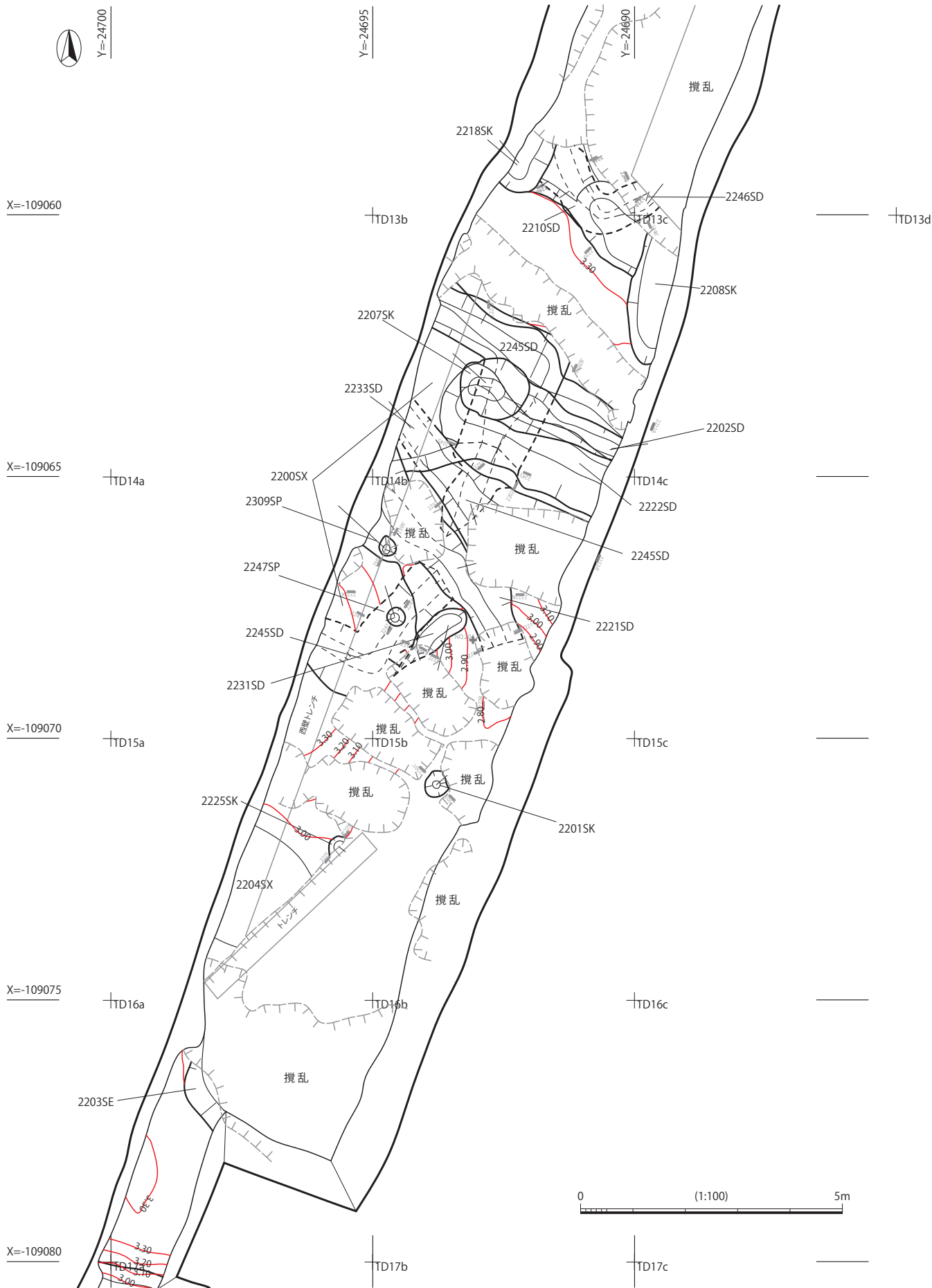
遺物の出土傾向としては包含層から残存状態が良好な個体が多く見られた。遺構からは破片での出土が多く、全容の把握に時間を要したが、土師器羽釜、内耳鍋、焙烙や施釉陶器の傾向



第 62 图 2 地点 A 区 遺構平面図



第63图 2地点A区 遺構平面図1



第 64 図 2 地点 A 区 遺構平面図 2



Y=-24690

Y=-24685

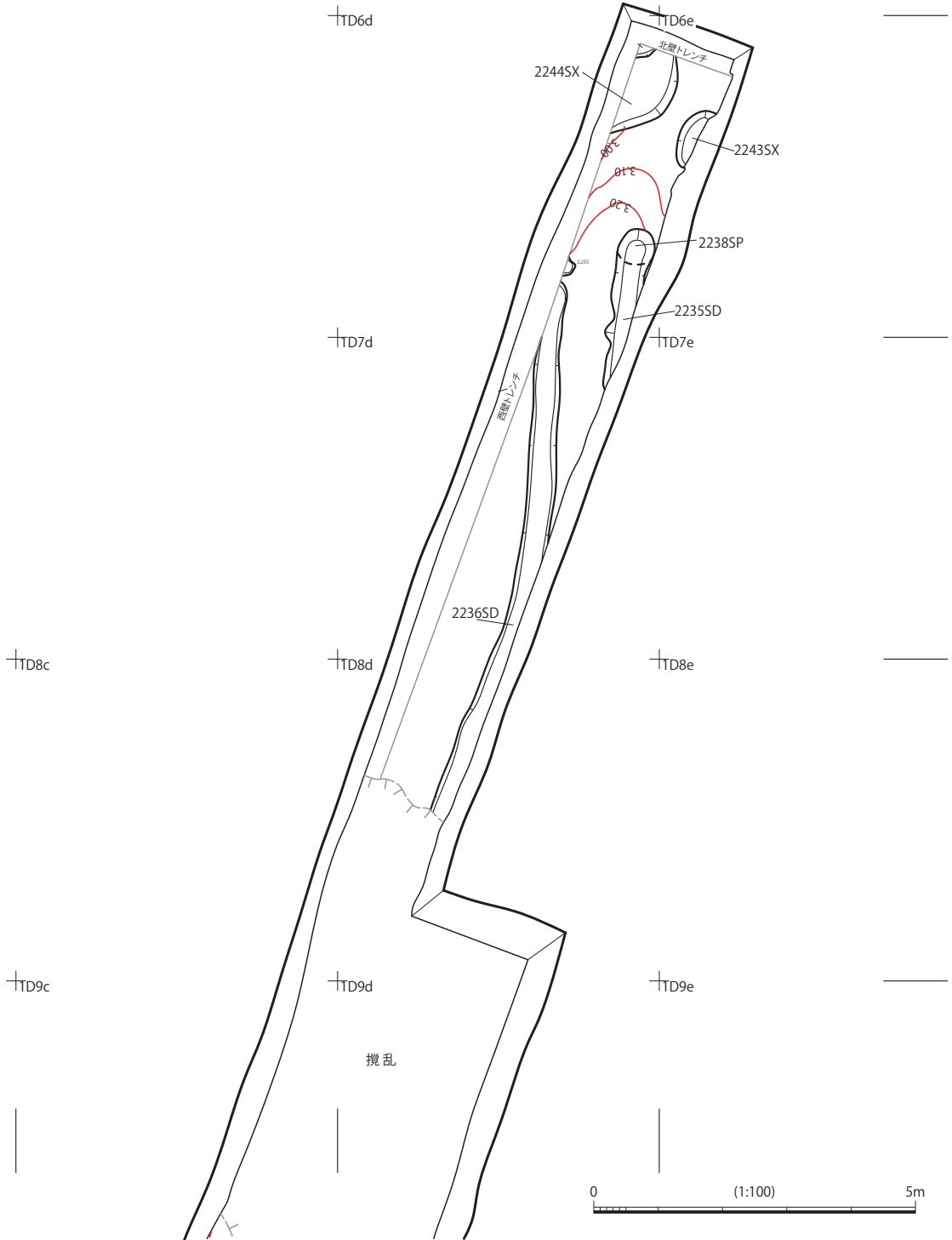
Y=-24680

X=-109025

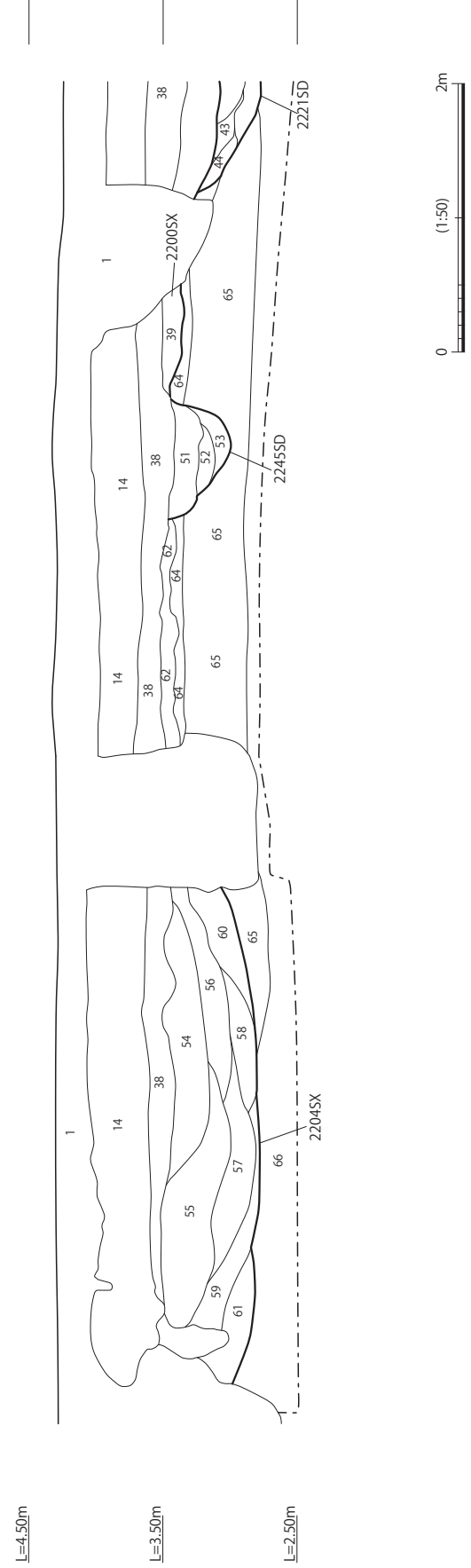
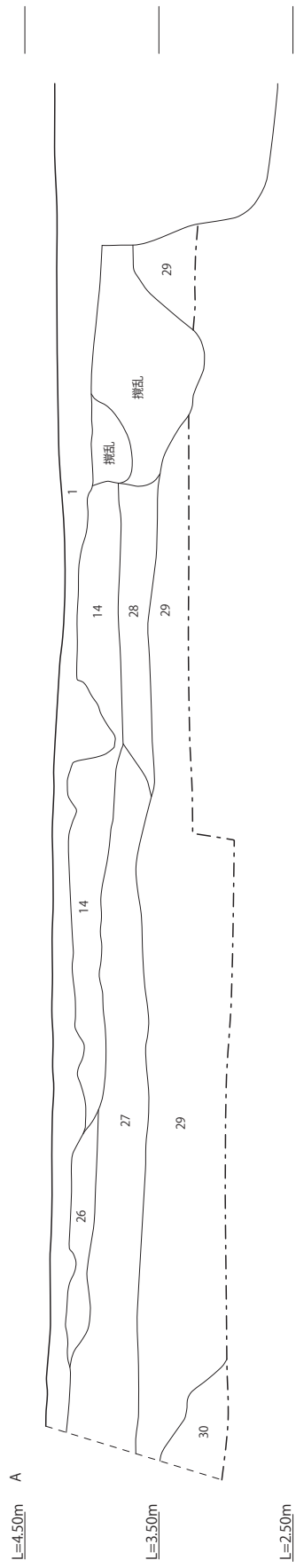
X=-109030

X=-109035

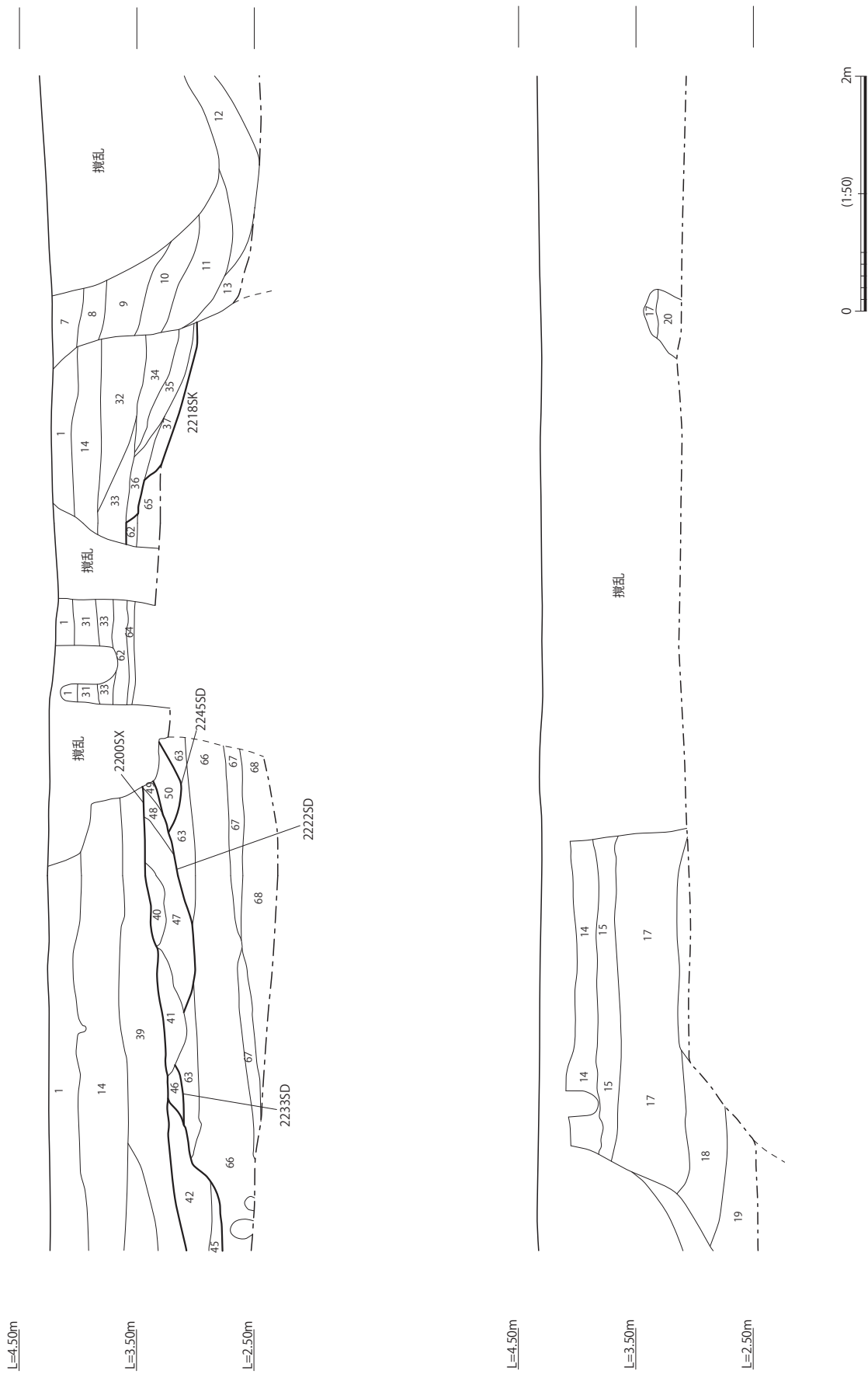
X=-109040



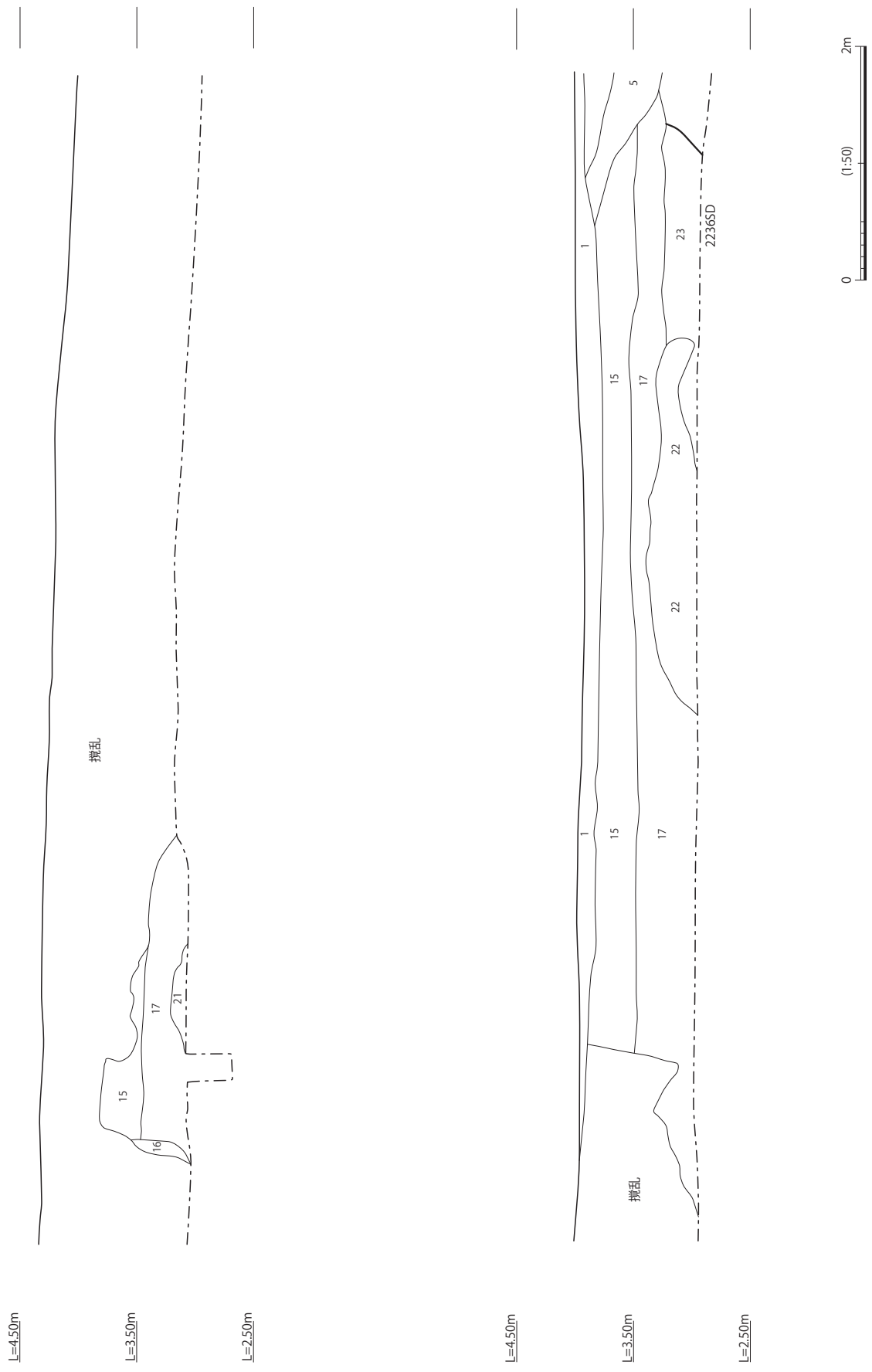
第 65 図 2 地点 A 区 遺構平面図 3



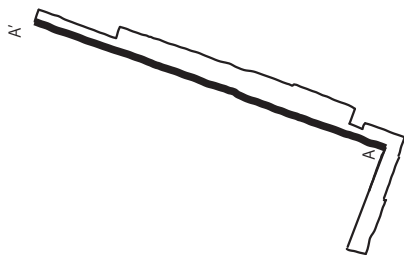
第66图 2地点A区 西壁土层断面图1



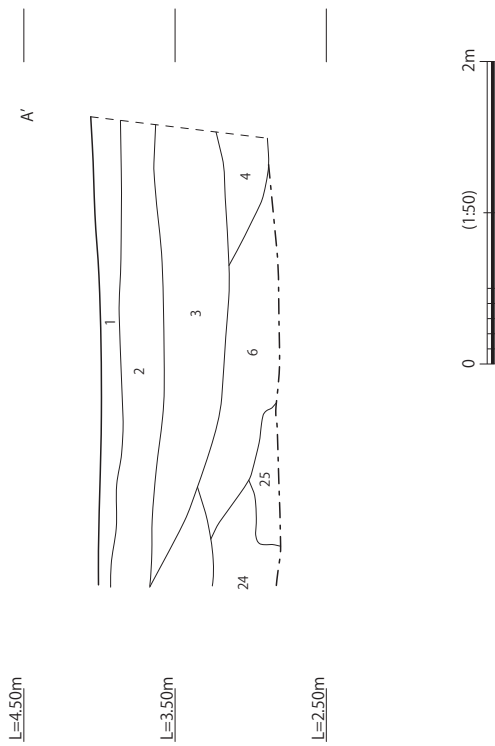
第 67 图 2 地点 A 区 西壁土层断面图 2



第 68 图 2 地点 A 区 西壁土层断面图 3

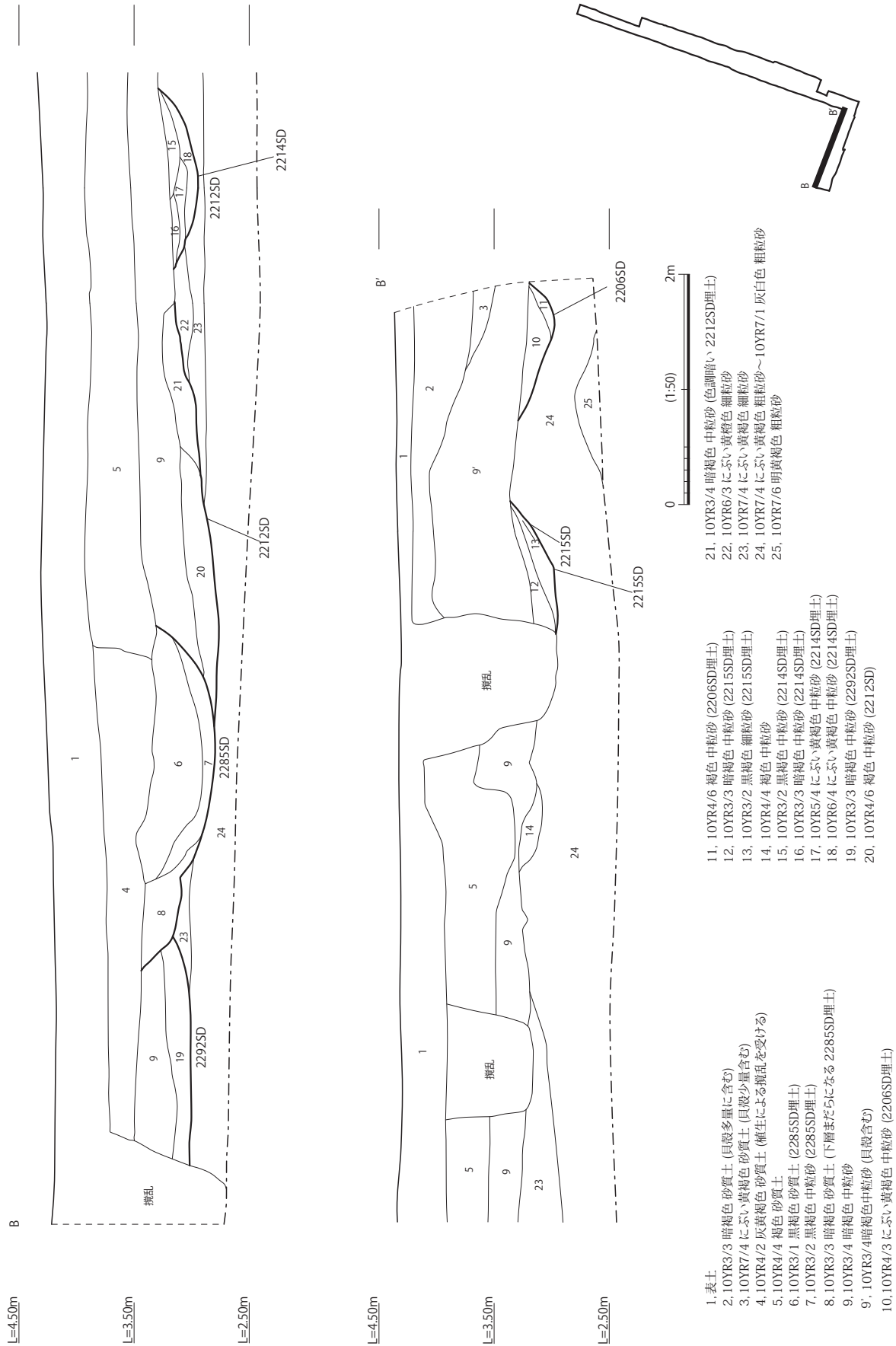


- 21. 10YR5/2 褐灰色砂質土
- 22. 10YR3/2 黒褐色中粒砂
- 23. 10YR5/3 にぶい、黄褐色粗粒砂 (2236SD)
- 24. 10YR4/3 にぶい、黄褐色中粒砂
- 25. 10YR3/2 黒褐色中粒砂
- 26. 10YR4/3 にぶい、黄褐色砂質土
- 27. 10YR3/3 暗褐色砂質土 (貝殻多量を含む)
- 28. 10YR3/4 暗褐色砂質土
- 29. 10YR7/4 にぶい、黄褐色砂質土 (貝殻少量含む)
- 30. 10YR3/4 暗褐色中粒砂 (貝殻含む)
- 31. 10YR4/6 褐色細粒砂 (貝殻多量を含む)
- 32. 10YR3/2 黒褐色細粒砂 (貝殻多量を含む)
- 33. 10YR4/3 にぶい、黄褐色細粒砂 (2218SK)
- 34. 10YR3/3 暗褐色中粒砂 (2218SK)
- 35. 10YR4/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (2218SK)
- 36. 10YR5/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (2218SK)
- 37. 10YR6/4 にぶい、黄褐色中粒砂 (2218SK)
- 38. 10YR4/4 褐色中粒砂 (中世包含層)
- 39. 10YR3/2 黒褐色中粒砂 (2200SX埋土)
- 40. 10YR4/6 褐色中粒砂
- 41. 10YR4/6 褐色中粒砂
- 42. 10YR4/4 褐色中粒砂 (2221SD)
- 43. 10YR4/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (2221SD)
- 44. 10YR6/4 にぶい、黄褐色中粒砂 (色調明るい、2221SD)
- 45. 10YR6/4 にぶい、黄褐色中粒砂 (色調暗い、2221SD)
- 46. 10YR4/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (2233SD)
- 47. 10YR6/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (色調暗い、2222SD)
- 48. 10YR6/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (2222SD)
- 49. 10YR6/4 にぶい、黄褐色中粒砂 (2222SD)
- 50. 10YR6/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (色調明るい、2245SD)
- 51. 10YR3/3 暗褐色中粒砂 (2245SD)
- 52. 10YR3/4 暗褐色中粒砂 (2245SD)
- 53. 10YR6/3 にぶい、黄褐色細粒砂 (2245SD)
- 54. 10YR3/1 黒褐色中粒砂 (2204SX)
- 55. 10YR3/2 黒褐色中粒砂 (2204SX)
- 56. 10YR3/3 暗褐色中粒砂 (2204SX)
- 57. 10YR3/4 暗褐色中粒砂 (2204SX)
- 58. 10YR6/4 にぶい、黄褐色中粒砂 (2204SX)
- 59. 10YR6/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (2204SX)
- 60. 10YR7/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (2204SX)
- 61. 10YR6/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (色調明るい、2204SX)
- 62. 10YR4/3 にぶい、黄褐色細粒砂
- 63. 10YR6/4 にぶい、黄褐色粗粒砂 (2233SD)
- 64. 10YR7/4 にぶい、黄褐色細粒砂 (色調暗い)
- 65. 10YR7/4 にぶい、黄褐色細粒砂
- 66. 10YR7/4 にぶい、黄褐色細粒砂～10YR7/1 灰白色粗粒砂
- 67. 10YR6/1 褐灰色粗粒砂 (粘土塊混じる)
- 68. 10YR7/4 にぶい、黄褐色砂質シルト (黄色強い)

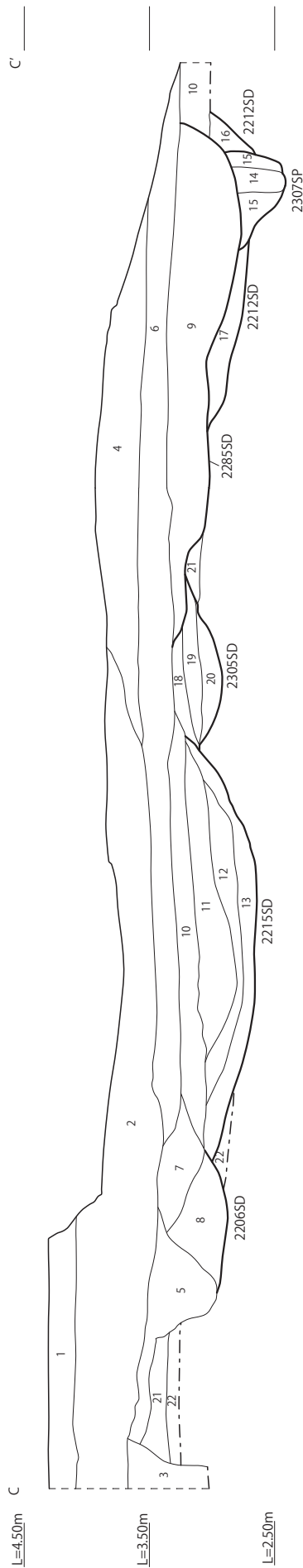


- 1. 表土
- 2. 10YR4/4 褐色砂質土 (近世以降の掘り込み)
- 3. 10YR4/6 褐色砂質土 (近世以降の掘り込み)
- 4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (近世以降の掘り込み)
- 5. 10YR4/1 褐灰色砂質土 (近世以降の掘り込み)
- 6. 10YR4/3 にぶい、黄褐色砂質土 (近世以降の掘り込み)
- 7. 10YR6/1 褐灰色砂質土 (近世以降の掘り込み)
- 8. 10YR4/4 褐色砂質土
- 9. 10YR5/3 にぶい、黄褐色砂質土
- 10. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
- 11. 10YR3/2 黒褐色砂質土
- 12. 10YR3/3 暗褐色砂質土
- 13. 10YR3/1 黒褐色砂質土 (貝殻混じる)
- 14. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
- 15. 10YR4/4 褐色砂質土
- 16. 10YR7/4 にぶい、黄褐色粗粒砂
- 17. 10YR4/3 にぶい、黄褐色砂質土 (他山ブロック多く含む)
- 18. 10YR4/3 にぶい、黄褐色粗粒砂
- 19. 10YR3/2 黒褐色砂質土
- 20. 10YR3/2 黒褐色砂質土

第 69 図 2 地点 A 区 西壁土層断面図 4



第70図 2地点A区 北壁土層断面図



- 1. 表土
- 2. 10YR3/4 暗褐色 砂質土 (貝殻片多量含む)
- 3. 10YR7/4 にぶい、黄褐色 粗砂質土 (貝殻片多量を含む 近世カクラン)
- 4. 10YR3/4 暗褐色 砂質土
- 5. 10YR3/3 暗褐色 砂質土 (貝殻片多量含む)
- 6. 10YR4/4 褐色 砂質土 (中世包含層)
- 7. 10YR4/4 褐色 中粒砂
- 8. 10YR4/6 褐色 中粒砂 (貝殻片少量混じる 2206SD埋土)
- 9. 10YR3/1 黒褐色 砂質土 (2285SD埋土)
- 10. 10YR4/6 褐色 中粒砂 (φ 0.5mmの粒混じる)
- 11. 10YR3/4 暗褐色 中粒砂 (貝殻片少量混じる 2215SD埋土)
- 12. 10YR3/2 黒褐色 中粒砂 (貝殻片少量混じる 2215SD埋土)
- 13. 10YR3/2 黒褐色 中粒砂 (2215SD埋土)
- 14. 10YR4/4 褐色 粗粒砂 (柱状 2307SP埋土)
- 15. 10YR4/4 褐色 砂質土 (2307SP埋土)
- 16. 10YR5/4 にぶい、黄褐色 中粒砂 (φ 1.0mm~3.0mmの粒混じる 2212SD埋土)
- 17. 10YR4/6 褐色 中粒砂 (2212SD埋土)
- 18. 10YR3/4 暗褐色 中粒砂
- 19. 10YR5/3 にぶい、黄褐色 粗粒砂 (2305SD埋土)
- 20. 10YR6/4 にぶい、黄褐色 粗粒砂 (2305SD埋土)
- 21. 10YR6/3 にぶい、黄褐色 粗粒砂 (生活面)
- 22. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (他山)

第 71 図 2 地点 A 区 南壁土層断面図

から前述の時代に収まると判断した。山茶碗については東濃型と尾張型の2系統を確認した。藤澤編年によるところの6～10型式のものが見られる。瀬戸美濃系陶器については、天目茶碗、丸碗、折縁大皿、縁釉はさみ皿などが見られる。天目茶碗は鉄釉のものがほとんどを占める。古瀬戸後期～大窯期のものが主体を占める。常滑産陶器については、甕、壺、播鉢が見られる。土師器煮沸具は伊勢鍋、羽釜、内耳鍋、焙烙が見られる。羽釜の比率がやや高い傾向が見られる。土師器皿はロクロ土師皿と非ロクロ土師皿が見られ、ロクロ土師皿の比率が優位を占める。

近世の遺構

溝状遺構 2235SD(第72図 図版8)

2地点A区1D6d・7dグリッドに位置する。幅0.47m、深さ0.28mをはかる。南北方向に延び、南側は調査区外に延びる。後述する2236SDと平行する。近世造成土上に立地する。出土遺物は土師器片や陶器、山茶碗片が見られる。

溝状遺構 2236SD(第72図 図版8)

2地点A区1D6d～8dグリッドに位置する。幅0.44m、深さ0.11mをはかる。南北方向に延び、南側は攪乱によって壊される。調査区外に延びる。後述する2236SDと平行する。近世造成土上に立地する。出土遺物は土師器片や陶器、山茶碗、弥生土器条痕文片が見られる。

中世の遺構

井戸 2203SE(第64図)

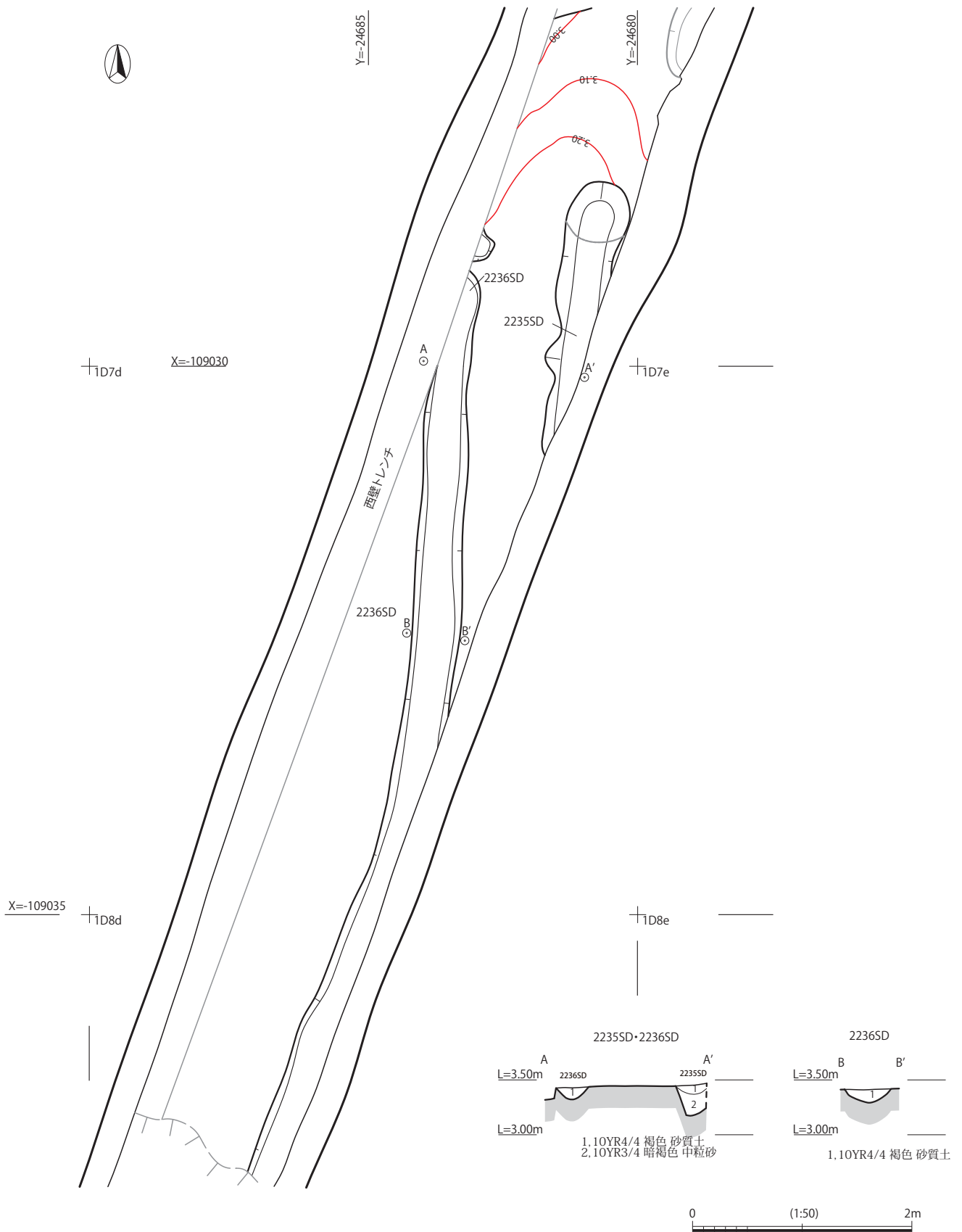
2地点A区1D16aグリッドに位置する。大部分を攪乱により壊されていることから、全容は不明であるが、残存長径1.37m、深さ0.56m以上をはかる。出土遺物は陶器片、尾張型山茶碗などが見られる。

包含層 2200SX(第73・74図 図版8)

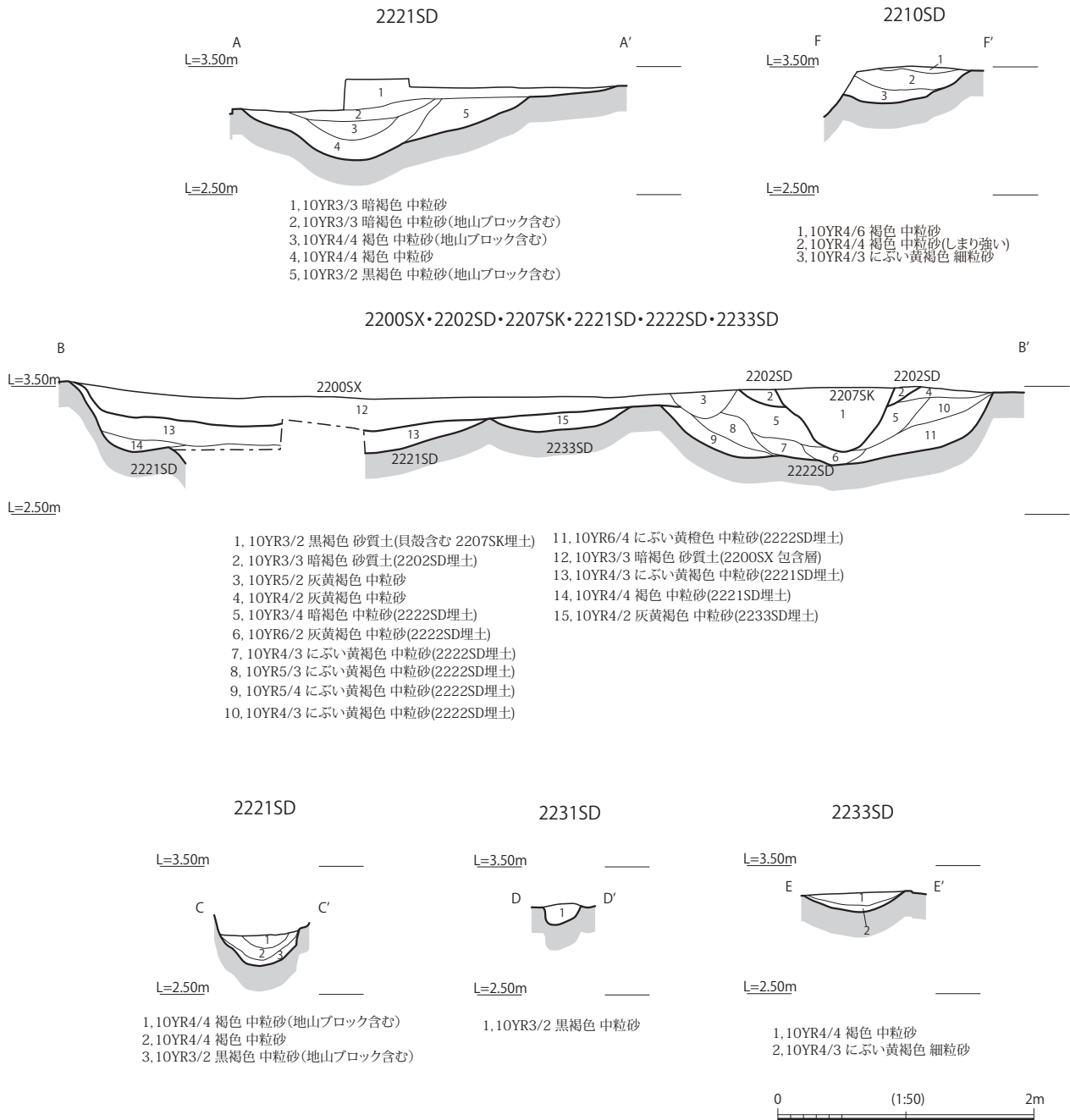
2地点A区1D14a～1D13・14bグリッドに位置する。調査時に遺構検出面上に堆積していた10YR3/3 暗褐色中粒砂を主体とした包含層である。当初は近世造成土を地山と把握していたので、L字状を呈す大溝と考えていたが、攪乱断面からの土層観察や近世造成土によって攪乱を受けていることが調査の進捗によって判明したので、包含層と判断した。掘削を進めた結果、区画溝2221SD・2233SD・2231SDと不明遺構2204SX及び溝状遺構2245SDを確認した。出土遺物は土師器、陶器、山茶碗(東濃型、尾張型)、瓦、土錘(114～123)、弥生土器や加工痕が見られる鹿角などが見られる。

区画溝 2221SD(第73・74図 図版8)

2地点A区1D13・14bグリッドに位置する。幅0.79m、深さ0.37mをはかる。東西方向に延びる。東西側は調査区外に延びることと攪乱によって壊されているため全容は不明である。2233SDと平行する。出土遺物は土師器羽釜、陶器、山茶碗(東濃型、尾張型)、土錘、弥生土器などが見られる。



第72図 2地点A区 溝状遺構 2235・2236SD 平面・断面図



第74図 2地点A区 包含層2200SX・区画溝2221・2231・2233SD・溝状遺構2210SD 断面図
 区画溝2233SD(第73・74図 図版8)

2地点A区 1D13・14bグリッドに位置する。幅0.88m、深さ0.15mをはかる。東西方向に延びる。東西側は調査区外に延びることと攪乱によって壊されているため全容は不明である。2221SDと平行するが、2221SDと比較して深度が浅いことから、後発する遺構の可能性が考えられる。出土遺物は土師器、陶器、弥生土器などが見られる。

区画溝2231SD(第73・74図 図版8)

2地点A区 1D14bグリッドに位置する。幅0.49m、深さ0.22mをはかる。南北方向に延びるが、南側を攪乱によって壊されている。2221SDに直交するように掘られている。残存状

況から途中で途切れている様子が見られることから、区画を分割する溝の可能性が考えられる。出土遺物は土師器、陶器、土錘、弥生土器などが見られる。

区画溝 2285・2212SD(第 75 図 図版 9)

2 地点 A 区 1C16・17 r・1C17s グリッドに位置する。2285SD が幅 0.99m、深さ 0.50m、2212SD が推定幅 0.89m、深さ 0.25m をはかる。東西方向に延びる。2212SD が先行し、その後、ほぼ同じ場所に 2285SD が掘られている。2285SD の北側では屈曲する様子が見られることや 2212SD がさらに西側に延びる様子を確認できなかったことから、屈曲部は区画の南西隅に該当すると考えられる。また、重複関係と立地から区画地は長期間維持されていたと考えられる。出土遺物は 2285SD から土師器鍋 (52) や皿、山茶碗 (東濃型、尾張型)、常滑甕片、土錘のほか、弥生土器、2212SD からは土師器や弥生土器が見られる。遺物から 14～15 世紀と思われる。

区画溝 2291SD(第 75 図 図版 9)

2 地点 A 区 1C17 r グリッドに位置する。幅 1.01m、深さ 0.10m をはかる。東西方向に延びるが、西側を 2280SK に切られている。溝が唐突に途切れるような様子が見られるが、調査を進めた結果、2290SI を切る溝状の落ち込みの南側肩部の方向がそろふことから、さらに西側へ延びる可能性が考えられる。2285SD・2212SD に平行する。2285・2212SD との時期的関係については遺構検出時に 2285SD が 2212SD と 2291SD の上層堆積土を切っている状況を確認したことから、2291SD は 2285SD に後発すると判断した。出土遺物は常滑産陶器片が見られるが、全容は不明である。

区画溝 2287SD(第 63 図)

2 地点 A 区 1C16q.17q グリッドに位置する。幅 0.91m、壁面観察から深さ 0.45m をはかる。東西方向に延びるが、西側を攪乱に切られ、東側は調査区外に延びることから全容は不明である。2290SI を切る。出土遺物は瀬戸美濃系陶器や尾張型山茶碗、北村 A6 類に比定される土師器伊勢鍋の破片が見られる。遺物から 14～15 世紀と思われる。

区画溝 2214SD(第 76 図 図版 9)

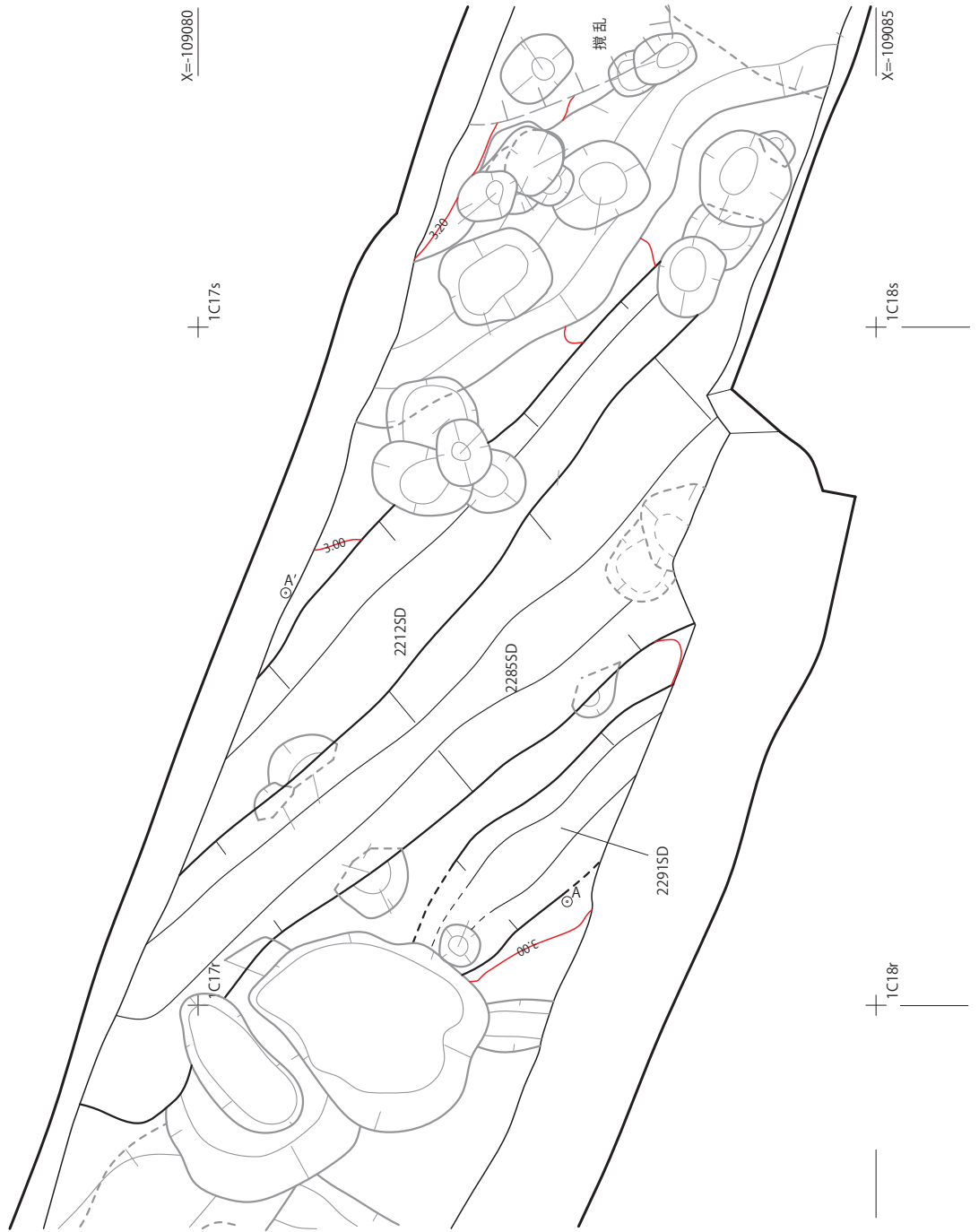
2 地点 A 区 1C17 r・1C17s グリッドに位置する。幅 0.97m、深さ 0.14m をはかる。東西方向にやや蛇行ぎみに延びて、2215SD と合流する。2285・2212SD に切られることから、中世でも古い時期の区画溝と考えられる。出土遺物は土師器、山茶碗 (50)(東濃型、尾張型)、瀬戸美濃系陶器折縁皿、常滑産陶器のほか弥生土器が見られる。

区画溝 2215SD(第 76 図 図版 9)

2 地点 A 区 1C17s・17 t～1C18s・18 t グリッドに位置する。幅 2.13m、深さ 0.41m をはかる。南北方向に延びる。南北側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、規模は大きく、他の区画溝とは様相が異なる。また、平面形状が乱れていることから、掘り直し等による改変の結果、幅が大きくなった可能性も考えられるものの、断面観察からはそのような痕跡は見つけられなかった。出土遺物は土師器羽釜 (51)、非ロクロ皿、山茶碗 (東濃型、尾張型)、瀬戸美濃系陶器 (鉄釉、灰釉)、常滑産陶器のほか弥生土器が見られる。北村 A3 類の羽釜が見られることから 14～15 世紀と思われる。

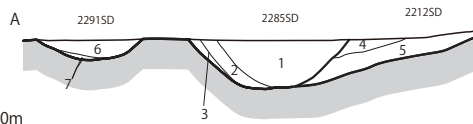
Y=-24710

Y=-24715



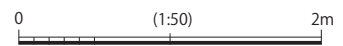
2212SD・2285SD・2291SD

L=3.50m

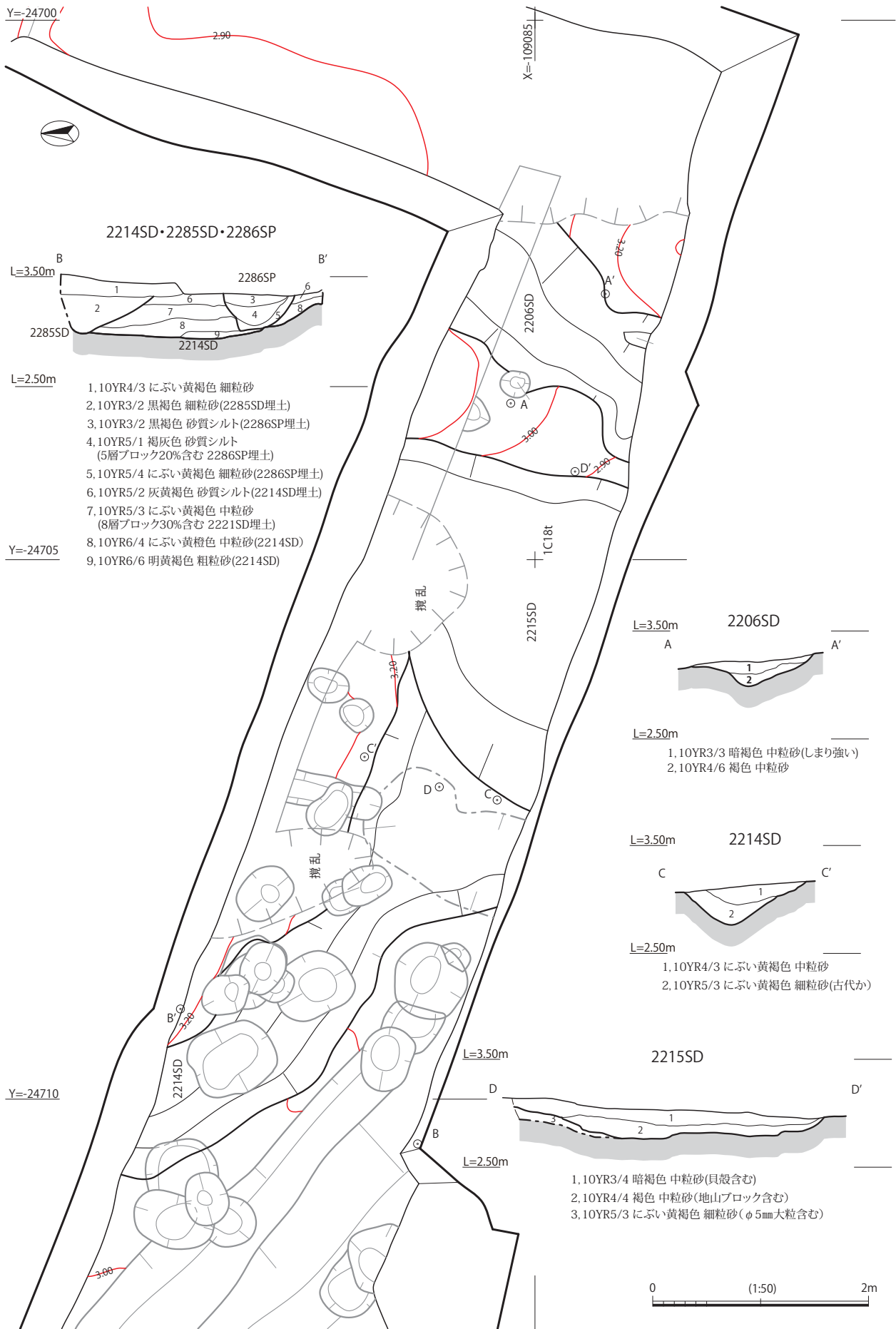


L=2.50m

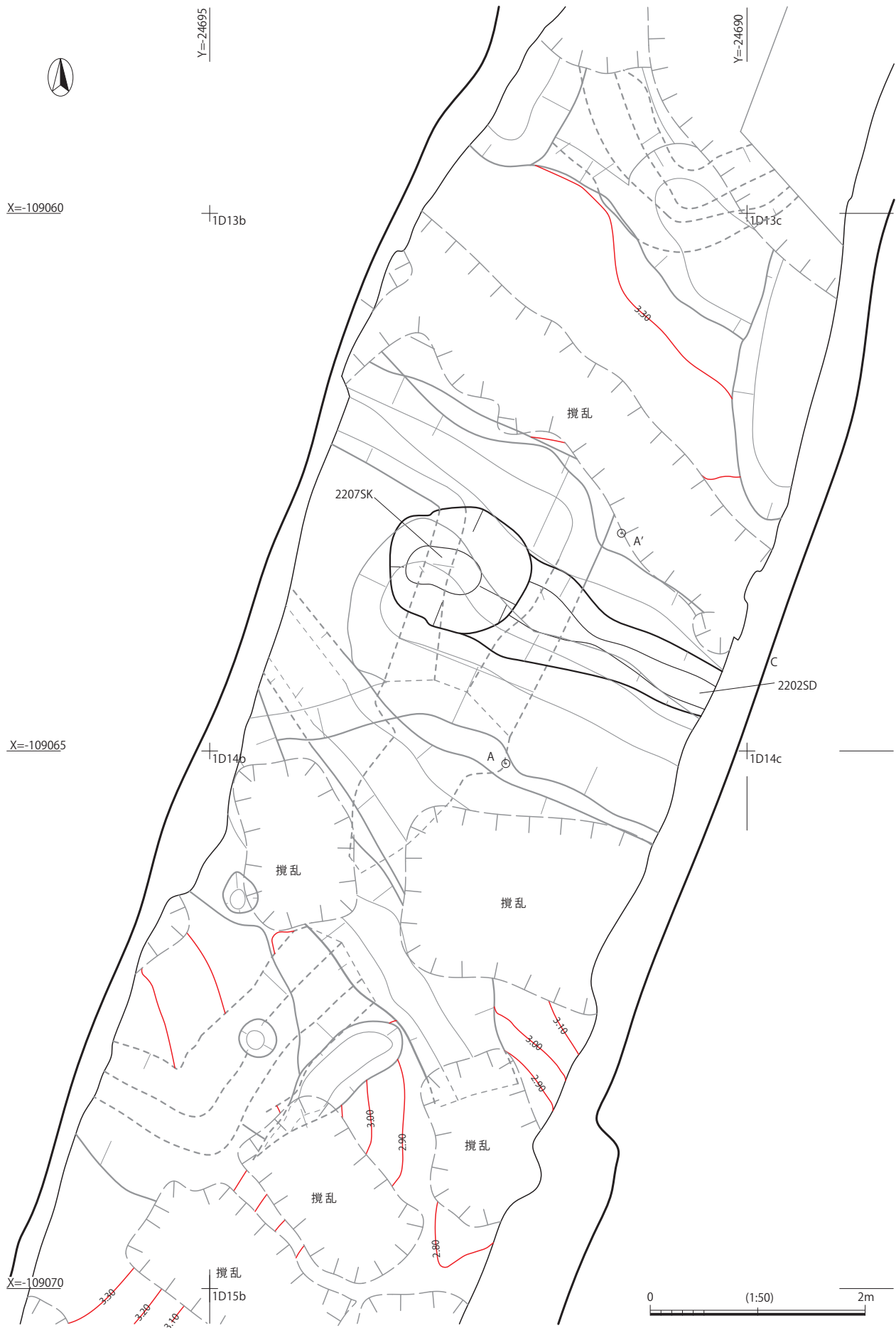
1. 10YR3/1 黒褐色 砂質土(2285SD埋土)
2. 10YR3/2 黒褐色 中粒砂(2285SD埋土)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 中粒砂(2285SD埋土)
4. 10YR4/4 褐色 中粒砂(2212SD埋土)
5. 10YR4/6 褐色 中粒砂(2212SD埋土)
6. 10YR4/2 灰黄褐色 中粒砂(2291SD埋土)
7. 10YR5/2 灰黄褐色 細粒砂(2291SD埋土)



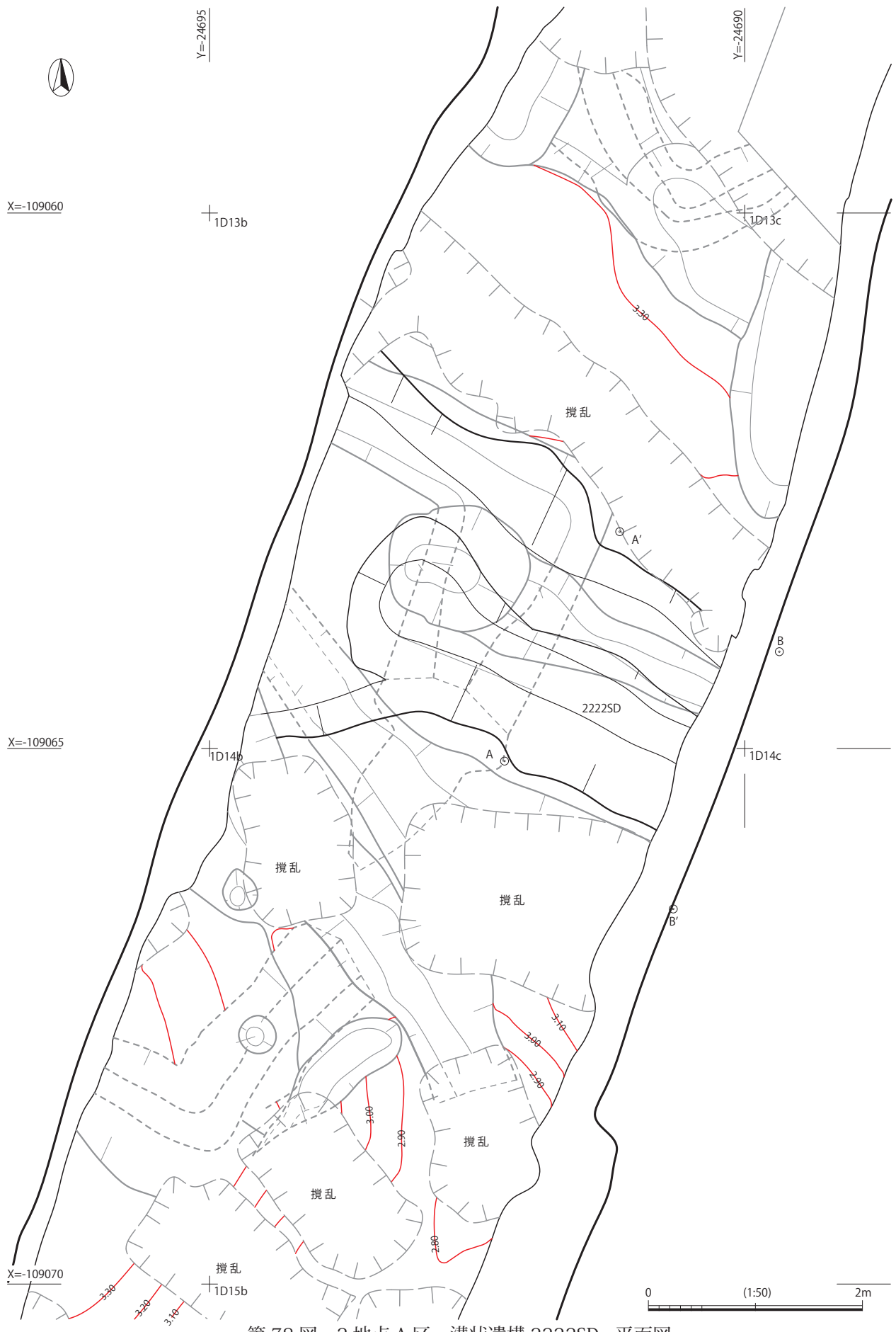
第 75 図 2 地点 A 区 区画溝 2212・2285・2291SD 平面・断面図



第76図 2地点A区 溝状遺構 2206・2214・2215SD 平面・断面図



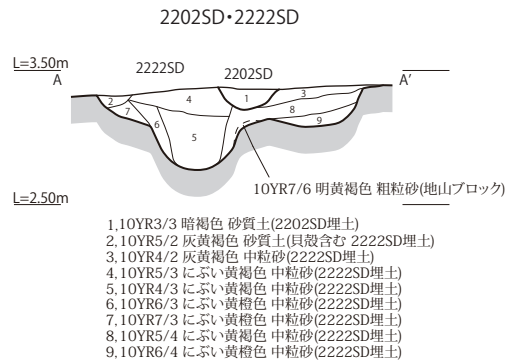
第 77 图 2 地点 A 区 沟状遺構 2202SD・土坑 2207SK 平面图



第 78 图 2 地点 A 区 沟状遺構 2222SD 平面图

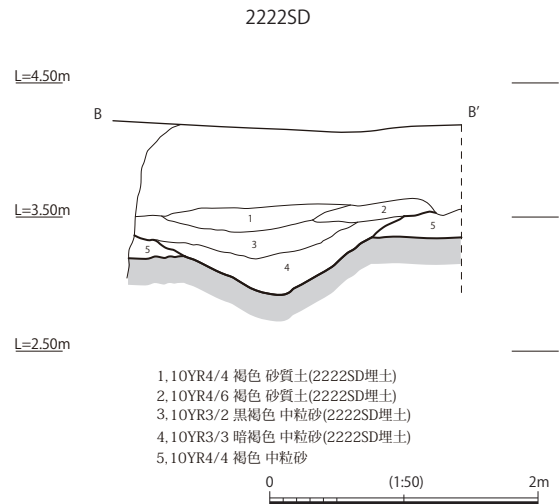
区画溝 2206SD(第76図 図版9)

2地点A区1C17・18tグリッドに位置する。幅1.15m、深さ0.23mをはかる。南北方向に延びる。調査区外に延びることから全容は不明である。規模が大きいことから区画を構成する溝と判断した。出土遺物は土師器皿、瀬戸美濃系陶器卸皿、土錘などが見られる。時期は古瀬戸後期様式と思われる卸皿(91)から判断して14～15世紀と思われる。



溝状遺構 2202SD(第77・79図 図版9)

2地点A区1D13bグリッドに位置する。幅0.56m、深さ0.15mをはかる。東西方向に延びる。2207SKに切られる。北側に延びる様子は確認できなかった。出土遺物は弥生土器(条痕文)が見られる。



第79図 2地点A区 溝状遺構 2202・2222SD 断面図

溝状遺構 2222SD(第78・79図 図版10)

2地点A区1D13・14bグリッドに位置する。幅1.31m、深さ0.60mをはかる。東西方向にやや南に曲がりながら延びる。2207SK、2202SD、2221SD、2233SDに切られる。2245SDを切る。規模が大きく、溝の方向も他の溝とは異なる。北側をテラス状に掘り込んで

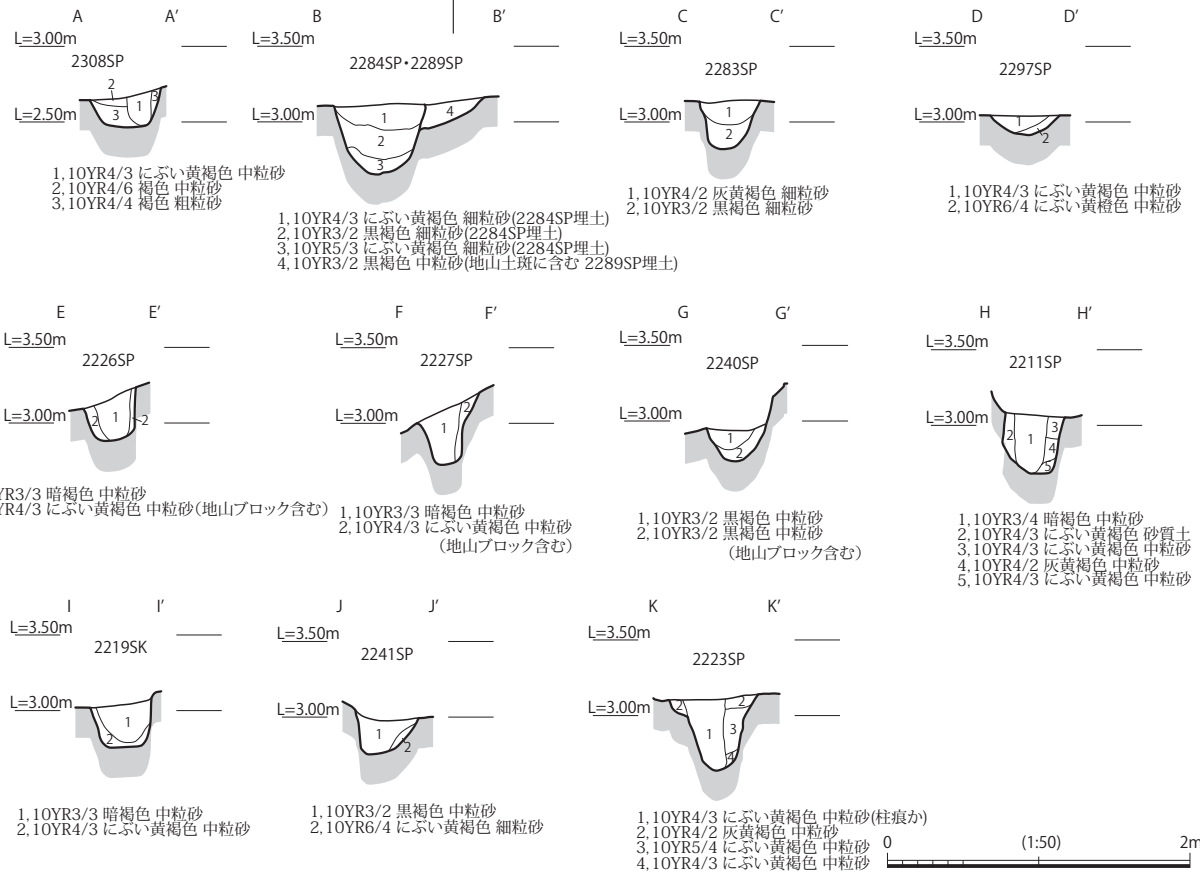
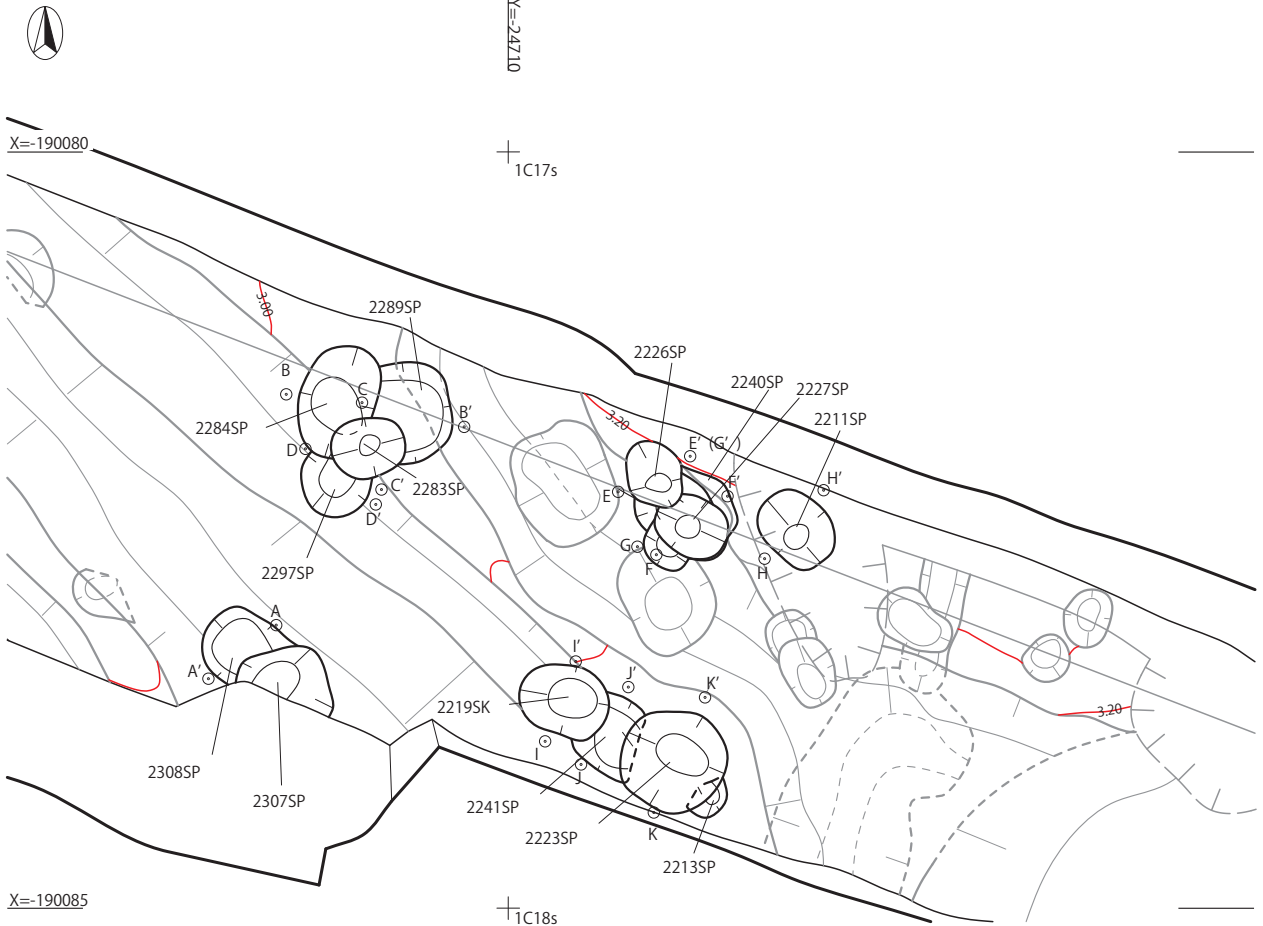
いるように見られるが、断面観察から掘り直しの痕跡が見られた。出土遺物は土師器羽釜、山茶碗(東濃型、尾張型)、弥生土器(条痕文)が見られ、東濃型山茶碗9形式と思われる破片が含まれる。遺構の重複関係から中世でも古い時期の遺構と考えられるが、出土遺物からそれを裏付けることは困難である。

溝状遺構 2210SD(第72・73図 図版9)

2地点A区1D12・13b・cグリッドに位置する。幅0.93m、深さ0.31mをはかる。東西方向に延びる。2208・2218SKに切られる。2221・2233SDと方向が酷似することから、区画溝の可能性が考えられる。出土遺物は尾張型山茶碗、弥生土器(条痕文、櫛描文)、鉢底部が見られる。

土坑 2207SK(第77・79図 図版9)

2地点A区1D13bグリッドに位置する。長さ1.31m、幅1.15m、深さ0.56mをはかる。平面形状は楕円形に近い円形を、断面形状は碗形を呈す。2202・2222SDを切る。埋土に貝殻片が混じることから、中世でも新しい時期の遺構と考えられる。出土遺物は土師器、山茶碗(東濃型、尾張型)、常滑産陶器、竹菅刺突文を施す弥生土器(条痕文)などが見られる。



第 80 図 2 地点 A 区 掘立柱建物跡 001SB 平面・断面図

土坑 2218SK(第 73 図)

2 地点 A 区 1D12b グリッドに位置する。長さ 1.251m、幅 0.63m、深さ 0.11m をはかる。調査区外に拡がることから全容は不明である。平面形状は楕円形を、断面形状は碗形を呈す。2210SD を切る。出土遺物は山茶碗 (93) が見られる。

掘立柱建物跡 001SB(第 80 図 図版 10)

2 地点 A 区 1C17t・s グリッドに位置する。1 間以上 (桁行 1.8m 以上) × 2 間 (梁行 1.1 ~ 2.1m) をはかる。平面は長方形を呈す。梁行間には偏りが見られる。主軸方向は N-32° -E である。柱穴は楕円形と円形を呈す。規模は直径 0.37 ~ 0.71m、深さ 0.15 ~ 0.45m とバラツキがあるが、概ね 0.35m 前後の柱穴が多く見られる。特徴として重複関係が著しいことから、複数回の建て替えがあったと考えられる。また、区画溝の方向と相違が見られることと、区画溝に切られている柱穴があることから区画が形成される以前の遺構である可能性が考えられる。出土遺物は瀬戸美濃系陶器片、山茶碗 (東濃型、尾張型) が見られる。

古代の遺構

不明遺構 2204SX(第 82 図 図版 10)

2 地点 A 区 1D15a グリッドに位置する。幅 3.68m 以上、深さ 0.69m をはかる。大部分を攪乱によって壊されていることから全容は不明であるが、東西方向に延びる溝状の落ち込みと考えられる。当初は上層の黒褐色中粒砂において中世遺物が出土したことから、中世に帰属する土坑と判断していた。しかし、調査を進めていくと、古代の遺物が主体的に見られたことと周辺の遺構分布から、古墳の周溝である可能性も考えた。しかし、当該期の須恵器などは確認できず、より古い時期の遺物が見られることから特定はできなかった。出土遺物は青磁碗 (90)、土師器鉢 (67)、弥生土器 (条痕文、櫛描文)、石核 (チャート) などが見られる。

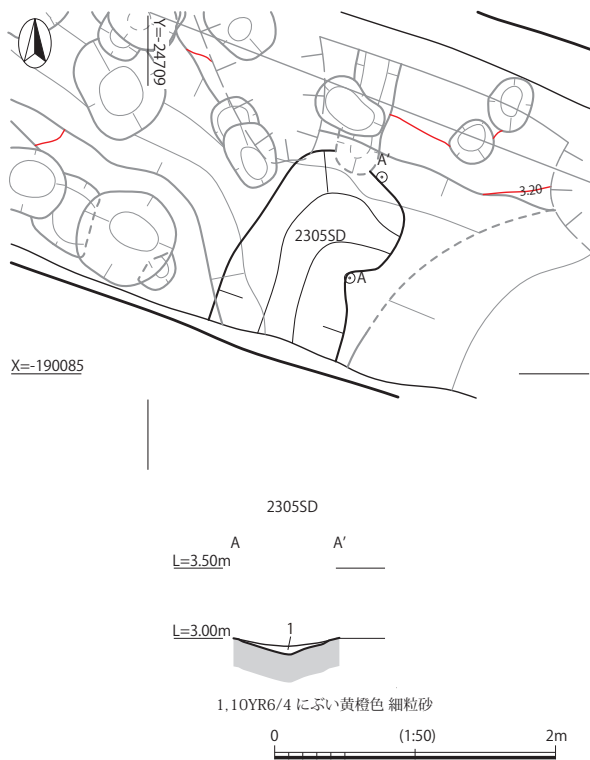
溝状遺構 2245SD(第 83 図 図版 10)

2 地点 A 区 1D13b ~ 1D14a・b グリッドに位置する。幅 1.28m、深さ 0.28m をはかる。平面形状はコの字状を呈す。埋土は上層に灰黄褐色細粒砂が、下層に地山に酷似したにぶい黄橙色中粒砂が見られる。

当初は南側の落ち込みを中世の遺物が含まれることから中世区画溝 (2205SD) と判断して、調査を進めていた。しかし、中世遺物を含む埋土を取り除いた後、明瞭な地山と思えない灰黄褐色細粒砂を確認したことから一旦調査を中断した。その後、2222SD の肩部において確認した掘り込みが上層範囲と整合し、溝状の範囲を検出したことから、2245SD と判断した。出土遺物は土師器羽釜、鍋 (95)、山茶碗 (東濃型、尾張型)、土錘、弥生土器 (条痕文) などが見られる。

溝状遺構 2246SD(第 83 図 図版 10)

2 地点 A 区 1D12b・c ~ 1D13b・c グリッドに位置する。幅 0.75m、深さ 0.32m をはかる。攪乱に大部分を壊されているため、全容は不明である。平面形状は L 字状を呈す。埋土は上層ににぶい黄橙色粗粒砂が、下層に地山に酷似したにぶい灰白粗粒砂が見られる。2210SD 下から検出した。2245SD を確認したことから同様の堆積の有無を精査したところ、2210SD 底



第 81 図 2 地点 A 区 溝状遺構 2305SD 平面・断面図

面にてにぶい黄橙色粗粒砂が溝状に広がる様子を確認したことから、2246SD と判断した。出土遺物は石鏃 (77) が見られる。

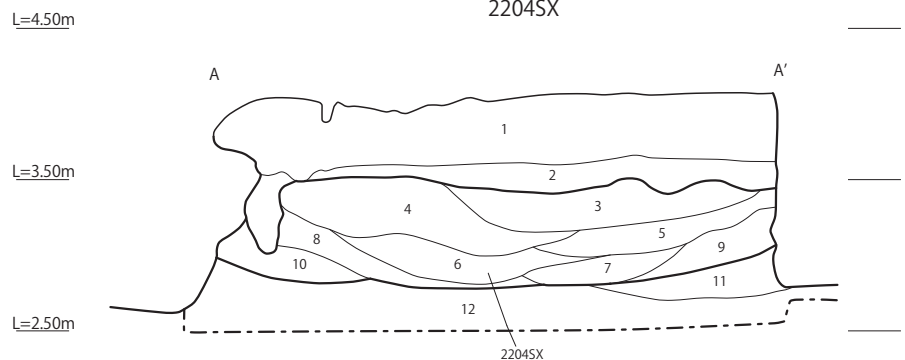
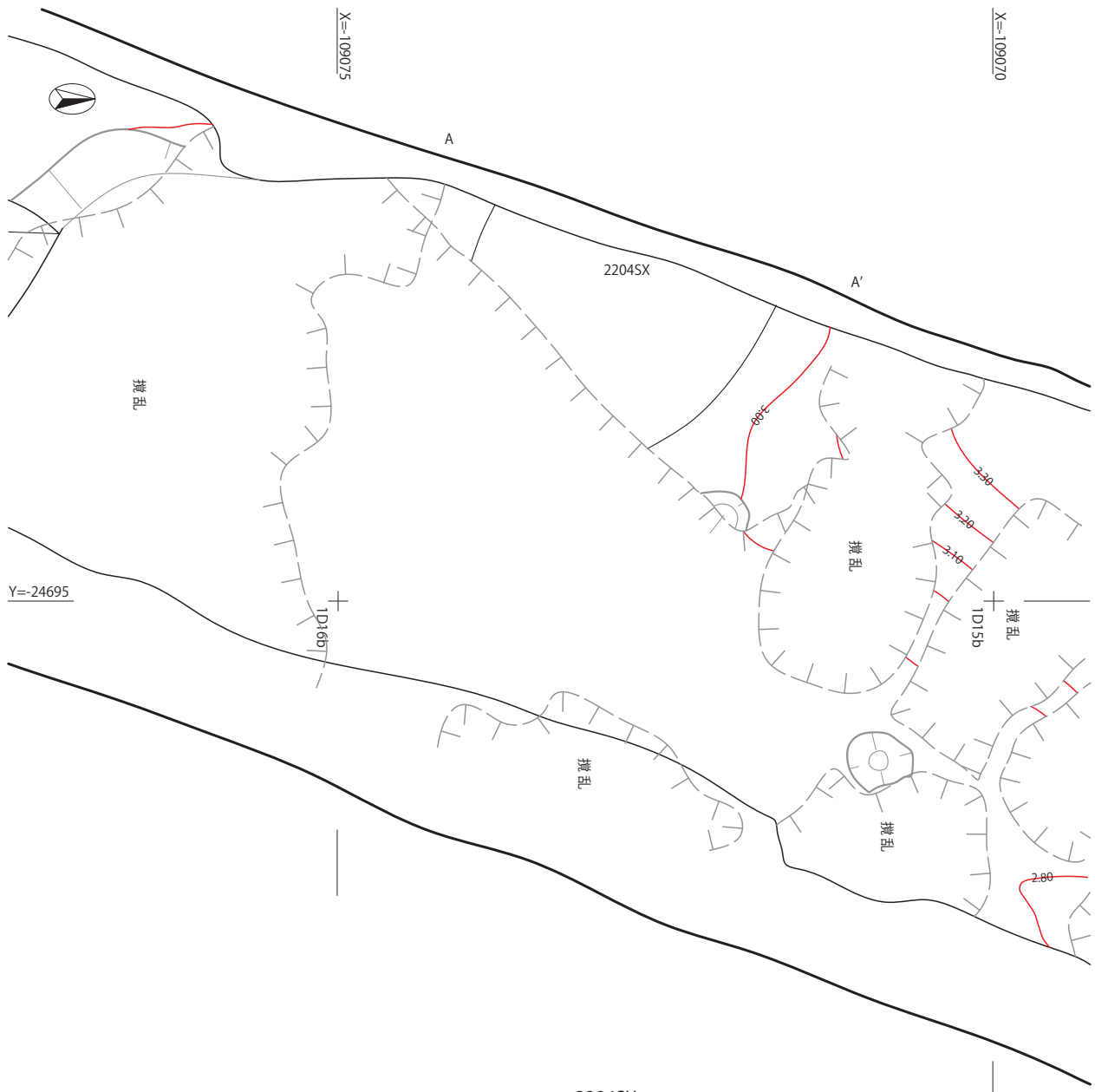
2245SD・2246SD とともに埋土が地山に酷似することや直線的なコの字状や L 字状を呈することから、共通の特徴が見られる。該当する遺構となると方形周溝墓などが考えられるが、特定はできなかった。

溝状遺構 2305SD(第 81 図)

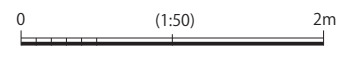
2 地点 A 区 1C17s グリッドに位置する。幅 0.80m、深さ 0.17m をはかる。調査区外に延びることから全容は不明である。平面形状は L 字状を呈す。埋土は地山に酷似したにぶい黄橙色粗粒砂が見られる。L 字状を呈す形状であるが溝自体が 2215SD に切られることから、さらに東側に延びる可能性が考えられることから、2235・2236SD と同様の遺構である可能性が考えられる。

竪穴状遺構 2290SI(第 84 図 図版 10)

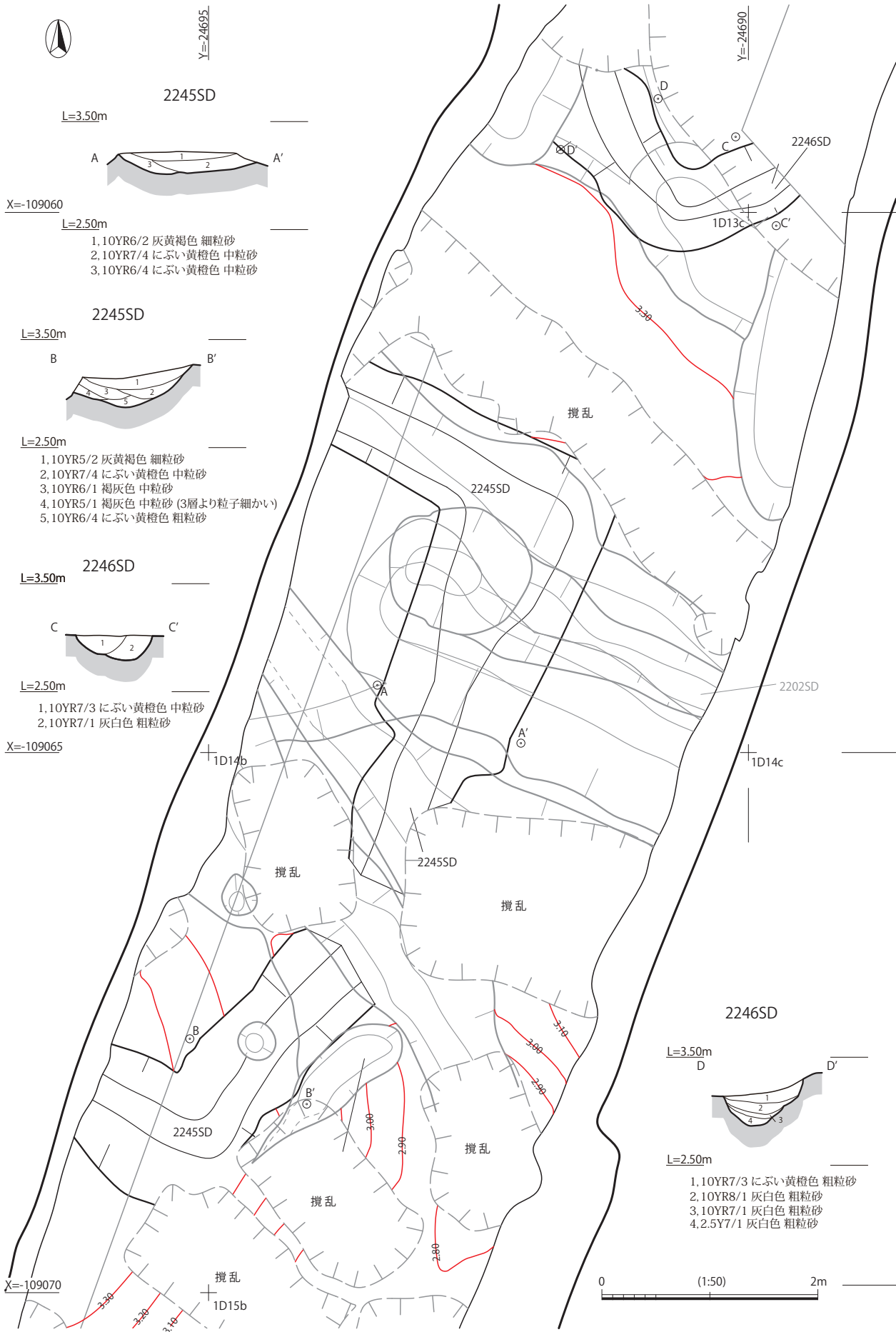
1 地点 A 区 1C16・17q グリッドに位置する。調査区外に広がることから全容は不明である。長さ 3.36m、幅 2.65m、深さ 0.05～0.24m をはかる。隅丸方形の平面形状を、断面形状は皿形を呈す。溝状の掘方 (2292SD) と、内部にほぼ直線状に並ぶピット (2293・2299・2300・2301SP) を確認した。2287SD、2288SK に切られる。出土遺物は土師器、青磁、山茶碗 (東濃型、尾張型)、陶器、弥生土器などが見られる。出土遺物からは中世の遺物が多く、古代に帰属する物証は乏しい。周辺の調査においても同様な遺構は今のところ確認されていないことから、竪穴状遺構と断定はできないが、掘方とピットの埋土がほぼ同質であることや、直列するピットの深度が深いこと、中世区画溝と軸方向を違えることからその可能性は高いと判断した。

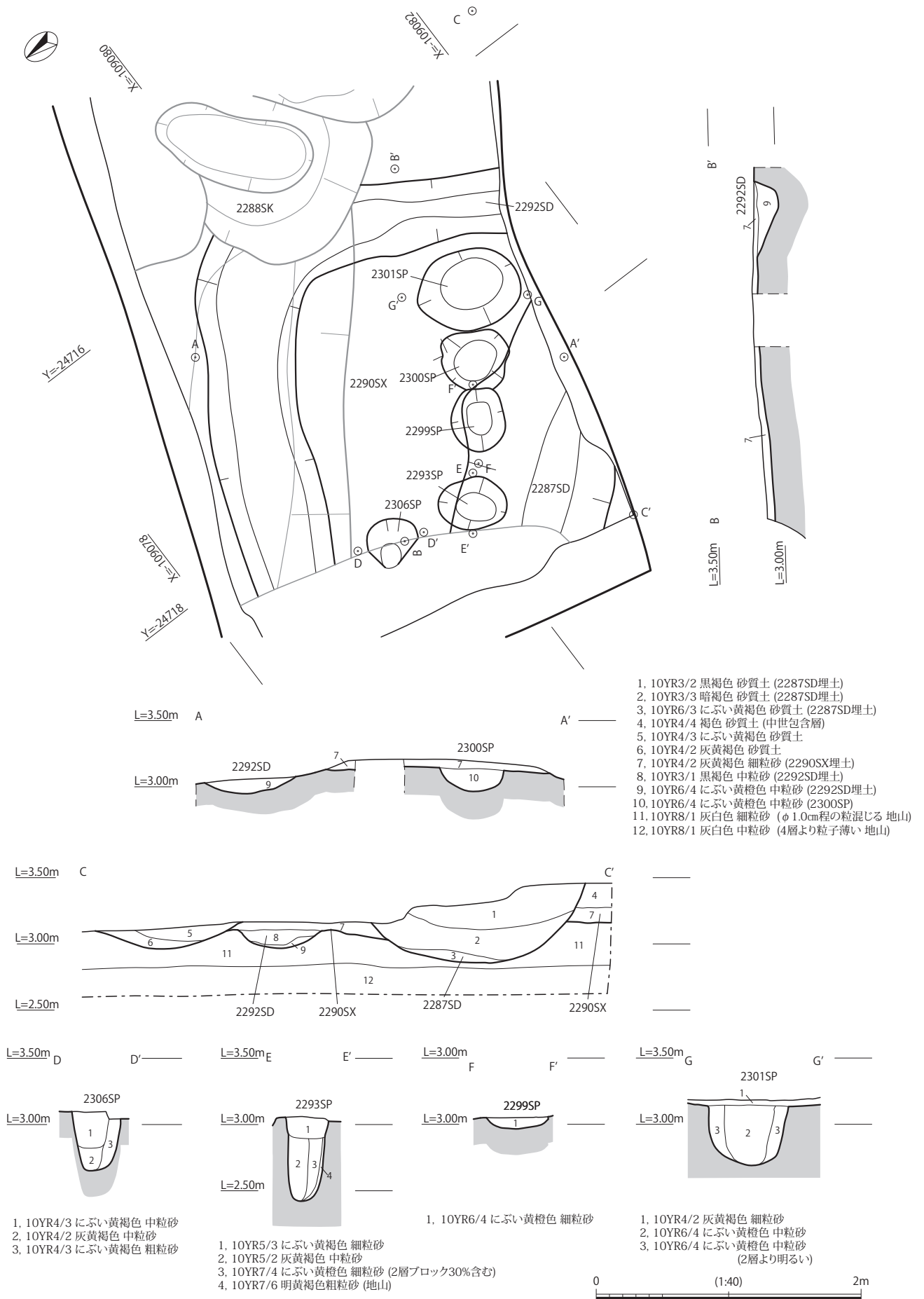


- | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|
| 1, 10YR4/2灰黄褐色砂質土 | 11, 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂 |
| 2, 10YR4/4褐色中粒砂 (中世包含層) | 12, 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂～10YR7/1灰白色粗粒砂 |
| 3, 10YR3/1黒褐色中粒砂 (2204SX) | |
| 4, 10YR3/2黒褐色中粒砂 (2204SX) | |
| 5, 10YR3/3暗褐色中粒砂 (2204SX) | |
| 6, 10YR3/4暗褐色中粒砂 (2204SX) | |
| 7, 10YR6/4にぶい黄橙色中粒砂 (2204SX) | |
| 8, 10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂 (2204SX) | |
| 9, 10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂 (2204SX) | |
| 10, 10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂 (色調明るい、2204SX) | |



第 82 図 2 地点 A 区 不明遺構 2204SX 平面・断面図





第 84 図 2 地点 A 区 竪穴状遺構 2290SI 平面・断面図

第4節 2地点B区(東畑遺跡)の遺構

概要と基本層序

2地点B区(東畑遺跡)は遺跡が立地する第1砂堆の南側に位置する。調査区の一部は近世以降の開発によって壊されていたが、中世の町割や古代(弥生時代後期の可能性がある)の遺構と弥生時代中期後半～中世・近代にかけての遺物を確認した。調査面積は188㎡である。

畑間遺跡と東畑遺跡の境界に立地し、平成30年度の畑間遺跡2地点A区、平成29年度の東畑遺跡3地点の調査区に近接する。基本層序は以下のとおりである。

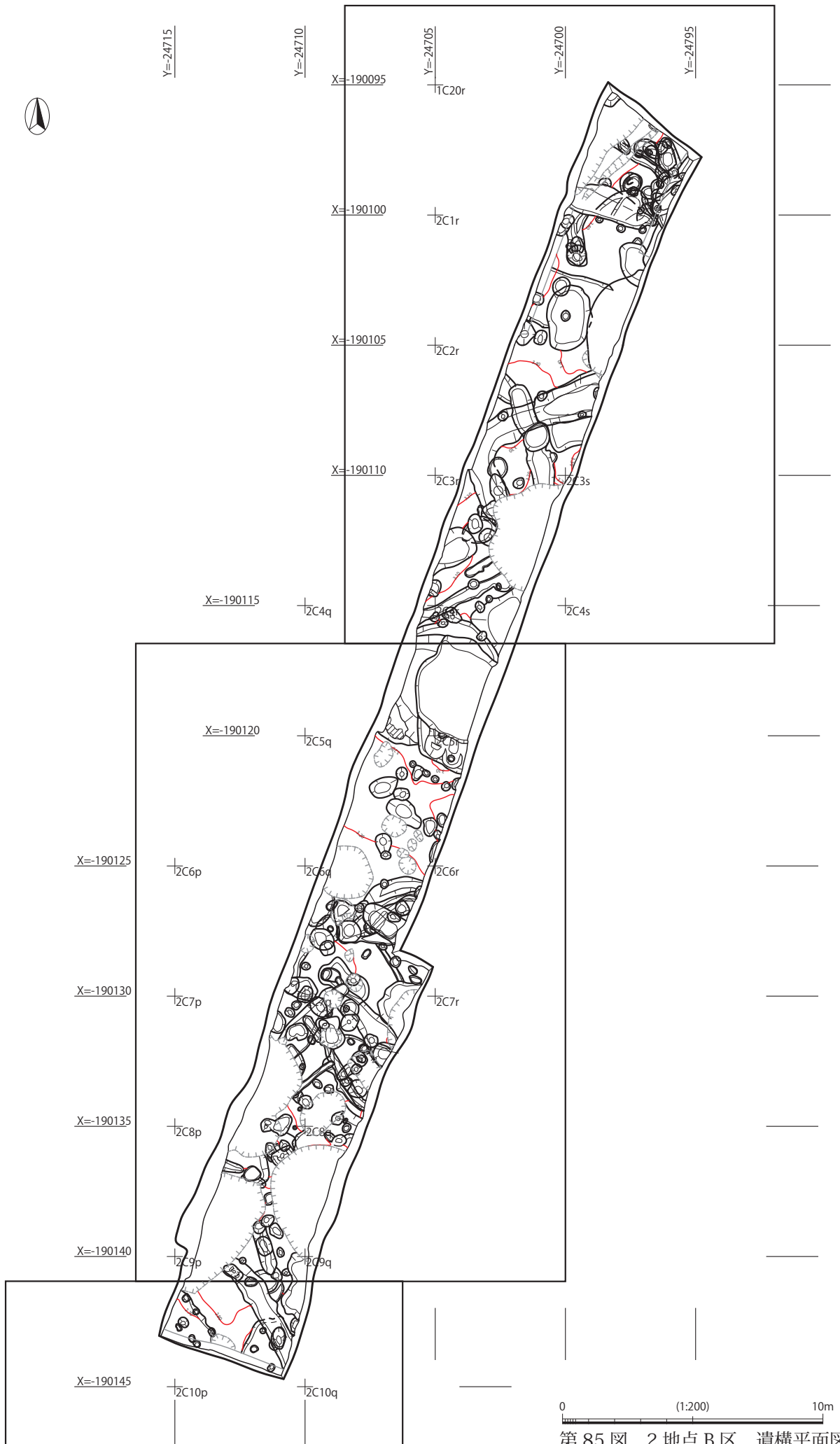
- I層：表土層 近現代の盛土である。
- II層：遺物包含層 10YR3/2 黒褐色中粒砂(貝殻片を含む)を主体とする。近世から弥生時代の遺物を包含する。中世後期の整地層である。
- III層：基盤層 地山である10YR7/6 黄橙色粗粒砂に由来する。

2地点B区は一部が近世以降の開発によって壊されているが、遺構の残存状況は良好で、古代から中世・近代にかけての遺構を確認した。中世遺構の内訳は井戸1基(2001SE)、区画溝4条(2010SD・2079SD・2090SD・2150SD)、溝状遺構2条(2027SD・2044SD)、土坑(2032SK・2045SK)、竪穴状遺構6基(2012SI・2013SI・2015SI・2019SI・2080SK・2097SI)、犬埋葬遺構(2088SX)、その他、土坑及びピットを多数確認した。古代遺構の内訳は包含層(2029SX)、溝状遺構8条(2017SD・2028SD・2164SD・2194SD・2197SD・2324SD)、土坑(2195SK・2199SK・2258SK)及びピットを確認した。

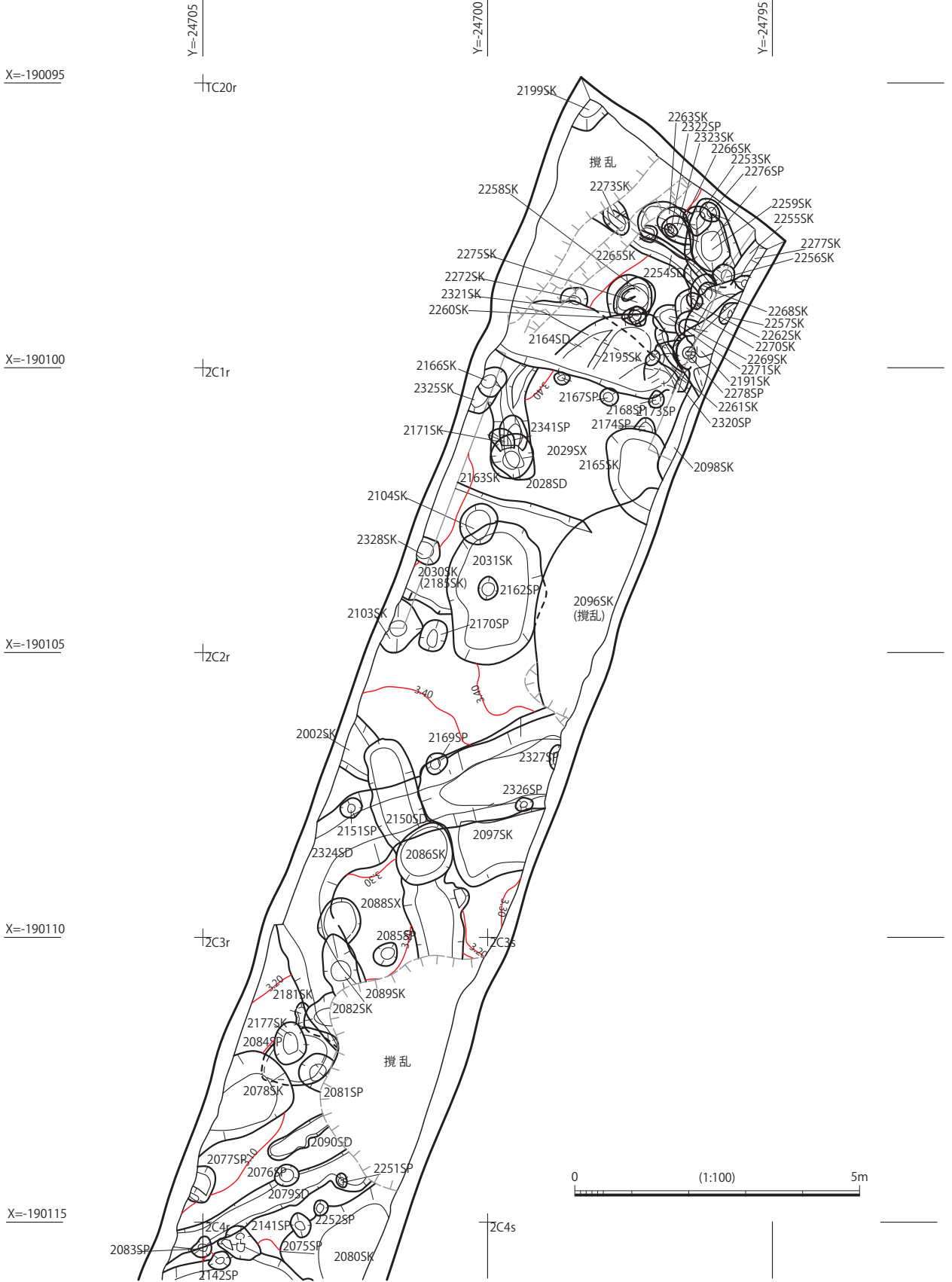
2地点B区の大きな特徴として貝殻片を多く含む中世後期の整地層を確認したこと、中世に帰属する竪穴状遺構を複数確認したこと、弥生時代後期の可能性があるL字状の溝状遺構、ほぼ全体が遺存する犬埋葬遺構などがあげられる。とくに、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物が集中する堆積層と遺構群は範囲が限定される傾向が見られることから、当該期における遺構分布の検証や景観復元の一助となると考えられる。

遺物は主に13～17世紀の遺物が主体を占める。山茶碗、瀬戸美濃系陶器、常滑産陶器、土師器伊勢鍋、羽釜、内耳鍋、焙烙、青磁などの日用品や、土錘など生業に関わる遺物が見られる。その他、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物が多く見られる。ほとんどは破片で全容は不明であるが、条痕文や櫛描文、加飾壺やS字状口縁台付甕、石器、剥片などが見られる。

遺物の出土傾向としては包含層から残存状態が良好な個体が多く見られた。遺構からは破片での出土が多く、全容の把握に時間を要したが、土師器煮沸具や施釉陶器の傾向から前述の時代に収まると判断した。山茶碗については東濃型と尾張型の2系統を確認した。藤澤編年によるところの6～10型式のものが見られる。瀬戸美濃系陶器については、天目茶碗、丸碗、折縁大皿、縁釉はさみ皿などが見られる。天目茶碗は鉄釉のものがほとんどを占める。古瀬戸後期～大窯期のものが主体を占める。常滑産陶器については、甕、壺、播鉢が見られる。土師器煮沸具は伊勢鍋、羽釜、内耳鍋、焙烙が見られる。羽釜の比率がやや高い傾向が見られる。



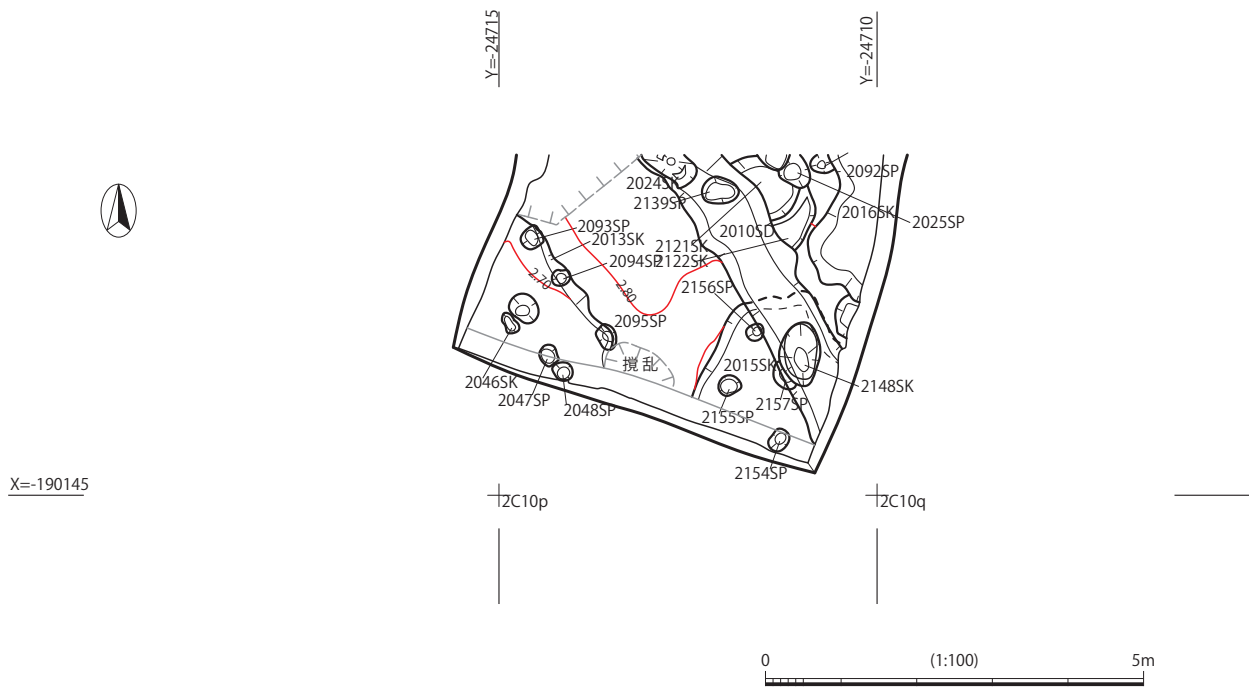
第 85 图 2 地点 B 区 遺構平面图



第 86 图 2 地点 B 区 遺構平面图 1



第 87 图 2 地点 B 区 遺構平面図 2



第 88 図 2 地点 B 区 遺構平面図 3

中世の遺構

井戸 2001SE(第 93 図 図版 11)

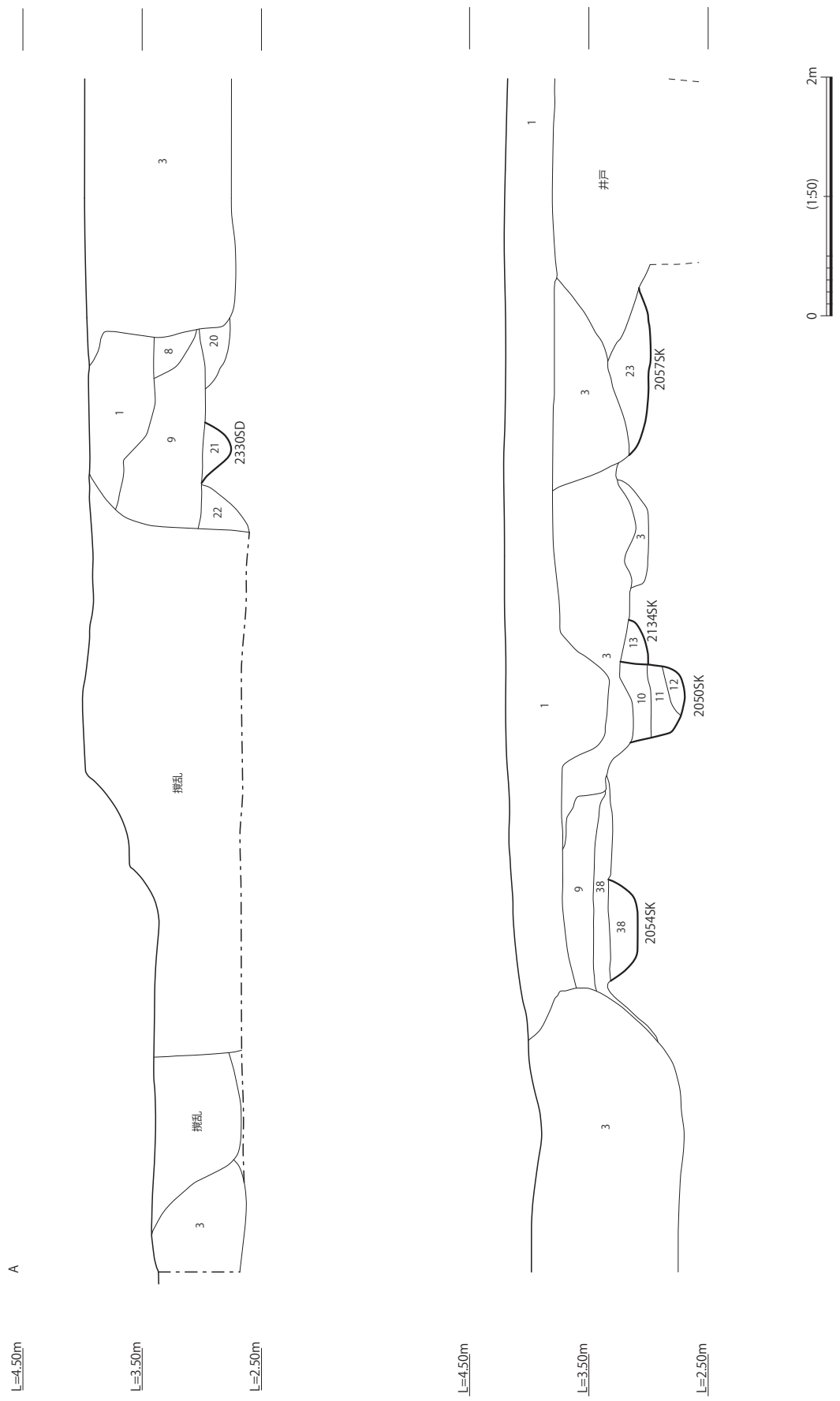
2 地点 B 区 2C4q・4r ~ 2C5q・5r グリッドに位置する。西側が調査区に延びる。長径 3.59m、深さ 0.82m 以上をはかる。楕円形の平面形状を呈す。井戸枠材は確認できなかった。2032SK を切る。調査面から 0.8m 掘削した時点で湧水が著しかったので、安全上掘削を中断した。そのため最終的な深さは不明である。埋土中に貝殻片が多く含まれることから、中世における整地の際に廃絶したと思われる。掘方の南壁には段違いにテラス状の平場が構築されている様子を確認したことから、井戸構築に関わる足場の可能性が考えられる。出土遺物は土師器羽釜(49)、尾張型山茶碗(96)のほか施釉陶器、青磁、古墳時代の高坏、弥生土器片のほか陶丸や加工円盤などが見られる。廃絶時の混入が著しいことから遺物から時期を推定することは難しい。

区画溝 2010SD(第 94 図 図版 11)

2 地点 B 区 2C9p グリッドに位置する。幅 0.82m、深さ 0.24m をはかる。南北方向に延びる。南北側は調査区外に延びることと攪乱によって壊されているため全容は不明である。断面形状は碗形を呈する。2015SI を切る。出土遺物は土師器羽釜、陶器、山茶碗(東濃型、尾張型)、弥生土器(条痕文、波状文)などが見られる。遺物から 14 ~ 15 世紀と思われる。

区画溝 2079SD(第 97 図)

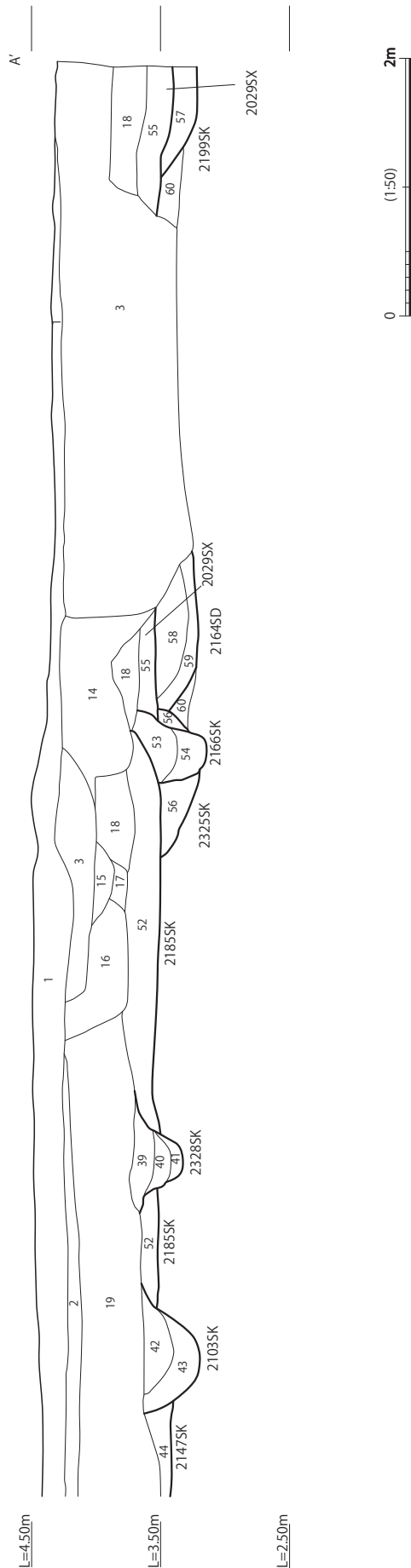
2 地点 B 区 2C3r グリッドに位置する。幅 0.81m、深さ 0.20m をはかる。東西方向に延びる。西側が調査区外に延び、東側は攪乱によって壊されている。2090SD と平行する。出土遺物は土師器羽釜、山茶碗(尾張型)、陶器片、弥生土器(条痕文、櫛描文)が見られる。遺物から 14 ~ 15 世紀と思われる。



第 89 图 2 地点 B 区 西壁土層断面图 1

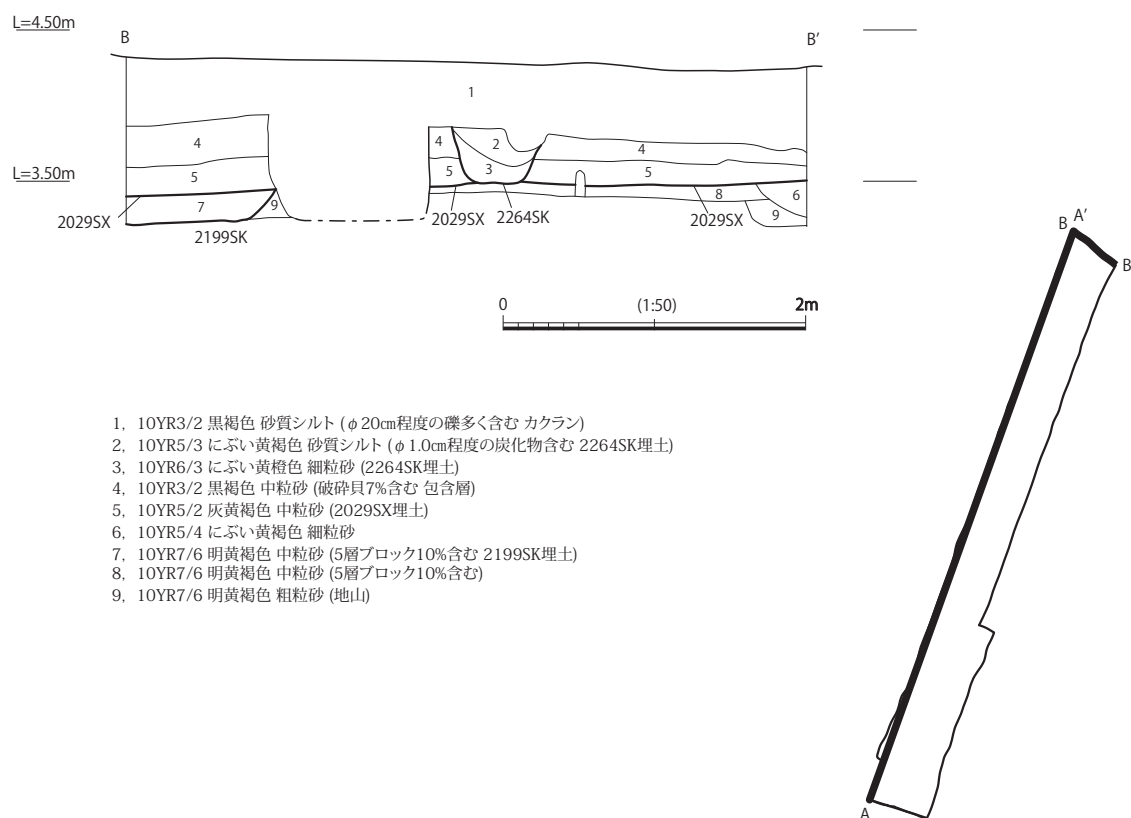


第90图 2地点B区 西壁土层断面图2



1. 表土
2. 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト (礫土)
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (礫土)
4. 10YR3/2 黒褐色 細粒砂
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト (5層ブロック10%含む)
7. 10YR5/1 褐灰色 砂質シルト
8. 10YR6/2 灰黄褐色 砂質シルト
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (礫片20%含む 包含層)
10. 10YR6/2 灰黄褐色 砂質シルト (2050SK理土)
11. 10YR5/2 にぶい黄褐色 砂質シルト (2050SK理土)
12. 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト (2050SK理土)
13. 10YR5/2 にぶい灰褐色 砂質シルト (礫化鉄多く含む 2134SK理土)
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂 (礫片50%含む)
15. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土 (礫片50%含む)
16. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂 (礫片20%含む 近世遺構?)
17. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂 (礫片30%含む 近世遺構?)
18. 10YR3/2 黒褐色 中粒砂 (礫片7%含む)
19. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (礫片50%含む 包含層)
20. 10YR6/1 褐灰色 中粒砂
21. 10YR6/1 褐灰色 中粒砂 (2330SD理土)
22. 10YR6/1 褐灰色 中粒砂
23. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトブロック30%含む 2057SK理土)
24. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (礫片3%含む 包含層)
25. 10YR6/1 褐灰色 中粒砂 (2001SE掘方理土)
26. 10YR6/1 褐灰色 中粒砂 (ラミナあり 2001SE掘方理土)
27. 2.5YR/6 黄色 粘質土 (2032SK理土)
28. 10YR5/2 灰黄褐色 粗粒砂 (グライ化顕著 2032SK理土)
29. 7.5YR4/2 灰黄褐色 中粒砂 (2032SK理土)
30. 7.5YR4/2 灰黄褐色 中粒砂 (礫化鉄50%含む 2032SK理土)
31. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂 (2032SK理土)
32. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (礫片1%含む 2078SK理土)
33. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルトブロック40%含む 2078SK理土)
34. 10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂 (礫片1%含む 2078SK理土)
35. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (礫片1%含む 2079SD理土)
36. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (礫片1%含む 2079SD理土)
37. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトブロック30%含む 包含層)
38. 10YR6/2 灰黄褐色 粗粒砂 (2054SK理土)
39. 10YR4/4 褐色 細粒砂 (2328SK理土)
40. 10YR7/4 にぶい黄褐色 細粒砂 (10YR4/4 褐色 細粒砂ブロック30%含む 2328SK理土)
41. 10YR7/4 にぶい黄褐色 細粒砂 (10YR4/4 褐色 細粒砂ブロック10%含む 2328SK理土)
42. 10YR5/4 にぶい黄褐色 細粒砂 (2103SK理土)
43. 10YR7/6 明黄褐色 細粒砂 (2103SK理土)
44. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトブロック30%含む 2147SK理土)
45. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂
46. 10YR7/6 明黄褐色 中粒砂 (10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂ブロック20%含む 2324SD理土)
47. 10YR7/6 明黄褐色 細粒砂 (2324SD理土)
48. 10YR7/6 明黄褐色 中粒砂 (48層ブロック5%含む 2324SD理土)
49. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (2324SD理土)
50. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトブロック30%含む 包含層)
51. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトブロック30%含む 2150SD理土)
52. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトブロック30%含む 2185SK理土)
53. 10YR6/3 にぶい黄褐色 粗粒砂 (2166SK理土)
54. 10YR6/4 にぶい黄褐色 中粒砂 (2166SK理土)
55. 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂 (2029SX理土)
56. 10YR6/2 灰黄褐色 中粒砂 (2325SK理土)
57. 10YR7/6 明黄褐色 中粒砂 (54層ブロック10%含む 2199SK理土)
58. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂 (2164SD理土)
59. 10YR6/3 にぶい黄褐色 中粒砂 (2164SD理土)
60. 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂 (地山)

第91図 2地点B区 西壁土層断面図3



第 92 図 2 地点 B 区 北壁土層断面図

区画溝 2090SD(第 97 図)

2 地点 B 区 2C3r グリッドに位置する。幅 0.37m、深さ 0.05m をはかる。東西方向に延びる。東側が攪乱によって壊されている。西側は途中で途切れる。2079SD と平行する。断面形状は皿形を呈する。溝の深度が浅いことから削平を受けている可能性が考えられる。出土遺物は陶器片や尾張型山茶碗片が見られる。

区画溝 2150SD(第 97 図 図版 11)

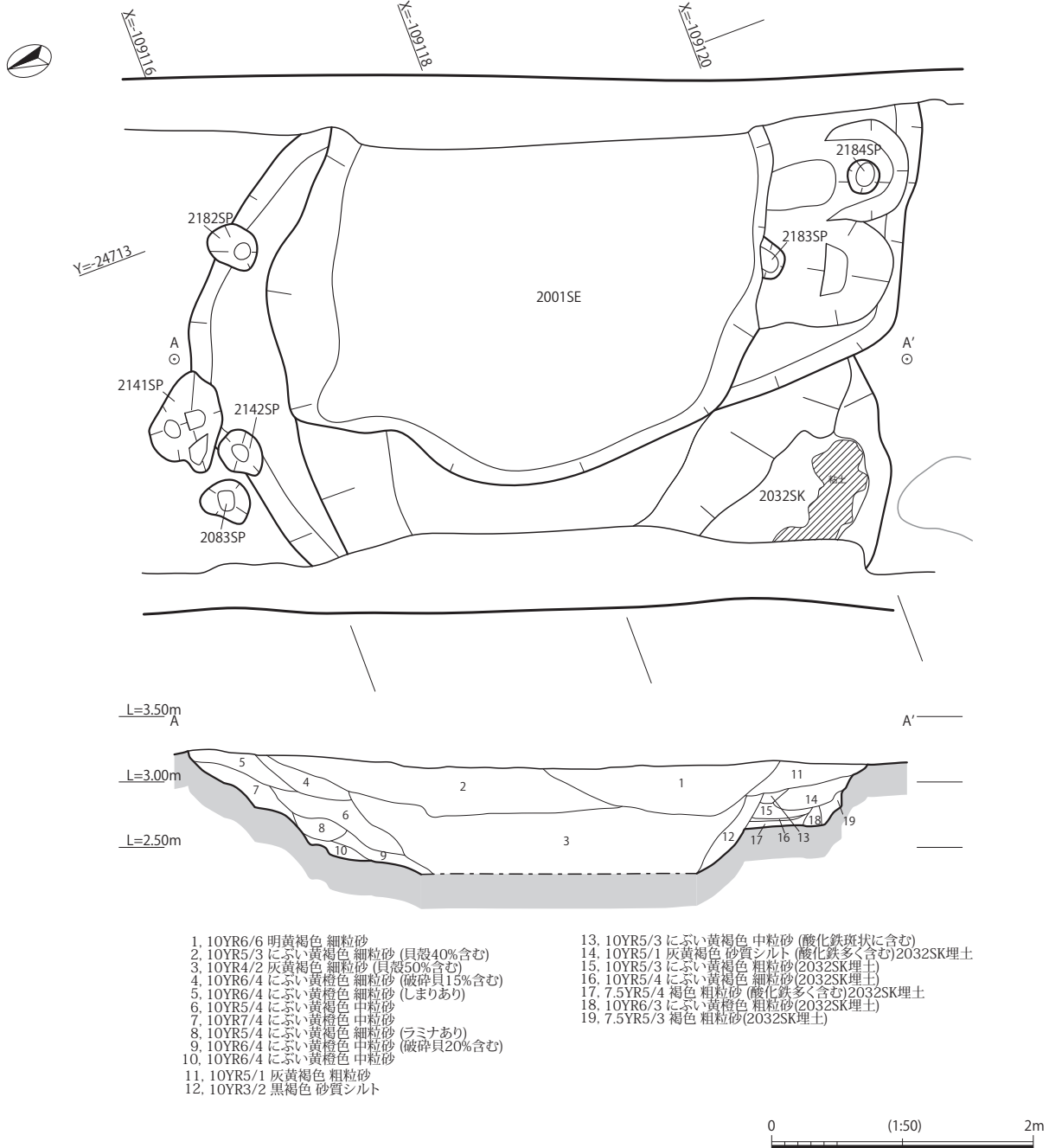
2 地点 B 区 2C2r・3r グリッドに位置する。幅 0.90m、深さ 0.16m をはかる。南北方向に延びる。南側を攪乱に切れ、北側は途中で途切れる。2086SK に切られる。断面形状は皿形を呈する。出土遺物は土師器、陶器や尾張型山茶碗、弥生土器片などが見られる。

溝状遺構 2027SD(第 95・96 図 図版 11)

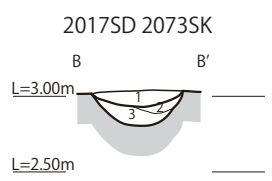
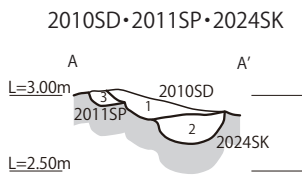
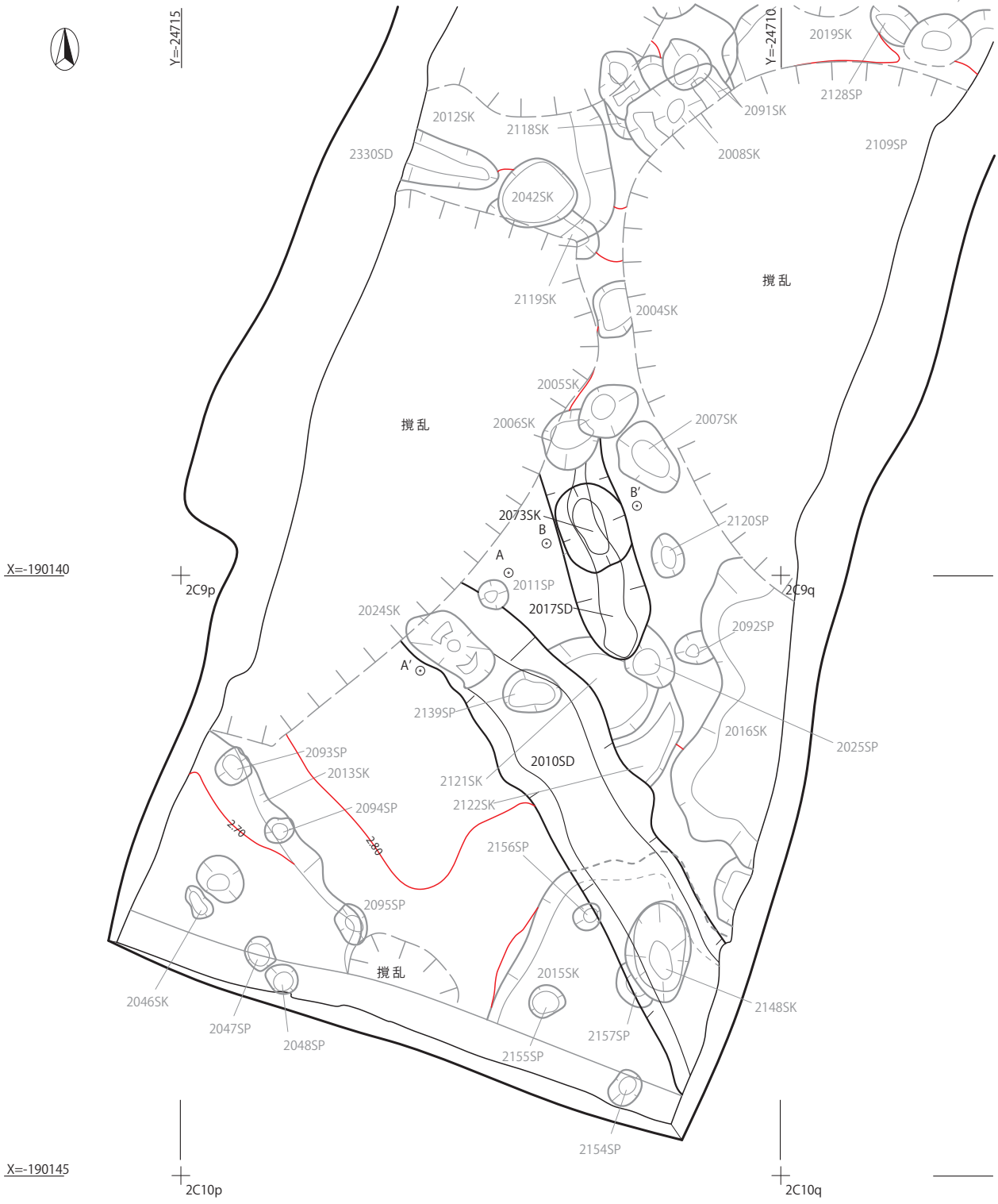
2 地点 B 区 2C7q グリッドに位置する。幅 0.19m、深さ 0.37m をはかる。東西方向に延びる。西側を攪乱によって壊されているため全容は不明である。断面形状は U 字形を呈する。2044SD と直交する。出土遺物は見られなかった。

溝状遺構 2044SD(第 95・96 図 図版 11)

2 地点 B 区 2C7p・7q グリッドに位置する。幅 0.33m、深さ 0.11m をはかる。南北方向に延びるが、南側は調査区外に、北側は途中で途切れる。断面形状は碗形を呈する。2027SD と直交する。残存状況から途中で途切れている様子がみられるも 2010SD と方向がほぼ一致することから、区画溝かもしくは区画を分割する溝の可能性が考えられる。出土遺物は土師器羽

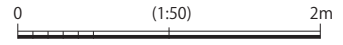


第93図 2地点B区 井戸2001SE・土坑2032SK 平面・断面図



- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト(2010SD埋土)
- 2. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト(2024SK埋土)
- 3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 細粒砂(2011SP埋土)

- 1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂(2017SD埋土)
- 2. 10YR6/4 にぶい黄褐色 中粒砂(2073SK埋土)
- 3. 10YR6/3 にぶい黄褐色 中粒砂(2073SK埋土)



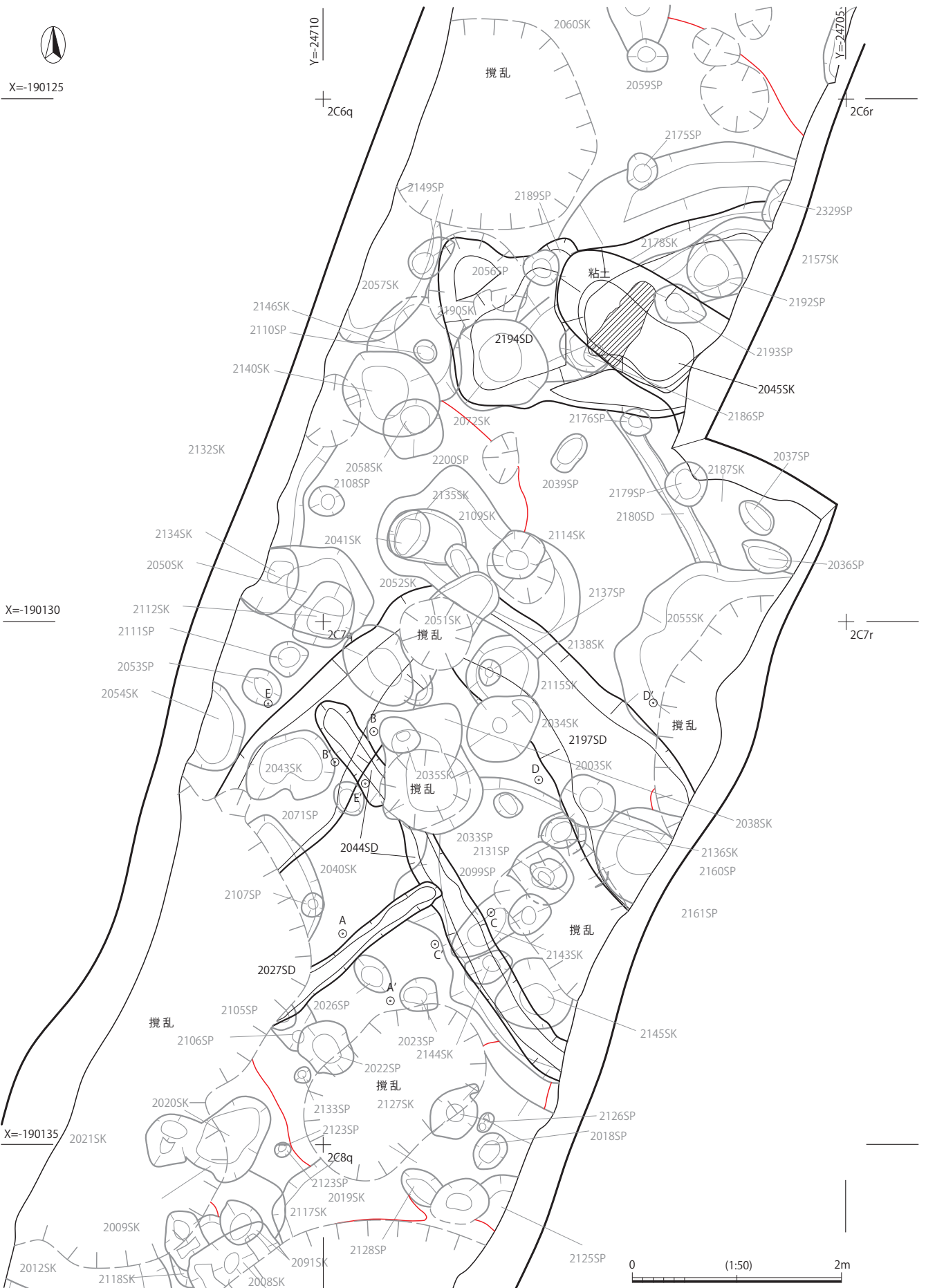
第 94 図 2 地点 B 区 区画溝 2010SD・溝状遺構 2017SD 平面・断面図



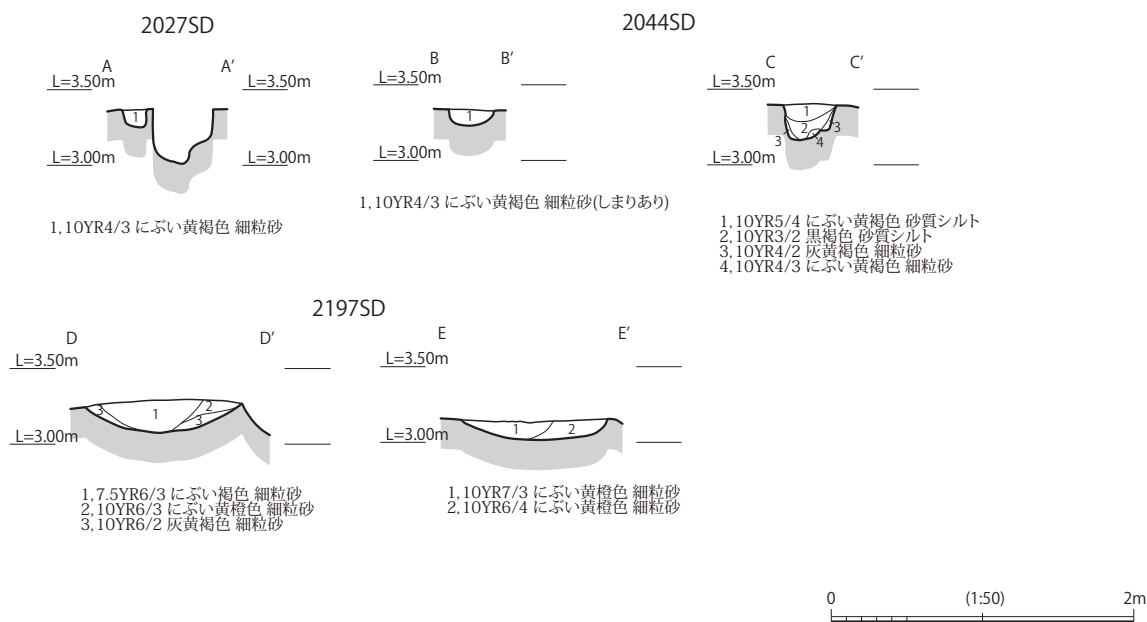
X=-190125

Y=24710

Y=24705



第 95 图 2 地点 B 区 溝状遺構 2027・2044・2197SD 平面图



第96図 2地点B区 溝状遺構 2027・2044・2197SD 断面図

釜が見られる。遺物から14～15世紀と思われる。

土坑 2032SK(第93図 図版11)

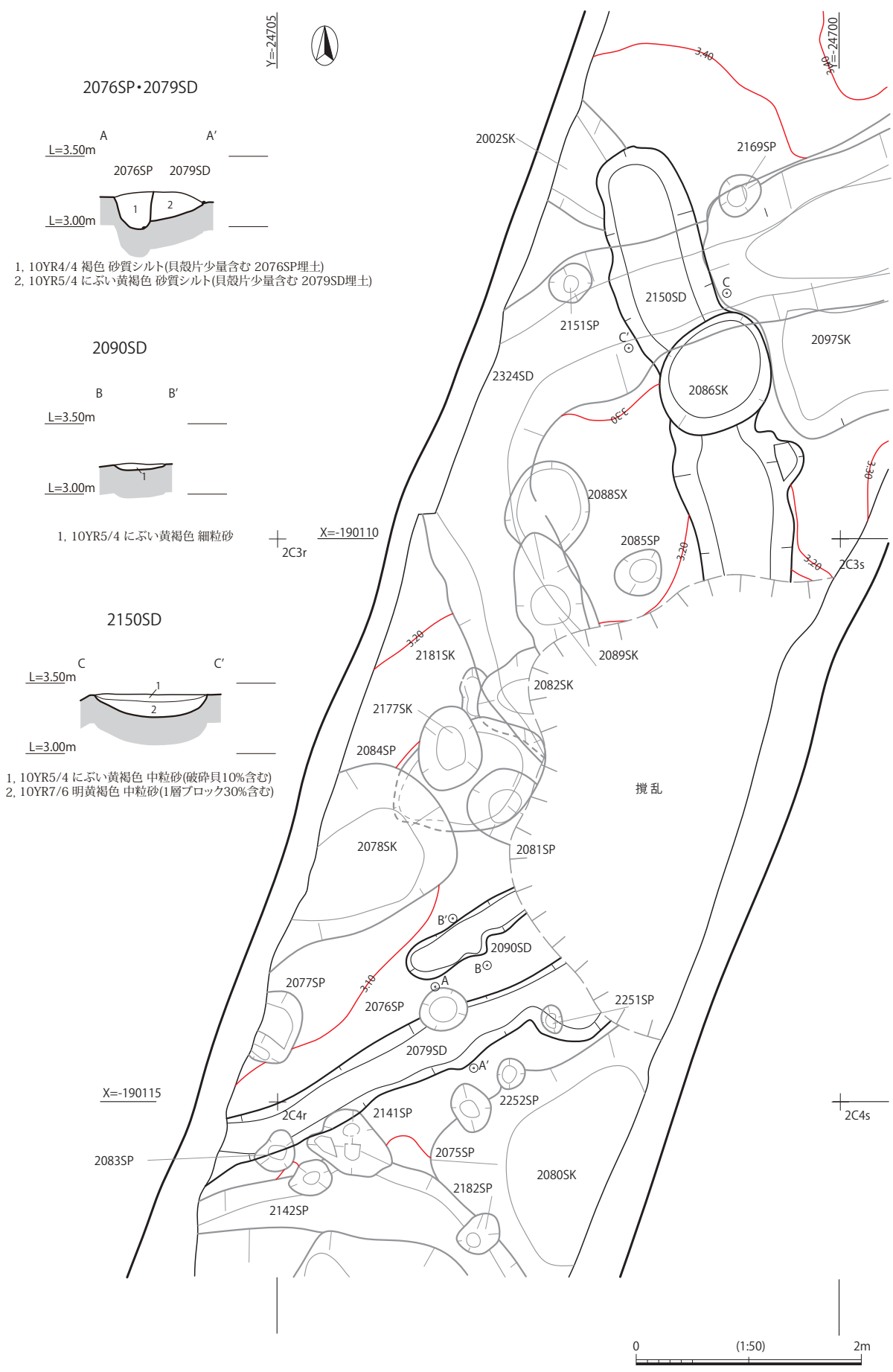
2地点B区2C4p・5pグリッドに位置する。長さ1.45m以上、幅1.22m以上、深さ0.28mをはかる。平面形状は楕円形に近い円形を、断面形状は皿形を呈す。2001SEに切られることと大部分が調査区外に拡がるため全容は不明である。底面に黄褐色粘土を貼り付けており、粘土下において鉄分の吸着が観察されたことから、湧水を遮断しており、貯水を目的とした性格が考えられる。出土遺物は見られなかった。

土坑 2045SK(第98図 図版12)

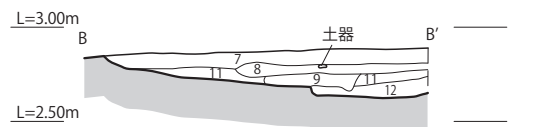
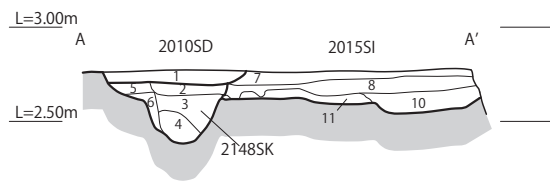
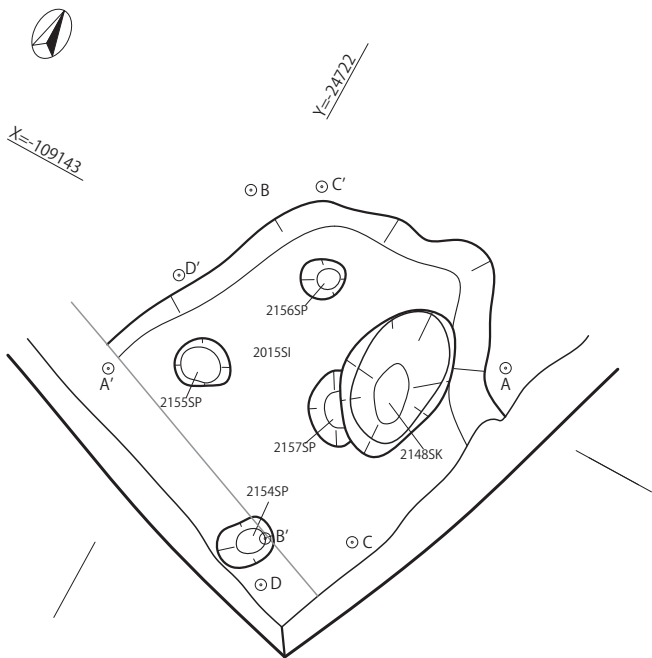
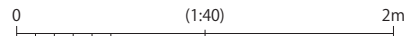
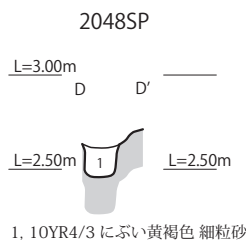
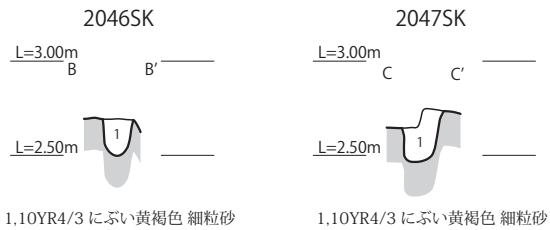
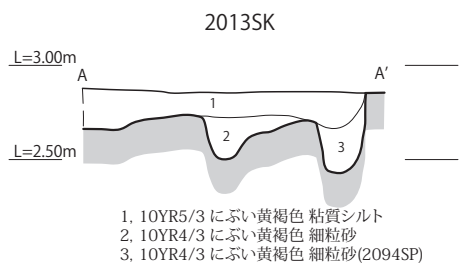
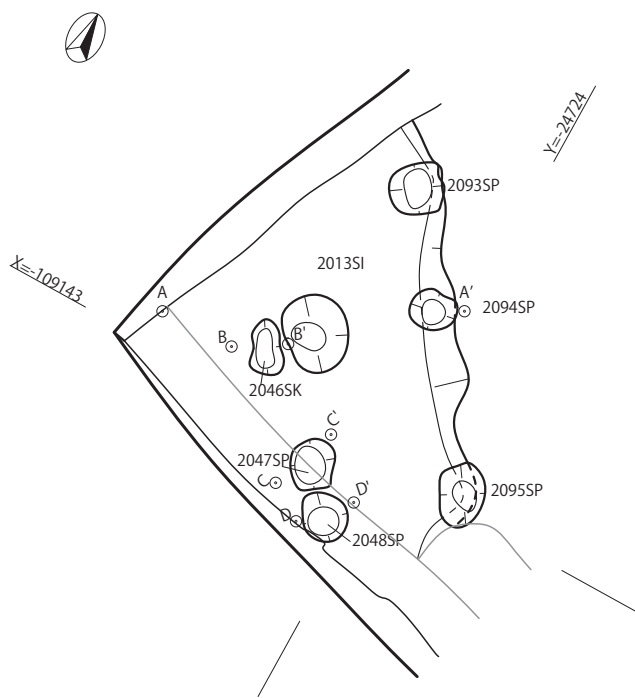
2地点B区2C6qグリッドに位置する。長さ1.57m以上、幅0.96m、深さ0.43mをはかる。調査区外に拡がるため全容は不明である。平面形状は楕円形を、断面形状はU字状を呈す。2194SDを切る。埋土上層に黄褐色粘土塊が人為的に置かれていた。当初は粘土壁とを考えていたが、調査を進めると底面では粘土が全く確認できず、遺構の短軸に沿うような形で粘土塊を確認した。断面観察から上層に粘土塊を置いている様子と粘土ブロックが混じる埋土とそうでは無い埋土が見られることから複数の遺構が重複している可能性も考えられる。出土遺物は瀬戸美濃系鉄釉天目茶碗(94)などが見られる。

竪穴状遺構 2013SI(第99図 図版12)

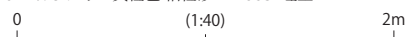
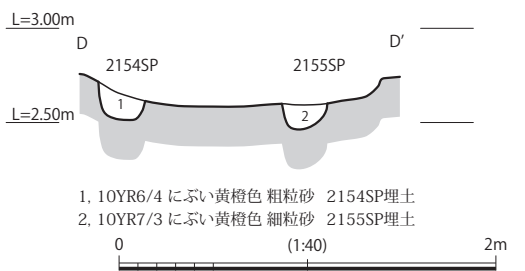
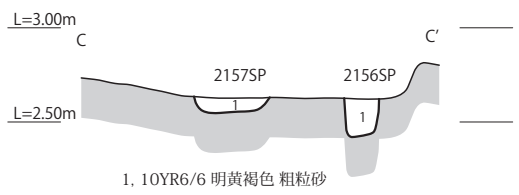
2地点B区2C9pグリッドに位置する。長さ2.10m以上、幅1.14m以上、深さ0.24mをはかる。調査区外に拡がるため全容は不明である。平面形状は方形を呈すと推定される。断面形状は皿形を呈す。壁面に沿って2093・2094・2095SPが、内部には2046・2047・2048SPが直線上に並ぶ様子が見られる。底面には貼床などは確認できなかった。内部のピットの底面がほぼ一定であることから、柱穴の可能性が考えられる。出土遺物は土師器羽釜、内耳鍋(53)、陶器片、



第 97 図 2 地点 B 区 区画溝 2079・2090・2150SD 平面・断面図



- 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘質シルト(2010SD埋土)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト(2148SK埋土)
- 10YR4/4 褐色 細粒砂(2148SK埋土)
- 10YR6/3 にぶい黄褐色 中粒砂(2148SK埋土)
- 10YR7/3 にぶい黄褐色 細粒砂(2148SK埋土)
- 10YR7/2 にぶい黄褐色 細粒砂(2148SK埋土)
- 10YR4/4 にぶい褐色 粘質シルト(2015SI埋土)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト(しまりあり 2015SI埋土)
- 10YR6/4 にぶい黄褐色 細粒砂(8層ブロック50%含む 2015SI埋土)
- 10YR6/4 にぶい黄褐色 細粒砂(2層ブロック40%含む 2015SI構築土か)
- 10YR6/4 にぶい黄褐色 細粒砂(2層ブロック40%含む 2015SI埋土)
- 10YR6/4 にぶい黄褐色 細粒砂(2層ブロック40%含む 11層より色調明るい 2015SI埋土)



第 99 図 2 地点 B 区 竪穴状遺構 2013・2015SI 平面・断面図

加工円盤、陶板などが見られる。遺物から 14～15 世紀と思われる。

竪穴状遺構 2015SI(第 99 図 図版 12)

2 地点 B 区 2C9p グリッドに位置する。長さ 1.84m 以上、幅 1.68m 以上、深さ 0.26m をはかる。調査区外に拡がるため全容は不明である。平面形状は方形を呈すと推定される。断面形状は皿形を呈す。2010SD と 2184SK に切られる。内部には 2155・2155・2156・2157SP があり、中でも 2155・2156SP が壁面の方向に平行に並ぶ様子が見られる。底面には貼床などは確認できなかった。内部のピットの底面がほぼ一定であることから、柱穴の可能性が考えられる。出土遺物は土師器羽釜、陶器播鉢、陶丸のほか古代の高坏脚部や弥生土器などが見られる。古い時代の遺物が混入するものの周辺の遺構分布などから 14～15 世紀と思われる。

竪穴状遺構 2080SI(第 100 図 図版 12)

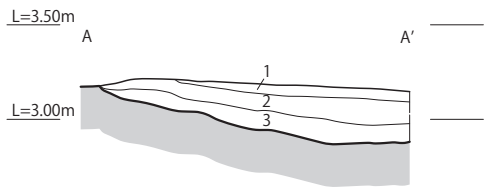
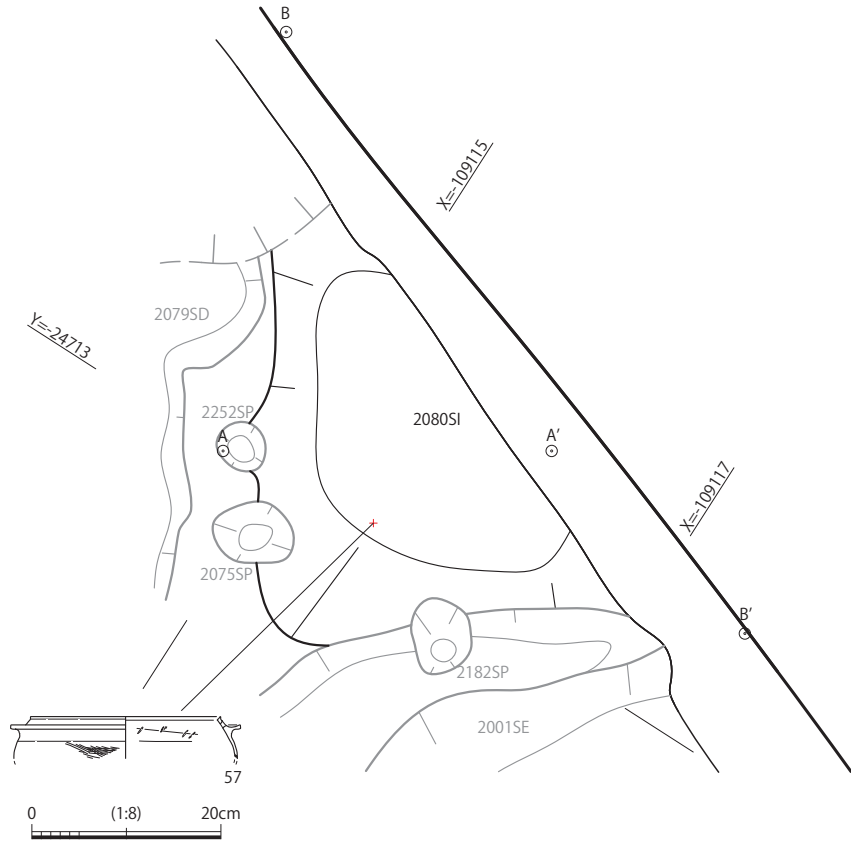
2 地点 B 区 2C3r・4r グリッドに位置する。長さ 2.09m 以上、幅 1.81m 以上、深さ 0.24m をはかる。調査区外に拡がるため全容は不明である。平面形状は方形を呈すと推定される。断面形状は皿形を呈す。2001SEK に切られる。底面には貼床などは確認できなかった。出土遺物は土師器羽釜(54～57)、陶器播鉢、折縁深皿、山茶碗(東濃型、尾張型)、古代の土師器や弥生土器(条痕文、櫛描文)などが見られる。古い時代の遺物が混入するものの周辺の遺構分布や羽釜を多く出土していることなどから 14～15 世紀と思われる。

竪穴状遺構 2097SI(第 101 図 図版 12)

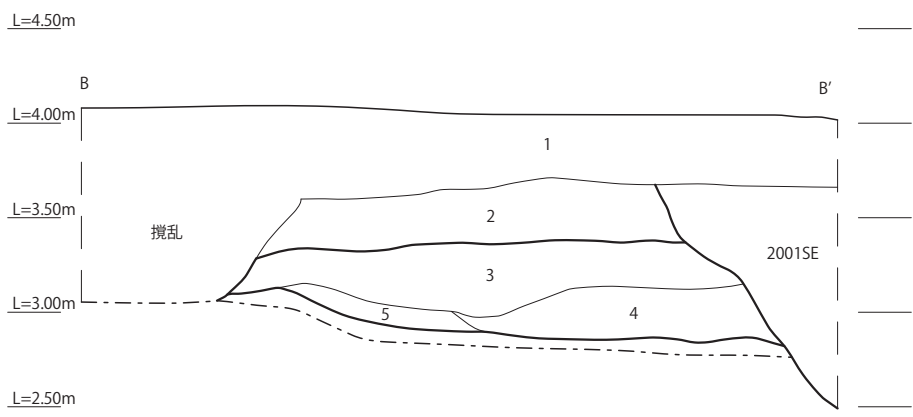
2 地点 B 区 2C2r グリッドに位置する。長さ 2.20m 以上、幅 2.85m 以上、深さ 0.43m をはかる。調査区外に拡がるため全容は不明である。平面形状は長方形を、断面形状は皿形を呈す。区画溝 2150SD に切られる。底面は一見テラス状を呈するよう見られるが、断面観察から複数の遺構が重複している様子が確認された。また、調査を進めていったところ一段深くなっていた箇所は溝状遺構 2324SD と対応することが判明した。出土遺物は土師器片、尾張型山茶碗(60)のほか、弥生土器鉢(61)、丸底壺底部(62)、古代土師器高坏脚部(63)などが見られる。古い時代の遺物が混入するが、これらは 2324SD に帰属する可能性が考えられる。13 世紀前半の山茶碗が出土していることや区画溝に切られることから、区画に先行する可能性が考えられるものの明言できる根拠は乏しい。

犬埋葬遺構 2088SX(第 102 図 図版 12)

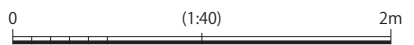
2 地点 B 区 2C2r グリッドに位置する。長さ 3.55m 以上、幅 2.32m、深さ 0.13m をはかる。平面形状は楕円形を、断面形状は皿形を呈す。2087SK に切られる。犬の頭骨、下顎骨、脊椎、肋骨などを埋葬している。しかし、一概に埋葬とはいえない様子が見られる。各部位の詳細については第 4 章にて述べるが、正位置を保っているのは脊椎と肋骨のみで、頭骨と下顎骨は本来の位置とは逆方向に向いている。また、脊椎が穴の傾斜に沿って屈曲していることから、埋葬を意図したものではなく、最小限の掘り込みをしている様子がうかがえる。さらに四肢の骨や肩甲骨や腰骨などが見られなかったことなど埋葬と判断するにはあるべき部位が確認できなかった。むろん後世の攪乱も受けていることもあるが、それならば肩甲骨や腰骨など半分分の残存が見られるはずなので、埋葬というよりは四肢を解体したのちに廃棄された可能性が考えられる。また、食用を指向した可能性も考えられるものの、骨には刃物痕などは確認できな



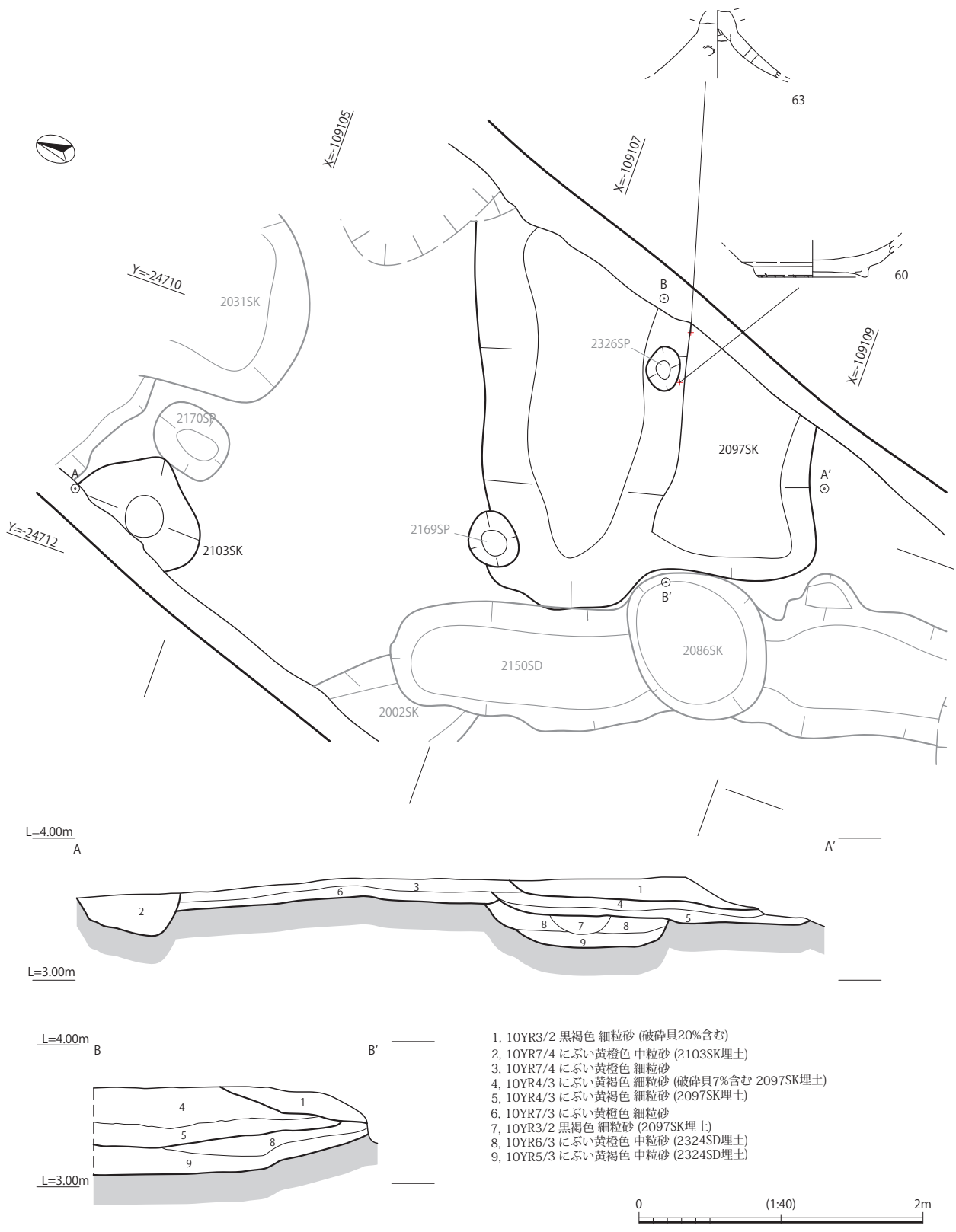
- 1. 10YR4/3 にふい黄褐色 砂質シルト(炭化物粒少量含む)
- 2. 10YR5/3 にふい黄褐色 砂質シルト
- 3. 10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルト



- 1. 表土
- 2. 10YR4/4 褐色 砂質土(包含層)
- 3. 10YR4/4 褐色 中粒砂(貝殻少量含む 2080SK埋土)
- 4. 10YR3/2 黒褐色 中粒砂(中世遺物含む 2080SK埋土)
- 5. 10YR4/3 にふい黄褐色 中粒砂(2080SK埋土)

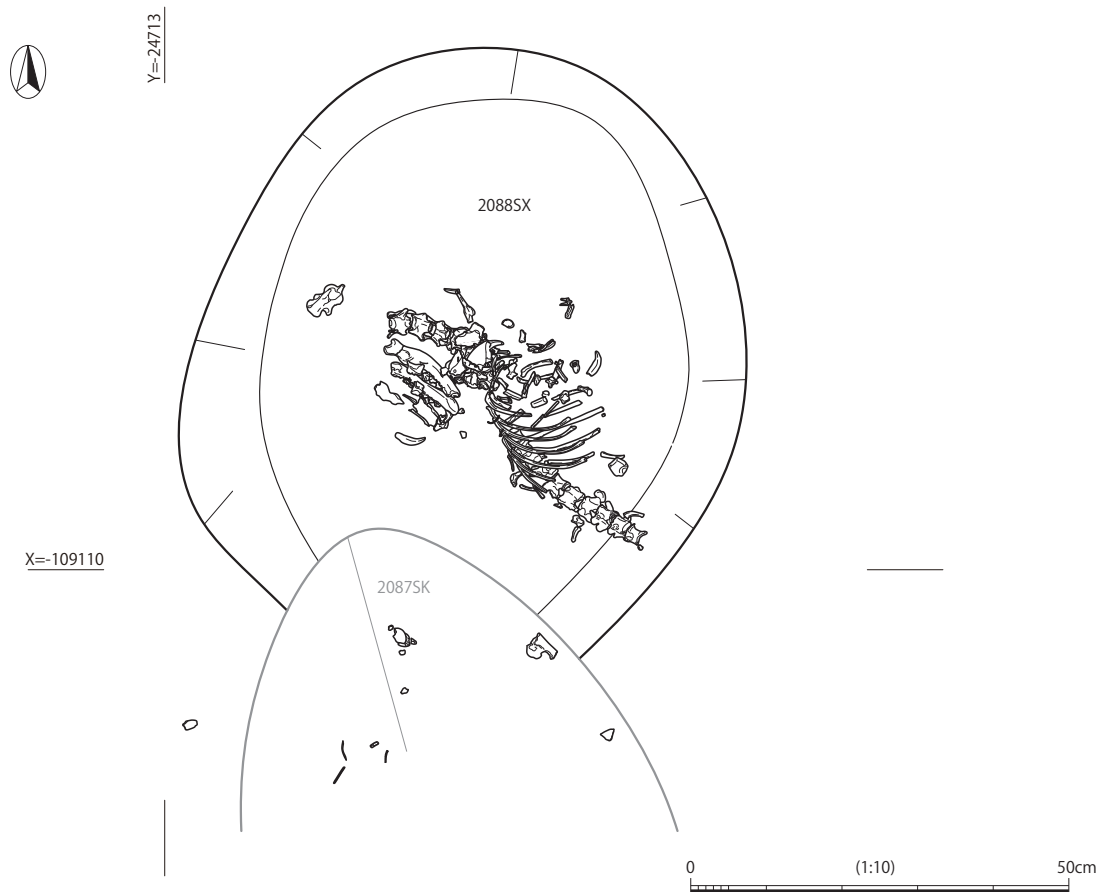


第 100 図 2 地点 B 区 竪穴状遺構 2080SI 平面・断面図



1. 10YR3/2 黒褐色 細粒砂 (破砕貝20%含む)
2. 10YR7/4 にぶい黄橙色 中粒砂 (2103SK埋土)
3. 10YR7/4 にぶい黄橙色 細粒砂
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂 (破砕貝7%含む 2097SK埋土)
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂 (2097SK埋土)
6. 10YR7/3 にぶい黄褐色 細粒砂
7. 10YR3/2 黒褐色 細粒砂 (2097SK埋土)
8. 10YR6/3 にぶい黄褐色 中粒砂 (2324SD埋土)
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂 (2324SD埋土)

第 101 図 2 地点 B 区 竪穴状遺構 20197SI 平面・断面図



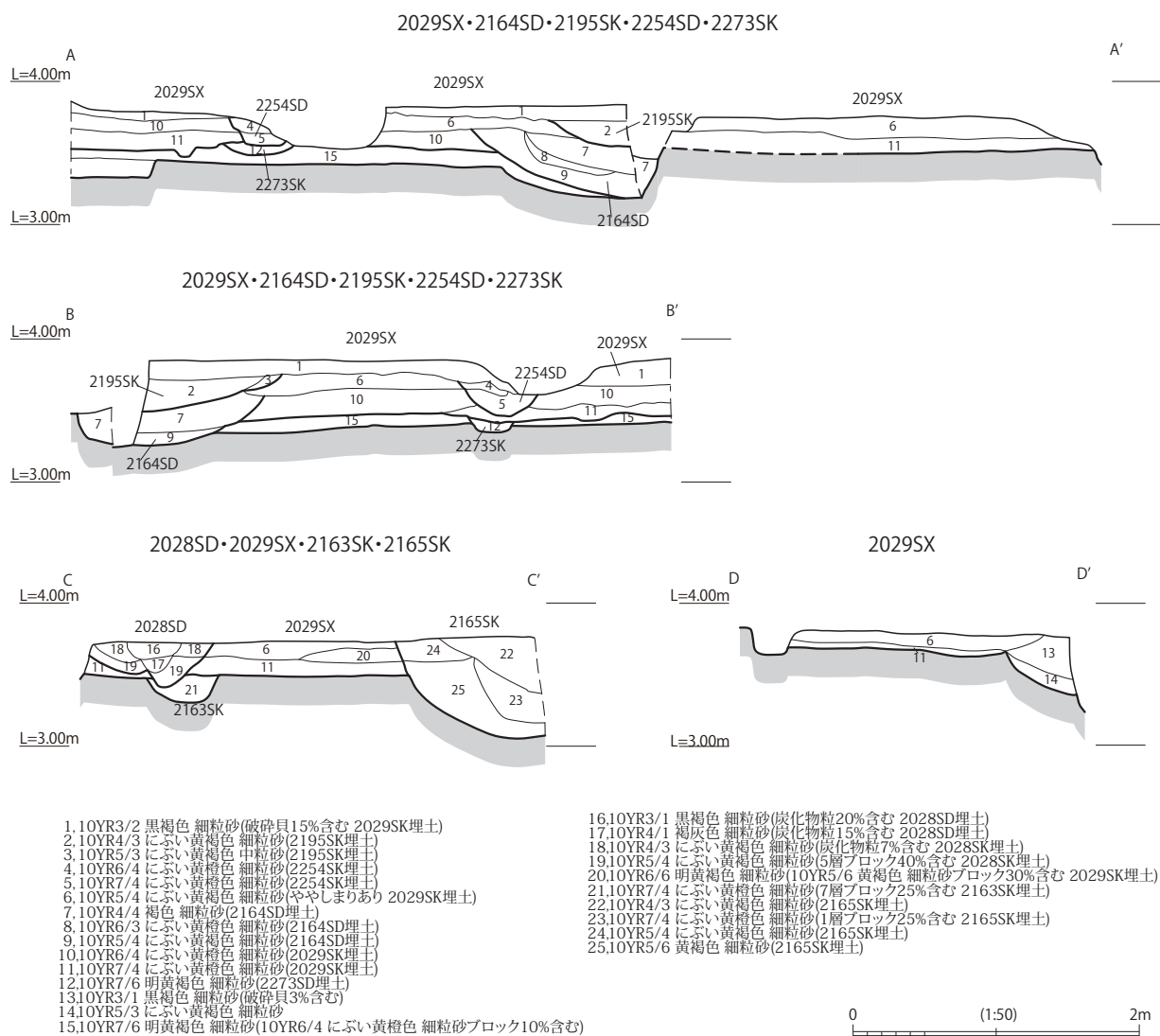
第 102 図 2 地点 B 区 犬埋葬遺構 2088SX 平面・断面図

かったこととそれならば骨がより損壊していると考えられるので、推定の域を出ない。その他、上層から別個体の犬の下顎骨やカエルの四肢骨と思われるもの、常滑産陶器片や弥生土器壺底部などが出土している。

古代の遺構

包含層 2029SX(第 103・104 図 図版 13・14)

2 地点 B 区 1C20s ~ 1C1r・s に位置する。検出時において、弥生土器を多く包含する黒褐色細粒砂の範囲とそれを切る溝状遺構 2028SD を確認したことから、竪穴状遺構が存在する可能性を考えた。そこで堆積範囲の土層観察を目的とした十字状のセクションを設定し、まずは 2028SD の調査を進めた。詳細については後述するが、弥生土器が多く出土していることから、壁周溝の可能性を考慮して、精査を進めたところ竪穴状遺構と判断できる遺構などは確認できなかったことから、セクションを残しつつ慎重に精査を進めた結果、複数のピットと北側に溝状の落ち込みを確認したことから、調査区の拡張を行い、さらに調査を進めることとした。一部を近世から現代の開発によって壊されていたが、良好な残存状況を確認したので既存のセクションを延長して、調査を進めた。まず、攪乱と貝殻片を多く含む中世堆積土を除去して、堆積状況の確認を行い遺構の把握に努めた結果、S 字状口縁台付甕を含む弥生土器が集中



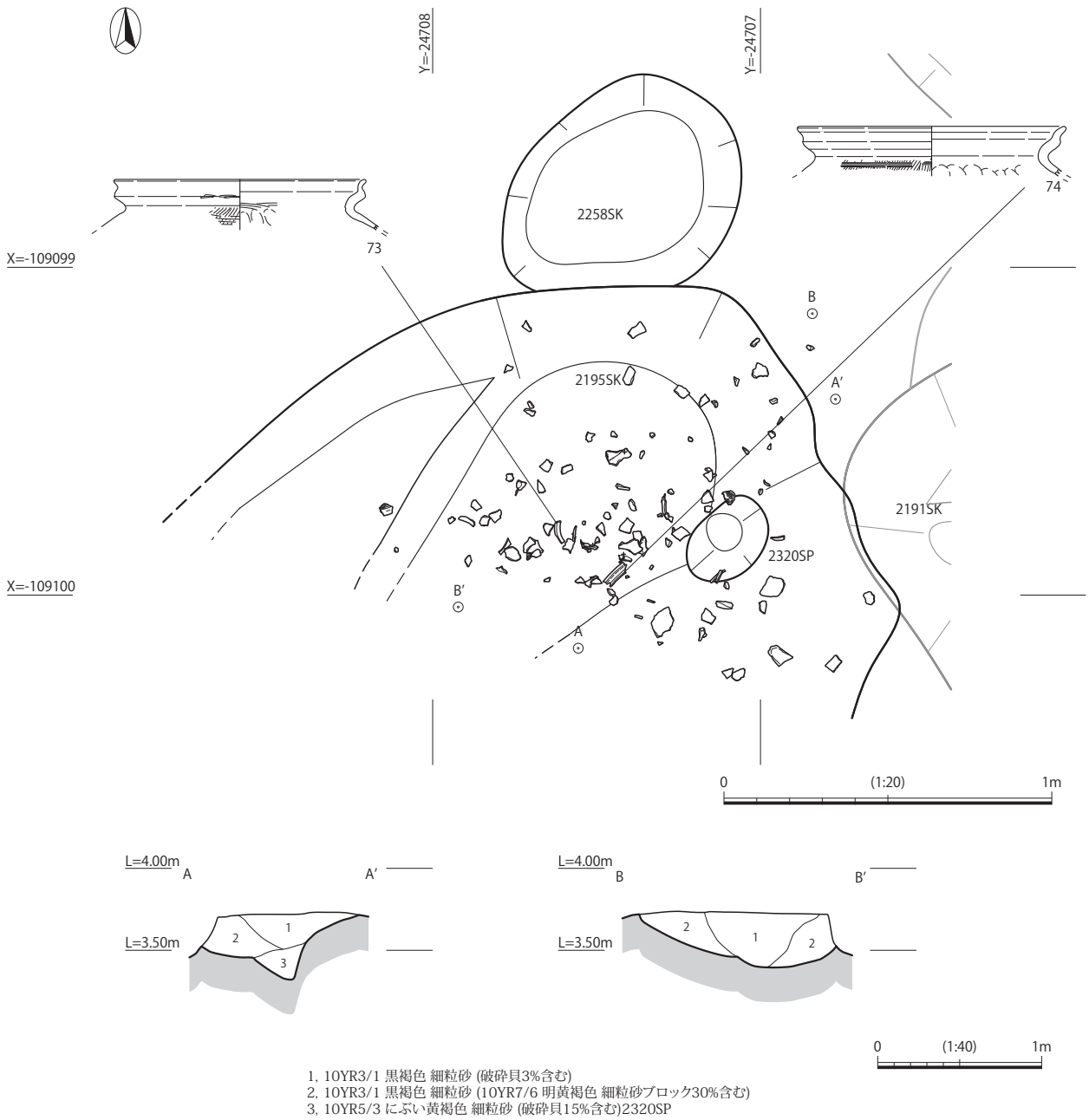
第 104 図 2 地点 B 区 包含層 2029SX・溝状遺構 2028・2254・2164SD 断面図

する土坑 2195SK とそれに切られる土坑 2258SK、調査区外に延びる弥生時代中期前葉の可能性が考えられる土坑 2199SK、東西方向に延びる溝状遺構 2254SD・2264SD のほか複雑に重複するピットを確認した。出土遺物は弥生時代中期前葉から古墳時代前期を中心した遺物(68～70)のほかミニチュア土器(71)や須恵器、石鏃(76)や剥片などが見られるものの、大半が細片のため詳細については不明瞭である。観察の結果、条痕文系の土器がやや多い傾向が見られることから弥生時代中期が活動の中心となる可能性が考えられる。

以下に主な遺構についての説明を述べていく。

溝状遺構 2028SD(第 103・104 図 図版 13)

2 地点 B 区 1C20s・2C1s グリッドに位置する。幅 0.62m、深さ 0.30m をはかる。南北方向にやや東側に曲がりながら直線状に延びるが、拡張区においては攪乱によって壊されていたため、続きは確認できなかった。断面形状は U 字型を呈する。出土遺物は弥生土器(条痕文、櫛描文)などが見られる。2029SX 上面から検出されていることから、弥生時代においても中

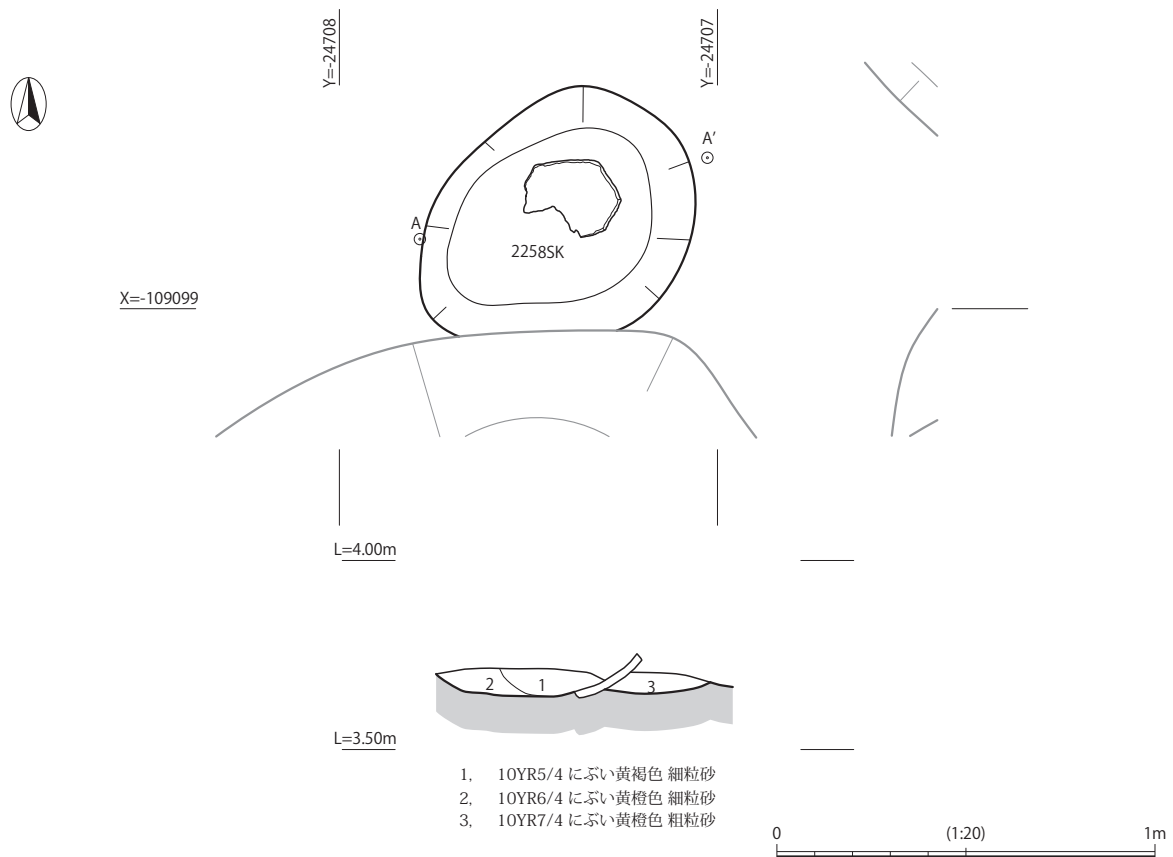


第 105 図 2 地点 B 区 土坑 2195SK 平面・断面図

期後葉以降の可能性が考えられる。

土坑 2195SK(第 105 図 図版 13)

2 地点 B 区 1C20s・2C1s グリッドに位置する。長さ 1.40m 以上、幅 1.16m、深さ 0.40m をはかる。平面形状は方形を、断面形状は碗形を呈す。当初の検出では確認できず、拡張の結果、検出した遺構であることから南側については確認できなかった。底面はテラス状を呈す。埋土内には遺物が多く見られるが大半が細片である。その中でも S 字状口縁台付甕 (73・74) やミニチュア土器 (71)、烏帽子型深鉢 (72) のほか、弥生土器 (条痕文) などがあるが、古墳時代の遺物がやや多く見られる。遺物から古墳時代前期には廃絶していた可能性が考えられる。



第 106 図 2 地点 B 区 土坑 2258SK 平面・断面図

土坑 2258SK(第 106 図 図版 13)

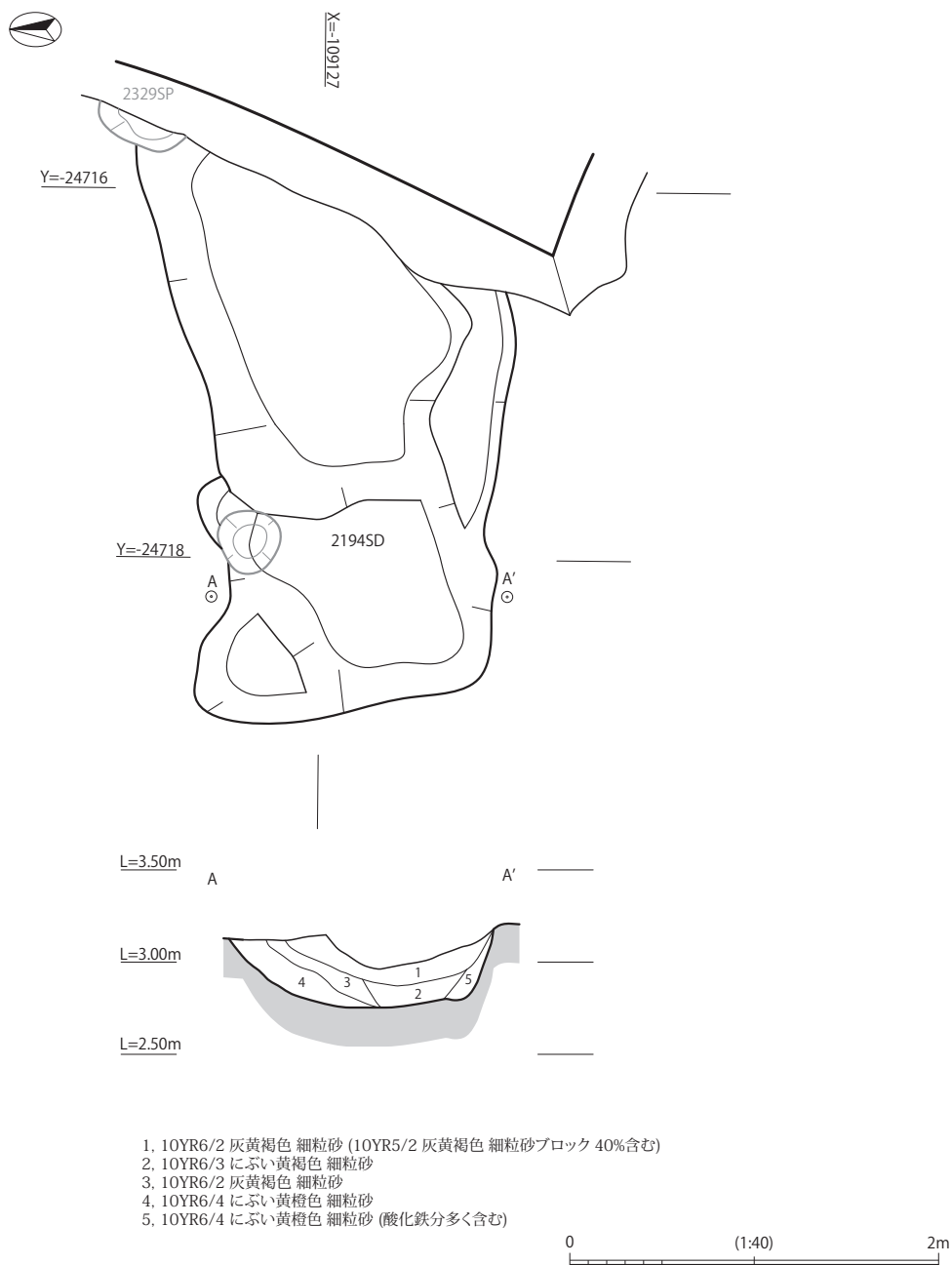
2 地点 B 区 1C20s グリッドに位置する。長さ 0.74m 以上、幅 0.63m、深さ 0.07m をはかる。平面形状は楕円形を、断面形状は皿形を呈す。2195SK に切られる。条痕文系深鉢の体部片が受け皿のような形で出土しているが、人為的に据えている様に見られるものの土器内埋土には内容物などは認められなかったことから、性格については現状では不明である。遺物から弥生時代中期前葉以降と思われる。

溝状遺構 2254SD(第 103・104 図 図版 14)

2 地点 B 区 1C20s グリッドに位置する。幅 0.29m、深さ 0.15m をはかる。東西方向にわずかに南側に曲がりながら直線状に延びる。東西を攪乱と遺構によって壊されているため、全容は不明である。溝の規模から竪穴状遺構に伴う壁周溝の可能性を考慮したが、対応する遺構が確認できなかった。また、断面観察から 2195SK と同じ面から掘り込まれている。出土遺物は弥生土器片(条痕文)が見られる。

溝状遺構 2164SD(第 103・104 図 図版 13・14)

2 地点 B 区 1C20s グリッドに位置する。幅 1.32m、深さ 0.42m をはかる。東西方向に直線状に延びるが東端で閉じる。西側が調査区外に延びることから全容は不明である。断面形状は碗形を呈する。断面観察から 2195SK に先行する。出土遺物は弥生土器片、剥片が見られ、遺物の出土高がほぼ同じであることから一括性が高いと思われる。

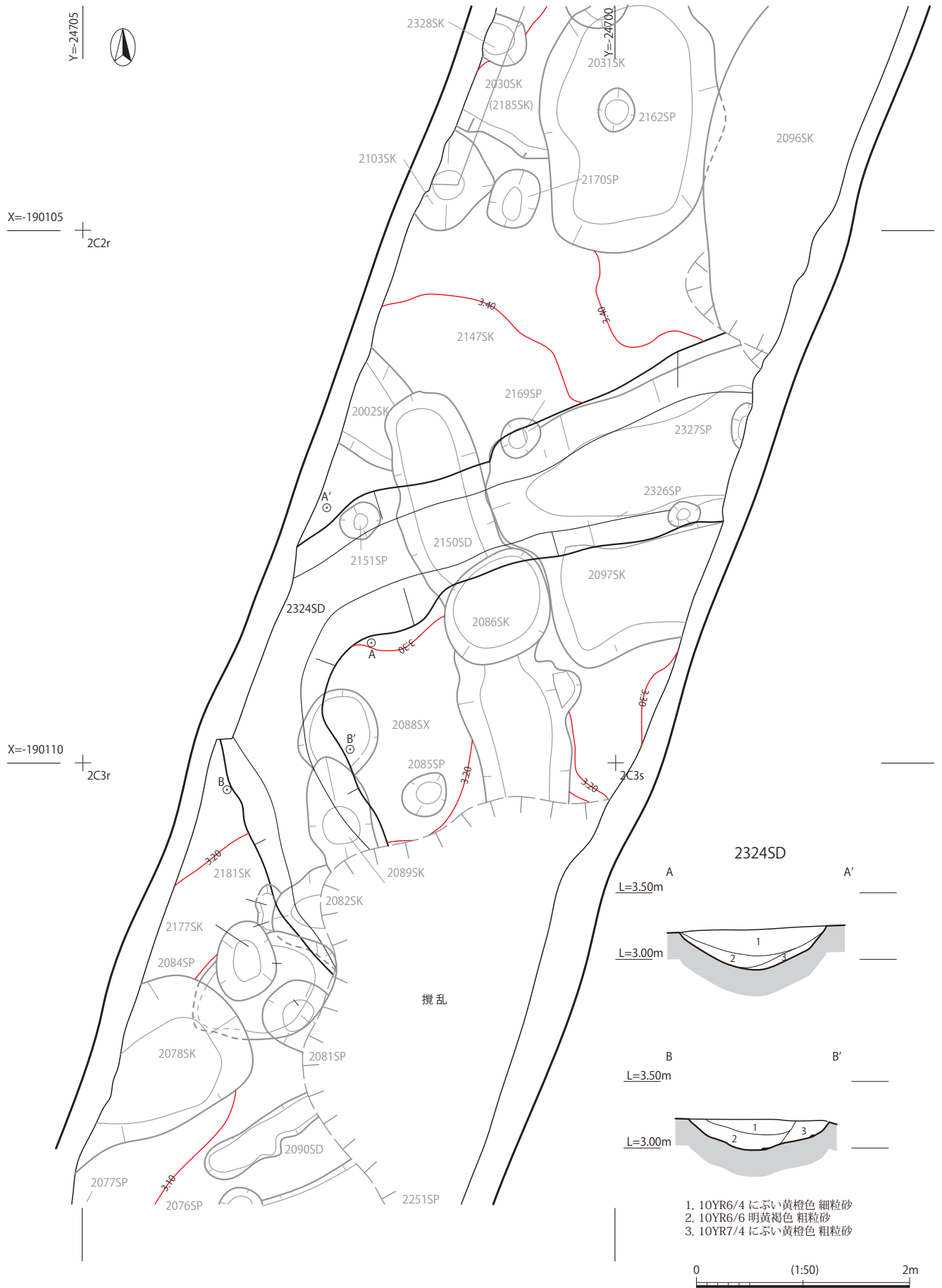


第 107 図 2 地点 B 区 溝状遺構 2194SD 平面・断面図

土坑 2199SK(第 103・104 図 図版 14)

2 地点 B 区 1C20s グリッドに位置する。長さ 0.59m 以上、幅 0.47m 以上、深さ 0.18m をはかる。遺構の南西部のみ検出した。断面観察から地山から掘り込まれているように見られるが、上層から遺物の集中が見られることから掘り込み面が上層となるのか、もしくは重複する遺構の存在が考えられる。出土遺物は弥生土器片が見られる。

以上が包含層 2029SX に関連する遺構である。断面観察や遺物から複層的及び連続性の高い遺構の展開が見られることが大きな特徴といえる。その反面当時の生活面の把握が難しく、実態については不明瞭であることから、周辺の遺構分布と照らし合わせて慎重な検討が今後必



第 108 図 2 地点 B 区 溝状遺構 2324SD 平面・断面図

要となろう。

溝状遺構 2017SD(第 94 図)

2 地点 B 区 2C8・9p グリッドに位置する。幅 0.59m、深さ 0.26m をはかる。南北方向に直線状に延びる。北側を攪乱によって壊されているため、全容は不明である。断面形状は皿形を呈す。2073SK を切る。区画溝 2010SD と比較すると軸線が北方向に振ることと出土遺物に中世のものが見られず、弥生土器が見られることから古代の遺構と判断した。出土遺物は岩滑式に比定される弥生土器鉢 (65) が見られる。

溝状遺構 2194SD(第 107 図 図版 14)

2 地点 B 区 2C6q グリッドに位置する。幅 1.60m、深さ 0.38m をはかる。南北方向に直線状に延びて西側で閉じるが、東側は調査区外に延びるため全容は不明である。断面形状は碗形を呈す。2045SK など複数の遺構に切られる。埋土は白色が強い灰黄褐色細粒砂を主体とし地山と非常に酷似している。このような様子は畑間遺跡 2 地点 A 区の 2245・2246SD でも見られたため古代の遺構と判断した。出土遺物は弥生土器 (条痕文) のほか山茶碗 (東濃型) などが見られる。

溝状遺構 2197SD(第 95・96 図 図版 14)

2 地点 B 区 2C6・7q・2C7p・2C7r グリッドに位置する。幅 3.76m、深さ 0.22m をはかる。平面形状は L 字状を呈す。断面形状は皿形を呈す。西側を攪乱によって壊され、東側が調査区外に延びるため全容は不明である。複数の遺構に切られる。埋土は地山に酷似するにぶい黄橙色細粒砂を主体であることから古代の遺構と判断した。出土遺物は弥生土器 (条痕文、櫛描文) が見られる。

溝状遺構 2324SD(第 108 図 図版 14)

2 地点 B 区 2C2・3r・2C2s グリッドに位置する。幅 2.91m、深さ 0.23m をはかる。平面形状は L 字状を呈す。断面形状は皿形を呈す。西側を攪乱によって壊され、東側が調査区外に延びるため全容は不明である。2097SI に切られる。埋土は地山に酷似するにぶい黄橙色細粒砂を主体であることから古代の遺構と判断した。出土遺物は見られなかった。

第3章 遺物

第1節 遺物の概要

今回の調査では整理コンテナ 39 箱分の遺物が出土した。内訳としては土器と陶磁器が大部分を占め、土製品、金属製品、石器、骨のほか土壌サンプルなどで、土器類が 32 箱、その他の遺物が 6 箱を数える。土器類は 1 地点 A・B 区で 4 箱、3 地点 17 箱、2 地点 A・B 区で 11 箱と、3 地点での出土が多く、それに続き 2 地点 A・B 区となり、1 地点 A・B 区となる。遺物の時期としては弥生時代中期から近代と広範囲にわたり、特に中世が多くを占める。遺物の型式や時期比定については参考文献に準拠する。

弥生時代～古墳時代の遺物は 2 地点 B 区からの出土が大部分を占める。細片が多く全容を把握できる遺物は少ないが、条痕文系土器から松河戸式の遺物が確認された。出土傾向としては包含層から比較的大きな個体が見られたことと出土地点が極端に偏ることが見られた。包含層からは岩滑式の波状文をもつ鉢の破片や廻間Ⅱ式の加飾壺の破片などが出土している。その他、弥生時代中期から後期に至る破片が出土している。遺構からの出土としては 2092SX 下の遺構からの出土が多く見られた。弥生時代中期前葉から古墳時代前期に至る破片が出土しているが、同一遺構内で時期差の大きい遺物の出土が見られることから、長期間の活動による遺構面の攪拌が非常に大きいものと思われる。そのほか石鏃や剥片、石核などが見られる。石材は下呂石、チャートなどが見られる。剥片は円礫を利用しているものが見られることから、石材の調達場所についても興味深い知見が見られた。

古代の遺物は 1 地点 A・B 区からの出土が見られた。概ね 9 世紀の遺物が中心でとくに 066SI から出土した須恵器坏や甑は一括性が高い。そのほか知多式 4 類の製塩土器が見られる。また、古代と中世の過渡期にあたる土師器伊勢型鍋古段階のものが僅かながら見られることから古代から中世にかけての継続的な活動を示唆するものと考えられる。

中世の遺物はすべての調査区から出土している。山茶碗、常滑産陶器、瀬戸美濃系陶器、土師器類は羽釜、伊勢鍋、内耳鍋、焙烙、土師皿、他にも青磁や白磁、銭貨など 13～17 世紀の遺物が見られる。山茶碗は尾張型と東濃型の 2 系統が見られた。尾張型は第 6～10 型式、東濃型は第 8～10 型式のものが見られ、破片が多いため正確な数量の把握は困難であるが、尾張型が優位を占める傾向が認められる。常滑産陶器の器種は甕が多く、播鉢、壺などが見られる。甕は第 8～11 型式のものが見られ、また井戸跡からの出土が多く、井戸枠に転用されていた様子が見られた。瀬戸美濃系陶器は天目茶碗、折縁皿、縁釉はさみ皿などの日常雑器が主体で、古瀬戸後期から大窯期のものが見られる。土師器類は羽釜、伊勢鍋、内耳鍋、焙烙などの煮沸具が多く見られる。中でも羽釜と内耳鍋が優位を占める傾向が認められる。土師皿はロクロ土師皿と非ロクロ土師皿が見られる。ロクロ土師皿は器形が山茶碗小皿に酷似しているものと、器壁が薄いものが見られた。また、胎土が赤みがかっているものが見られることから、中世から近世の過渡期を表す様子が見られる。

そのほかの遺物として銭貨、土錘、陶丸、加工円盤、瓦、砥石や礎石などの石製品や銅製分

銅などの金属製品、獣骨や亀の甲羅などの動物遺存体が出土している。

第2節 1 地点A・B区(畑間遺跡)の 出土遺物

竪穴状遺構 020SI 出土遺物

(第109図 図版15)

1は土錘である。紡錘形を呈し、孔部の両端は欠損している。縦方向に紐痕がみられる。2は須恵器の坏蓋である。口縁端部は、内傾気味に下方に折り曲げられている。

区画溝 022SD・063SD 出土遺物

(第110図 図版15)

3は、土師器内耳鍋である。外面内外面にヨコナデ調整、内面は横方向のナデ調整を施す。体部は球胴状を呈し、口縁部は内傾し、端部を強くナデる。外面には煤が付着している。16世紀前半と比定される。022SDから出土した。4は、山茶碗の底部である。上外方へ大きく広がる体部と回転糸切り底に低い貼付高台を有する。貼付高台には、粉殻痕を有する。063SDから出土した。尾張型6型式で13世紀中頃に比定される。

溝状遺構 065SD 出土遺物 (第110図 図版15)

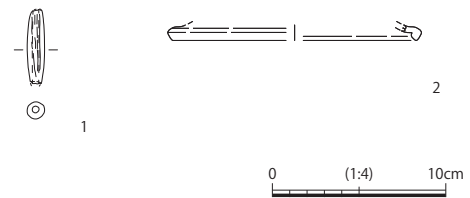
5は、山茶碗小皿である。外面はロクロナデを施し、底部は回転糸切り後に板状工具による圧痕が残っている。尾張型6型式で13世紀中頃に比定される。6は、山茶碗小皿である。外面はロクロナデを施し、底部は回転糸切り後にナデを施している。尾張型6型式で13世紀中頃に比定される。7は、伊勢型鍋である。外内面にナデ調整を施し、緩やかに外反する口縁部であり、口縁端部は、短く内側に折り返され肥厚している。伊勢型鍋の古い様相が認められる。11世紀以降と考えられる。

井戸 069SE 出土遺物 (第110図 図版15)

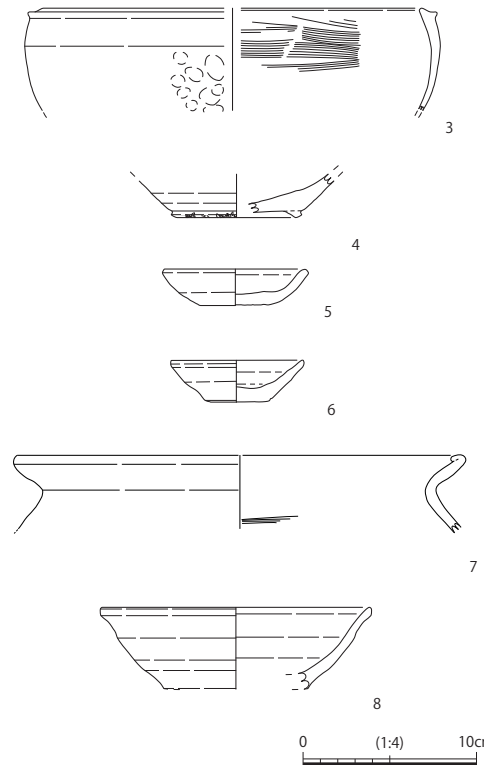
8は、山茶碗である。上外方に大きく広がりを持ち、口縁部には面を有している。尾張型6型式で13世紀中頃に比定される。

竪穴状遺構 066SI 出土遺物 (第111図 図版15・16)

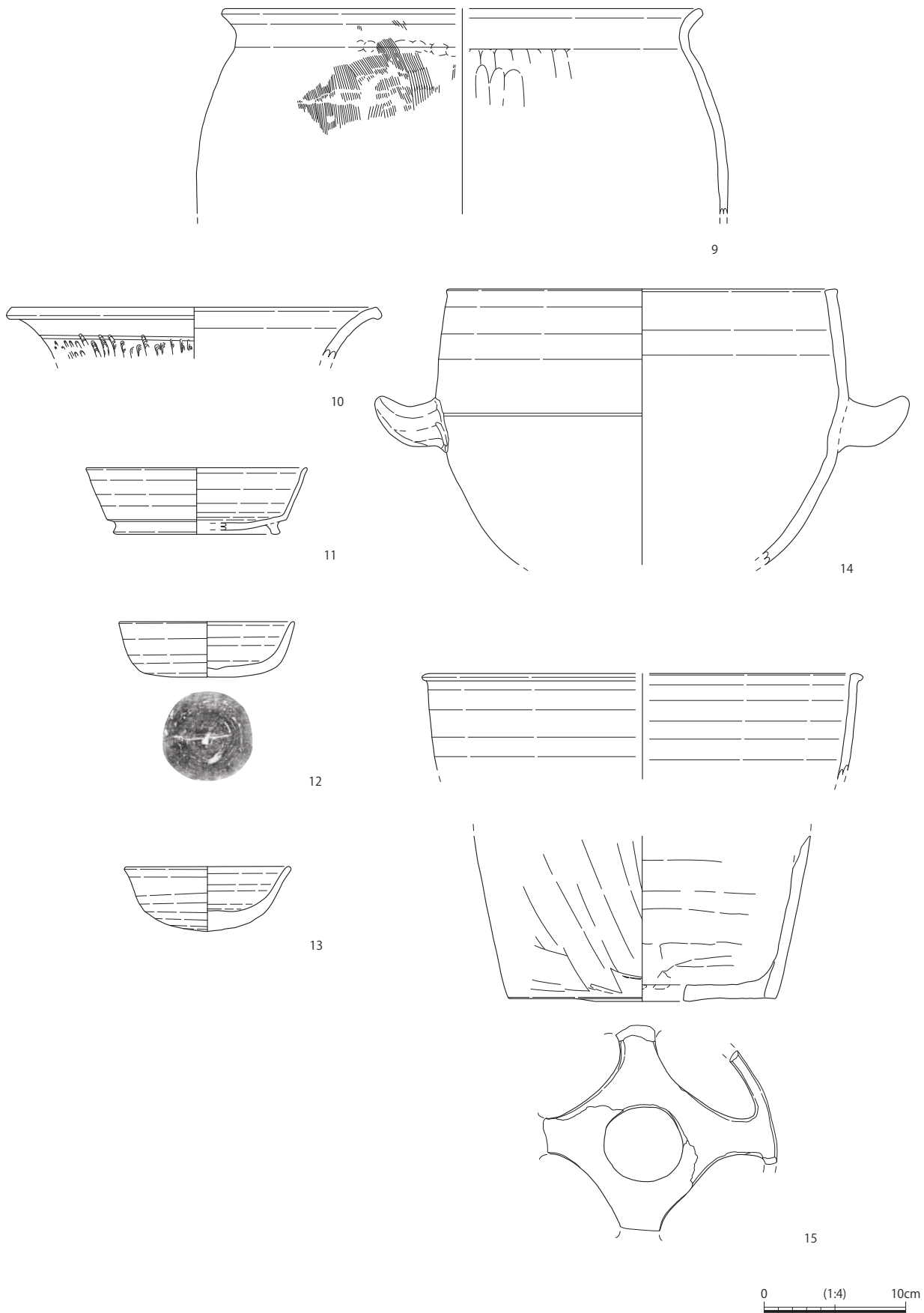
9は、土師器甕の胴部から口縁部である。外面に縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整を施



第109図 1 地点A区 竪穴状遺構 020SI
遺物実測図



第110図 1 地点A・B区 区画溝 022・063SD
溝状遺構 065SD・井戸 069SE 遺物実測図



第 111 图 1 地点 B 区 竖穴状遺構 066SI 遺物実測図

す。くの字状に短く外反した口縁部を有する。内面に一部被熱を受けている。濃尾系甕と比定される。10は、須恵器甕である。口縁部は緩やかに外反しており、口縁端部は下方へ摘み出し、外面に面を有している。頸部には、沈線をめぐらせた後、波状文を施している。11は、須恵器有台坏である。底部は回転ヘラケズリを施し、貼付高台を有する。高台端部を強くナデて、撥状を呈す。内面に×状もしくは×状の線刻が見られる。12は、須恵器坏身である。底部は回転ヘラケズリ痕がみられる。底部に線刻の可能性のある刻みが見られる。13は、須恵器坏身である。底部は回転ヘラ切り痕がみられる。内面の一部に被熱を受けている。器厚は厚く、底面はやや丸底状を呈す。14は、須恵器甕である。把手接合部に沈線が1条めぐっており、胴部から底部にかけては、平行状のタタキを施している。把手は牛角状を呈する。体部は球胴状を呈す。15は須恵器甕である。体部から口縁部にかけて緩やかに広がり、口縁端部は外方に摘み出されている。体部は筒胴状を呈す。蒸気孔は、円孔と楕円孔の多数孔であり、ヘラ切りによって穿孔されている。接合はできなかったが、2カ所に牛角状の把手を持つ。

池状遺構 001SG 出土遺物 (図版 21)

78は、染付碗の口縁部である。内外面にロクロナデ調整を施す。乳白色の釉薬を施した後、青色の釉薬を用いて内面には口縁部と体部下方に線を廻らせる。外面には草花文を描き、体部と底部の境目に線を廻らせる。18世紀以降と推定される。001SGから出土した。

第3節 3地点(畑間遺跡)の出土遺物

井戸 3010SE 出土遺物 (第112図 図版16)

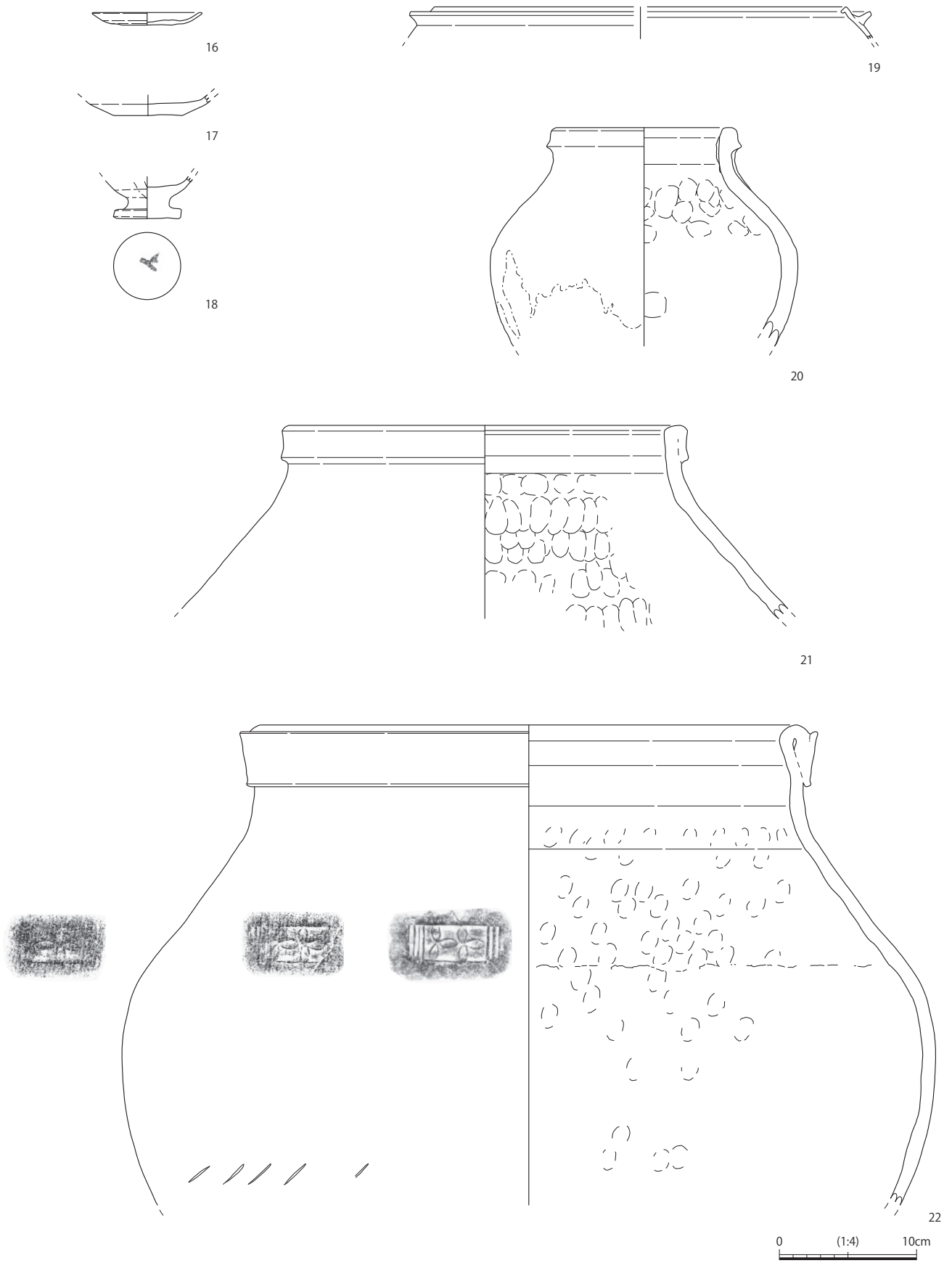
16は、山茶碗の小皿である。外内面共にロクロナデを施し器壁を薄く仕上げる。底部は回転糸切り痕がみられる。胎土は均質で白色が強い。東濃型9型式で14世紀中頃に比定される。17は、瀬戸美濃系の腰折皿である。外内面共にロクロナデを施しており、見込み部はユビオサエ痕、底部は回転糸切り痕がみられる。灰釉を施す。大窯期に比定される。18は、瀬戸美濃系の仏供である。ロクロナデの後、鉄釉が施されている。底面には、「上」と墨書されている。古瀬戸後期様式に比定される。

井戸 3019SE 出土遺物 (第112図 図版16)

19は、土師器羽釜である。口縁部は内彎ぎみに内傾しており、鏝はやや斜め上方に突出している。口縁端部は内面下方に摘み出されている。羽釜A4類で15世紀前半と比定される。

井戸 3223SE 出土遺物 (第112図 図版17・21～23)

20は、常滑産陶器の玉縁壺である。球形に張った体部と、短く外反する口縁部を持つ。頸部の内外面に釉だまりがみられる。21は、常滑産陶器の甕である。常滑9型式に比定される。口縁端部は、外側に折り返され肥厚させており、外面は板ナデが施されている。22は、常滑産陶器の甕である。口縁部は外側に折り返し、頸部に貼り付けられ肥厚している。胴部には、押印文が施されている。常滑10型式に比定される。3223SEの井戸枠として使用される。80は、常滑産陶器の大甕である。内外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部を外側に折り曲げたのち、強くナデる。常滑10型式で、15世紀に比定される。81は、常滑産陶器の大甕である。内外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部を外側に折り曲げたのち、強くナデる。わずかに口縁



第 112 図 3 地点 井戸 3010・3019・3223SE 遺物実測図

部の突出を割欠いている痕跡が見られる。常滑 11 型式で、16 世紀に比定される。82 は、常滑産陶器の大甕である。内外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部を外側に折り曲げたのち、強くナデる。肩部に「×」印の線刻が見られる。井戸杵材として使用されたため、口縁部の突出を削り取っている痕跡が見られる。常滑 11 型式で、16 世紀に比定される。83 は、常滑産陶器の大甕である。内外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部を外側に折り曲げたのち、強くナデる。井戸杵材として使用されたためか、口縁部の突出を打ち欠いている痕跡が見られる。常滑 8 型式で、15 世紀に比定される。84 は、常滑産陶器の大甕である。内外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部を外側に折り曲げたのち、強くナデる。自然釉がかかる。井戸杵材として使用されたためか、口縁部の突出を打ち欠いている痕跡が見られる。常滑 11 型式で、16 世紀に比定される。85 は、常滑産陶器の大甕である。内外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部を外側に折り曲げたのち、強くナデる。井戸杵材として使用されたためか、口縁部の突出を打ち欠いている痕跡が見られる。常滑 11 型式で、16 世紀に比定される。86 は、常滑産陶器の大甕である。内外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部を外側に折り曲げたのち、強くナデる。井戸杵材として使用されたためか、口縁部の突出を打ち欠いている痕跡が見られる。常滑 9 型式で、15 世紀に比定される。

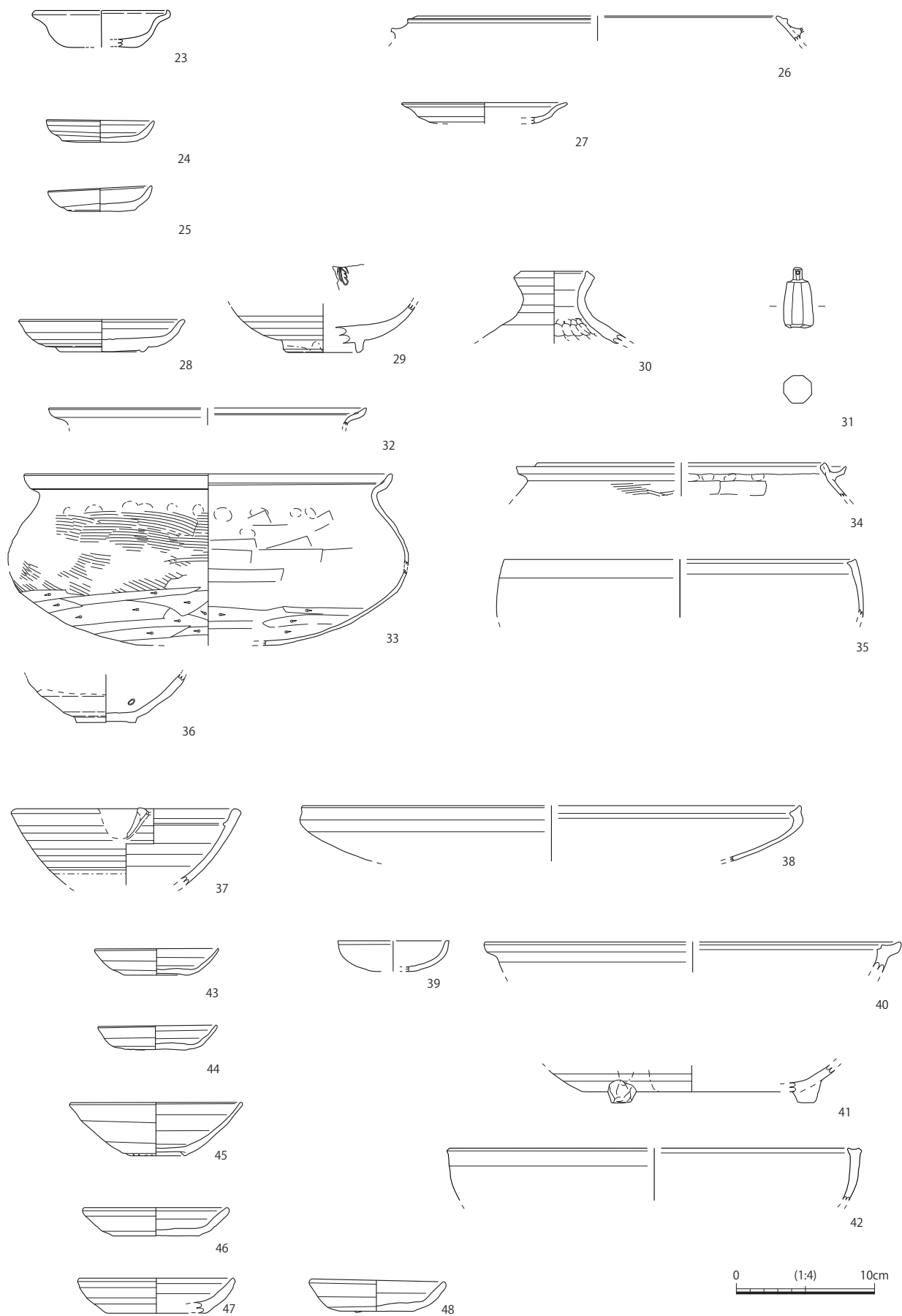
区画溝出土遺物 (第 113 図 図版 17)

23 は瀬戸美濃系の折縁皿である。内外面にロクロナデ調整を施す。口縁部は外反し、端部は内側に強く内彎する。内面に長石釉を施す。大窯 4 期に比定される。3015SD から出土した。16 ～ 17 世紀に比定される。79 は、山茶碗の口縁部である。内外面にロクロナデ調整を施す。器壁は薄く、東濃型 10 型式で、14 世紀中頃に比定される。3015SD から出土した。24 は、ロクロ土師皿である。体部から口縁部にかけて、緩やかに広がりを持つ。底部は回転糸切り痕がみられる。胎土は赤みを帯びる。3140SD から出土した。25 は、ロクロ土師皿である。体部が浅く、湾曲している。底部には回転糸切り痕がみられる。胎土は赤みを帯びる。3140SD から出土した。26 は、土師器羽釜である。口縁部は内彎ぎみに内傾している。口縁端部は、外面下方に折り曲げられ肥厚している。羽釜 A4 類で、15 世紀前半と比定される。3170SD から出土した。27 は、ロクロ土師皿である。器壁は薄く、緩やかに広がる体部と、口縁部は「ての字」形状を呈す。3170SD から出土した。

溝状遺構 3011SD 出土遺物 (第 113 図 図版 17・18)

28 は、瀬戸美濃系の志野丸皿である。上外方に広がる体部を持ち、底部に削り出し高台を有する。全面に長石釉を施している。29 は、青磁椀である。上外方に広がる体部を持ち、底部には削り出し高台を有する。淡い緑色の釉薬を施すが、底部は露胎している。見込み部分に印花が押されている。

30 は、常滑産陶器の小型壺口縁部である。内外面にロクロナデ調整を施す。口縁部は緩やかに外反しており、口縁端部は、ナデにより面を有している。体部はやや鋭角に広がる。鳶口壺か。31 は、銅製の分銅である。形状は釣鐘状を呈し、断面形状は八面体である。摘みに紐通孔を開ける。32 は、伊勢型鍋の口縁部である。緩やかに外反する口縁部であり、口縁端部は短く内側に折り返され肥厚している。鍋 A6 類で、15 世紀前半と比定される。33 は伊勢型



第 113 图 3 地点 区画溝・溝状遺構・土坑・掘立柱建物跡 遺物実測図

鍋である。内外面にヨコナデ調整を施す。体部外面は横方向のハケメ調整、底部外面は横方向のケズリを施す。口縁端部は折り曲げて、強くナデる。体部はやや扁平の球胴形を呈す。鍋 A6 類で、15 世紀前半と比定される。34 は、土師器羽釜である。口縁部は内傾しており、鐔はやや斜め上方に突出している。口縁端部は、内側に折り曲げ肥厚させた後、ヨコナデを施している。羽釜 A4 類で、15 世紀前半と比定される。35 は、土師器内耳鍋の口縁部である。口縁部は内傾しており、口縁端部はやや強くナデられており、面を有している。内耳鍋 A3 類で、16 世紀前半と比定される。

溝状遺構 3172SD 出土遺物 (第 113 図 図版 18)

36 は、天目茶碗の底部である。内外面にロクロナデ調整、外面に回転ヘラケズリを施す。削り出し高台である。灰釉を施す。大窯期に比定される。

土坑 3008SK 出土遺物 (第 113 図 図版 18)

37 は、瀬戸美濃系の片口皿である。ロクロナデの後、灰釉を施している。古瀬戸後期様式に比定される。38 は、焙烙である。丸底部から直線的な体部を持ち、内彎する。口縁端部はナデにより、若干ではあるが凹んでいる。外面に煤が付着している。19 世紀前葉と比定される。

土坑 3017SK 出土遺物 (第 113 図 図版 18・19)

39 は土師器小皿である。はヨコナデ調整を施す。手づくねで成形される。口縁端部は外反する。内面は黒く、瓦器に類似する。40 は、瀬戸美濃系の折縁深皿の口縁部である。ロクロナデが施されており口縁端部は、外側に摘み出されている。外内面共に灰釉が施されている。瀬戸後期様式に比定される。41 は、瀬戸美濃系の大皿である。上外方に広がる体部を持つ。外内面共に灰釉を施している。底部に獣脚を貼り付ける。瀬戸後期様式に比定される。42 は、土師器内耳鍋である。体部上方が直線的に立ち上がり、口縁部に至っている。口縁端部は強くナデられている。内耳鍋 A3 類で、16 世紀前半と比定される。

土坑 3269SK 出土遺物 (第 113 図 図版 19)

43 は、ロクロ土師皿である。外内面共にロクロナデを施しており、底部は回転糸切り痕が見受けられる。器壁は薄い。44 は、ロクロ土師皿である。体部から口縁部にかけて緩やかに広がりを持つ。体部にロクロナデ、見込み部は指ナデが施されており、底部は回転糸切り痕がみられる。器壁は薄い。

土坑 3187SK 出土遺物 (第 113 図 図版 19)

45 は、山茶碗である。上外方に広がる体部と、回転糸切り底に貼付高台を有する。貼付高台は、刳殻圧痕を有する。胎土は均質で器壁は薄い。東濃型 10 型式で 15 世紀に比定される。

掘立柱建物跡 005SB 出土遺物 (第 113 図 図版 19)

46 は、ロクロ土師皿である。体部が浅く、ロクロナデが施されている。底部には回転糸切り痕がみられる。3270SP から出土した。47 は、ロクロ土師皿である。体部が浅く、ロクロナデが施されている。底部には回転糸切り痕がみられる。3270SP から出土した。48 は、ロクロ土師皿である。体部から口縁部にかけて、緩やかに立ち上がっている。底部には回転糸切り痕がみられる。3251SK1 層から出土した。

第4節 2地点A区(畑間遺跡)・
2地点B区(東畑遺跡)の出土遺物

井戸 2001SE 出土遺物

(第114図 図版19)

49は、羽釜である。口縁部は内傾しており、鏝は水平ぎみに突出している。口縁端部は外に摘まみ出され、ナデにより面を有している。外面の一部に煤が付着している。羽釜A3類で、14世紀後半と比定される。96は、山茶碗の底部である。内外面にロクロナデ調整を施す。底部に回転糸切り痕が見られる。尾張型8型式で、14世紀前半に比定される。

区画溝 2214SD・2215SD・2285SD

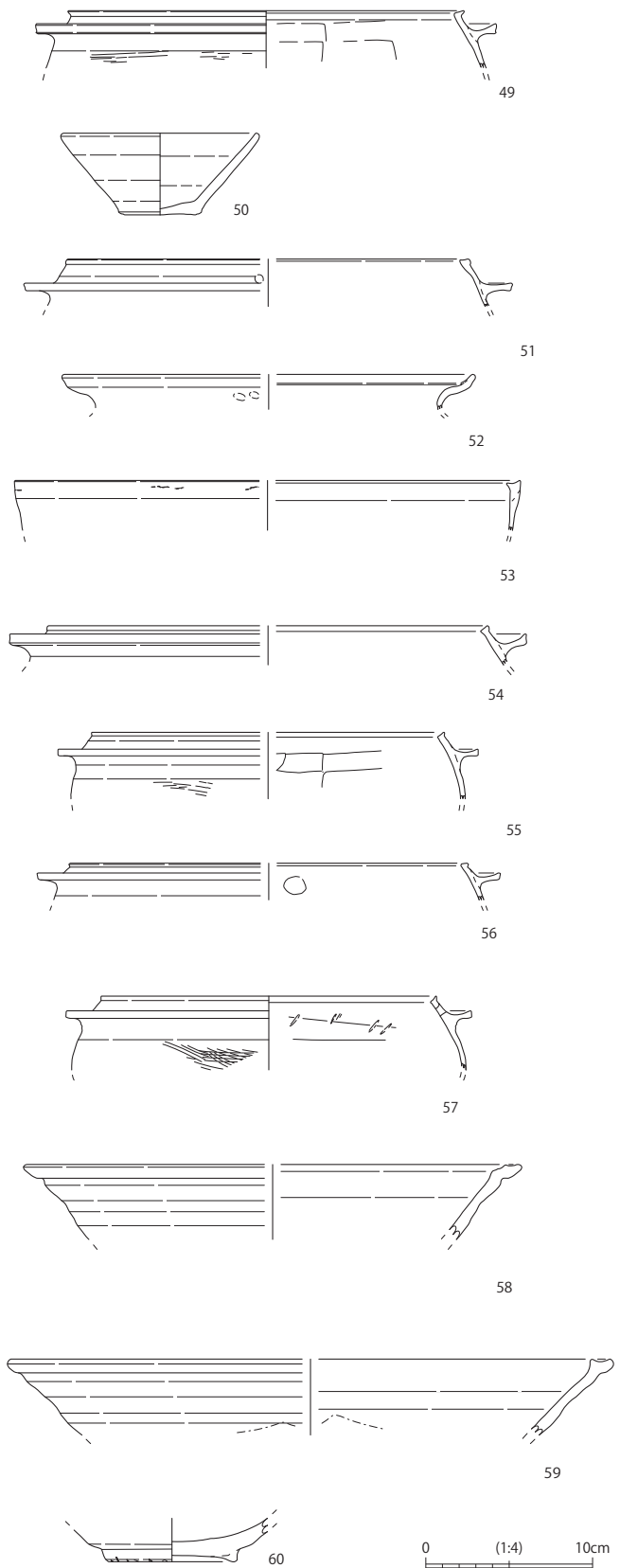
出土遺物(第114図 図版19)

50は、山茶碗である。上外方に大きく広がる体部を持ち、底部は回転糸切り痕と板状圧痕がみられる。体部に二次被熱痕が認められる。尾張型9型式で、14世紀後半に比定される。2214SDから出土した。51は、羽釜である。口縁部は内彎ぎみに内傾している。口縁端部はナデにより面を有している。鏝孔があり、前面に煤が付着している。羽釜A3類で14世紀後半と比定される。2215SDから出土した。52は、伊勢型鍋の口縁部である。緩やかに外反する口縁部であり、口縁端部は、短く内側に折り返され肥厚している。鍋A5類で、14世紀後半と比定される。2285SDから出土した。

竪穴状遺構 2013SI 出土遺物

(第114図 図版19)

53は、土師器内耳鍋である。体部上方が直線的に立ち上がり、口縁部に至っている。口縁端部は強くナデられている。



第114図 2地点A・B区 区画溝・溝状遺構・土坑
遺物実測図

一部、煤が付着している。内耳鍋 A1 類で、15 世紀に比定される。

竪穴状遺構 2080SI 出土遺物 (第 114 図 図版 19・20)

54 は、土師器羽釜である。口縁部は内傾しており、鐔は斜め上方に突出している。口縁端部は、ナデにより面を有している。羽釜 A4 類で、14 世紀後半と比定される。55 は土師器羽釜である。口縁部はやや内傾しており、鐔は水平ぎみに突出している。口縁端部はナデにより面を有している。羽釜 A3 類で、14 世紀後半と比定される。56 は、土師器羽釜である。口縁部はやや内傾しており、鐔は水平ぎみに突出している。口縁端部は外につまみ出され、ナデにより面を有している。羽釜 A3 類で、14 世紀後半と比定される。57 は、羽釜である。口縁部は内彎ぎみに内傾している。口縁端部は、ナデにより面を有している。鑿孔がある。羽釜 A4 類で、15 世紀前半と比定される。58 は、瀬戸美濃系の折縁深皿である。口縁部は緩やかに外反しており、ロクロナデを施している。灰釉を施している。古瀬戸後期様式に比定される。59 は、瀬戸美濃系の折縁深皿である。口縁部は緩やかに外反している。底部は回転ヘラケズリ、口縁部はロクロナデを施している。灰釉を施している。古瀬戸後期様式に比定される。

竪穴状遺構 2097SI 出土遺物 (第 114・115 図 図版 20)

60 は、山茶碗である。底部は回転糸切りの後に高台を貼り付ける。高台は貼り付けた後に強くナデて三角形に成形する。粉殻圧痕がみられる。内面の一部に自然釉がみられる。尾張型 6 型式で、13 世紀中頃に比定される。2097SK1 層から出土した。

61～63 は弥生土器である。61 は、鉢である。外面に横方向の条痕文、内面はナデ調整を施す。口縁部は、緩やかに外反する。口縁端部に沈線が 1 条巡り、一部端部をつまみ上げて稜を作る。岩滑式で、弥生時代中期前葉に比定される。62 は、壺の底部である。外面に縦方向のケズリが見られる。内面は剥離が著しいため、不明瞭である。外面に被熱が見られるものの焼成時のものか、使用によるものかについての判別はできない。63 は、高坏である。内外面共に摩耗が激しいが、外面にわずかにミガキの痕跡が見られる。内面はナデと横方向のハケメ調整が見られる。現状で 2 カ所の透かし孔が見られることと孔の間隔から、4 方向の透かし孔が推定される。廻間式Ⅱ期以降と推定される。

土坑 2016SK 出土遺物 (第 115 図 図版 20)

64 は、鉢である。内外面とも斜め方向の粗いハケメ調整を施す。体部から口縁部にかけて緩やかに広がりを持つ。器壁は薄く、作りはやや粗雑である。

溝状遺構 2017SD 出土遺物 (第 115 図 図版 20)

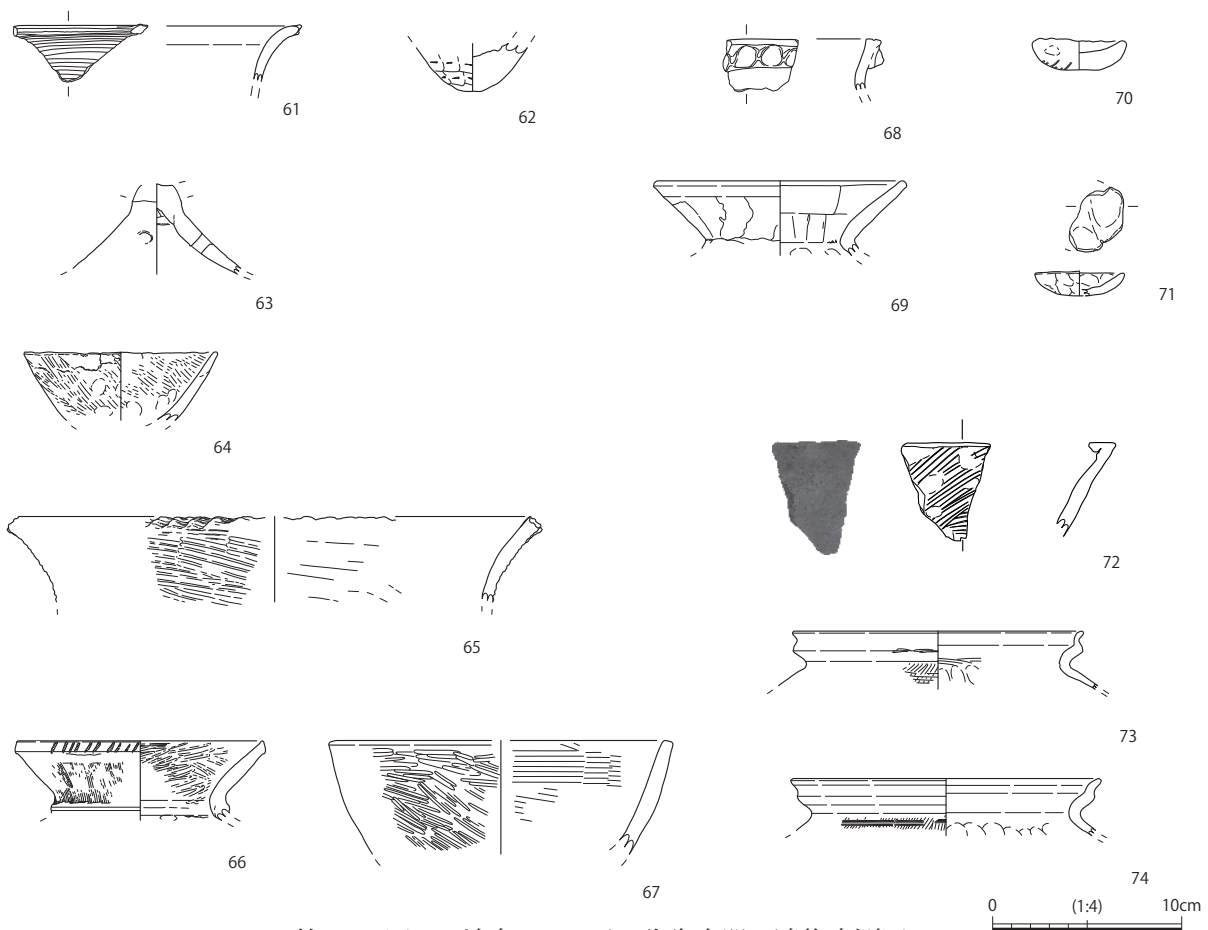
65 は、深鉢である。口縁部は逆八の字状に外傾しており、外面に条痕が施されている。口縁端部は、押し引き列点文が施されている。岩滑式で、弥生中期前葉に当たる。

ピット 2042SP 出土遺物 (第 115 図 図版 20)

66 は、壺である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反している。口縁端部はナデにより面を有し、刻みが施されている。頸部には沈線が 1 条施されている。山中式と推定される。弥生時代後期に比定される。

溝状遺構 2204SX 出土遺物 (第 115 図 図版 20)

67 は、鉢である。口縁部は緩やかに外反している。口縁端部はナデにより面を有している。



第 115 図 2 地点 A・B 区 弥生土器 遺物実測図

外面はハケメ調整後にミガキ、内面はハケメ調整が施されている。器厚はやや厚い。廻間式 I 期以降と推定される。弥生時代終末期から古墳時代前期に比定される。90 は、青磁碗の底部である。内外面にロクロナデ調整と外面に回転ヘラケズリを施す。削り出し高台である。淡い緑色の釉薬を施す。内面には草花文を刻印する。13～14 世紀と推定される。

不明遺構 2029SX 出土遺物 (第 115 図 図版 20)

68 は、鉢の口縁部である。外面に横方向の条痕文、内面はナデ調整を施す。口縁部外面に押圧突帯を貼り付けている。口縁部はやや外反し、口縁端部はやや内彎する。口縁頂部に沈線を巡らせる。岩滑式で、弥生中期前葉に比定される。69 は、壺である。ハの字状に外反する口縁部を持つ。口縁部は板ナデ、口縁端部はナデが施されている。松河戸式で、古墳時代前期に比定される。70 は、ミニチュア土器である。手づくねで成形され、外面にハケメ調整が見られる。胎土観察から弥生時代中期以降と推定される。

土坑 2195SK 出土遺物 (第 115 図 図版 21)

71 は、ミニチュア土器である。手づくねで作られており、指紋が明瞭に残る。口縁端部は薄く摘まみ上げられる。体部は浅い。胎土観察から弥生時代中期以降と推定される。72 は、深鉢である。外面に条痕が施される。口縁端部は強くナデられ、内側に突出している。いわゆる烏帽子型深鉢である。弥生時代中期前葉に比定される。73 は、S 字状口縁台付甕であり、短く外反した S 字状口縁部を持ち、口縁部下段に押引刺突文が施されている。廻間 II 式 1 段

階に比定される。74 は、S 字状口縁台付甕であり、短く外反した S 字状口縁部を持つ。廻間Ⅱ式 1 段階に比定される。

その他の遺構出土遺物 (図版 23・24)

87 は、山茶碗小皿である。内外面にロクロナデ調整を施す。口縁部は緩やかに立ち上がって外反し、端部は肥厚する。内面に自然釉がかかる。尾張型 6 型式で、13 世紀中頃と比定される。2030SK より出土した。89 は、山茶碗である。内外面にロクロナデ調整を施す。口縁端部はやや外反する。底部に回転糸切り痕が見られる。胎土の色調はやや赤みを帯び、器厚は薄い。東濃型 8 型式で、14 世紀中頃に比定される。2140SK より出土した。91 は、瀬戸美濃系陶器卸皿の底部である。内外面にロクロナデ調整を施す。底面には回転糸切り痕が見られる。内面に格子状の刻目を入れて、毛羽立たせる。古瀬戸後期様式に比定される。2206SD より出土した。92 は、土師器内耳鍋の口縁部である。内外面にヨコナデ調整を施す。口縁部は内傾し、端部を強くナデる。内耳鍋 A4 類に比定される。2143SK より出土した。93 は、山茶碗の底部である。内外面にロクロナデ調整を施す。底部に回転糸切り痕が見られる。高台を貼り付けて強くナデる。尾張型 6 型式で 13 世紀中頃に比定される。2218SK より出土した。94 は、天目茶碗の口縁部である。内外面にロクロナデ調整を施す。口縁部はやや直立し、端部は外反する。体部は屈曲する。鉄釉を施す。大窯期で、16 世紀以降と推定される。2045SK より出土した。95 は、土師器鍋の口縁部である。内外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部は折り曲げて、強くナデる。鍋 A5 類で、14 世紀後半以降と推定される。2245SD より出土した。97 は、瀬戸美濃系陶器の蓋である。内外面にロクロナデ調整を施す。中央を凹ませて、逆 U 字状のつまみを取り付ける。外面に鉄釉を施す。茶入の蓋か。大窯期で、16 世紀以降と推定される。2181SP より出土した。

第 5 節 その他の出土遺物

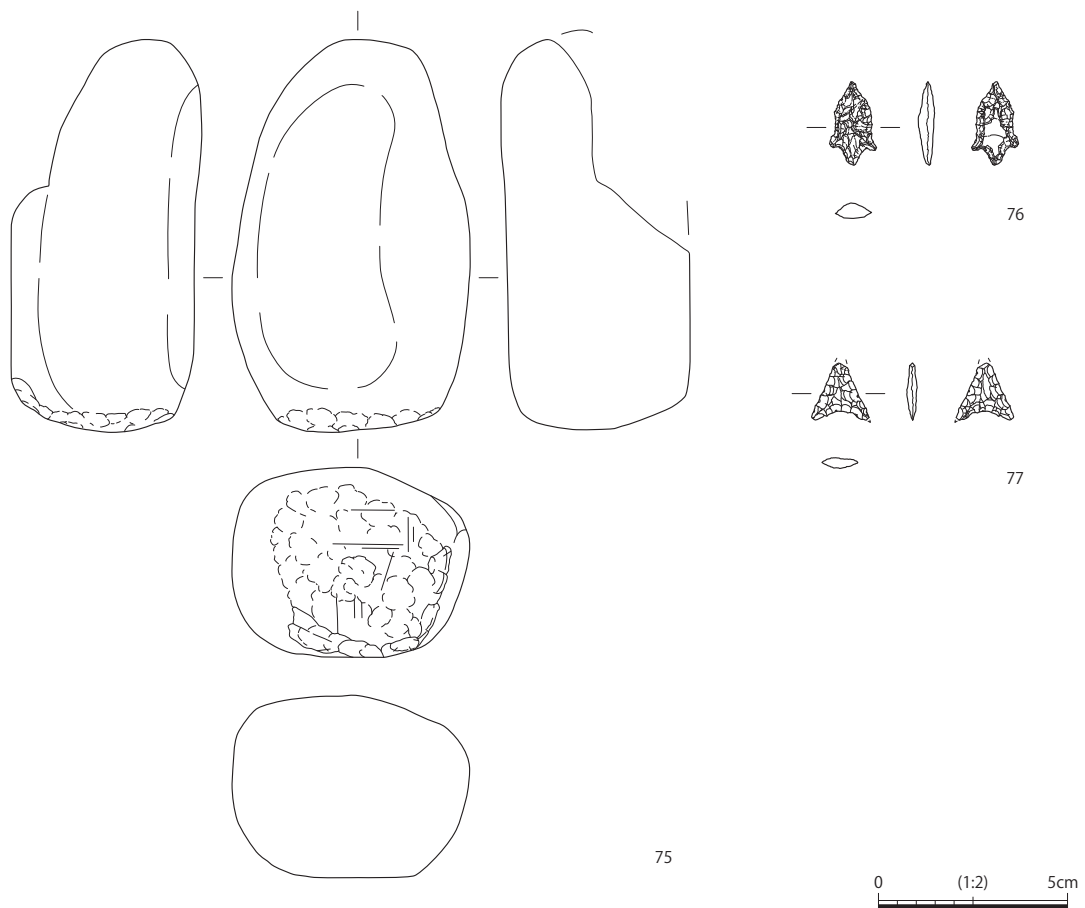
石器 (第 116 図 図版 21)

75 は、敲石である。下側面に敲打痕が見受けられる。3 地点攪乱より出土した。76 は、凸基式有茎石鏃である。断面形状は、厚く凸レンズ状を呈する。2 地点 B 区 2029SK から出土した。77 は、凹基式無茎石鏃である。断面形状は、凸レンズ状を呈する。2 地点 B 区 2246SD から出土した。88 は、砥石である。断面形状は方形を呈す。表と裏の 2 面を使用している。孔径 0.2 cm の紐通し孔を穿孔している。2 地点 B 区の攪乱より出土した。

銭貨 (図版 24)

銭貨は 6 枚出土した。唐銭が 1 枚と宋銭が 2 枚、金銭が 1 枚見られる。

98 は、紹聖元宝である。初鑄造は 1094 年である。3005SK より出土した。99 は腐食が著しいことから詳細は不明である。3005SK の周辺から出土した。100 は銘の判別はできなかったが、残存状況は良好である。101 は天禧通宝である。初鑄造は 1017 年である。3193SP より出土した。102 は、正隆元宝である。初鑄造は 1158 年である。2030SK より出土した。103 は、開元通宝である。初鑄造は 691 年である。2 地点 A 区より表採したことから、他からの混入物の可能性も考えられる。



第 116 図 石器 遺物実測図

土錘 (図版 24)

土錘は 113 点の出土が見られる。紙幅の都合上個々の説明は省くが、ほとんどが紡錘形を呈す。法量は長さ 1.7 ~ 5.7cm、幅 0.6 ~ 6.2cm、重さ 0.6 ~ 23.1g とバラツキが見られる。

104 は太い円筒形を呈す。孔径は 1.4cm と大きい。1 地点 062SK より出土した。105 ~ 112 は紡錘形を呈す。孔径は 0.3cm 前後をはかる。3 地点 3011SD より出土した。113 は紡錘形を呈す。△の線刻を施している。2 地点 A 区包含層より出土した。114 ~ 123 は紡錘形を呈す。孔径は 0.3cm 前後をはかる。2 地点 A 区 2200SX より出土した。



第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze

1. はじめに

愛知県東海市に位置する畑間・東畑遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 2 のとおりである。第 116 図に年代試料の画像を示す。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表2 測定試料および処理

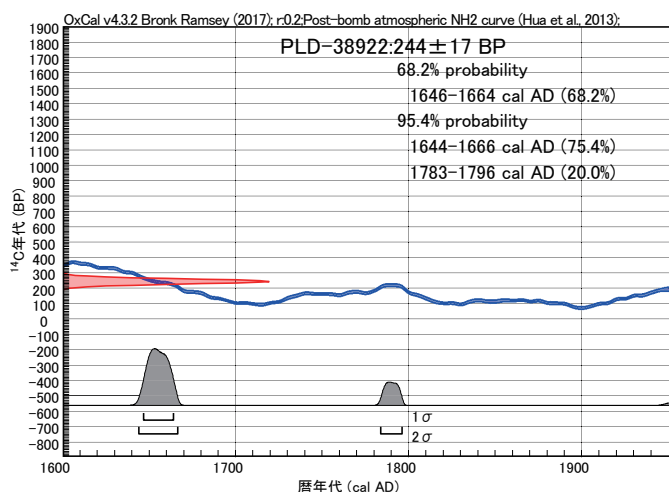
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-38922	調査区: 3地点 グリッド: 2A20t 遺構: 3017SK 遺物 No.407 試料 No.55	種類: 炭化物・材 試料の性状: 最終形成年輪 以外部位不明 状態: wet 依頼注意: 特になし	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

3. 結果

表 3 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、1950 年の大気の ^{14}C 濃度を 1 として計算した試料の ^{14}C 濃度を表す $F^{14}\text{C}$ 値を、第 117 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。



第 117 図 年代試料



第 118 図 暦年較正結果

表3 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-38922 試料No.No.55 遺物No.No.407	-25.77 ± 0.26	244 ± 17	245 ± 15	Post-bomb NH2 2013: 1646-1664 cal AD (68.2%)	Post-bomb NH2 2013: 1644-1666 cal AD (75.4%) 1783-1796 cal AD (20.0%)

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: Post-bomb atmospheric NH2) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

3地点 (グリッド: 2A20t) の 3017SK から検出された炭化材片 (遺物 No.407/ 試料 No.55) が今回の年代試料である。この炭化材の年代値は、245 \pm 15 BP を示し、2 σ の暦年代校正結果で 17世紀半～18世紀後半となる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337 – 360.
- Hua, Q., Barbetti, M. Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950–2010. *Radiocarbon*, 55(4), 1 – 14.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3 – 20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869 – 1887.

第2節 畑間・東畑遺跡から出土した動物遺体

中村賢太郎(パレオ・ラボ)

1. はじめに

愛知県東海市に位置する畑間・東畑遺跡の発掘調査で出土した動物遺体について同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、発掘調査現場で採集された動物遺体である。動物遺体が採集された地点は、井戸3223SE、包含層（グリッド2C4r）、犬埋葬遺構2088SX、包含層2029SXである。

動物遺体の観察は肉眼で行い、標本との比較により部位と分類群を同定した。観察の際には、焼けや切創などの痕跡に注意した。なお、必要に応じて、ノギスを用いてサイズ計測を行った。

3. 結果と考察

(1) 同定された種類

同定されたのは、ニホンイシガメ (*Mauremys japonica*)、イヌ (*Canis lupus familiaris*)、ウシあるいはウマ (*Bos taurus* or *Equus caballus*)、クロダイ属 (*Acanthopagrus* sp.) である。その他に哺乳綱 (Mammal) の可能性がある試料やカエル類 (*Anura*) の可能性がある試料が見られた。同定結果を表1に示す。

以下に遺構や層位ごとに採集された動物遺体の特徴を述べる。

(2) 井戸3223SE

本遺構では、ニホンイシガメ、ウシあるいはウマ、哺乳綱の可能性がある骨片が同定された。

3223SEで同定されたニホンイシガメの部位は、背甲、腹甲、左肩甲骨・前烏口骨、左上腕骨、左大腿骨などである。甲羅は破片化していたが、破片の接合により、背甲はおよそ1/3まで、腹甲はほぼ全体を復元できた個体もあった。腹甲右腹甲板の数に基づくと、ニホンイシガメの最小個体数は10である。左腹甲板～股甲板の1点には内外面に黒色で細かくひび割れた焼け焦げの痕が見られた。焼けた甲羅が見られた点から、ニホンイシガメは、井戸内に生息していたのではなく、人の手が加えられた後に井戸内へ置かれたと考えられる。さらに、焼け焦げの痕が外面だけでなく内面にも見られた点から、少なくともこの1個体については、解体（背甲と腹甲の分離）されていた可能性がある。ただし、背甲、腹甲、四肢骨のいずれにも切創を確認できなかった。10個体と多くのニホンイシガメが井戸内に置かれ、一部には焼いた痕も見られる点から、ニホンイシガメを用いた何らかの儀礼が行われた可能性がある。

ウシあるいはウマは、椎骨の破片のみが見られた。また、哺乳綱の肋骨の可能性がある骨片も見られた。

(3) 包含層（グリッド2C4r）

この層位での動物遺体は、遺構面上で検出されており、2088SKに伴う可能性もある。包含

層（グリッド 2C4r）では、イヌの左下顎骨 1 点が同定された。後述する 2088SX で出土したイヌとは別個体で、2088SX のイヌに比べてやや小さい。

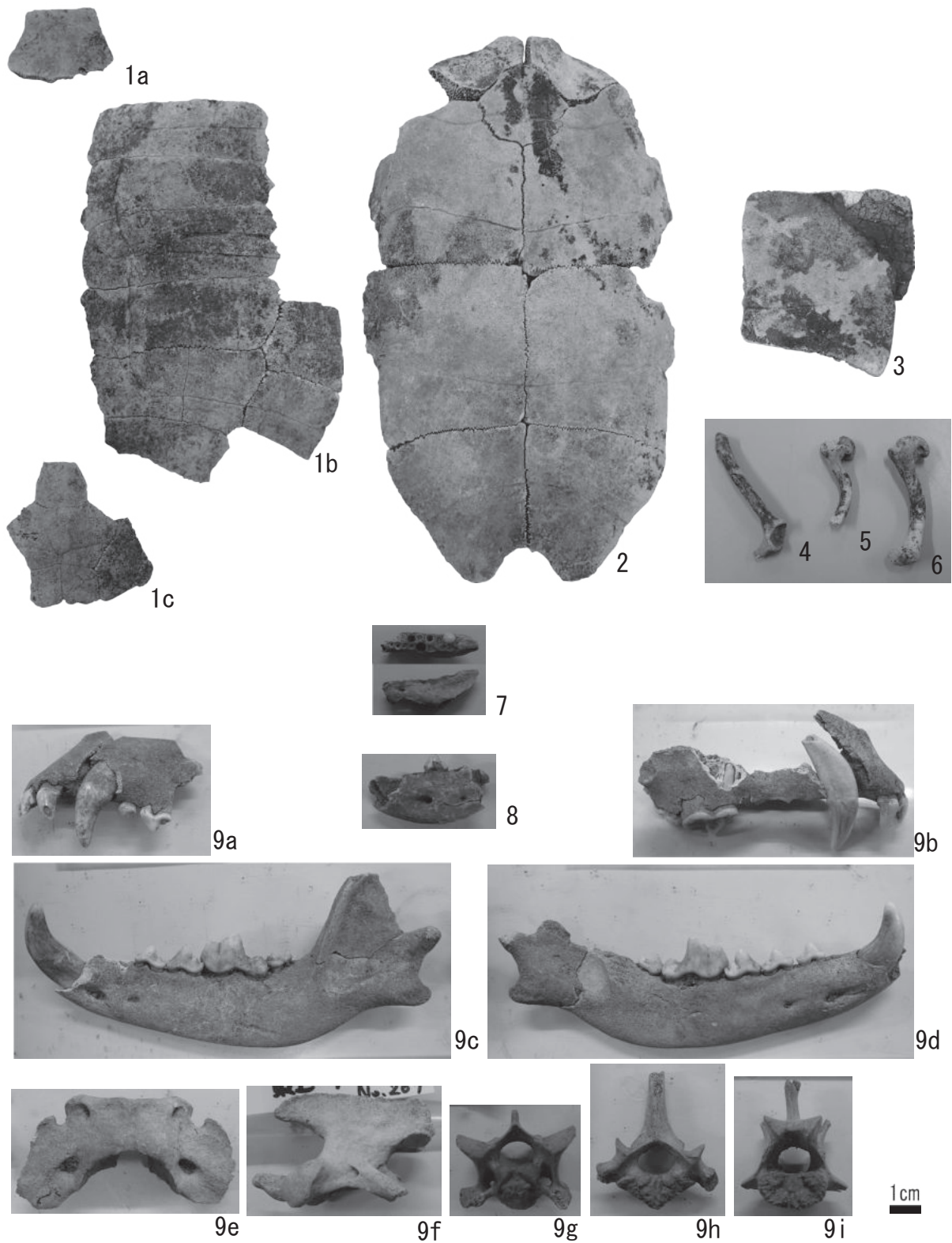
(4) 犬埋葬遺構 2088SX

本遺構では、イヌの頭部と胴部、カエル類の可能性のある骨片が見られた。

イヌの頭蓋骨、下顎骨、頸椎（環椎、軸椎ほか）、胸椎、腰椎、尾椎、肋骨が同定された。部位の重複は無く、1 個体に由来すると考えられる。歯の萌出状況から成獣と考えられる。性別は不明である。右下顎骨の最大長は 126.4mm で、小型～中型犬と言えるだろう。肩甲骨、仙椎、寛骨、四肢骨は確認できなかった。出土時には、頸椎（環椎と軸椎を除く）、胸椎、腰椎、肋骨が、解剖学的な正位置を保っていた。一方、軸椎は他の頸椎と離れ、下顎骨は頸椎の向きとは反対を向いていた。切創は確認できなかったものの、イヌの埋葬と考えるには不自然な状況（部位の不足や頭部の不自然な向き）が見られ、解体を経た後に 2088SX にイヌの骨が廃棄された可能性がある。

(5) 包含層 2029SX

本遺構では、クロダイ属の左歯骨 1 点が同定された。クロダイ属は、クロダイかキチヌと考えられる。いずれも沿岸～河口付近に生息するため、そうした場所で獲られたと考えられる。



1. ニホンイシガメ背甲：a. 項甲板、b. 右肋甲板～縁甲板、c. 椎甲板～臀甲板 (No. 585)
2. ニホンイシガメ腹甲 (No. 585) 3. ニホンイシガメ腹甲右腹甲板 (No. 585)
4. ニホンイシガメ左肩甲骨・前烏口骨 (No. 585) 5. ニホンイシガメ左上腕骨 (No. 585)
6. ニホンイシガメ左大腿骨 (No. 585) 7. クロダイ属左歯骨 (No. 1181)
8. イヌ左下顎骨 (No. 652) 9. イヌ：a. 左上顎骨 (No. 674・675・681)、
b. 右上顎骨 (No. 677・681・928・1056)、c. 左下顎骨 (No. 673・928・1012)、
d. 右下顎骨 (No. 928・1013)、e. 環椎 (No. 675)、f. 軸椎 (No. 1005)、g. 頸椎 (No. 1010)、
h. 胸椎 (No. 1010)、i. 腰椎 (No. 1015)

第 119 図 畑間・東畑遺跡から出土した動物遺体

表4-1 動物遺体一覧

箱No.	No.	地点	グリッド	出土地点	層位	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	—	項甲板	1	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	左	肋甲板・縁甲板	1	背甲の1/6程度
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	右	肋甲板・縁甲板	1	背甲の1/3程度、ほぼ完存の腹甲と同一個体
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	左	肋甲板	1	腹甲との接合部
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	不明	肋甲板	9	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	不明	縁甲板	12	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	—	臀甲板	1	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	—	ほぼ完存	1	最大長・18.5cm、1/3程度残る背甲と同一個体
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	左	喉甲板	1	593の腹甲右喉甲板と接合
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	左右	喉甲板・肩甲板	1	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	左	胸甲板	1	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	左	腹甲板・股甲板	2	2個体分、1点は内外面に焼け
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	右	胸甲板・腹甲板・股甲板	1	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	右	腹甲板・股甲板	1	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	甲羅	不明	破片	26	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	肩甲骨・前烏口骨	左	関節	1	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	上腕骨	左	近位端～骨幹	1	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	大腿骨	左	完存	1	
—	585	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	四肢骨	不明	破片	8	
16	593	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	不明	肋甲板	3	
16	593	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	不明	縁甲板	1	
16	593	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	右	喉甲板	1	585の腹甲左喉甲板と接合
17	595	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	—	臀甲板	1	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	—	椎甲板	1	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	不明	肋甲板	15	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	不明	縁甲板	21	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	不明	破片	2	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	左	喉甲板	2	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	右	喉甲板	1	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	左	肩甲板・胸甲板	2	2個体分
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	左	胸甲板	1	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	右	胸甲板	1	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	左	腹甲板	2	2個体分
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	右	腹甲板	7	7個体分
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	左	股甲板	1	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	腹甲	右	股甲板	1	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	甲羅	不明	破片	30	
36	596	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	椎骨	—	破片	3	
18・19	597	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	不明	縁甲板	1	
18・19	597	3	2B20b	3223SE	埋土	ニホンイシガメ	背甲	不明	破片	2	
19	598	3	2B20b	3223SE	埋土	哺乳綱?	肋骨?	不明	破片	3	
22	652	2B	2C4r	包合層	遺構面上	イヌ	下顎骨	左	下顎体	1	2088SXか?
36	671	2B	2C2r	2088SX		イヌ?	不明	不明	破片	1	
36	673	2B	2C2r	2088SX		イヌ	歯	左	下顎犬歯	1	1012左下顎骨と接合
36	674	2B	2C2r	2088SX		イヌ	歯	左	上顎第2前臼歯	1	675、681の左上顎骨と接合
36	674	2B	2C2r	2088SX		イヌ?	不明	不明	破片	1	
36	675	2B	2C2r	2088SX		イヌ	頭蓋骨	左	上顎骨	1	犬歯周辺。674、681の左上顎骨と接合

表4-2 動物遺体一覧

箱No.	No.	地点	グリッド	出土地点	層位	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
36	675	2B	2C2r	2088SX		イヌ	頭蓋骨	不明	破片	4	
36	675	2B	2C2r	2088SX		イヌ	環椎	—	半欠	1	
36	676	2B	2C2r	2088SX		イヌ	椎骨	—	破片	1	
36	676	2B	2C2r	2088SX		イヌ	肋骨	不明	破片	4	
36	677	2B	2C2r	2088SX		イヌ	歯	右	上顎犬歯	1	681、928、1056右上顎骨と接合
36	678	2B	2C2r	2088SX		イヌ?	不明	不明	破片	1	
36	681	2B	2C2r	2088SX		イヌ	頭蓋骨	左右	上顎骨	1	左は674、675と接合。右は677、928、1056と接合
36	681	2B	2C2r	2088SX		イヌ	歯	不明	下顎切歯	2	
36	681	2B	2C2r	2088SX		イヌ	頭蓋骨	—	破片	11	
36	681	2B	2C2r	2088SX		イヌ	椎骨	—	破片	6	
36	681	2B	2C2r	2088SX		イヌ	肋骨	不明	破片	1	
36	928	2B	2C2r	2088SX	1層清掃中	イヌ	頭蓋骨	右	上顎骨	1	677、681、1056右上顎骨と接合
36	928	2B	2C2r	2088SX	1層清掃中	イヌ	頭蓋骨	不明	破片	27	
36	928	2B	2C2r	2088SX	1層清掃中	イヌ	下顎骨	左	破片	1	1012左下顎骨と接合
36	928	2B	2C2r	2088SX	1層清掃中	イヌ	下顎骨	右	破片	1	1013右下顎骨と接合
36	928	2B	2C2r	2088SX	1層清掃中	カエル類?	四肢骨	不明	破片	2	
36	1005	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	軸椎	—	ほぼ完存	1	
36	1010	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	歯	左	上顎第3後臼歯	1	
36	1010	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	頭椎	—	ほぼ完存	5	
36	1010	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	胸椎	—	ほぼ完存	4	
36	1010	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	背側端	3	
36	1010	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	破片	3	
36	1010	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ?	不明	不明	破片	1	
36	1011	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	尾椎	—	ほぼ完存	2	
36	1011	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	椎骨	—	破片	5	
36	1011	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	背側端	3	
36	1011	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	破片	5	
36	1012	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	下顎骨	左	吻部欠く	1	673犬歯と928破片と接合
36	1013	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	下顎骨	右	下顎体	1	最大長[Id-Goc]126.4mm、928破片と接合
36	1014	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ?	不明	不明	破片	4	
36	1015	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	腰椎	—	ほぼ完存	10	
36	1015	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	尾椎	—	ほぼ完存	2	
36	1015	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	椎骨	—	破片	2	
36	1015	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	破片	20	
36	1045	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	背側端	4	
36	1045	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	破片	20	
36	1046	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	椎骨	—	破片	3	
36	1046	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	背側端	3	
36	1046	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	破片	4	
36	1047	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	椎骨	不明	破片	2	
36	1047	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	不明	不明	破片	1	
36	1056	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	歯	右	上顎第3後臼歯	1	677、681、928の右上顎骨と接合
36	1057	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ?	不明	不明	破片	1	
36	1058	2B	2C2r	2088SX	埋土	イヌ	肋骨	不明	破片	1	
29	1181	2B	1C20s	2029SX	4層	クロタイル	歯骨	左	1/2壊	1	

第3節 畑間・東畑遺跡出土金属製品の保存処理

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

愛知県東海市大田町畑間、東畑に所在する畑間・東畑遺跡は、発掘調査によって弥生時代前期から江戸時代の複合遺跡であることが確認されている。

今回は、本遺跡から出土した鉄製品1点、銅製品1点の計2点について保存処理を実施する。

1. 資料

資料は畑間・東畑遺跡から出土した鉄製品1点、銅製品1点の計2点である。鉄製品は「No. 369 3地点 2A20t グリッド 3017SK 2層 鉄製品」と呼称される棒状の製品で、処理前の状況では3破片が確認される。銅製品は「No. 425 3地点 3B1b グリッド 3011SD 1層 銅製品」と呼称される分胴様の製品で、ほぼ完形である。処理前、処理後の写真を第119図に示す。

2. 処理方法

(1) 処理前調査

保存処理前の資料の状況を写真で記録するとともに、遺物本来の形状や内部状態の把握のためにX線透過撮影を行った。各遺物の撮影条件は次の2パターンで実施した。X線写真は第120図に示す。

電圧 110KV、電流 5mA、照射時間 15秒間～30秒間、照射距離 1m

(2) 一次クリーニング・脱塩準備

エアブラシ・メス・ニッパー・グラインダーなどを用いて錆及び表面に付着した土などを除去した。

(3) 脱塩処理および脱アルカリ処理

アルカリ溶液による脱塩処理、脱アルカリ処理を行った後、錆の安定化を図るため、ベンゾトリアゾール1%エタノール溶液に一日浸漬させ、錆の安定化処理を行い、その後約24時間乾燥を行った。

(4) 二次クリーニング

エアブラシ・メス・ニッパー・グラインダーなどを用いて錆及び表面に付着した土などを除去した。

(5) 樹脂含浸

アクリル樹脂の減圧含浸および塗布を実施した。

(6) 接合

接合にはエポキシ系接着剤を使用した。

(7) 処理後調査

処理後の写真を撮影、状態の記録を実施し、脱酸素剤とともにフィルムパックに密封した。



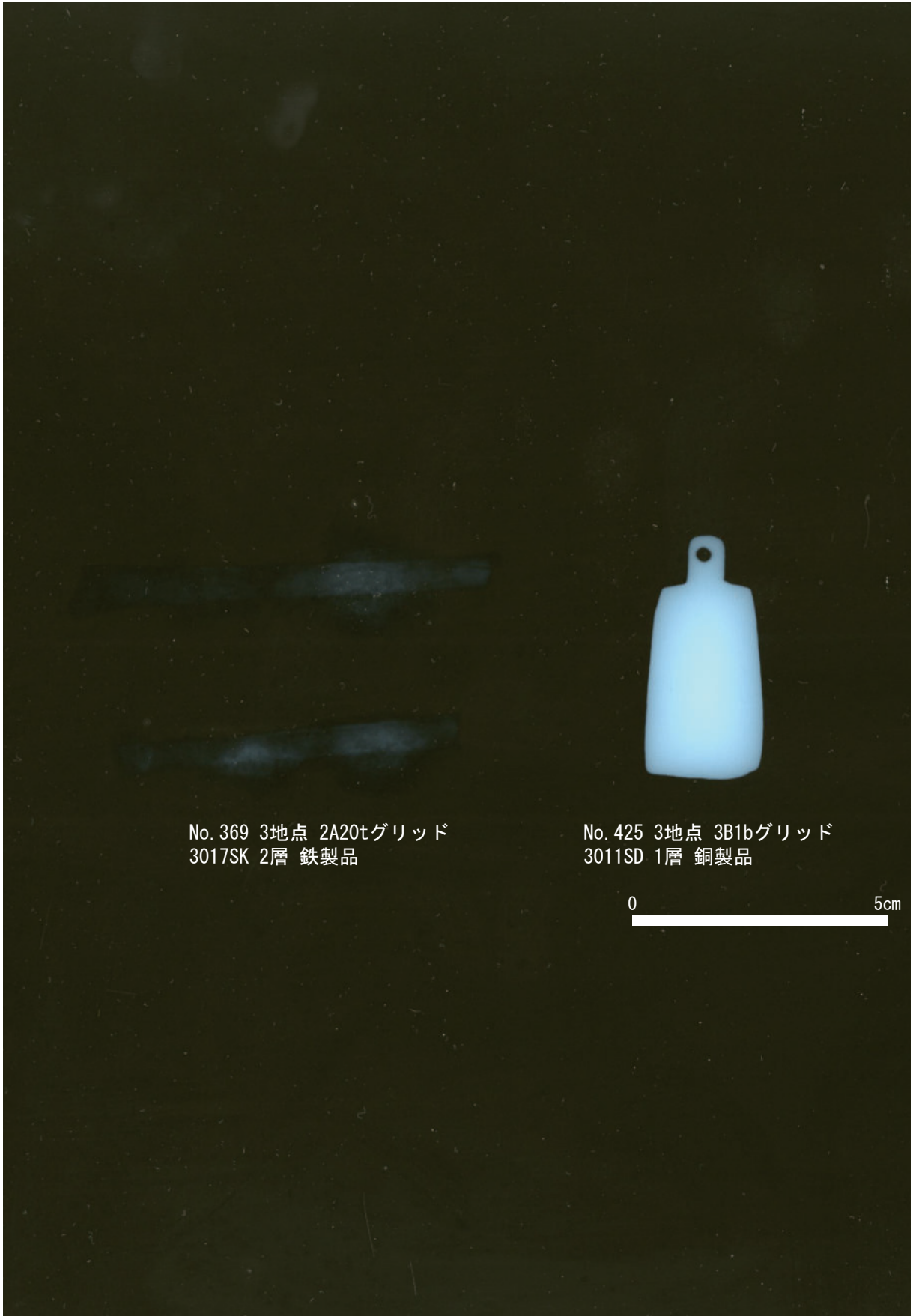
No. 369 3地点 2A20tグリッド 3017SK 2層 鉄製品
 (左：処理前、右：処理後)



No. 425 3地点 3B1bグリッド 3011SD 1層 銅製品
 (左：処理前、右：処理後)

0 5cm

第 120 図 保存処理遺物写真



No. 369 3地点 2A20tグリッド
3017SK 2層 鉄製品

No. 425 3地点 3B1bグリッド
3011SD 1層 銅製品

0 5cm

第 121 図 X線遺物写真

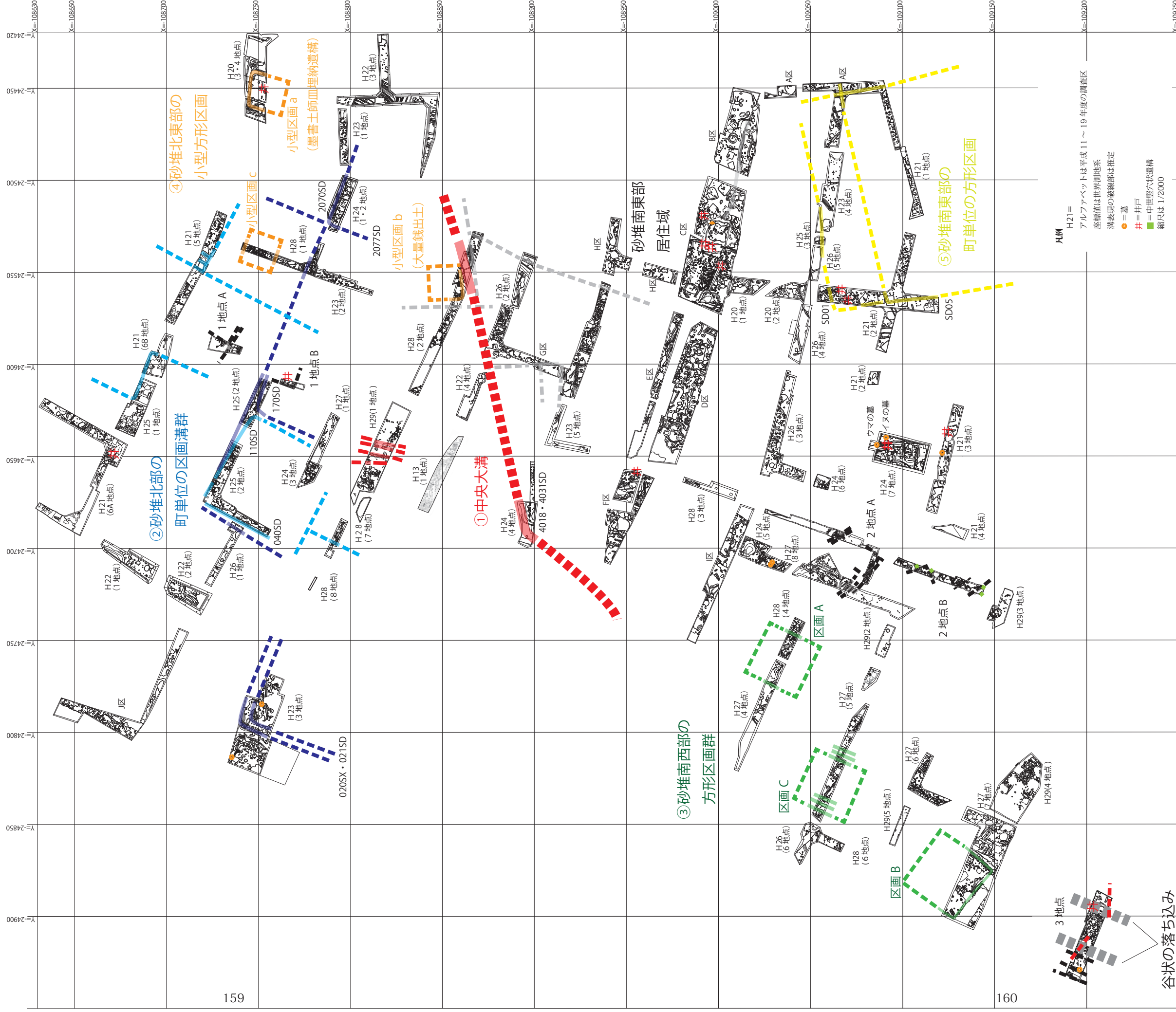
第5章 まとめ

第1節 調査成果について

今回の調査は奇しくも畑間遺跡の北端部と南端部にあたる箇所を調査し、興味深い知見を得ることができた。そこで各調査区での成果を簡潔にまとめたい。

北端部にあたる1地点A・B区は郷中遺跡と近接しており、既往調査からも中世～近世の区画が確認されている。1地点においても既往の区画溝と対応する区画溝022SD・034SDを確認し、平成25年度2地点の170SDと対応する063SDを確認した。170SDは13世紀に帰属する見解が提示され、これは063SDの年代観と齟齬が無く、概ね妥当と判断できる。また、170SDと063SDの溝間隔は20mをはかる。中村氏(1)によって整理された区画溝の復元案では当該地には町単位の区画溝が復元されていることから、区画を分割したか、もしくは小区画が構築された可能性が考えられる。しかし、全体を確認できていないことから、より慎重な検討を要する。022SDからは15世紀後半と思われる土師器内耳鍋が出土していることから、長期間にわたる集落の経営が行われていたと考えられる。これは、A区において近世染付碗が出土した池状遺構001SGやそれに後発する井戸002SE、B区においても近世・近代以降に帰属する井戸などが確認されたことから裏付けられよう。その他、8世紀後半～9世紀に帰属する竪穴状遺構2基と一括性の高い須恵器甑、坏を確認することができた。既往調査からは7～8世紀の竪穴建物や遺物の出土が見られ、古代の居住域が存在することが推定されていたが今回それを補強する資料を得ることができた。また、包含層や中世の区画溝上層からは7世紀後半～9世紀と比定される須恵器の破片が他の調査区に比べて多く出土している。しかし、その実態の解明には至っておらず今後の資料の蓄積と検討を要する。

南端部にあたる3地点周辺の既往調査において13世紀の方形区画や15世紀の墓域のほか、古墳時代初頭の方形周溝墓が確認されていたが、今回さらに15～18世紀にかけての区画溝や掘立柱建物、井戸、粘土壁土坑、土坑墓などを確認した。また、古代の遺物はごく少量出土しているが、遺構についてはほとんど確認できなかった。個々の詳細については前章にて記述しているので省くが、おおまかな調査成果としては①15世紀に帰属する土坑墓(3187SK)が16世紀以降に帰属する区画溝(3170SD)に切られること、②16世紀以降に帰属する区画溝(3150SD・3170SD・3172SD)とは軸方向を違える17世紀以降の区画溝(3140SD、3015SD)が存在すること、③掘立柱建物が範囲を限定して長期にわたり建て替えが行われていること、④区画溝と掘立柱建物の軸方向を違えること、⑤17～18世紀と推定される埋土に竈材や炭化物を多く含む粘土壁土坑(3017SK・3016SK)という特殊な遺構(2)が見られること、⑥出土遺物のなかに竿秤の分銅や土錘が多く見られることなどがあげられる。以上の事柄から3地点の遺構の消長を推測すると①の事柄から15世紀には墓などが造られ始めるが、その後16世紀には集落の発展による区画溝や掘立柱建物などの開発が進められ、近世にわたる活動があったと考えられる(②・③)。また、④の事柄に着目すると、建物が区画溝に圍繞される様子が確認できなかったことと、むしろ建物の軸方向は周辺調査で確認された13世紀の区画



第122図 畑間・東畑区画復元図

平成28年度 畑間・東畑遺跡発掘調査報告書から転載、加筆

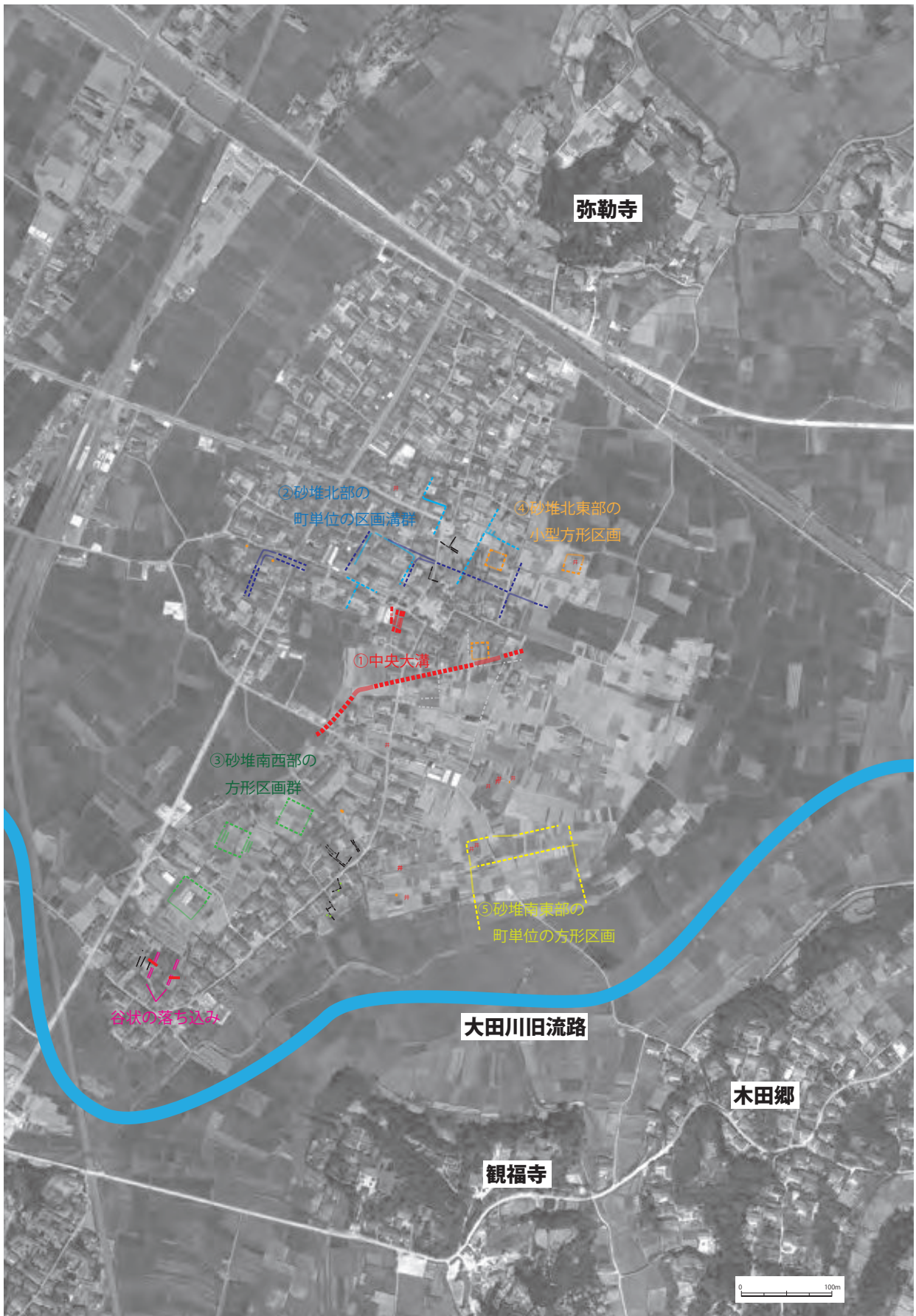
溝に酷似することから、13世紀におそらく里道など基準になるものが存在し、永続的にその軸を踏襲している可能性が考えられる。そうすると、3地点で確認された区画溝は建物や屋敷地を区画する意図ではなく、もっと大きな範囲の区画を指向していた可能性を指摘したい。残念ながら周辺調査において対応される遺構は確認されていないが、遺跡の西端に位置することや遺構密度が薄くなることから遺跡の縁辺部にあたと見て差し支えないと思われる。そして⑤と⑥の事柄から中世後期における漁労や商業活動の痕跡が見られるが、中世後期と近世においては3地点の環境は大きく変わる。それは大田川の河口において1666年(嘉文6年)に2代尾張藩主徳川光友が自身の隠居所である「横須賀御殿」の造営に伴い、河川の付け替え(3)を行ったことである。これにより3地点の南側に流れていた河川は消滅し漁労活動は出来なくなったことは想像に難くない。しかし、新たに農地や道に活用できる土地が出現したと推察され、職能の入れ替えなどが発生した可能性も考えられる。集落範囲や存続期間など不明な点も多いが永続的に遺構は存在し、近現代に至ったものと推定される。この契機として横須賀御殿の存在と光友の死後破却されるが、1783年(天明3年)に「横須賀代官所」(4)が造られ、近世町の整備が進められていく過程が少なからず影響を与えた可能性を指摘したい。むろん証明できるものではなく筆者の憶測ではあるが今後文献や資料の増加によって証明されることを期待したい。

南東部にあたる2地点A・B区周辺の既往調査では、古代(縄文から古墳時代)の遺構・遺物と13～15世紀の区画溝や土坑墓などが確認されている。まず古代の様相として2地点A区の西側にあたる平成29年度2地点では、円墳の可能性が高い6世紀に比定される須恵器を有する周溝や、弥生時代の方形周溝墓が3基確認され、2地点B区の南側にあたる平成29年3地点では、古墳時代初頭の竪穴建物とそれに先行する方形周溝墓が確認されている。その他、A区の北東側にあたる平成26年3地点では縄文晩期から弥生時代中期の遺構と遺物が確認されている。中世以降の様相として平成24年5地点と平成27年8地点において、13世紀の土坑墓群と14世紀以降の長方形に復元される区画が確認され、平成29年度2地点では今回確認した区画溝(2291SD・2212SD)と対応する可能性がある144SD・152SDが確認されており、区画の範囲を補強する結果となった。平成26年3地点では旧八剣社境内地にあたる地点を調査し、近世以降の神社に関係すると推定される遺構を確認している。また、平成24年6地点では近世以降に土地の削平を受けている様子が見られることから、A区での近世造成土の存在がこれらの事柄を補強しよう。

今回の調査ではA区は近世の大規模な造成によって攪乱を受け、それにより遺構はごく限られた範囲で残存し、B区についても同じく近世以降の攪乱を受けるものの、遺構の残存は良好であった。遺跡区分上A区は畑間遺跡、B区は東畑遺跡に立地するが、一連の遺跡と判断される。個々の詳細については省くが、大まかな調査成果として①区画溝が並列もしくは重複した状態で確認したこと、②区画溝に先行する掘立柱建物を確認したこと、③中世(14～15世紀)の竪穴状遺構を複数確認したこと、④弥生時代中期から古墳時代初頭にわたる包含層と遺構を確認したことが挙げられる。①の事柄から並列する区画溝(2221SD・2233SDと2214SD・2291SD・2287SD)と重複する区画溝(2285SD・2212SD)が確認されている。このうち時期

の前後関係が明確なのは 2285SD と 2212SD で、遺物では明確に差異は確認できなかったが、検出状況と断面観察から 2285SD が後発することを確認した。並列する区画溝は時期差を確認出来なかったが、2221SD と 2233SD は非常に近接している特徴が見られる。複数の区画が接近して造られている可能性も考えられるが、既往調査においてはそのような痕跡が見られないことや砂堆という流動性の高い地質上に造られていることから、生活環境や気象条件によってはたやすく崩落等の改変をうけることから、1つの区画を同一の場所で掘り直しを行ったものと推定されるが、畑間・東畑・郷中遺跡において区画全体の調査例がないことから資料の蓄積が望まれる。②の事柄については A 区にて掘立柱建物を 1 棟復元しているが、区画溝の軸方向が異なることや柱穴が溝に切られる状況を確認したことから、区画に先行する可能性が推定される。ただし、掘立柱建物と対応する区画溝は不明瞭で、かろうじて 2215SD の軸方向が酷似しているが、既往調査において同様の遺構は確認出来なかったことから断定はできない。③の事柄については B 区から 4 基の竪穴状遺構 (2013SI・2015SI・2080SI・2097SI) を確認した。いずれも出土遺物から 14～15 世紀に帰属する可能性が考えられる。中でも 2080SI からは土師器羽釜の口縁部が 8 個体出土しており、他の遺構と比べて多く遺物が出土している。既往調査において当該期の竪穴状遺構は確認されていないことから、遺構の性格については断定できる資料に乏しい。ただ全国の調査例においては「工房」もしくは「倉庫」とされている例が多く報告されている (5)。いささか乱暴ではあるが、その観点から指向を観察すると、焼土面や鉾物などは確認出来なかったことから「工房」とは考えにくく、消極的ではあるが「倉庫」の可能性が推定される。その仮定で周辺を観察すると B 区の西側にあたる平成 29 年 2 地点の調査において南半部を中心に遺構密度が非常に薄い範囲が見られる。攪乱を受けているため、当時の風景を復元することは難しいが、地山が残存している箇所においても遺構が少ないことが確認されている。2 地点 B 区は大田川旧河道に近接することから、あくまでも筆者の憶測ではあるがこの場所に大田川からの物資の荷揚げもしくは保管場所として竪穴状遺構が構築された可能性を指摘したい。さらに踏み込めば、西側の遺構密度が薄い範囲については集落の広場もしくは市場などが立地した可能性が考えられるが想像の域をでない。しかし、河川に近接するという立地については集落の縁辺部にあたることはまず間違いないことから、川湊のような施設が造られた可能性は十分に考えられよう。今後、旧河道周辺の調査成果の増加を期待したい。④の事柄について遺物は細片が多く全体を復元できる資料は乏しいが岩滑式～松河戸式と比定される弥生時代中期前葉から古墳時代初頭にいたる遺物が集中する様子を確認することが出来た。また、ごく少数ではあるが烏帽子型深鉢 (6) の破片を確認している。遺構についてもいくつか確認しているが、性格等については残念ながら把握することが出来なかった。また、遺物が集中する理由についてもよく分からない。たまたま、その後の開発を免れた可能性が高いと思われる。そのほか、遺物の出土がほとんど見られないため断定はできないが、方形周溝墓の可能性のある溝状遺構を 4 基 (2245SD・2246SD・2197SD・2324SD) 確認している。共通の特徴として L 字状もしくはコの字状を呈し、埋土が地山と酷似する点が挙げられる。

以上が大まかではあるが今回の調査成果である。概ねこれまで調査を補強する資料を得ることができた。その中でも 3 つの成果が挙げられる。一つは 1 地点における古代の竪穴状遺



第 123 図 周辺環境と溝・復元図 平成 28 年度 畑間・東畑遺跡発掘調査報告書から転載、加筆

構を確認したこと、一つは3地点における中世から近世にわたる活動の痕跡を確認したこと、一つは2地点B区における中世の竪穴状遺構を確認したことであろう。特に3地点と2地点B区は遺跡の縁辺部を調査することができた。このことにより遺跡内だけではなく、遺跡外の活用と今後の遺構分布を検証するうえで寄与するものとする。

第2節 井戸 3223SE 出土のカメ遺存体について

3地点の調査において井戸 3223SE の埋土内から被熱を受けた人頭大の石とともにニホンイシガメの遺存体が10個体分出土した。遺構の詳細については第2章において記述しているが、個人的にも初めて取り扱う資料であり、また愛知県内でニホンイシガメの出土例が散見されることから既存の調査成果の整理を試みたい。

今回出土したニホンイシガメ遺存体の詳細については第4章において記述しているが改めて内容を振り返りたい。残存部位は背甲と腹甲が大部分を占め、左肩甲骨・前烏口骨・左上腕骨、左大腿骨などがわずかに見られた。腹甲の内外面に被熱を受ける個体が見られたことや頭骨が全く確認出来なかったことから、生存体では無く頭部や四肢などを除去した遺存体であったと推定される。雌雄の差異などについては同定には至らなかった。以上のことから明らかに人為的な処理を施した遺存体を石と共に井戸内に投棄したという行為が推定され、これらの行為については井戸の廃絶に伴う祭祀の可能性が高い。

次に既存の調査成果について見てみたい。主に中世以降の事例について表3にまとめてみたが、各事例について簡潔に触れる。大まかに分類すると①井戸から出土している事例(清洲城下町遺跡 SE28・神領遺跡 SE01、SX02・志賀公園遺跡 SE05・畑間遺跡 H30 - 3地点 3223SE)、②土坑から出土している事例(清水遺跡 SK113・畑間遺跡 H28 - 1地点 1060SK)、③自然流路等から出土している事例(畑間遺跡 H20 - 3・4地点 NR22・H28 - 2地点 2120・2180SD)、④包含層等から出土している事例(金山屋敷遺跡包含層・畑間遺跡 H28 - 7地点Ⅱ・Ⅲ層)に分類される。

①の事例について個々の特徴を観察すると、清洲城下町遺跡・神領遺跡・畑間遺跡で出土した遺存体は人為的な処理の痕跡(7)が顕著に認められ、井戸の廃絶に伴う可能性(8)が指摘されているが、志賀公園遺跡の事例はほぼ全体の骨格が残存しているものが多く、また、卵を有

表5 カメ出土遺跡一覧表

遺跡	遺構	時期	種名	個体数	備考
清洲城下町遺跡	SE28	16世紀末～17世紀初	ニホンイシガメ	8	個体選別の可能性あり。首を切り落としているか。
清水遺跡	SK113	16世紀	ニホンイシガメ	43以上	大きな個体選別の可能性あり。
神領遺跡絲田地区A区	SE01	15世紀	カメ属	1	焼ける。
神領遺跡絲田地区J区	SX02	15世紀中頃	カメ属	1	焼ける。
志賀公園遺跡	SE05	15世紀後半	ニホンイシガメ	50以上	卵を持つ個体あり。
金山屋敷遺跡	包含層(貝塚層)	13世紀から15世紀	ニホンイシガメ	3	甲羅を破砕している個体あり。
畑間遺跡H28-1地点	1060SK	13世紀以降	ニホンイシガメ	1以上	一部焼ける。
畑間遺跡H28-1地点	1066SP	不明	ニホンイシガメ	1以上	
畑間遺跡H28-2地点	2120SD	12世紀～16世紀	ニホンイシガメ	1以上	焼ける。
畑間遺跡H28-2地点	2180SD	15世紀	ニホンイシガメ	1以上	
畑間遺跡H28-7地点	Ⅱ・Ⅲ層	不明	ニホンイシガメ	1以上	
畑間遺跡H20-3・4地点	NR22	15世紀後半～16世紀	イシガメ	3	大中小3個体 洪水により死亡した可能性あり。
畑間遺跡H30-3地点	3223SE	16世紀以降	ニホンイシガメ	10	一部焼ける。甲羅が主体で頭骨・四肢骨は非常に少ない。

している個体も見られることから自然に遺構内に入り込んだもの(9)と推定されている。

次に②の事例について観察すると、清水遺跡 SK113 は貝殻を非常に多く含むことから廃棄土坑と推定されている。同定された個体数は 43 体を数え、風化等によって同定できなかった遺存体も多く見られたと報告されている。また、同定された 43 体の内 42 体がメスであったことから投棄する個体が選別されていた可能性を指摘している(10)。畑間遺跡 1060SK から一部焼けた痕跡がある背甲・腹甲の破片が確認されている。出土状況などは詳細が報告されていないため不明であるが、黒色化した埋土から有機物も含めた廃棄土坑との報告がされている(11)。

③の事例について観察すると、畑間遺跡 NR22 からはそれぞれ大きさが異なる 3 個体の遺存体が確認されている。ほぼ平行な状態で出土したとの報告がされているが、人為的に置かれたものでは無く偶然密集していたところに洪水砂によって密閉された結果死亡したものと推定されている(12)。畑間遺跡 2120・2180SD からは腹甲の破片が確認されている。出土状況などは詳細が報告されていないため不明であるが 2120SD の破片からは一部焼けた痕跡が確認されている(13)。

最後に④の事例について観察すると、金山屋敷遺跡貝塚層からは甲羅を破砕したものや解体痕跡が認められる個体が報告されている。焼けた痕跡などは見られないものの食用を意図した可能性が指摘されている(14)。

以上各事例を観察してきた。当然のことではあるが、遺存体が出土する要因としては人為的な廃棄と偶発的な混入の 2 つの傾向が認められる。人為的な廃棄には解体の痕跡や部位の不足、被熱痕や個体選別などが伴う事例が多く認められることから、井戸の廃絶に伴う祭祀に供されたことや食用に伴う可能性が指摘される。偶発的な混入には部位の不足が極めて少なく、胎卵などの生体痕跡が認められることから周辺の環境がニホンイシガメの生息に適しており、水場や産卵場として利用されていたと考えられよう。

このことを踏まえて、井戸 3223SE の事例を観察すると明らかに人為的な廃棄に位置付けられよう。また、被熱痕をもつ人頭大の石によって井戸が埋められている(15)ことから廃絶時には何らかの祭祀があったとみて間違いなからう。しかし、供物にイシガメが供された理由についてはさらなる考察の必要がある。その為には考古学からのアプローチのほか、民俗学や文献学など多様な学問による検討(16)が期待される。

最後に余談ではあるが、出土する遺存体のほとんどがニホンイシガメである要因について少し触れておきたい。従来、愛知県内での遺跡で出土する可能性のあるカメはニホンイシガメ、クサガメ、スッポンの 3 種であるとされてきた。クサガメは渥美町の伊川津遺跡からの出土例のみで、攪乱部分からの出土で時期についても縄文時代より後世の自然死したものとの報告がされている。現在の分布ではクサガメがニホンイシガメより優位に立っているが、遺跡からの出土はウミガメを除くとニホンイシガメが大部分を占める事実は先行研究から指摘されている(17)。このことを裏付ける研究成果としてクサガメが 18 世紀末に朝鮮半島から持ち込まれた外来種との報告(18)が近年なされていることが挙げられる。まだ、断定しうる段階ではないが古環境を復元する上で十分考慮すべき事柄と思われる。

また、今回の整理する過程で畑間遺跡においてニホンイシガメの遺存体がある程度確認できた。このことはニホンイシガメが知多半島において非常に身近な生物であったと推定される。これまでの県内での調査において見落とされていた可能性も十二分に考えられるが、祭祀や食用も含めてどのような活用がされてきたのか今後の調査例の増加に期待したい。



ニホンイシガメ遺存体



被熱石



ニホンイシガメ焼痕(内面)



ニホンイシガメ焼痕(外面)

注釈

注(1) 中村毅 2018「第4章 考察 第3節 調査成果から見た中世大里郷」

『愛知県東海市 平成28年度畑間遺跡発掘調査報告』

注(2) 畑間遺跡の既往調査において粘土で構築された遺構がいくつか確認されている。

G037SX 2014『愛知県東海市 平成24年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』

—平成11～19年度調査』

006SX・007SX 2013『愛知県東海市 畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』

NO.5 調査区土坑 1997『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』

この中で3016・3017SKに近いと思われるのが、G037SXである。「幅1.7mほどの掘り込みに、幅1.0mほどの舟形状に粘土を貼り、西側には拡張するように二重の粘土帯を貼り付ける」と記述され、用途については不明としている。写真からは底面に湧水が認められる。土層観察からは炭化物や竈材などは確認されていない。また、断面図からは拡張というより造り替えの印象を受ける。

3016・3017SKと同一の遺構とはいえないが、粘土を壁や底面に貼る構造に共通項があろう。しかし、貯水か目的か遮水が目的かについては両方の用途が考えられるため、今後の資料の増加に期待したい。ただ、個人の憶測ではあるが3017SKについては炭化物や竈材が埋土に含まれることから、近辺に煮炊場が存在した可能性が考えられ、貯水施設としての大規模な粘土壁土坑が必要な職能としては製塩が考えられる。しかし、製塩に関わる遺物は確認されていないことから、憶測の域はでないがあえて踏み込むのなら鹹水溜の可能性を挙げたい。

蛇足ではあるが、NO.5調査区土坑は試掘調査で確認されているが、残念ながら本調査には至っていない遺構である。報告書写真には僅かに壁面に沿って粘土が廻るように見られる。また、調査区位置図では最も海岸線に近い場所に立地しているので、非常に興味深い。

注(3) 鬼頭剛 2014「付論1 —東海市、東畑遺跡周辺の表層地形解析—」

『愛知県東海市 平成24年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告』

注(4) 横須賀町史編纂委員会編 1969『横須賀町史』横須賀町

注(5) 大野亨 2001「竪穴建物跡とは何か—八戸市根城跡を中心に—」『掘立と竪穴 中世遺構論の課題』

高志書院

遺構全体の調査を行っていないため、全容については不明であるが本文でも述べたとおり旧河道と西側の遺構密度の少ない空間との関係性を改めて強調したい。

注(6) 石黒立人 1996「烏帽子遺跡をめぐる問題群」『烏帽子遺跡』第63集

注(7) 矢部隆 1992「第四章 自然科学的分析 第1節 井戸出土のカメの遺体」

『清洲城下町遺跡(Ⅱ)』第27集

個体数と比較して頭骨が少ないことから、首を切り落としたカメを用いている可能性を指摘している。

注(8) 井戸の上層埋土より出土する傾向が見られることから、廃絶時に閉塞作業の途中において祭祀が執行された可能性が考えられる。

注(9) 矢部隆 永井宏幸 堀木真美子 2001「志賀公園遺跡から出土したカメ」『志賀公園遺跡』

第90集

報告では廃絶時に井戸部材の抜き取りが行われ、その後再掘削が行われた初期段階でカメが生息し始めたと推定されている。また、周辺埋土からは種子類や昆虫の遺存体が確認されていることから、ある程度の期間開口していたと推定される。

注(10) 矢部隆 堀木真美子 1994「愛知県西尾市清水遺跡から出土したカメの遺体について—なぜニホンイシガメのメスが多く出土するのか—」『愛知県埋蔵文化財センター年報 1994』

愛知県埋蔵文化財センター

ニホンイシガメはメスの個体がオスの個体より大きくなるので、大型の個体を選別すると必然的にメスを選別する可能性が高くなる。また、解体痕跡が見られないことから食用の可能性は低いと推定されている。廃棄土坑内に何故多くのニホンイシガメの遺存体が投棄されたかについては今後の資料の蓄積に期待したい。

注(11) 東海市教育委員会 2018『愛知県東海市 平成28年度畑間遺跡発掘調査報告』

注(12) 東海市教育委員会 2009『愛知県東海市 畑間・東畑遺跡発掘調査報告』

注(13) 東海市教育委員会 2018『愛知県東海市 平成28年度畑間遺跡発掘調査報告』

注(14) 金子浩昌・パリノ・サーヴェイ株式会社 2004「金山屋敷遺跡出土の動物遺存体
『2004 特養建設用地埋蔵文化財発掘調査報告書 金山屋敷遺跡』

注(15) 久世康博 2001「井戸はどうして埋められたか(石を入れる)」

『考古学論集第5集』考古学を学ぶ会

久世康博 2005「井戸はどうして埋められたか(焼石を入れる)」『龍谷大学考古学論集I』

龍谷大学考古学論集刊行会

3223SEの枠内埋土は、土よりも石や遺物のほうの割合がやや多い傾向が見られた。久世氏は論考のなかで石を使用した埋没について3つに分類される傾向を指摘しているが、今回の調査では全般に石を充填する傾向に酷似していると思われる。これは埋没後の地盤沈下を防止する目的を加味している可能性が考えられる。また、焼石をいれる事例については石の大きさは10cm前後の小石から人頭大の石まで見られるが、小石が多く中世以降になると人頭大の石が見られるようになることと述べている。また、民俗例から丸く白い石を焼いてそれを餅に見立てて魔除けに用いる例があるとのこと。少なくとも焼石を用いる理由の一つに魔除けや祓いの意識があると考えられる。また、3223SEに先行する3019SEは枠材が見られなかったが常滑産陶器の甕片が見られたことから、同様の構造であったと推定されるが3223SEには枠材の抜き取りが見られなかったことから、水場として不適切な事情が発生した可能性も考慮されるか？

注(16) 矢野憲一『ものと人間の文化史 亀』法政大学出版

亀は度々神の使いとして取り上げられる。沿岸部においてはおもにウミガメが御使いとなるが、京都の松尾大社では亀が御使いとされる。松尾山には霊亀の滝があり、また亀の井といわれる清水が湧き出てその水で酒造を行うと酒が腐敗しないと伝えられている。

また、余談ではあるが、奈良の薬師寺玄奘三蔵院には亀を土台とした顕彰碑が立っているがそれは亀ではなく大地を支える龍の一種であると薬師寺の僧侶から聞いたことがある。直接的に水に関わるかどうかについては考察はできなかったが、亀の神格について考慮する事例といえる。

注(17) 矢部隆 堀木真美子 1994「愛知県西尾市清水遺跡から出土したカメの遺体について—なぜニホンイシガメのメスが多く出土するのか—」『愛知県埋蔵文化財センター年報 1994』

愛知県埋蔵文化財センター

論考のなかでも現在の生態と符号しない点を指摘しており、古環境の復元の重要性を述べられている。つつい現在の事象を念頭に置いてしまうが、当時の海岸線や風景、環境を考慮する必要が重要であろう。

注(18) 疋田努 鈴木大 2010「江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入」

『日本爬虫両棲類学会報』日本爬虫両棲類学会

1712年に刊行された『和漢三才図会』には13種のカメが認識されているが、この段階でクサガメが認識されていたがどうかについて今回把握は出来なかった。クサガメが外来種であればこうした分野からの研究も加味していく必要があるだろう。

参考文献

- 愛知県教育委員会 1999 『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』
- 愛知県史編さん委員会 2002 『愛知県史資料編 1 考古 1 旧石器・縄文』
- 愛知県史編さん委員会 2003 『愛知県史資料編 2 考古 2 弥生』
- 愛知県史編さん委員会 2005 『愛知県史資料編 3 考古 3 古墳』
- 愛知県史編さん委員会 2010 『愛知県史資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』
- 愛知県史編さん委員会 2017 『愛知県史資料編 5 考古 5 鎌倉～江戸』
- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史資料別編 5 窯業 2 中世・近世瀬戸系』
- 愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史資料別編 5 窯業 2 中世・近世常滑系』
- 渥美町教育委員会 1988 『伊川津遺跡』
- 春日井市教育委員会 2001 『平成 12 年度 春日井神領土地区画整理事業に伴う事前調査
神領遺跡発掘調査概要報告書』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 第 10 集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991 『清水遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 第 25 集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992 『清洲城下町遺跡 (II)』愛知県埋蔵文化財センター 第 27 集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994 『朝日遺跡 V』愛知県埋蔵文化財センター 第 34 集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1996 『烏帽子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 第 63 集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997 『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 第 73 集
- 財団法人愛知県教育サービスセンター 2001 『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 第 90 集
- 財団法人愛知県教育サービスセンター 2002 『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 第 92 集
- 財団法人愛知県教育サービスセンター 2002 『烏帽子遺跡 II』愛知県埋蔵文化財センター 第 117 集
- 財団法人愛知県教育サービスセンター 2005 『名古屋城三の丸遺跡 (VII)』愛知県埋蔵文化財センター
第 127 集
- 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 2014 『松崎遺跡 II 上浜田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
第 182 集
- 東海市教育委員会 1997 『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2004 『愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 永井伸明・宮澤浩司 2007 「伊勢湾を望む海辺の遺跡―東畑遺跡等発掘調査概報―」
『研究報告とうかい』創刊号
- 東海市教育委員会 宮澤浩司 2009 「伊勢湾を望む海辺の遺跡 (2)
―平成 19 年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要―」『研究報告とうかい』第 2 号
- 東海市教育委員会 2009 『愛知県東海市 畑間・東畑遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2012 『愛知県東海市 畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2012 『愛知県東海市 平成 22 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2013 『愛知県東海市 畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2014 『愛知県東海市 平成 24 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2014 『愛知県東海市 平成 24 年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告―平成 11 ～
19 年度調査―』
- 東海市教育委員会 2015 『愛知県東海市 平成 25 年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2016 『愛知県東海市 平成 26 年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2017 『愛知県東海市 平成 27 年度畑間遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2018 『愛知県東海市 平成 28 年度畑間遺跡発掘調査報告』

- 東海市教育委員会 2019『愛知県東海市 平成29年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告』
- 常滑市教育委員会 2004『2004 特養建設用地埋蔵文化財発掘調査報告書 金山屋敷遺跡』
- 石黒立人・加納俊介編 2002『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 考古学フォーラム編 1996『鍋と甕 そのデザイン』考古学フォーラム
- 考古学フォーラム編 2010『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 中野晴久 2013『中世常滑窯の研究』愛知学院大学学位請求論文
- 藤沢良祐 2008『中世古瀬戸窯の研究』高志書院
- 宇野隆夫 2001『荘園の考古学』青木書店
- 小野正敏編 2001『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 考古学フォーラム編 2002『東海の中世集落を考える』考古学フォーラム
- 新修名古屋市史編集委員会 1997『新修名古屋市史 第一巻』名古屋市
- 新修名古屋市史編集委員会編 1998『新修名古屋市史 第二巻』名古屋市
- 東海市史編さん委員会編 1990『東海市史 通史編』東海市
- 知多市誌編さん委員会編 1981『知多市誌 本文編』知多市
- 永原慶二 1998『荘園』吉川弘文館
- 半田市誌編さん委員会編 1989『半田市誌』半田市
- 横須賀町史編纂委員会編 1969『横須賀町史』横須賀町
- 久保和士 1999『動物と人間の考古学』真陽社
- 藤澤良祐ほか 2005『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』
同シンポジウム実行委員会
- 東海土器研究会 2000『須恵器生産の出現から消滅 一猿投窯・湖西窯編年の再構築』東海土器研究会
- 東北中世考古学会編 2001『掘立と竪穴 中世遺構論の課題』高志書院
- 伊藤鄭爾 1958『中世住居史 封建住居の成立』東京大学出版会
- 東海窯業史研究会 2019『東海窯業史研究論集Ⅱ』東海窯業史研究会
- 永原慶二編 1995『常滑焼と中世社会』小学館
- 鐘方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
- 矢部隆 1992「第Ⅳ章 自然科学的分析 第1節 井戸出土のカメの遺体」『清洲城下町遺跡(Ⅱ)』
第27集
- 矢部隆 堀木真美子 1994「愛知県西尾市清水遺跡から出土したカメの遺体についてーなぜニホンイシガ
メのメスが多く出土するのかー」『愛知県埋蔵文化財センター年報 1994』愛知県埋蔵文化財センター
- 矢部隆 永井宏幸 堀木真美子 2001「志賀公園遺跡から出土したカメ」『志賀公園遺跡』第90集
- 疋田努 鈴木大 2010「江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入」『日本爬虫両棲類学会報』
日本爬虫両棲類学会
- 久世康博 2001「井戸はどうして埋められたか(石を入れる)」『考古学論集第5集』考古学を学ぶ会
- 久世康博 2005「井戸はどうして埋められたか(焼石を入れる)」『龍谷大学考古学論集Ⅰ』
龍谷大学考古学論集刊行会
- 鈴木正貴 2005「名古屋城三の丸遺跡出土土師器皿の変遷」『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』
愛知県埋蔵文化財センター

表6-1 遺物観察表

地点	クワッド	図版番号	出土地 点・層位	産地材質	器種	口径 点・長さ	器高 幅	底径 長さ	孔径 径か	残存率	外面調整	内面調整	胎土	焼成	外面色調	内面色調	断面色調	観察備考
1A	8E4b	001	020SI 1層	土師器	土釜	4.4	1.0	1.0	0.1	ほぼ完形	ナデ		密、砂粒 含む	良好	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	重さ3.4g、釉痕
1A	8E4c	002	020SI	須恵器	坏蓋	(14.0)	(0.9)	-	-	口縁10%	ロクロナデ	ロクロナデ	密、砂粒 含む	良好	7.5YR3/3暗褐色	10YR6/2灰黄褐	7.5YR5/1褐灰	-
1A	8E5b	003	022SD 2層	土師器	内耳鍋	(21.8)	(5.9)	-	-	口縁15%	ヨコナデ、指頭正痕	ハケ、ナデ	やや密、 礫含む	良好	7.5YR2/1黒	10YR7/2にぶい黄緑 黄緑	10YR7/3にぶい 黄緑	外面に黒付着
1B	8D13s	004	063SD	山楽碗	山楽碗	-	(2.5)	(6.9)	-	底部15%	ロクロナデ	ロクロナデ、指ナデ	粗	良好	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	胎付高台、モミガラ 痕、被熱
1B	8D13s	005	065SD 1層	山楽碗	小皿	8.1	2.2	3.9	-	完形	ロクロナデ、板状正痕	ロクロナデ、指オサエ	やや粗、 礫含む	良好	N8/ 灰白	N8/ 灰白	N8/ 灰白	自然軸
1B	8D14r	006	065SD 2層	山楽碗	小皿	7.5	2.4	3.7	-	口縁~底部 90%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密、砂粒 含む	良好	N8/ 灰白	N8/ 灰白	N8/ 灰白	自然軸
1B	8D14s	007	065SD 2層	土師器	伊勢型鍋	(26.0)	(4.6)	-	-	口縁部25%	ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ	密	良好	10YR8/4浅黄緑	7.5YR8/4浅黄緑	10YR8/4浅黄緑	伊勢鍋A1
1B	8D13s	008	069SE 2層	山楽碗	碗	(15.4)	(4.2)	-	-	口縁~体部 10%	ロクロナデ	ロクロナデ	粗	良好	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい 橙	-
1B	8D13s	009	066SI (包含層)	土師器	囊	(33.4)	(14.5)	-	-	口縁20%	ヨコナデ、指オサエ、ハケ	ヨコナデ、ナデ	やや粗、 砂粒多く	良好	10YR8/2灰白	口縁、10YR8/2灰白 胴部、10YR6/1褐灰	10YR3/1黒褐	066S直上
1B	8D13s	010	066SI	須恵器	囊	(25.8)	(3.6)	-	-	口縁25%	ヨコナデ、沈線、波状文	ヨコナデ	密、砂粒 含む	不良	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	10YR8/4浅黄緑	Dot11
1B	8D13s	011	066SI	須恵器	坏身	(15.4)	4.7	(11.2)	-	口縁30% 底部30%	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	密、砂粒 含む	良好	2.5Y7/1灰白	2.5Y6/1黄灰	10YR6/1褐灰	胎付高台
1B	8D13s	012	066SI	須恵器	坏身	12.3	4.0	4.3	-	口縁90%	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	密、砂粒 少量含む	良好	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	2.5Y7/1灰白	窯印有り
1B	8D13s	013	066SI	須恵器	坏身	11.5	4.6	-	-	口縁98%	ロクロナデ、ヘラ切り	ロクロナデ	密、白色 礫含む	良好	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白	-	内面一部被熱
1B	8D13s	014	066SI	須恵器	甗	(27.2)	(19.5)	-	-	口縁40%	ヨコナデ、ナデ、指頭正痕 状々々々	ヨコナデ、ナデ、指頭正痕	やや密	やや不良	7.5YR8/1灰白	10YR8/1灰白	7.5YR8/3浅黄緑	沈線1条
1B	8D13s	015	066SI	須恵器	甗	(11.7)	(11.8)	-	-	底部10%	板ナデ(縦方向)	ナデ、板状正痕、ヘラ切り	やや密	良好	10YR8/3浅黄緑	10YR8/1灰白	N8/ 灰白	-
1B	8D13s	015	066SI	須恵器	甗	(29.6)	(7.5)	-	-	口縁15%	ロクロナデ	ロクロナデ	やや粗	やや不良	2.5Y5/1黄灰	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	全体的に黒付着、150 と同一個体か
3	2A18n	016	3010SE 1層	山楽碗	小皿	(7.6)	0.9	(3.7)	-	口縁~底部 30%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密	良好	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	北部系
3	2A18n	017	3010SE 1層下層	瀬戸美濃	腰折皿	-	(1.5)	(4.8)	-	底部100%	ロクロナデ、回転糸切	ヨコナデ、指オサエ、ハケ、ケズ リ	密、砂粒 含む	良好	2.5Y7/2灰黄	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白	灰軸、内面黒不着
3	2A18n	018	3010SE 埋土	瀬戸美濃	仏供	-	(3.1)	4.9	-	胴部~底部 80%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密、礫少 量含む	良好	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/2灰白	鉄軸、底部に墨書 『上』か
3	2B20a~3B1b	019	3019SE	土師器	羽釜	(30.0)	(2.3)	-	-	口縁5%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、砂粒 含む	良好	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	-
3	2B20b	020	3223SE 埋土	常滑	甗	(12.8)	(16.0)	-	-	口縁~胴部 40%	ヨコナデ	ヨコナデ、指オサエ	密、礫含 む	良好	5YR3/3暗赤褐	5YR4/3にぶい赤褐	10YR7/2にぶい 黄緑	自然軸
3	2B20b	021	3223SE 埋土	常滑	囊	(28.4)	(14.1)	-	-	口縁10%	ヨコナデ、板ナデ	ヨコナデ、指オサエ	密、礫含 む	良好	7.5Y8/1灰白	2.5YR3/2暗赤褐	7.5Y5/1灰	自然軸
3	2B20b	022	3223SE 埋土	常滑	囊	490	(35.0)	-	-	口縁30%	ヨコナデ、板ナデ	ヨコナデ、指オサエ	密、砂 粒、礫含 む	良好	10YR7/1灰白	2.5YR3/3暗赤褐	10YR5/1褐灰	押印三箇所、拓本あり
3	3B2b	023	3015SD 1層	瀬戸美濃	折縁小皿	(12.0)	2.5	(4.4)	-	口縁~底部 30%	ロクロナデ	ロクロナデ	密、砂粒 少量含む	良好	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	-
3	2A19q	024	3140SD	土師器	皿	7.7	1.6	5.5	-	口縁~底部 75%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密、砂粒 含む	良好	5YR6/6橙	5YR6/6橙	5YR6/6橙	-
3	2A19p	025	3140SD 埋土	土師器	皿	7.4	1.8	4.9	-	口縁70% 底部100%	ロクロナデ、回転糸切	ヨコナデ、指オサエ	密	良好	5YR7/6橙	5YR7/6橙	5YR7/6橙	-
3	2A18o	026	3170SD	土師器	羽釜	(26.0)	(1.8)	-	-	口縁5%	ヨコナデ	ヨコナデ	密	良好	7.5YR8/3浅黄緑	7.5YR8/3浅黄緑	7.5YR8/3浅黄緑	-
3	2A18o	027	3170SD	土師器	皿	(11.8)	(1.5)	-	-	口縁5%	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	10YR7/4にぶい黄緑	10YR7/4にぶい黄緑	10YR7/4にぶい 黄緑	-
3	3B1a	028	3011SD 中層	瀬戸美濃	志野丸皿	(11.8)	2.3	(6.7)	-	口縁40% 底部60%	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	密、砂粒 含む	良好	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	10YR7/2灰黄	削出高台、長石軸
3	3B1b	029	3011SD 下層	輸入陶磁	青磁碗	-	(3.6)	(6.3)	-	底部20%	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	やや密	良好	胎土、10YR6/2灰黄 褐色	軸、5G77/1明オリ一 フ灰	2.5Y8/1灰白	見込み印花、青磁軸
3	3B2a	030	3011SD 下層	常滑	甗	(4.8)	(5.2)	-	-	口縁~頸部 10%	ロクロナデ	ロクロナデ、指頭正痕	密、礫少 量含む	良好	10YR4/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	10YR7/1灰白	-
3	3B1b	031	3011SD 1層	御製品	分銅	4.3	2.0	9lg	-	100%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、砂粒 含む	良好	10YR3/1黒褐	7.5YR3/1黒褐	10YR7/3にぶい 黄緑	八角形、鋳造
3	3B1b	032	3011SD 上層	土師器	伊勢型鍋	(22.9)	(1.2)	-	-	口縁15%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、砂粒 含む	良好	10YR3/1黒褐	7.5YR3/1黒褐	10YR7/3にぶい 黄緑	黒不着

表6-1 遺物観察表

地点	グリッド	図版番号	出土地 点・層位	産地材質	器種	口径 長さ	器高 幅	底径 長さ	孔径 径か	残存率	外面調整	内面調整	胎土	焼成	外面色調	内面色調	断面色調	観察備考
3	3B1b	033	3011SD 1層	土師器	伊勢型鍋	(26.4)	(12.4)	-	-	口縁20%	ヨコナデ、指オサエ、板ナデ、ケズリ	ヨコナデ、指オサエ、板ナデ、ケズリ	やや密	良好	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい黄緑	10YR7/2にぶい黄緑	全体的に煤不着
3	3B1b	034	3011SD 上層	土師器	羽釜	(20.8)	(2.4)	-	-	口縁10%	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、指オサエ、板ナデ	密、砂粒含む	良好	10YR6/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐色	-
3	3B1a	035	3011SD 下層	土師器	内耳鍋	(25.4)	(4.2)	-	-	口縁5%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、砂粒含む	良好	10YR7/1灰白	2.5Y7/2灰黄	10YR7/4にぶい黄緑	外面煤不着
3	2A18n	036	3172SD 1層	瀬戸美濃	天目茶碗	(10.5)	(3.2)	(4.2)	-	底部40%	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y7/4浅黄	2.5Y8/3深黄	2.5Y7/2灰黄	隅りだし高台、内面に窯運具刷痕あり
3	3B2b	037	3008SK 1層	瀬戸美濃	片口	(15.6)	(5.6)	-	-	口縁20%	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	やや密、砂粒多く含む	良好	胎土、2.5Y8/2灰白	軸、5Y6/3オリーブ黄	7.5YR6/4にぶい黄緑	灰軸
3	3B2b	038	3008SK 1層	土師器	焙烙	(35.8)	(4.0)	-	-	口縁10%	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	密、砂粒含む	良好	7.5YR2/1黒	10YR2/1黒	10YR7/2にぶい黄緑	器面を輝す、瓦器?
3	2A20t	039	3017SK 3層	土師器	小皿	(8.0)	(2.2)	-	-	10%	口縁ヨコナデ、胴部ナデ	口縁ヨコナデ、胴部ナデ	密、砂粒少量含む	良好	10YR2/1黒	10YR2/1黒	10YR7/4にぶい黄緑	灰軸
3	2A20t	040	3017SK 上層	瀬戸美濃	折縁深皿	(30.0)	(2.2)	-	-	口縁5%	ロクロナデ	ロクロナデ	密、砂粒少量含む	良好	5Y6/3オリーブ黄	5Y6/3オリーブ黄	10YR7/2にぶい黄緑	灰軸
3	2A20t	041	3017SK 2層	瀬戸美濃	大皿	(29.6)	(3.8)	(15.8)	-	底部5%	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	密	良好	10YR7/2にぶい黄緑	10YR7/2にぶい黄緑	2.5Y8/3深黄	灰軸、3足か
3	2A19p	043	3150SD 半截中	土師器	皿	8.8	1.9	4.5	-	口縁→底部80%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密	良好	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	口縁端部強くナデル
3	2A19p	044	3269SK 下層	土師器	皿	8.5	1.8	4.6	-	口縁85% 底部100%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ、指ナデ	密	良好	10YR8/3浅黄緑	10YR8/3浅黄緑	10YR8/3浅黄緑	内面一部タール付着
3	2A19o	045	3187SP 下層	山茶碗	碗	12.3	3.9	3.9	-	口縁→底部60%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密、砂粒含む	良好	5Y8/2灰白	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	-
3	2A20r	046	3270SP 埋土	土師器	皿	(10.2)	2.1	6.2	-	口縁→底部50%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密	良好	7.5YR7/4にぶい黄緑	7.5YR7/4にぶい黄緑	7.5YR7/4にぶい黄緑	-
3	2A20r	047	3270SP 埋土	土師器	皿	(11.1)	2.6	(7.4)	-	口縁→底部20%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密、砂粒含む	良好	10YR8/3浅黄緑	10YR8/3浅黄緑	10YR8/3浅黄緑	-
3	2A20r	048	3251SK 1層	土師器	皿	9.6	2.4	5.5	-	口縁80% 底部100%	ロクロナデ、回転糸切	ヨコナデ、指オサエ、ロクロナデ	密、砂粒含む	良好	7.5YR7/4にぶい黄緑	7.5YR7/4にぶい黄緑	7.5YR7/4にぶい黄緑	外面煤付着
2B	2C4r	049	2001SE 埋土	土師器	羽釜	(23.6)	(3.5)	-	-	口縁15%	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、板ナデ	密	良好	10YR4/1褐灰	10YR4/1褐灰	10YR6/1褐灰	二次的焼熟
2A	1D17s	050	2214SD 埋土	山茶碗	碗	(11.5)	4.9	(5.0)	-	底部50%	ロクロナデ、回転糸切、板状片痕	ロクロナデ、指オサエ	粗、 ϕ 3mm以下	良好	5Y7/1灰白	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	-
2A	1C17e-1C17s	051	2215SD 埋土	土師器	羽釜	(24.0)	(2.9)	-	-	口縁10%	ヨコナデ	ヨコナデ	密	良好	7.5YR6/3にぶい黄緑	7.5YR6/2灰褐	7.5YR6/2灰褐	全体的に煤付着
2A	1C17r	052	2285SD 埋土	土師器	伊勢型鍋	(24.5)	(2.1)	-	-	口縁10%	ヨコナデ、指頭片痕	ヨコナデ	やや密	良好	10YR5/2灰黄褐	10YR7/2にぶい黄緑	10YR7/1灰白	-
2B	2C9p	053	2013 S K 埋土	土師器	内耳鍋	(30.3)	(3.0)	-	-	口縁10%	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ	密	良好	10YR3/3暗褐	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	外面煤付着
2B	2C3r、2C4r	054	2080SI 埋土	土師器	羽釜	(26.2)	(2.3)	-	-	口縁12%	ヨコナデ	ヨコナデ	やや密	良好	10YR6/4にぶい黄緑	10YR6/4にぶい黄緑	10YR7/2にぶい黄緑	外面煤付着
2B	2C3r、2C4r	055	2080SI 埋土	土師器	羽釜	(21.1)	(4.0)	-	-	口縁10%	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、板ナデ	やや密	良好	10YR7/4にぶい黄緑	10YR8/4浅黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	外面煤付着
2B	2C3r、2C4r	056	2080SI 埋土	土師器	羽釜	(23.8)	(2.2)	-	-	口縁10%	ヨコナデ	ヨコナデ	やや密	良好	10YR7/4にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/2にぶい黄緑	外面煤付着
2B	2C4r	057	2080SI 埋土	土師器	羽釜	(20.0)	(4.5)	-	-	口縁15%	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、板ナデ	密	良好	10YR7/4にぶい黄緑	10YR8/4浅黄緑	10YR8/3浅黄緑	外面煤付着
2B	2C4r	058	2080SI 埋土	瀬戸美濃	折縁深皿	29.9	(4.5)	-	-	口縁5%	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	5Y6/3オリーブ黄	5Y6/3オリーブ黄	2.5Y7/1灰白	灰軸
2B	2C4r	059	2080SI 埋土	瀬戸美濃	折縁深皿	(35.8)	(4.6)	-	-	口縁5%	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/4浅黄	2.5Y6/2灰黄	灰軸
2B	2C2s	060	2097SI 1層	山茶碗	碗	-	(2.6)	7.5	-	底部100%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密、砂粒含む	良好	5YR5/4にぶい赤褐	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐色	胎付高台、内面自然 軸、モミガラ痕あり
2B	2C2r	061	2097SI 埋土	弥生	鉢	-	(3.0)	-	-	-	ヨコハケ	ナデ	密、砂粒含む	良好	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	10YR6/2灰黄褐	口縁端部沈痕あり
2B	2C2r	062	2097SI 埋土	弥生	壺	-	(2.6)	-	-	底部100%	ケズリ、ナデ	ナデ	粗、礫含む	良好	10YR7/4にぶい黄緑	7.5YR5/3灰オリーブ	10YR6/2灰黄褐	-
2B	2C2s	063	2097SI 1層	土師器	高坏	-	(4.8)	-	-	脚部	磨耗	磨耗	やや粗	良好	10YR7/4にぶい黄緑	7.5YR5/4にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	透孔
2B	2C9p	064	2016 S K 埋土	土師器	鉢	(10.2)	(3.6)	-	-	口縁25%	ハケ、指オサエ、ナデ	ハケ、指オサエ、ナデ	密、礫含む	良好	5YR6/6褐	5YR6/6褐	10YR7/3にぶい黄緑	-
2B	2C9p	065	2017 S D 埋土	弥生	鉢	(27.0)	(4.5)	-	-	口縁10%	糸痕、押し引き	ナデ	やや密、砂粒含む	良好	10YR8/3浅黄緑	10YR4/1褐灰	10YR8/3浅黄緑	-

表6-1 遺物観察表

地点	グリップ	図版番号	出土地点・層位	産地材質	器種	口径長さ	器高幅	底径長さ	孔径長さ	残存率	外面調整	内面調整	胎土	焼成	外面色調	内面色調	断面色調	観察備考	
2B	2C8p	066	2042SP 埴土	弥生	壺	(12.9)	(4.2)	-	-	口縁20%	ハケ、ヨコナデ、キザミ、沈瀬	ハケ、指オサエ、ナデ、ミガキ	密、砂粒、少量含む	良好	5YR6/6橙	5YR6/6橙	7.5YR8/4浅黄橙	-	
2A	1D15a	067	2204SX 黒色層	弥生	鉢	(17.3)	(6.0)	-	-	口縁20%	ヨコナデ、ハケ後ミガキ	ハケ	密、砂粒、少量含む	良好	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	-	
2B	1C20s	068	2029SX 4層	弥生	鉢	-	(2.7)	-	-	口縁	貼付突帯、ナデ、ハケ	ナデ	粗	良好	10YR7/4にぶい、黄橙	10YR7/3にぶい、黄橙	10YR7/3にぶい、黄橙	口縁端部に沈瀬1条	
2B	1C20s	069	2029SX 3層	土師器	壺	(13.0)	(3.9)	-	-	口縁～頸部30%	ヨコナデ、板ナデ	板ナデ、指オサエ	密、砂粒、少量含む	良好	5YR6/6橙	5YR6/6橙	7.5YR8/3浅黄橙	-	
2B	1C20s	070	2029SX 埴土	弥生	ミニチュア土器?	5.0	1.5	-	-	40%	指オサエ、ナデ	ナデ	密、砂粒、少量含む	良好	2.5Y4/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y6/3にぶい、黄	底部条痕文	
2B	1C20s	071	2195SK 土師器	土師器	皿	(4.6)	(1.2)	-	-	口縁20%	手づくね	手づくね	密、砂粒、多く含む	やや良	2.5Y5/2暗灰黄	10YR5/2暗灰黄	7.5YR4/2灰褐	-	
2B	1C20s	072	2195SK 弥生土器	弥生土器	深鉢	(24.4)	(5.2)	-	-	口縁部5%	ナデ、ハケ(貝殻)	ナデ	密、砂粒、多く含む	良好	7.5YR7/6橙	5YR6/6橙	2.5Y6/2灰黄	外面に指跡有	
2B	1C20s	073	2195SK 古式土師器	古式土師器	S字口縁台付壺	(15.2)	(3.1)	-	-	口縁6%	ヨコナデ、タテハケ、ヨコハケ、押引	ヨコナデ、ヨコハケ、指オサエ	密、砂粒、少量含む	良好	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	2.5Y5/2暗灰黄	-	
2B	1C20s	074	2195SK 埴土	古式土師器	S字口縁台付壺	(16.2)	(3.0)	-	-	口縁～頸部10%	ヨコナデ、タテハケ、ヨコハケ	ヨコナデ、指オサエ	密	良好	2.5Y8/3淡黄	10YR8/4浅黄橙	2.5Y8/3淡黄	-	
3		075	2029SX 埴土	石器	砥石	10.4	6.3	4.8	-	70%	-	-	-	-	-	-	-	-	重さ459.8g、敲打痕
2B	1C20s	076	2029SX 埴土	石器	石磯	2.2	1.25	0.45	-	100%	-	-	-	-	-	-	-	-	重さ0.8g
2A	1D12b	077	2246SD 埴土	石器	石磯	(1.0)	(1.5)	0.3	-	90%	-	-	-	-	-	-	-	-	先端部欠損
1A	8E6b	078	001SC	染付	碗	(10.4)	(4.2)	-	-	4.0%	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	-	
3	3B2b	079	3015SD 1層	山茶碗	小皿	(21.8)	-	-	-	口縁5%	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	2.5Y7/2灰黄	-	
3	2B20b	080	3223SE 埴土	常滑	囊	(34.8)	(16.5)	-	-	口縁20%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、1～5mmの砂	良好	7.5YR7/8黄橙	7.5YR7/6橙	5YR7/6橙	-	
3	2B20b	081	3223SE 埴土	常滑	囊	(44.0)	(17.5)	-	-	口縁30%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、1～5mmの砂	良好	10R4/3赤褐	10YR4/2灰赤	7.5YR6/1褐灰	-	
3	2B20b	082	3223SE 埴土	常滑	囊	(60.2)	(24.0)	-	-	口縁30%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、少量含む	良好	5YR6/6橙	5YR6/6橙	5YR7/6橙	-	
3	2B20b	083	3223SE 埴土	常滑	囊	(53.0)	(37.0)	-	-	口縁～脚部40%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、砂粒、多く含む	良好	10YR7/3にぶい、黄橙	5YR6/6橙	10YR7/3にぶい、黄橙	-	
3	2B20b	084	3223SE 埴土	常滑	囊	(41.0)	(22.0)	-	-	口縁40%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、6mm位の礫含む	良好	2.5Y4/2灰赤	10R3/3暗赤褐	2.5Y5/1黄灰	-	
3	2B20b	085	3223SE 埴土	常滑	囊	(38.8)	(48.5)	-	-	口縁30%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、1～6mmの礫	良好	5YR5/4にぶい、赤褐色	2.5YR6/4にぶい、橙	5YR6/6橙	-	
3	2B20b	086	3223SE 埴土	常滑	囊	(39.0)	(43.7)	-	-	口縁～脚部40%	ヨコナデ	ヨコナデ	密、1～6mmの礫	良好	2.5YR4/1赤灰	10R5/6赤	10R6/8赤橙	-	
2B	2C1r	087	2030SK 埴土	山茶碗	小皿	(8.4)	1.5	(5.0)	-	45%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ、板ナデ	密、砂粒、少量含む	良好	5Y7/1灰白	7.5YR7/1明褐灰	10YR7/1灰白	口縁一部に自然釉	
2B	2C7q	088	2140SK 埴土	弥生	砥石	7.6	1.8-2.3	1.8	0.30-0.35	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	二面に磨擦痕、孔有
2B	2C6q	089	2140SK 埴土	山茶碗	碗	(12.0)	4.0	(5.4)	-	口縁～底部40%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ、指ナデ	密、砂粒、少量含む	良好	10YR7/3にぶい、黄橙	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	内面底部に削痕の牡丹文、削りだし高台	
2A	1D15a	090	2206SD 黒色層	輸入陶磁	青磁碗	-	(2.0)	(6.4)	-	底部60%	ロクロナデ、ハラケズリ	ロクロナデ	密	良好	2.5YR5/4にぶい、赤褐(軸)10Y6/2オリーブ灰	(軸)10Y6/2オリーブ灰	2.5Y7/1灰白	-	
2A	1C17t	091	2206SD 上層	瀬戸美濃	銅皿	(10.0)	(1.8)	(8.0)	-	底部20%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密	良好	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	2.5Y8/3淡黄	胴し目一部に自然釉	
2B	2C7q	092	2143SK 半截中	土師器	内耳鍋	(30.0)	(4.2)	-	-	口縁5%	指オサエ、ナデ	ハケス、ナデ	密	良好	10YR8/4浅黄橙	10YR7/4にぶい、黄橙	10YR8/4浅黄橙	-	
2A	1D12b	093	2218SK 埴土	山茶碗	碗	-	(1.8)	5.6	-	底部100%	ロクロナデ、回転ハラケズリ	ロクロナデ	密、1～5mmの砂	良好	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	底部に粉痕、貼付高台、石ハケ	
2B	2C6q	094	2045SK 埴土	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.4)	(4.5)	-	-	口縁15%	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	10YR2/3黒褐	10YR3/2黒褐	10YR8/2灰白	鉄軸	
2A	1D14b	095	2245SD 埴土	土師器	伊勢型鍋	(24.0)	-	-	-	口縁10%	ナデ	口縁折りまげ部分強いナデ	密	良好	10YR7/3にぶい、黄橙	7.5YR6/3にぶい、褐黄橙	10YR7/2にぶい、黄橙	伊勢鍋3段階B	
2B	2C4r	096	2001SE 瀬戸埴土	山茶碗	碗	-	(2.1)	5.2	-	底部100%	ロクロナデ、回転糸切	ロクロナデ	密、1～4mmの長砂粒、少量含む	良好	2.5Y7/2灰黄	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/3淡黄	貼付高台痕、砥石の磨化	
2B	2C3r	097	2181SP 埴土	瀬戸美濃	蓋(茶入?土瓶?)	8.3	1.5	4.3	-	完形	ロクロナデ	ロクロナデ	密、砂粒、少量含む	良好	10YR2/3黒褐	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	鉄軸	

表6-2 遺物観察表

地点	グリッド	図版番号	出土地点・層位	産地材質	器種	口径長さ	器高	口径長さ	口径厚さ	孔径(φ)	孔径(φ)ばか	残存率	外面調整	内面調整	胎土	焼成	外面色調	内面色調	断面色調	観察備考
3	3B1a	98	3005SK 銅	銭貨	銅	φ2.3	0.2	4.60	-	4.60	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	「縮型元宝」
3	3A1t	99	3005SK 銅 付近	銭貨	銅	(φ2.0)	(0.3)	(1.25)	-	(1.25)	80%(片含む)	-	-	-	-	-	-	-	-	縮型による腐食著しい
3	2A20q	100	3202SK 銅	銭貨	銅	φ2.4	0.2	2.84	-	2.84	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	
3	2A19p	101	3193SP 銅 埋土	銭貨	銅	φ2.2	0.2	3.08	-	3.08	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	「天龍通宝」
2B	2C1s	102	2030SK 銅	銭貨	銅	φ2.4	0.2	3.82	-	3.82	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	「正隆元宝」
2A		103	表探	銭貨	銅	φ2.4	0.2	3.27	-	3.27	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	「開元通宝」

表6-3 遺物観察表

地点	グリッド	図版番号	出土地点・層位	産地材質	器種	口径長さ	器高	口径長さ	口径厚さ	孔径(φ)	孔径(φ)ばか	残存率	外面調整	内面調整	胎土	焼成	外面色調	内面色調	断面色調	観察備考
1B	8D14r	104	062SK		土錘	(4.0)	(3.1)	12.91	(φ1.4)	(φ1.4)	25%	ナデ、太い円筒型、	密	良好	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR8/4浅黄褐色	10YR8/2灰白	中央部酸化		
3	3B1a	105	3011SD 土層		土錘	4.6	1.5	8.63	φ0.35	ほぼ完形	ほぼ完形	ナデ、紡錘型、	密	良好	2.5YR6/6褐色	2.5YR7/4淡赤褐色				
3	3B1a	106	3011SD 土層		土錘	(4.1)	2.1	15.08	φ0.45	80%	ナデ、紡錘型、	密、砂粒 少量含む	密、砂粒 少量含む	良好	7.5YR7/6褐色	5YR6/8褐色				
3	3B1a	107	3011SD 土層		土錘	(4.9)	1.2	5.14	φ0.2	90%	ナデ、紡錘型、	密、砂粒 少量含む	密、砂粒 少量含む	良好	5YR6/6褐色	2.5YR7/8褐色				
3	3B1a	108	3011SD 土層		土錘	(3.9)	1.2	4.32	φ0.35	ほぼ完形	ほぼ完形	ナデ、紡錘型、	密、砂粒 少量含む	良好	7.5YR6/4にぶい褐色	2.5YR7/6褐色				
3	3B1a	109	3011SD 土層		土錘	(2.2)	(1.0)	2.05	φ0.3	20%	ナデ、紡錘型、	密	密	良好	5YR6/4にぶい褐色	7.5YR6/2灰褐色				
3	3B1b	110	3011SD 土層		土錘	4.8	1.2	6.15	φ0.35	完形	完形	ナデ、紡錘型、	密、砂粒 少量含む	良好	7.5YR8/6浅黄褐色	7.5YR6/4にぶい褐色				
3	3B2a	111	3011SD 土層		土錘	(2.7)	0.7	1.32	φ0.2	40%	ナデ、紡錘型、	密	密	良好	10YR7/4にぶい黄褐色	-	10YR8/3浅黄褐色			
3	2B20b	112	3011SD 土層		土錘	2.3	6.3	25.13	φ0.4	完形	完形	ナデ、紡錘型、	密、砂粒 少量含む	良好	2.5YR6/6褐色	5YR7/6褐色				
2A	1D14b	114	2200SX 褐色層		土錘	(4.9)	1.3	7.59	φ0.3	90%	ナデ、紡錘型、	密	密	良好	10YR6/2灰褐色	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白			
2A	1D14b	115	2200SX 褐色層		土錘	(3.3)	0.8	1.50	φ0.3	70%	ナデ、紡錘型、	密	密	良好	7.5YR6/4にぶい褐色	10YR5/1褐色	10YR6/1褐色			
2A	1D15a	116	2200SX 褐色砂		土錘	5.5	1.3	6.19	φ0.3	ほぼ完形	ほぼ完形	ナデ、紡錘型、	密	良好	7.5YR6/3にぶい褐色	7.5YR5/2灰褐色	7.5YR7/2明褐色			
2A	1D15a	117	2200SX 褐色砂		土錘	5.0	1.1	4.89	φ0.3	完形	完形	ナデ、紡錘型、	密	良好	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	-			
2A	1D15a	118	2200SX 褐色砂		土錘	2.0	0.5	0.72	φ0.3	ほぼ完形	ほぼ完形	ナデ、紡錘型、	密	良好	5YR6/4にぶい褐色	5YR6/4にぶい褐色	5YR6/4にぶい褐色			
2A	1D15a	119	2200SX 褐色砂		土錘	2.0	0.6	0.73	φ0.25	ほぼ完形	ほぼ完形	ナデ、紡錘型、	密	良好	2.5YR5/4にぶい赤褐色	2.5YR5/4にぶい赤褐色	-			
2A	1D15a	120	2200SX 褐色砂		土錘	4.0	0.9	3.13	φ0.3	完形	完形	ナデ、紡錘型、	密	良好	2.5YR5/3にぶい赤褐色	2.5YR4/2灰赤	-			
2A	1D15a	121	2200SX 褐色砂		土錘	(2.8)	0.8	1.33	φ0.3	40%	ナデ、紡錘型、	密	密	良好	10R5/6赤	10R6/6赤褐色	10R6/6赤褐色			
2A	1D15a	122	2200SX 褐色砂		土錘	(2.6)	0.7	1.18	φ0.3	50%	ナデ、紡錘型、	密	密	良好	10YR5/2灰黄褐色	10YR7/2にぶい黄褐色	10YR7/2にぶい黄褐色			
2A	1D15a	123	2200SX 褐色砂		土錘	(3.2)	1.1	3.29	φ0.3	50%	ナデ、紡錘型、	密、砂粒 少量含む	密	良好	2.5YR6/6褐色	2.5YR5/6明赤褐色	2.5YR6/6褐色			
2A	1D8d	113	包含層		土錘	3.2	1.0	3.14	φ0.2	完形	完形	ナデ、紡錘型、	密	良好	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR4/2灰褐色	-	△刻		

図

版



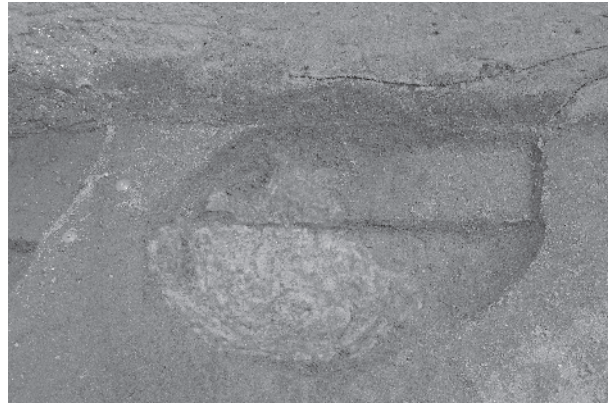
1 地点 A 区 第 1 面全景



池状遺構 001SG 土層断面



1 地点 A 区 第 2 面全景



土坑 006SK 粘土貼付状況



1 地点 B 区 全景



1 地点 A 区 土坑群 完掘



池状遺構 001SG 検出



井戸 069SE 完掘



区画溝 022SD 完掘



溝状遺構 065SD 完掘



区画溝 022SD 遺物出土 (3)



竪穴状遺構 020SI 完掘



区画溝 063SD 完掘



竪穴状遺構 066SI 遺物出土



区画溝 064SD 完掘



竪穴状遺構 066SI 完掘



3地点 全景



3地点 東側半景



井戸 3010SE 土層断面



井戸 3019SE 土層断面



井戸 3010SE 完掘



井戸 3223SE 土層断面



井戸 3010SE 断割



井戸 3019・3223SE 完掘



井戸 3223SE 井戸枠 1 段目



区画溝 3140SD 完掘



井戸 3223SE 井戸枠 2 段目



区画溝 3011SD 土層断面



井戸 3223E 井戸枠 3 段目



区画溝 3011SD 遺物出土 (31)



井戸 3223SE 井戸枠 4 段目



区画溝 3011SD 完掘



区画溝 3150SD 完掘



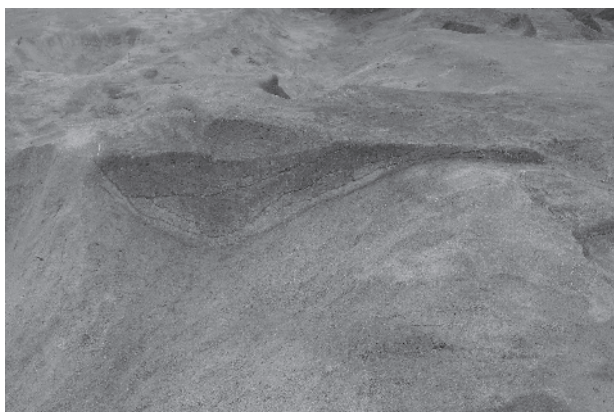
区画溝 3172SD 完掘



区画溝 3170SD 完掘



区画溝 3172SD 遺物出土



区画溝 3170SD 土層断面



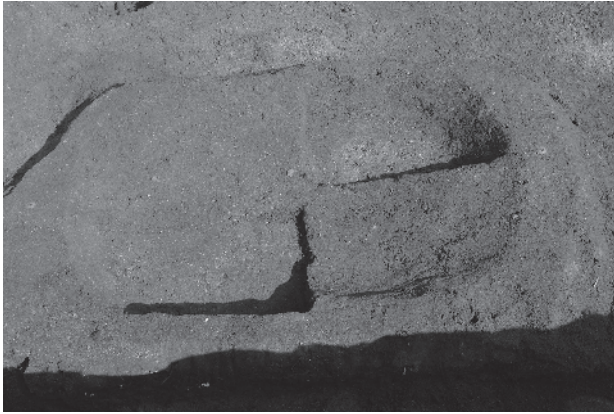
溝状遺構 3251SD 完掘



区画溝 3170SD 土層断面



溝状遺構 3251SD 土層断面



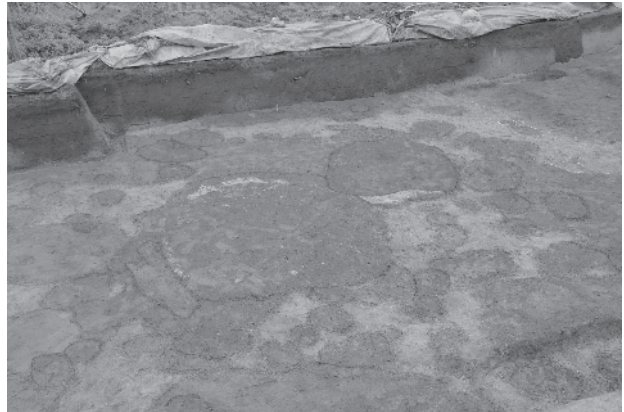
土坑 3005SK 完掘



土坑 3269SK 遺物出土(43)



土坑 3163SK 完掘



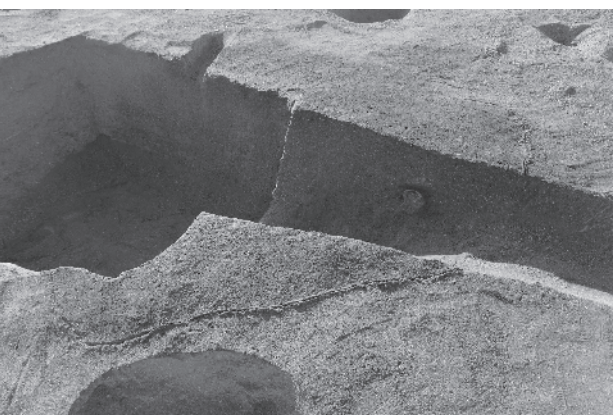
土坑 3016・3017SK 検出



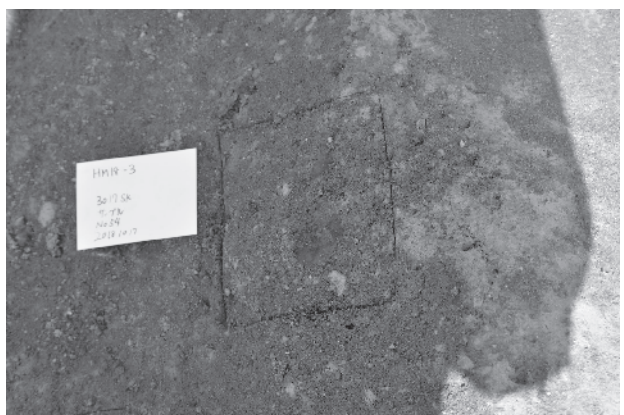
土坑 3179SK 完掘



土坑 3017SK 粘土塊・炭化物出土



土坑 3269SK 検出



土坑 3017SK カマド材出土



土坑 3017SK 粘土壁



掘立柱建物跡 001SB 完掘



土坑 3017SK 完掘



柱穴 3226SP 礎石出土



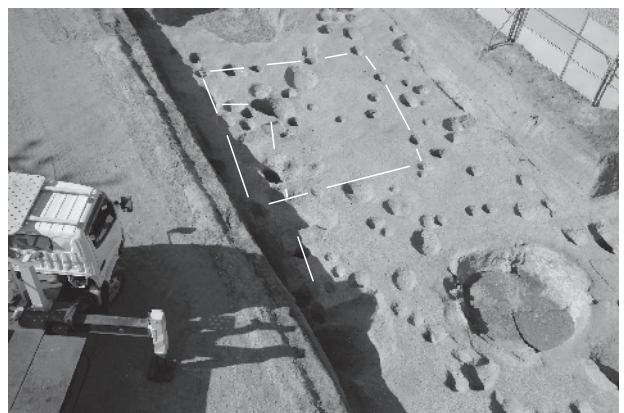
土坑 3016SK 完掘



掘立柱建物跡 002・003・004SB 完掘



土坑 3016SK 粘土壁



掘立柱建物跡 005・006SB 完掘



2地点A区 全景



2地点A区 全景



溝状遺構 2235・2236SD 完掘



包含層 2200SX 土層断面



包含層 2200SX 鹿角出土



区画溝 2221・2233SD 完掘



区画溝 2221・2233・2231SD 完掘



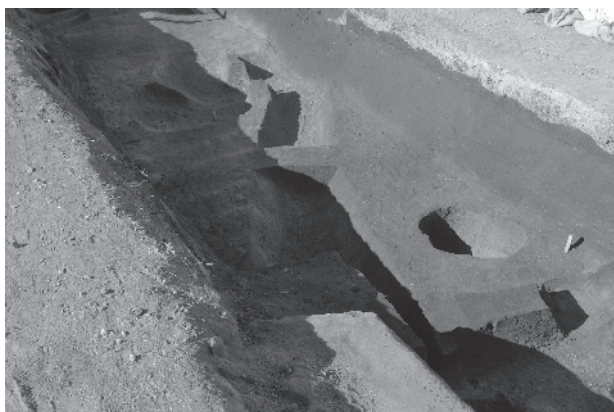
区画溝 2231SD 完掘



区画溝 2206SD 完掘



区画溝 2215SD 完掘



区画溝 2285SD 完掘



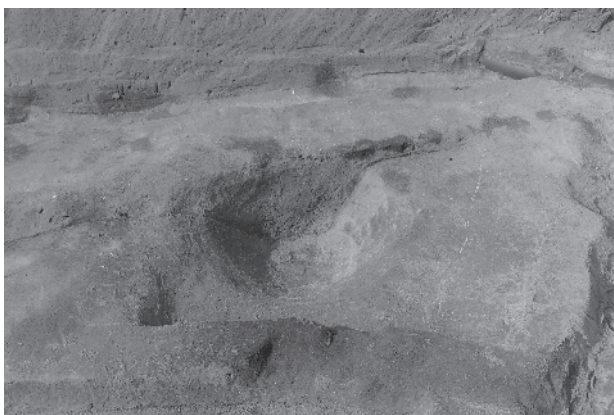
区画溝 2212・2214・2291SD 完掘



区画溝 2285・2214SD 土層断面



溝状遺構 2202SD 完掘



土坑 2207SK 完掘



溝状遺構 2210SD 完掘



溝状遺構 2222SD 完掘



掘立柱建物跡 001SB 完掘



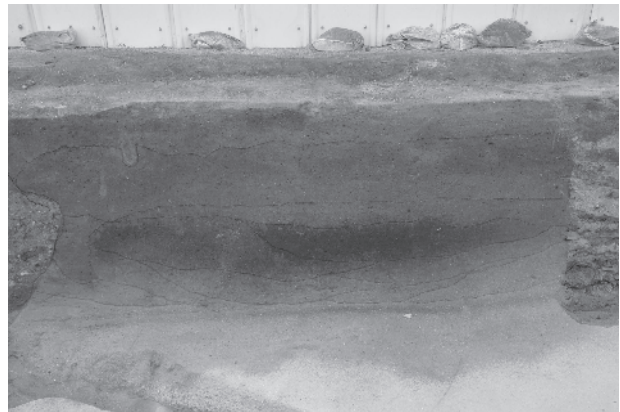
竪穴状遺構 2290SI 検出



不明遺構 2204SX 完掘



竪穴状遺構 2290SI 完掘



不明遺構 2204SX 土層断面



溝状遺構 2246SD 完掘



溝状遺構 2245SD 完掘



2地点B区 全景



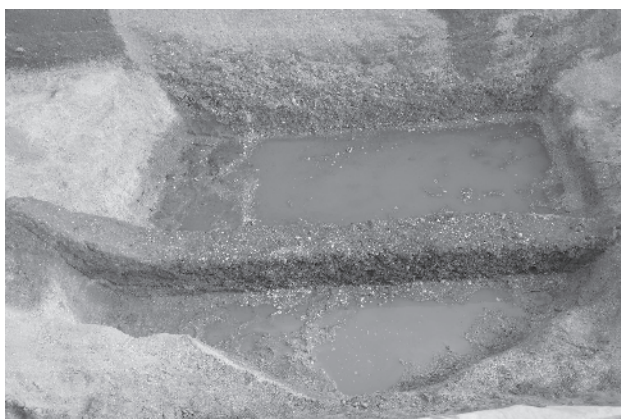
2地点B区 全景



井戸 2001SE 土層断面



区画溝 2010SD 完掘



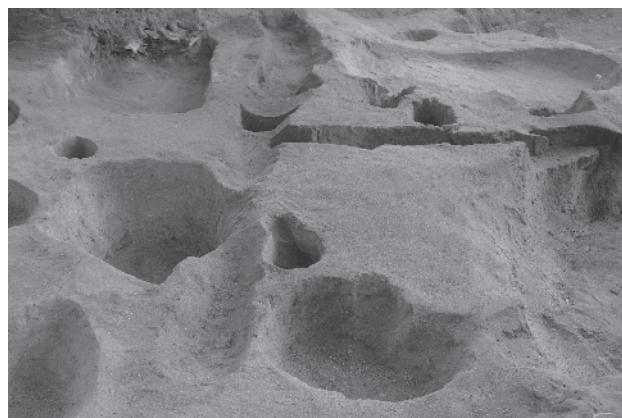
井戸 2001SE 完掘



区画溝 2150SD 完掘



土坑 2032SK 完掘



溝状遺構 2027・2044SD 完掘



竪穴状遺構 2013SI 完掘



土坑 2045SK 土層断面



竪穴状遺構 2015SI 完掘



犬埋葬遺構 2088SX イヌ遺存体出土



竪穴状遺構 2080SI 完掘



犬埋葬遺構 2088SX イヌ遺存体出土



竪穴状遺構 2097SI 完掘



犬埋葬遺構 2088SX イヌ遺存体出土



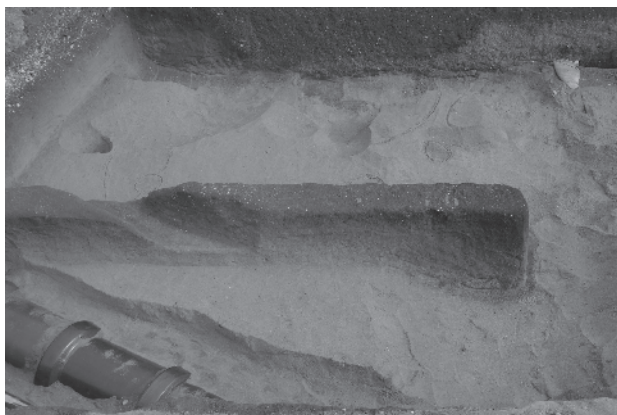
溝状遺構 2028SD 完掘



包含層 2029SX 土層断面



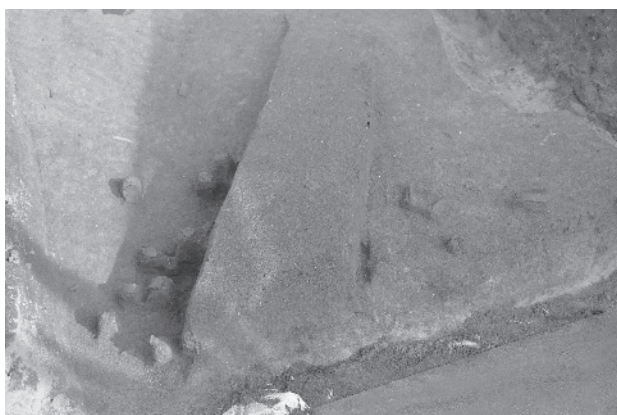
包含層 2029SX(溝状遺構 2164SD) 完掘



包含層 2029SX(溝状遺構 2164SD) 完掘



土坑 2195SK 検出



土坑 2195SK 完掘



土坑 2195SK 遺物出土



土坑 2258SK 遺物出土



溝状遺構 2254SD 完掘



溝状遺構 2164SD 完掘



土坑 2199SK 完掘



溝状遺構 2164SD 遺物出土



包含層 2029SX 完掘



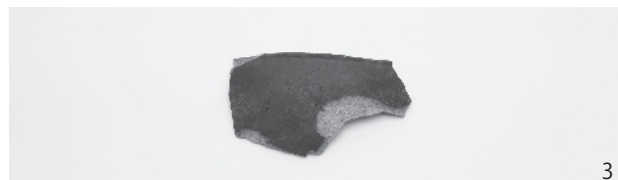
溝状遺構 2194SD 完掘



溝状遺構 2324SD 完掘



溝状遺構 2197SD 完掘





13



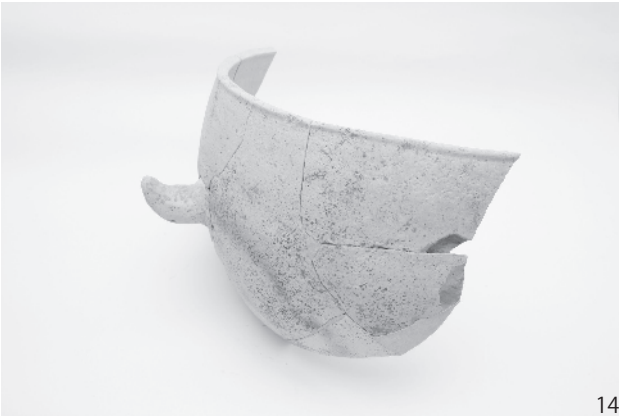
16



14



17



14



18



15



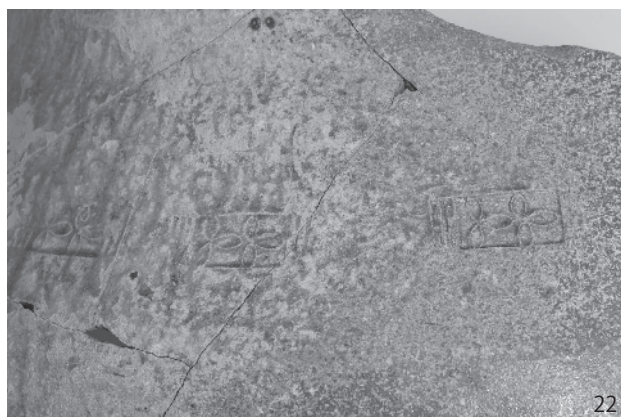
18

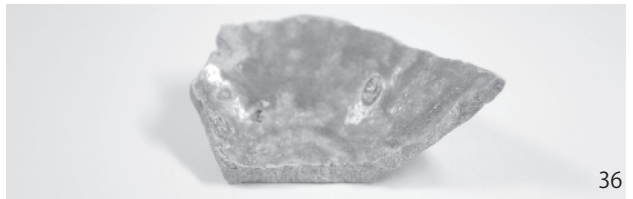


19



18







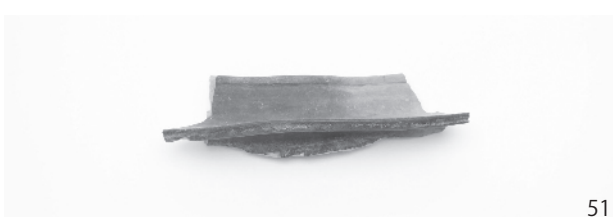
42



50



43



51



44



52



45



53



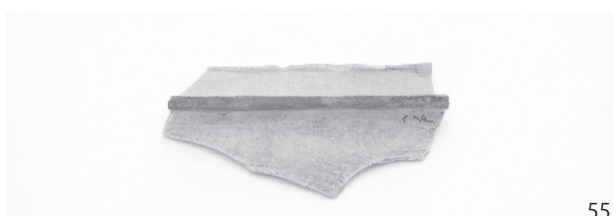
46



54



47



55



48



56

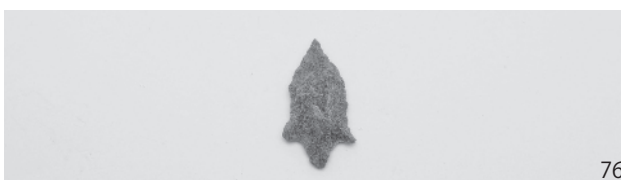


49



57









86



86



87



91



88



92



88



93



89



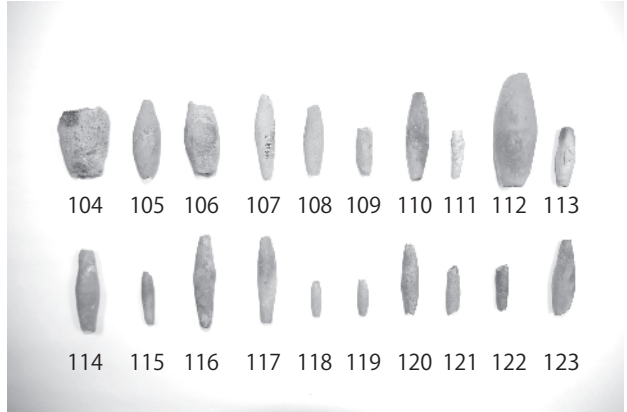
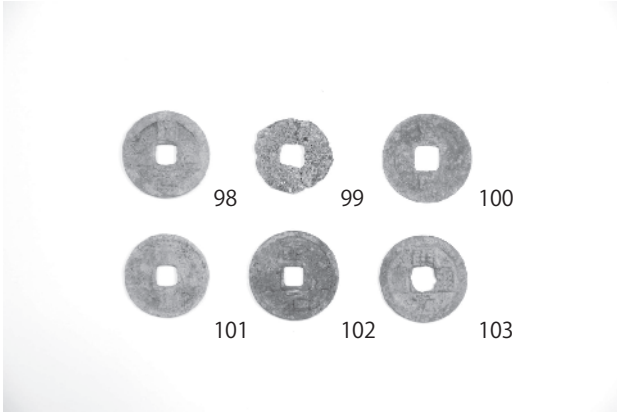
94



90



95



報告書抄録

ふりがな	へいせい30年度 はたま・ひがしはたいせきはっくつちょうさほうこく							
書名	平成30年度 畑間・東畑遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宮澤浩司・早川由香里・久富正登・新山王諒太・(株)パレオ・ラボ・パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	安西工業株式会社 名古屋支店							
所在地	〒451-0045 愛知県名古屋市名東区望が丘268-501 TEL052-769-6500							
発行機関	愛知県東海市教育委員会							
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地 TEL052-603-2211・0562-33-1111(代表)							
発行年月日	2020年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡調査番号					
はたま いせき 畑間遺跡	あいちけん とうかいし 愛知県東海市	23222	43050	35° 01′	136° 53′	2018.6.22 ～	1,031㎡	土地区画整理事業
ひがしはたいせき 東畑遺跡	あいちけん とうかいし 愛知県東海市	23222	43052	08″	47″	2019.3.29		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
1地点A区 (畑間遺跡)	集落	古代～ 中・近世	区画溝・土坑・竪穴状遺構・井戸		須恵器・土師器・中世陶器		9世紀の竪穴状遺構	
1地点B区 (畑間遺跡)	集落	古代～ 中・近世	区画溝・土坑・竪穴状遺構・井戸		須恵器・土師器・中世陶器		9世紀の竪穴状遺構及び一括性の高い須恵器	
2地点A区 (畑間遺跡)	集落	弥生時代～ 中・近世	区画溝・土坑・竪穴状遺構・井戸・掘立柱建物跡		弥生土器・土師器・中世陶器・土錘		中世区画溝群	
2地点B区 (東畑遺跡)	集落	弥生時代～ 中・近世	区画溝・土坑・竪穴状遺構・井戸・犬埋葬遺構		弥生土器・土師器・中世陶器・イヌ遺存体		弥生時代中期前葉～古墳時代初頭にかけての遺物	
3地点 (畑間遺跡)	集落	中・近世	区画溝・土坑・竪穴状遺構・井戸・掘立柱建物跡		土師器・中世陶器・土錘・分銅・ニホンイシガメ遺存体		竈材を有する粘土壁土坑。ニホンイシガメを用いた祭祀痕跡	

愛知県東海市
平成30年度
畑間・東畑遺跡発掘調査報告

令和2年(2020) 3月 16 日印刷

令和2年(2020) 3月 31 日発行

編 集 安西工業株式会社 名古屋支店
〒451-0045 愛知県名古屋市名東区望が丘268-501
TEL052-769-6500

発 行 愛知県東海市教育委員会
〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地
TEL052-603-2211・0562-33-1111(代表)

印刷・製本 株式会社 J I T S U G Y O
〒630-8144 奈良県奈良市東九条町6-6
TEL0742-62-3377
